秋田県文化財調査報告書第192集

はりま館遺跡発掘調査報告書（上巻）

——東北自動車道小坂インターチェンジ建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査——

秋田県埋蔵文化財センター

1990・3

秋田県教育委員会

はりま館遺跡発掘調査報告書(上巻)

——東北自動車道小坂インターチェンジ建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査——

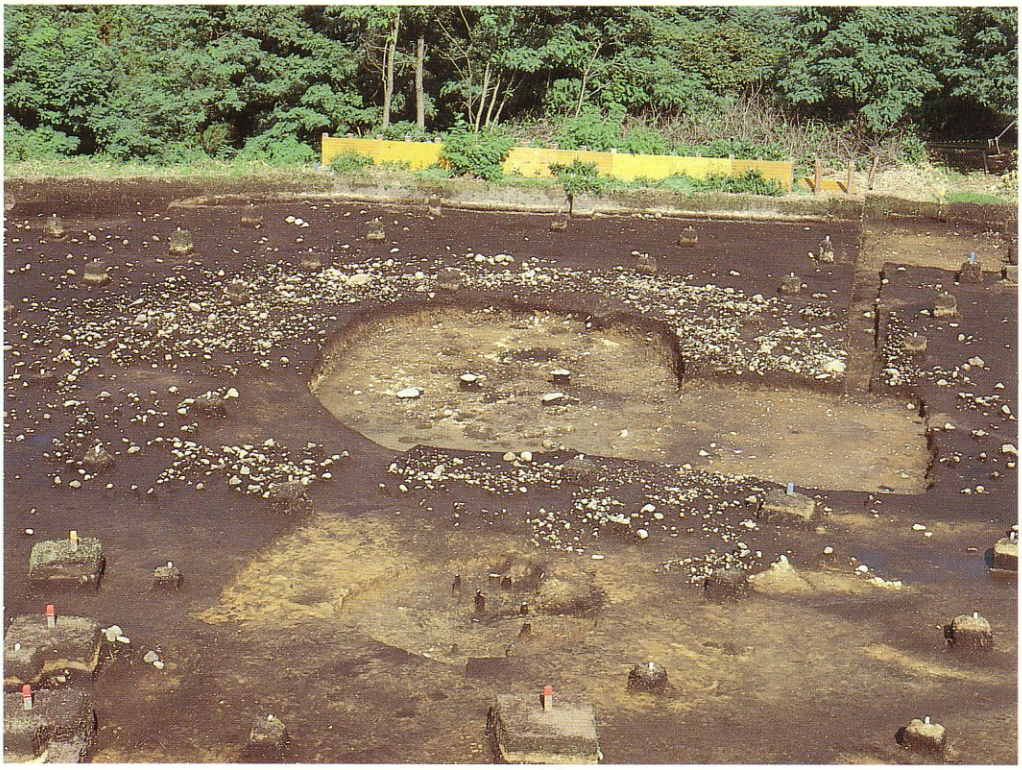
1990・3

秋田県教育委員会

はりま館遺跡航空写真（北東▶）

はりま館遺跡全景と各調査区の位置（南西▶）

ＡⅠ・Ⅱ区　SI152A・B竪穴住居跡と周囲の礫群(SQ153)（南▶）



同上（西▶）

出土遺物（縄文前期土器）

出土遺物（縄文前期土器）

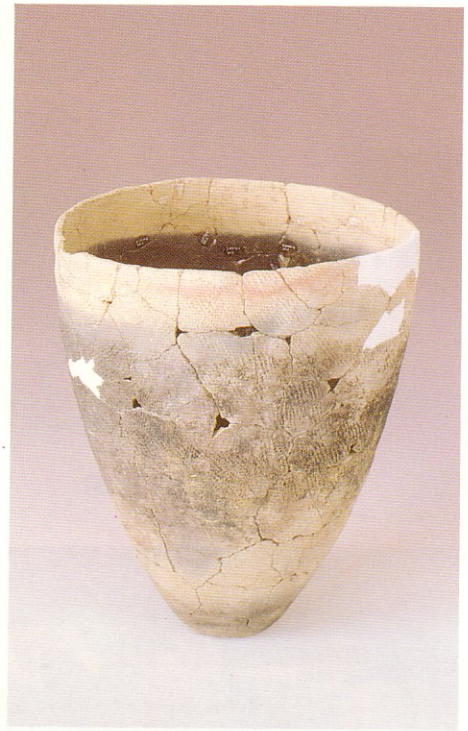
出土遺物（縄文前期土器）

出土遺物（縄文前期土器）

出土遺物（縄文前期土器）

出土遺物（弥生土器）

出土遺物（縄文前期土器）



C区SR14に埋設された土器

出土遺物（岩偶・垂飾品・石刀・石剣）

序

豊かな自然に恵まれた我が秋田県には、我々の先人達が営々と築き上げてきた歴史があります。地中に刻まれた埋蔵文化財もその歴史遺産の一つであります。

このたび、東北自動車道に新設のインター・チェンジ（小坂Ｉ・Ｃ）が計画され、小坂町小坂に所在するはりま館遺跡が発掘調査の対象となりました。同遺跡は、すでに自動車道本線建設に伴い昭和57年に一部調査され、今回と合わせ実に49,780㎡が発掘されたことになります。これは単独遺跡の調査としては、県内で最大規模であります。

調査の結果、縄文時代前期〜後期の竪穴住居跡、土坑、Ｔピット、土器埋設遺構、縄文時代晩期〜弥生時代の土坑（墓）、弥生時代の竪穴住居跡、井戸、平安時代の竪穴住居跡、溝・柱列、鍛冶遺構などが検出されました。なかでも縄文時代前期の大型住居跡は、住居を構築する際に掘り上げた土砂が、住居の外側に廻る土堤状の高まりとして残っていた珍しい例であります。また各時代の土器や石器などの遺物も多く、中でも復原された縄文時代前期の土器は200個体にも及びます。

本書はこれらの成果をまとめたもので、地域史解明と文化財に対する理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後に、本調査及び報告書作成に際し、ご協力いただきました小坂町教育委員会をはじめ関係機関、各位に対し深く感謝の意を表します。

平成２年３月15日

秋田県教育委員会
教育長　橋　本　顕　信

例　言

1．　本報告書は、はりま館遺跡発掘調査報告書――東北自動車道小坂インターチェンジ建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査――上・下２分冊のうちの上巻である。

2．　本報告書には上記事業に係り昭和63年度および平成元年度に調査した、はりま館遺跡ＡⅠ～Ⅳ区・Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区・Ｅ区の調査結果を収載している。

3．　本報告書に先立って調査結果の一部を公表しているが、本報告書の内容がそれらに優先する。

4．　本報告書の執筆分担は下記の通りである。

（上巻）

大野憲司……第１～３章、第４章第１・２・４節
第５章第１・２節、第６章第２節１（１）・第４節、第７章第２節３①・第３節

高橋　学……第４章第３節、第５章第３節、第６章第２・３節、第７章

小林　克……第７章第２節３②～④

5．　第11章科学的分析は以下の機関に依託した。

第１節　花粉分析……パリノ・サーヴェイ株式会社

第２節　樹種同定……パリノ・サーヴェイ株式会社

第３節　はりま館遺跡出土鉄製品・鉄滓の金属学的解析……財団法人岩手県文化振興事業団

なお、第３節については併せて岩手県立博物館赤沼英男氏に原稿を依頼した。

6．　石器石質については秋田県立博物館佐々木厚学芸主事の教示を得た。

7．　本報告書挿図中に使用した土色表記法は、農林省農林水産技術会議事務局、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に拠った。

8．　本報告書に使用した遺跡位置図は建設省国土地理院発行の50,000分の１地形図である。

9．　調査ならびに本報告書の刊行にあたって、次の方々から指導・助言を賜った。

秋元信夫、秋山進午、穴沢義功、板橋範芳、宇野隆夫、小田野哲憲、菊池徹夫、工藤雅樹、工藤清泰、林謙作、三宅徹也

10．　調査に係わる総ての資料は秋田県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　例

1．　本報告書に収載した遺構実測図に付した方位は国家座標第Ｘ系による座標北を示す。

2．　本報告書に収載した遺構実測図の縮尺は１／40、１／50を原則とし、適宜１／10、１／20、１／25の縮尺も加え、それぞれスケールを付している。

3．　本報告書に収載した遺物実測図の縮尺は、完形土器・磨製石器・礫石器は１／３、１／４、土製品・土器拓影は１／３、剥片石器・鉄器は１／２、２／３であり、それぞれにスケールを付している。

4．　個々の遺物実測図には各調査区毎に土器は１～、石器はＳ１～、鉄および鉄滓にはＭ１～のように通し番号を付した。それらは図版中の遺物写真の番号とも対応する。

5．　土層註記は基本層位にローマ数字を用い、遺構覆土にはアラビア数字を用いた。

6．　遺構番号は検出順に連番としたが、精査過程において欠番となったものもある。

7．　遺構の種別を表す略号は以下の通りである。

ＳＡ……柱列　　ＳＢ……掘立柱建物跡

ＳＩ……竪穴住居跡　　ＳＫ……土坑

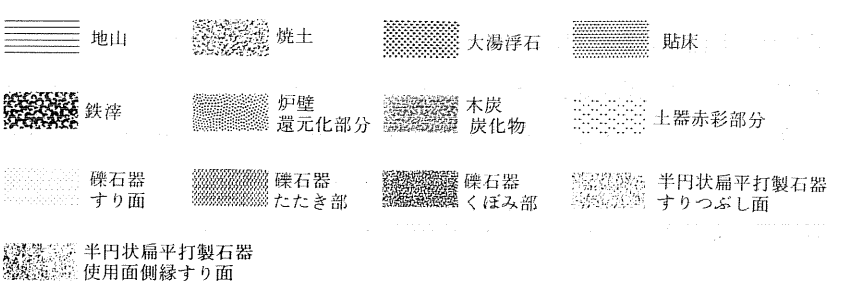
ＳＫＴ……Ｔピット　　ＳＫＰ……柱穴状遺構

ＳＤ……溝状遺構　　ＳＲ……土器埋設遺構

ＳＮ……焼土遺構　　ＳＱ……組石遺構・石囲炉・配石遺構

ＳＸ……鍛冶炉・性格不明の遺構

8．　挿図中に使用したスクリーン・トーンは以下の通りである。



総　目　次

（上巻）

巻頭図版
序
例　言
凡　例
目　次

第１章　はじめに…… 1
第２章　遺跡の立地と環境…… 3
第３章　発掘調査の概要…… 12
第４章　ＡⅠ・Ⅱ区の調査の記録…… 19
第５章　ＡⅢ区の調査の記録…… 217
第６章　ＡⅣ区の調査の記録…… 260
第７章　Ｃ区の調査の記録…… 300

（下巻）

例　言
凡　例
目　次

第８章　Ｂ区の調査の記録…… 429
第９章　Ｄ区の調査の記録…… 479
第10章　Ｅ区の調査の記録…… 619
第11章　科学的分析…… 679
第12章　まとめ…… 694

上巻目次

第１章　はじめに
　第１節　調査に至るまで……1
　第２節　調査の組織と構成……1
第２章　遺跡の立地と環境……3
　第１節　遺跡の位置と立地……3
　第２節　歴史的環境……6
第３章　発掘調査の概要……12
　第１節　遺跡の概要……12
　第２節　調査の方法……17
　第３節　調査経過……17
第４章　ＡⅠ・Ⅱ区の調査の記録……19
　第１節　ＡⅠ・Ⅱ区の概要……19
　第２節　縄文時代の遺構と遺物……24
　第３節　平安時代の遺構と遺物……163
　第４節　小結……213
第５章　ＡⅢ区の調査の記録……217
　第１節　ＡⅢ区の概要……217
　第２節　縄文時代の遺構と遺物……219
　第３節　平安時代の遺構と遺物……240
　第４節　小結……259
第６章　ＡⅣ区の調査の記録……260
　第１節　ＡⅣ区の概要……260
　第２節　縄文・弥生時代の遺構と遺物……263
　第３節　平安時代の遺構と遺物……279
　第４節　小結……298
第７章　Ｃ区の調査の記録……300
　第１節　Ｃ区の概要……300
　第２節　検出遺構と遺物……302
　第３節　小結……323
図版１～104

挿　図　目　次

第　1図　はりま館遺跡の位置……　3
第　2図　はりま館遺跡と周辺の地形……　4
第　3図　はりま館遺跡の位置と周辺の遺跡……　8
第　4図　はりま館遺跡各調査区の位置……　10
第　5図　基本層序模式図……　12
第　6図　工事計画図と調査区(1)……　13
第　7図　工事計画図と調査区(2)……　14
第　8図　工事計画図と調査区(3)……　15
第　9図　ＡＩ・Ⅱ・Ⅲ区の検出遺構と周辺地形……　21
第 10図　ＡＩ・Ⅱ・Ⅲ区の縄文時代の遺構配置図とグリッド配置図……　25
第 11図　ＳＩ207 竪穴住居跡……　27
第 12図　ＳＩ211 竪穴住居跡……　29
第 13図　ＳＩ205 竪穴住居跡……　30
第 14図　ＳＩ230・231・233・234・235・237竪穴住居跡……　33
第 15図　ＳＩ210 竪穴住居跡……　35
第 16図　ＳＩ212Ａ・Ｂ、ＳＩ215Ａ・Ｂ竪穴住居跡……　37
第 17図　ＳＩ223・224Ａ・Ｂ竪穴住居跡……　39
第 18図　ＳＩ175 Ａ・Ｂ竪穴住居跡……　41
第 19図　ＳＩ156 Ａ・Ｂ竪穴住居跡……　43
第 20図　ＳＩ173 Ａ・Ｂ・Ｃ竪穴住居跡(1)……　44
第 21図　ＳＩ173 Ａ・Ｂ・Ｃ竪穴住居跡(2)……　45
第 22図　ＳＩ213 Ａ・Ｂ竪穴住居跡……　49
第 23図　ＳＩ152 Ａ・Ｂ竪穴住居跡柱穴配置図……　51
第 24図　ＳＩ218 竪穴住居跡……　53
第 25図　ＳＩ228 竪穴住居跡……　55
第 26図　ＳＩ168 竪穴住居跡……　57
第 27図　ＳＩ170 竪穴住居跡……　57
第 28図　ＳＩ222 竪穴住居跡……　58
第 29図　ＳＩ162・165竪穴住居跡……　59
第 30図　ＳＫＴ159・167Ｔピット、ＳＫＦ157フラスコ状ピット、ＳＫ239・240・214土坑……　64
第 31図　ＳＫ220・236・179・208・178・180・161・166土坑…　65
第 32図　ＳＲ221・225・226・238土器埋設遺構……　66
第 33図　ＡＩ・Ⅱ区遺構内出土遺物(1)・土器(1)……　67
第 34図　ＡＩ・Ⅱ区遺構内出土遺物(2)・土器(2)……　68
第 35図　ＡＩ・Ⅱ区遺構内出土遺物(3)・土器(3)……　69
第 36図　ＡＩ・Ⅱ区遺構内出土遺物(4)・土器(4)……　70
第 37図　ＡＩ・Ⅱ区遺構内出土遺物(5)・土器(5)……　71
第 38図　ＡＩ・Ⅱ区遺構内出土遺物(6)・土器(6)……　72
第 39図　ＡＩ・Ⅱ区遺構内出土遺物(7)・土器(7)……　73
第 40図　ＡＩ・Ⅱ区遺構内出土遺物(8)・

土器(8)…… 74
第 41図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構内出土遺物(9)・
土器(9)…… 75
第 42図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構内出土遺物(10)・
土器(10)…… 76
第 43図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構内出土遺物(11)・
土器(11)…… 77
第 44図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構内出土遺物(12)・
土器(12)…… 78
第 45図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構内出土遺物(13)・
石器(1)…… 79
第 46図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構内出土遺物(14)・
石器(2)…… 80
第 47図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構内出土遺物(15)・
石器(3)…… 81
第 48図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構内出土遺物(16)・
石器(4)…… 82
第 49図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構内出土遺物(17)・
石器(5)…… 83
第 50図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構内出土遺物(18)・
石器(6)…… 84
第 51図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構内出土遺物(19)・
石器(7)…… 85
第 52図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構内出土遺物(20)・
石器(8)…… 86
第 53図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構内出土遺物(21)・
石器(9)…… 87
第 54図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構内出土遺物(22)・
石器(10)…… 88
第 55図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構内出土遺物(23)・
石器(11)…… 89
第 56図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構内出土遺物(24)・
石器(12)…… 90
第 57図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構内出土遺物(25)・
石器(13)…… 91
第 58図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構内出土遺物(26)・
石製品岩偶・垂飾品…… 92
第 59図　ＡⅠ区捨場土層断面図…… 93
第 60図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(1)・
土器(1)…… 109
第 61図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(2)・
土器(2)…… 110
第 62図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(3)・
土器(3)…… 111
第 63図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(4)・
土器(4)…… 112
第 64図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(5)・
土器(5)…… 113
第 65図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(6)・
土器(6)…… 114
第 66図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(7)・
土器(7)…… 115
第 67図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(8)・
土器(8)…… 116
第 68図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(9)・
土器(9)…… 117
第 69図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(10)・
土器(10)…… 118
第 70図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(11)・
土器(11)…… 119
第 71図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(12)・
土器(12)…… 120
第 72図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(13)・
土器(13)…… 121

第 73図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(14)・土器(14)…… 122
第 74図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(15)・土器(15)…… 123
第 75図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(16)・土器(16)…… 124
第 76図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(17)・土器(17)…… 125
第 77図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(18)・土器(18)…… 126
第 78図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(19)・土器(19)…… 127
第 79図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(20)・土器(20)…… 128
第 80図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(21)・土器(21)…… 129
第 81図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(22)・土器(22)…… 130
第 82図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(23)・土器(23)…… 131
第 83図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(24)・土器(24)…… 132
第 84図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(25)・土器(25)…… 133
第 85図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(26)・土器(26)…… 134
第 86図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(27)・土器(27)…… 135
第 87図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(28)・土器(28)…… 136
第 88図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(29)・土器(29)…… 137
第 89図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(30)・土器(30)…… 138
第 90図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(31)・土器(31)…… 139
第 91図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(32)・土器(32)…… 140
第 92図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(33)・土器(33)…… 141
第 93図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(34)・土器(34)…… 142
第 94図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(35)・土器(35)…… 143
第 95図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(36)・土器(36)…… 144
第 96図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(37)・石器(1)…… 145
第 97図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(38)・石器(2)…… 146
第 98図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(39)・石器(3)…… 147
第 99図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(40)・石器(4)…… 148
第100図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(41)・石器(5)…… 149
第101図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(42)・石器(6)…… 150
第102図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(43)・石器(7)…… 151
第103図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(44)・石器(8)…… 152
第104図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(45)・石器(9)…… 153

第105図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(46)・石器(10)…… 154
第106図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(47)・石器(11)…… 155
第107図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(48)・石器(12)…… 156
第108図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(49)・石器(13)…… 157
第109図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(50)・石器(14)…… 158
第110図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(51)・石器(15)…… 159
第111図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(52)・石器(16)…… 160
第112図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(53)・石器(17)…… 161
第113図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構外出土遺物(54)・石器(18)…… 162
第114図　平安時代の遺構配置図…… 164
第115図　カマドの模式図と用語、計測箇所…… 165
第116図　ＳＩ101 竪穴住居跡、ＳＤ102 溝状遺構…… 166
第117図　ＳＩ101 竪穴住居跡炭化材出土状況…… 167
第118図　ＳＩ101 竪穴住居跡カマド…… 168
第119図　ＳＩ106 竪穴住居跡…… 170
第120図　ＳＩ107 竪穴住居跡、ＳＮ145 焼土遺構…… 171
第121図　ＳＩ108 竪穴住居跡…… 173
第122図　ＳＩ109 竪穴住居跡…… 174
第123図　ＳＩ109 竪穴住居跡カマド…… 175
第124図　ＳＩ109 構築に伴うＳＱ153 礫群の移動…… 177
第125図　ＳＩ113 竪穴住居跡…… 178
第126図　ＳＩ113 竪穴住居跡カマド…… 179
第127図　ＳＩ114 竪穴住居跡…… 180
第128図　ＳＩ115 竪穴住居跡…… 182
第129図　ＳＩ115 竪穴住居跡カマド…… 183
第130図　ＳＩ116 竪穴住居跡…… 184
第131図　ＳＩ116 竪穴住居跡炭化材・種子出土状況…… 185
第132図　ＳＩ116 竪穴住居跡カマド…… 186
第133図　ＳＩ119 竪穴住居跡…… 188
第134図　ＳＩ119 竪穴住居跡カマドＡ…… 189
第135図　ＳＩ119 竪穴住居跡カマドＢ…… 190
第136図　ＳＩ120 竪穴住居跡…… 192
第137図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構内出土遺物(27)・土器(13)…… 193
第138図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構内出土遺物(28)・土器(14)…… 194
第139図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構内出土遺物(29)・土器(15)…… 195
第140図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構内出土遺物(30)・土器(16)…… 196
第141図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構内出土遺物(31)・フイゴ羽口…… 197
第142図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構内出土遺物(32)・砥石(1)…… 198
第143図　ＡⅠ・Ⅱ区遺構内出土遺物(33)・砥石(2)・鉄製品・窯壁…… 199
第144図　ＳＫ124・128・130・131・132・139・140・141 土坑…… 200
第145図　ＳＫ103・137・138 土坑、

ＳＢ184 掘立柱建物跡…… 201
第146図　ＳＫ154 土坑…… 202
第147図　ＳＢ185 掘立柱建物跡…… 203
第148図　ＳＸ110・ＳＢ111鍛冶遺構…… 205
第149図　ＳＸ110 鍛冶炉…… 206
第150図　ＳＮ147・204焼土遺構、
ＳＱ146 配石遺構…… 207
第151図　ＳＤ102・104・126・127・143
溝状遺構、ＳＡ129 柱列…… 209
第152図　ＳＸ133 畑畝跡…… 212
第153図　ＡⅢ区土層断面図…… 217
第154図　ＳＫＴ16・27・36・38Ｔピット… 222
第155図　ＳＫＴ39・41・42・43Ｔピット… 223
第156図　ＳＫＴ47・48・49・50Ｔピット… 224
第157図　ＳＫＴ51・52Ｔピット、
ＳＫ34・40・23土坑…… 226
第158図　ＳＮ60周辺の土器出土状況…… 228
第159図　ＡⅢ区遺構外出土遺物(1)・
土器(1)…… 229
第160図　ＡⅢ区遺構外出土遺物(2)・
土器(2)…… 230
第161図　ＡⅢ区遺構外出土遺物(3)・
土器(3)…… 231
第162図　ＡⅢ区遺構外出土遺物(4)・
土器(4)…… 232
第163図　ＡⅢ区遺構外出土遺物(5)・
土器(5)…… 233
第164図　ＡⅢ区遺構外出土遺物(6)・
土器(6)…… 234
第165図　ＡⅢ区遺構外出土遺物(7)・
土器(7)…… 235
第166図　ＡⅢ区遺構外出土遺物(8)・
土器(8)…… 236
第167図　ＡⅢ区遺構外出土遺物(9)・
石器(1)…… 237
第168図　ＡⅢ区遺構外出土遺物(10)・
石器(2)…… 238
第169図　ＡⅢ区遺構外出土遺物(11)・
石器(3)…… 239
第170図　ＳＩ02竪穴住居跡…… 241
第171図　ＳＩ04竪穴住居跡・ＳＫ14土坑… 242
第172図　ＳＩ05竪穴住居跡…… 243
第173図　ＳＩ07竪穴住居跡…… 244
第174図　ＳＩ08竪穴住居跡…… 246
第175図　ＡⅢ区遺構内出土遺物(9)・
木製品…… 246
第176図　ＳＩ10竪穴住居跡…… 247
第177図　ＳＩ11竪穴住居跡…… 249
第178図　ＳＩ19竪穴住居跡…… 250
第179図　ＳＩ19竪穴住居跡炭化材
出土状況…… 251
第180図　ＳＩ21竪穴住居跡…… 254
第181図　ＳＩ37竪穴住居跡…… 255
第182図　ＡⅢ区遺構内出土遺物(10)・
土器(1)・フイゴ羽口(1)…… 256
第183図　ＡⅢ区遺構内出土遺物(11)・
土器(2)・フイゴ羽口(2)…… 257
第184図　ＡⅢ区遺構内出土遺物(12)・
砥石・鉄製品…… 258
第185図　ＳＤ06溝状遺構・ＳＡ09柱列・
ＳＡ29柱列…… 259
第186図　ＡⅣ・Ｃ区の地形図及び
遺構配置図…… 261
第187図　ＳＩ332 Ａ・Ｂ竪穴住居跡…… 265

第188図　ＳＫＴ309(ＳＫＴ023)・328・329Ｔピット…… 269
第189図　ＳＫ312・313・316・321・322・330土坑…… 270
第190図　ＡⅣ区遺構内出土遺物(1)・石器(1)…… 271
第191図　ＡⅣ区遺構内出土遺物(2)・土器(2)……273
第192図　ＡⅣ区遺構内出土遺物(3)・石器…… 274
第193図　ＡⅣ区遺構外出土遺物(1)・土器(1)…… 275
第194図　ＡⅣ区遺構外出土遺物(2)・土器(2)…… 276
第195図　ＡⅣ区遺構外出土遺物(3)・石器… 277
第196図　ＳＫ311 土坑…… 278
第197図　ＡⅣ区遺構内出土遺物(3)・ＳＫ 311…… 278
第198図　ＳＩ300 竪穴住居跡…… 280
第199図　ＳＩ300 竪穴住居跡炭化材出土状況…… 281
第200図　ＳＩ301(ＳＩ006)竪穴住居跡…… 282
第201図　ＳＩ301 竪穴住居跡カマド…… 283
第202図　ＳＩ302(ＳＩ020)竪穴住居跡…… 285
第203図　ＳＩ310(ＳＩ018)竪穴住居跡…… 287
第204図　ＳＩ310 竪穴住居跡カマド…… 288
第205図　ＳＩ314(ＳＩ005)竪穴住居跡…… 289
第206図　ＳＩ323 竪穴住居跡…… 290
第207図　ＳＩ323 竪穴住居跡カマド…… 291
第208図　ＳＩ325(ＳＩ038)竪穴住居跡…… 291
第209図　ＡⅣ区遺構内出土遺物(4)・土器(3)…… 292
第210図　ＡⅣ区遺構内出土遺物(5)・土器(4)…… 293
第211図　ＡⅣ区遺構内出土遺物(6)・土器(5)・土製品・鉄製品・石製品(砥石)…… 294
第212図　ＡⅣ区遺構内出土遺物(7)・土器(6)…… 295
第213図　ＡⅣ区遺構内出土遺物(8)・土器(7)…… 296
第214図　ＳＫ305土坑・ＳＮ304焼土遺構と出土遺物…… 297
第215図　Ｃ区基本土層図…… 300
第216図　Ｃ区遺構配置図…… 302
第217図　ＳＩ12竪穴住居跡・炉…… 303
第218図　ＳＫＴ21Ｔピット・ＳＫ03・06・07・11・18・19土坑…… 304
第219図　ＳＮ04・15・16・20焼土遺構…… 306
第220図　ＳＲ05・13・14土器埋設遺構…… 307
第221図　Ｃ区遺構内出土遺物(1)・土器(1)… 310
第222図　Ｃ区遺構内出土遺物(2)・土器(2)… 311
第223図　Ｃ区遺構内出土遺物(3)・土器(3)… 312
第224図　Ｃ区遺構内出土遺物(4)・石器…… 313
第225図　Ｃ区遺構外出土遺物(1)・土器(1)… 315
第226図　Ｃ区遺構外出土遺物(2)・土器(2)… 316
第227図　Ｃ区遺構外出土遺物(3)・土器(3)… 319
第228図　Ｃ区遺構外出土遺物(4)・土器(4)… 320
第229図　Ｃ区遺構外出土遺物(5)・石器・石製品(1)…… 321
第230図　Ｃ区遺構外出土遺物(6)・石器・石製品(2)…… 322

図 版 目 次

ＡⅡ区

図版 1. はりま館遺跡航空写真（上が南）

ＡⅡ・Ⅲ区 平安時代の遺構の分布状況（上が南）

図版 2. ＡⅠ・Ⅱ・Ⅲ区 調査前の状況（北東▶）

ＡⅠ区 調査後全景（西▶）

図版 3. ＡⅡ区 北部の礫群の状況（南西▶）

ＡⅠ区 南部の礫群の状況（南▶）

図版 4. ＳＩ205・ＳＩ207竪穴住居跡 完掘（南西▶手前がＳＩ205）

ＳＩ207竪穴住居跡 完掘（北東▶）

図版 5. ＳＩ211竪穴住居跡 遺物・亜角礫出土状況（南▶）

ＳＩ211竪穴住居跡 完掘（西▶）

図版 6. ＳＩ207竪穴住居跡 土層断面（東▶）

ＳＩ207竪穴住居跡 完掘（北東▶）

図版 7. ＳＩ230・231・233・234・235・237竪穴住居跡 完掘（西▶）

ＳＩ230・231・233・234・235・237竪穴住居跡 完掘（南東▶）

図版 8. ＳＩ210竪穴住居跡 完掘（東▶）

ＳＩ212Ａ・Ｂ、215Ａ・Ｂ竪穴住居跡遺物出土状況（西▶）

図版 9. ＳＩ223・224Ａ・Ｂ竪穴住居跡 土層断面（南▶）

ＳＩ223・224Ａ・Ｂ竪穴住居跡 完掘（北▶）

図版 10. ＳＩ175Ａ・Ｂ竪穴住居跡 完掘（東▶）

ＳＩ156竪穴住居跡 完掘（北▶）

図版 11. ＳＩ173Ａ・Ｂ・Ｃ竪穴住居跡 精査前の状況（東▶）

ＳＩ173Ａ・Ｂ・Ｃ竪穴住居跡 半截後の状況（東▶）

図版 12. ＳＩ173Ａ・Ｂ・Ｃ竪穴住居跡 完掘（南▶）

ＳＩ173Ａ・Ｂ・Ｃの炉（東▶）

ＳＩ173Ａの土器埋設炉（東▶）

図版 13. ＳＩ213Ａ・Ｂ竪穴住居跡 1／4截の状況（北西▶）

ＳＩ213Ａ・Ｂ竪穴住居跡 完掘（南▶）

図版 14. ＳＱ146とその下の大湯浮石の状況（北▶）

ＳＩ152竪穴住居跡に堆積した大湯浮石層の状況（東▶）

図版 15. ＳＩ152Ａ・Ｂ竪穴住居跡とＳＱ153集石遺構の状況（西▶）

ＳＩ152竪穴住居跡 完掘（南▶）

図版 16. ＳＩ152竪穴住居跡西辺の柱穴検出状況（東▶）

ＳＩ152竪穴住居跡とＳＱ153集石遺構の状況（南西▶）

図版 17. ＳＱ153集石遺構の断面状況（東▶）

ＳＱ153集石遺構内の岩偶出土状況（南▶）

図版 18. ＳＩ218竪穴住居跡　完掘（上が北）
ＳＩ228竪穴住居跡　完掘（東▶）
図版 19. ＳＩ168竪穴住居跡　完掘（北▶）
ＳＩ170竪穴住居跡　完掘（西▶）
図版 20. ＳＩ222竪穴住居跡　土層断面の状況（東▶）
ＳＩ162・165竪穴住居跡　完掘（北西▶）
図版 21. ＳＫＴ159Ｔピット　完掘（東▶）
ＳＫＴ167Ｔピット　完掘（東▶）
ＳＫＦ157フラスコ状ピット　完掘（東▶）
ＳＫ239土坑　土器出土状況（西▶）
ＳＫ168土坑　完掘（南▶）
ＳＲ221土器埋設遺構　半截（南西▶）
ＳＲ225土器埋設遺構　半截（南▶）
ＳＲ226土器埋設遺構　半截（南東▶）
図版 22. ＡＩ区　捨場　調査状況（南東▶）
ＡＩ区　捨場　遺物出土状況（南東▶）
図版 23. ＡＩ区　捨場　遺物出土状況（北東▶）
ＡＩ区　捨場　土層断面（南▶）
図版 24. ＡＩ・Ⅱ区　遺構内出土土器(1)
図版 25. ＡＩ・Ⅱ区　遺構内出土土器(2)
図版 26. ＡＩ・Ⅱ区　遺構内出土土器(3)
図版 27. ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土土器(1)
図版 28. ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土土器(2)
図版 29. ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土土器(3)
図版 30. ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土土器(4)
図版 31. ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土土器(5)
図版 32. ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土土器(6)
図版 33. ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土土器(7)
図版 34. ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土土器(8)
図版 35. ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土土器(9)
図版 36. ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土土器(10)
図版 37. ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土土器(11)
図版 38. ＡⅡ区　第Ⅲ層大湯浮石層面での全景（南▶）
ＡⅡ区　第Ⅲ層大湯浮石層面での全景（北▶）
図版 39. ＳＩ101竪穴住居跡　炭化材出土状況（南▶）
ＳＩ101竪穴住居跡　完掘（西▶）
図版 40. ＳＩ101竪穴住居跡　西壁北側炭化材出土状況（西▶）
ＳＩ101竪穴住居跡　西壁南側炭化材出土状況（西▶）
ＳＩ101竪穴住居跡カマド　完掘（北▶）
図版 41. ＳＩ106・107竪穴住居跡、ＳＸ110鍛冶炉　確認状況（北▶）
ＳＩ106竪穴住居跡　遺物・礫出土状況（北▶）
図版 42. ＳＩ106竪穴住居跡　完掘（北▶）
ＳＩ106竪穴住居跡カマド　完掘（北▶）
図版 43. ＳＩ107竪穴住居跡　土層断面（北▶）
ＳＩ107竪穴住居跡　完掘（西▶）
図版 44. ＳＩ108竪穴住居跡　確認状況（西▶）
ＳＩ108竪穴住居跡　床面上礫出土状況（南▶）
図版 45. ＳＩ109竪穴住居跡　確認状況（東▶）
ＳＩ109竪穴住居跡　完掘（北▶）
図版 46. ＳＩ109竪穴住居跡カマド　支脚出土状況（西▶）

ＳＩ113竪穴住居跡　完掘（東▶）
図版 47. ＳＩ114竪穴住居跡　完掘（北▶）
ＳＩ114竪穴住居跡　カマド煙道部蓋石の状況（北▶）
図版 48. ＳＩ115竪穴住居跡　確認状況（西▶）
ＳＩ115竪穴住居跡　略完掘（北▶）
図版 49. ＳＩ116竪穴住居跡　確認状況（東▶）
ＳＩ116竪穴住居跡　炭化材出土状況（南▶）
図版 50. ＳＩ116竪穴住居跡　炭化材出土状況（西▶）
ＳＩ116竪穴住居跡　完掘（西▶）
図版 51. ＳＩ115竪穴住居跡カマド（北東▶）
ＳＩ116竪穴住居跡　炭化材出土状況（西▶）
ＳＩ116竪穴住居跡カマド　完掘（西▶）
図版 52. ＳＩ119竪穴住居跡　完掘（西▶）
ＳＩ119竪穴住居跡カマドＡ燃焼部（北▶）
ＳＩ119竪穴住居跡カマドＢ（北▶）
図版 53. ＳＩ120竪穴住居跡、ＳＤ121・134溝状遺構　確認状況（北▶）
ＳＩ120竪穴住居跡、ＳＤ121溝状遺構　完掘（北▶）
図版 54. ＳＩ120竪穴住居跡カマド　確認状況（北▶）
ＳＫ132土坑　確認状況（北▶）
ＳＫ132土坑　坑底面に掘り込まれている　小土坑
図版 55. ＳＫ154土坑　確認状況（東▶）
ＳＫ154土坑　炭化材出土状況（南▶）
ＳＮ147焼土遺構　確認状況（南▶）
図版 56. 鍛冶遺構（ＳＸ110・ＳＢ111）確認状況（北▶）
鍛冶遺構（ＳＸ110・ＳＢ111）　完掘（北▶）
図版 57. ＳＸ110鍛冶炉（真上から）
ＳＸ110鍛冶炉（南東▶）
ＳＸ110鍛冶炉　断ち割り（南▶）
図版 58. ＳＸ110鍛冶炉　掘り方（南▶）
ＳＸ110鍛冶炉　鍛造薄片出土状況
ＳＫ103土坑、ＳＤ102溝状遺構　確認状況（東▶）
図版 59. ＳＸ133畑畝跡、ＳＤ121・134溝状遺構　確認状況（北▶）
ＳＤ102、ＳＩ101、ＳＫ103（南▶）
ＳＤ105・149溝状遺構　確認状況（北▶）
図版 60. ＡⅢ区　調査風景（南▶）
ＡⅢ区　基本土層断面（南▶）
図版 61. ＳＫＴ16Ｔピット　完掘（西▶）
ＳＫＴ27Ｔピット　完掘（南▶）
ＳＫＴ39Ｔピット　土層断面（西▶）
ＳＫＴ47Ｔピット　完掘（西▶）
ＳＫＴ43Ｔピット　完掘（東▶）
ＳＫ14土坑　完掘（北▶）
ＳＫ34土坑　完掘（北▶）
ＫＪ56グリッドの石刀・石剣の出土状況（東▶）
図版 62. ＡⅢ区　遺構外出土土器(1)
図版 63. ＡⅢ区　遺構外出土土器(2)
図版 64. ＳＩ02竪穴住居跡　確認状況（西▶）
ＳＩ02竪穴住居跡　完掘（東▶）

図版 65. ＳＩ04竪穴住居跡、ＳＫ14土坑　確認状況（西▶）
ＳＩ05竪穴住居跡　確認状況（南▶）
図版 66. ＳＩ05竪穴住居跡完掘、ＳＩ37竪穴住居跡　確認状況（西▶）
ＳＩ37竪穴住居跡　完掘（西▶）
図版 67. ＳＩ07竪穴住居跡　確認状況（東▶）
ＳＩ07竪穴住居跡　完掘（東▶）
図版 68. ＳＩ08竪穴住居跡　完掘（西▶）
ＳＩ08竪穴住居跡　炭化木製品（皿）出土状況
図版 69. ＳＩ10竪穴住居跡　確認状況（北▶）
ＳＩ10竪穴住居跡　完掘（北▶）
図版 70. ＳＩ11竪穴住居跡　確認状況（北▶）
ＳＩ11竪穴住居跡　完掘（北▶）
図版 71. ＳＩ19竪穴住居跡　確認状況（西▶）
ＳＩ19・21竪穴住居跡　略完掘（北▶）
図版 72. ＳＩ19竪穴住居跡カマド（南▶）
ＳＩ19竪穴住居跡　北壁部炭化材出土状況（北▶）
ＳＩ19竪穴住居跡　北東隅部炭化材出土状況（北東▶）
図版 73. ＳＩ21竪穴住居跡　完掘（南▶）
ＳＩ21竪穴住居跡カマド　完掘（南▶）
図版 74. ＳＤ06溝状遺構、ＳＡ09柱列　確認状況（南▶）
ＳＤ06溝状遺構、ＳＡ09柱列　確認状況（左）完掘（右）（西▶）
図版 75. ＡⅣ区調査前状況（北▶）
調査状況（南東▶）
図版 76. ＳＩ332竪穴住居跡　完掘（北西▶）
ＳＩ332竪穴住居跡　完掘（南西▶）
図版 77. ＳＩ332竪穴住居跡　土層断面（西▶）
ＳＩ332竪穴住居跡　遺物出土状況（左　西▶、右　南▶）
図版 78. ＳＫＴ309Ｔピット　完掘（東▶）
ＳＫＴ328Ｔピット　土層断面（東▶）
ＳＫＴ328・329Ｔピット完掘（東▶）
図版 79. ＳＫ312土坑　遺物出土状況（南▶）
ＳＫ313土坑　完掘（西▶）
ＳＫ316土坑　遺物出土状況（南▶）
図版 80. ＳＫ321・322土坑　完掘（東▶）
ＳＫ330土坑　完掘（東▶）
ＳＮ304焼土遺構　土層断面（北▶）
図版 81. ＳＫ331土坑　確認状況（南▶）
ＳＫ311土坑　遺物出土状況（北▶）
ＳＫ311土坑　完掘（南▶）
図版 82. ＳＩ300竪穴住居跡　確認状況（北▶）
ＳＩ300竪穴住居跡　炭化材出土状況（西▶）
図版 83. ＳＩ300竪穴住居跡　北西部炭化材出土状況（南西▶）
ＳＩ300竪穴住居跡　北壁部炭化材出土状況（北▶）
図版 84. ＳＩ301竪穴住居跡　確認状況（西▶）
ＳＩ301竪穴住居跡完掘及びＳＩ310竪穴住居跡確認状況（東▶）
図版 85. ＳＩ301・310竪穴住居跡　完掘（東▶）
ＳＩ301・310竪穴住居跡　完掘（北東▶）
図版 86. ＳＩ301竪穴住居跡カマド　確認状況（西▶）
ＳＩ301竪穴住居跡カマド　完掘（西▶）

ＳＩ310竪穴住居跡カマド　完掘（北西▶）
図版 87. ＳＩ302竪穴住居跡　確認状況（東▶）
ＳＩ302竪穴住居跡　完掘（東▶）
図版 88. ＳＩ314竪穴住居跡　確認状況（ほぼ床面が現れている、西▶）
ＳＩ323竪穴住居跡　完掘（西▶）
図版 89. ＳＩ323竪穴住居跡カマド　完掘（西▶）
ＳＩ323竪穴住居跡　遺物出土状況
ＳＫ305土坑　土層断面（南▶）
図版 90. ＳＩ325竪穴住居跡　確認状況（東▶）
ＳＩ325竪穴住居跡　完掘（東▶）
図版 91. ＡⅣ区　遺構内・遺構外出土土器
図版 92. Ｃ区全景　第Ⅲ層面での遺構確認状況（北▶）
Ｃ区全景　第Ⅴ層面の状況（北▶）
図版 93. 基本層位　Ｂ地点（東▶）
調査風景　調査区南側（南東▶）
図版 94. ＳＩ12竪穴住居跡　確認状況（東▶）
ＳＩ12竪穴住居跡　完掘（東▶）
図版 95. ＳＩ12竪穴住居跡　炉確認状況
ＳＩ12竪穴住居跡　炉断ち割り
ＳＫＴ21Ｔピット　完掘（西▶）
図版 96. ＳＫ03土坑　完掘（北▶）
ＳＫ06土坑　完掘（東▶）
ＳＫ07土坑　完掘（南▶）
図版 97. ＳＫ11土坑　確認状況（東▶）
ＳＫ11土坑　土層断面（北▶）
ＳＫ11土坑　完掘（南▶）
図版 98. ＳＫ18土坑　土層断面（南▶）
ＳＫ18土坑　完掘（南▶）
ＳＫ19土坑　完掘（南▶）
図版 99. ＳＮ04・15・16焼土遺構　確認状況（南東▶）
ＳＮ04焼土遺構　確認状況（東▶）
遺物出土状況　ＫＴ14グリッド
図版100. ＳＲ05土器埋設遺構　確認状況（北西▶）
ＳＲ05土器埋設遺構　擦石出土状況（北▶）
ＳＲ05土器埋設遺構　擦石出土状況（北▶）
図版101. ＳＲ13土器埋設遺構（東▶）
ＳＲ13土器埋設遺構　土層断面（東▶）
ＳＲ13土器埋設遺構　略完掘（東▶）
図版102. ＳＲ14土器埋設遺構　確認状況（南▶）
ＳＲ14土器埋設遺構　（南▶）
ＳＲ14土器埋設遺構　土層断面（南▶）
図版103. Ｃ区　遺構内出土土器
図版104. Ｃ区　遺構外出土土器

第１章　はじめに

第１節　調査に至るまで

はりま館遺跡は、東北縦貫自動車道建設工事に係る事前発掘調査として、昭和57（1982）年に発掘調査されている。[註1] 今回、この地区に新設のインター・チェンジ（小坂Ｉ・Ｃ）建設が計画されたため、秋田県教育委員会では、計画地内の遺跡範囲確認調査を昭和62年８月24日～９月５日に行った。[註2] その結果、計画地内の大部分が発掘調査を必要とすることが分かり、調査対象面積は34,000㎡とされた。

秋田県教育委員会では、先の遺跡範囲確認調査結果を基に、昭和63年度に発掘調査を実施することとし、昭和63年５月９日から調査に着手した。途中、県道からインター・チェンジに至る新設の取り付け道路部分について予備調査を行ったところ、さらに発掘調査が必要な部分のあることが判明した。このため、秋田県土木部と日本道路公団、秋田県教育委員会３者の協議が持たれ、この部分に付いては、昭和64年（平成元年）４月に発掘調査を行うことで合意した。

昭和63年度の発掘調査は、昭和63年５月９日～同年12月８日まで、ＡＩ～Ⅳ区、Ｂ・Ｃ・Ｄ区とＥ区の一部を行った。調査面積は34,280㎡である。また、平成元年度の調査を平成元年４月２日～同年４月28日まで行い、ＥⅢ区2,900㎡を調査した。

第２節　調査の組織と構成

遺跡所在地	秋田県鹿角郡小坂町小坂字下モ上ハ山47―１、外
調査期間	昭和63年度　昭和63年５月９日～12月８日
	平成元年度　平成元年４月２日～４月28日
調査対象面積	37,600㎡
調査面積	37,180㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	昭和63年度
	大野　憲司（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）
	榮　一郎（　〃　〃　）
	小林　克（　〃　文化財主事）

高橋　　学（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）
近藤　智弥（　　〃　　非常勤職員）
久米　　徹（　　〃　　〃　　）
三浦　光男（　　〃　　〃　　）
阿部　　崇（　　〃　　〃　　）
平成元年度
大野　憲司（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）
高橋　忠彦（　　〃　　文化財主事）
榮　　一郎（　　〃　　学芸主事）
高橋　　学（　　〃　　〃　　）
鎌田　　茂（　　〃　　非常勤職員）
三浦　光男（　　〃　　〃　　）

調査総務担当　昭和63年度
加藤　　進（秋田県埋蔵文化財センター主査）
高橋忠太郎（　　〃　　主事）
平成元年度
佐田　　茂（　　〃　　主査）
高橋忠太郎（　　〃　　主事）

調査協力機関　秋田県土木部鹿角土木事務所
日本道路公団仙台建設局十和田南事務所
小坂町・小坂町教育委員会

註１　秋田県教育委員会　『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ｘ』秋田県文化財調査報告書第109集　1984（昭和59年）

註２　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第174集　1988（昭和63年）

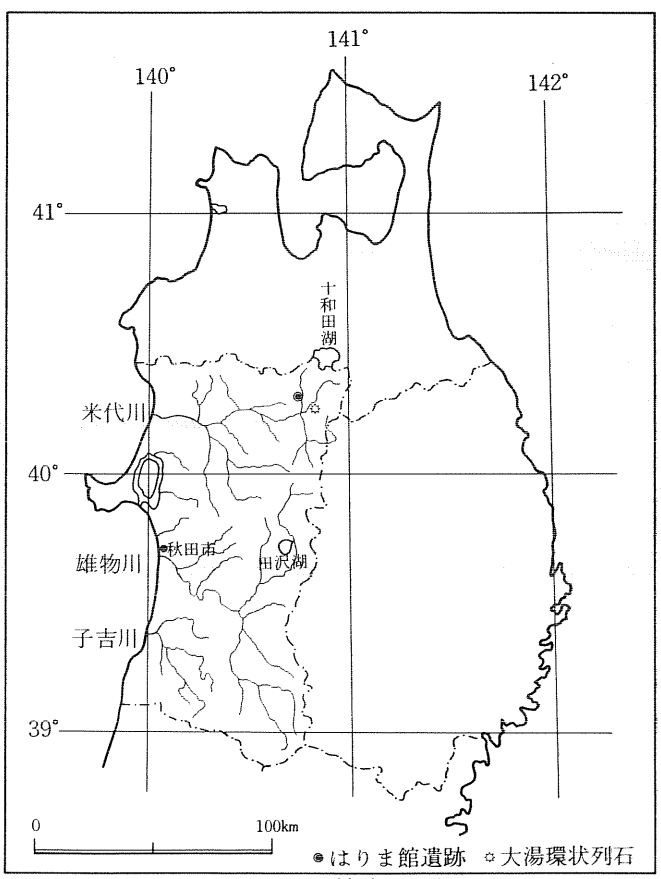
第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の位置と立地

１　遺跡の位置

はりま館遺跡は、鹿角郡小坂町小坂字下モ上ハ山と横館地内に所在する。遺跡中心部の位置は、おおよそ北緯40°19′、東経140°44′30″で、十和田湖の南西15kmに当たる。

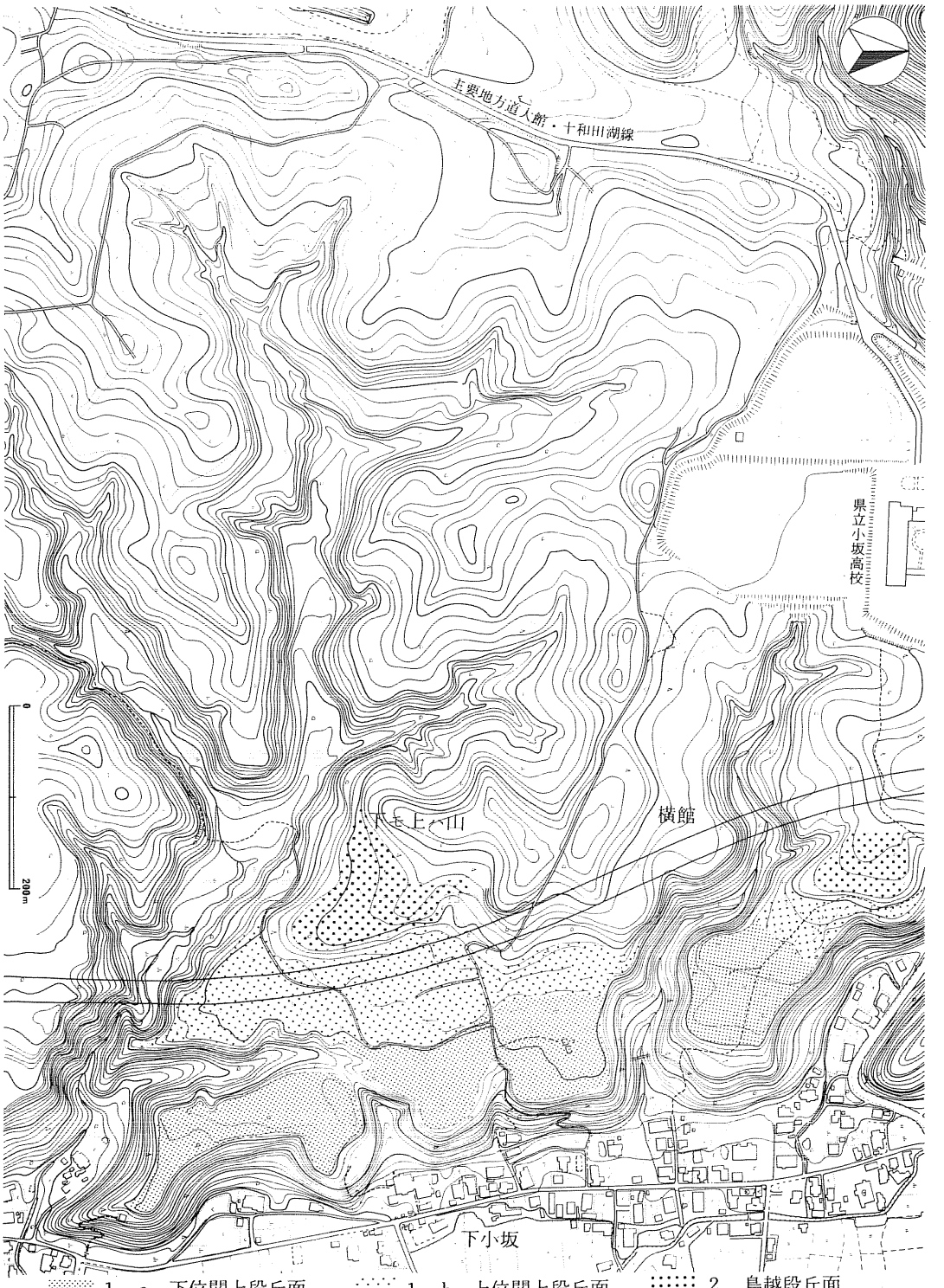
国道282号を鹿角市毛馬内から青森県錠ケ関方面に向かうと、およそ９kmで小坂町中心部に至り、主要地方道大館十和田湖線（樹海ライン）との交差点にさしかかる。この交差点を左に折れて大館市方向に進むと、すぐに沖積面との比高差が約45ｍの台地上に出る。その左手には県立小坂高等学校があり、その南が小坂インター・チェンジ入口になる。遺跡は、この小坂インター・チェンジ入口から料金所、インター・チェンジループ部分にかかる一帯である。



第１図　はりま館遺跡の位置

２　遺跡の立地

十和田湖南西側に源を発する小坂川は、一路南下を続け鹿角市毛馬内の南側で大湯川と合流した後、北流して来た米代川に流入する。鹿角盆地の端にあたる小坂川流域には、十和田火山起源の火山噴出物とその二次堆積物からなる３面の段丘面が広く分布している。３面の段丘面は、高い方から鳥越段丘、関上段丘、毛馬内段丘で、毛馬内段丘は小坂川の下流域にのみ分布する。小坂町地内においては、小坂川の東西両側に鳥越段丘、関上段丘が分布し、縄文時代から古代までの数多くの遺跡が存在しているが、遺跡の分布はこの両面に限られるわけではない。



第２図　はりま館遺跡と周辺の地形

鳥越段丘の外縁には、十和田火山第一期噴出物と見られる軽石流堆積物（ＴＷ１Ｐ）が広く分布しており、その後の浸蝕によってやや起状のある面となっているものの、そのなだらかな斜面等にも遺跡の存在していることが、まま見られる。なお、内藤博夫（1966）[註1]によれば、久野久（1953）の十和田火山第一期噴出物の軽石流堆積物には、高市軽石質火山灰層、鳥越軽石質火山灰層（鳥越段丘）、などがあり、それぞれ^{14}Ｃ年代は前者が33,000BP、後者が12,000～10,400BPとされている。また、関上段丘（申ケ野軽石質火山灰層）は、中川久夫ら（1972）[註2]による南部浮石（8,600BP）に対応するものであろうか。

小坂川両側には、南北に狭小な沖積地に沿う形で関上段丘・鳥越段丘・十和田火山第一期噴出物である軽石流堆積物（以下、ＴＷ１Ｐとする）の分布が見られる。はりま館周辺にも同様の分布が見られると考えられるものの、その構成については『秋田県総合地質図幅』[註3]と藤本幸雄（1984）[註4]の見解は、異なっている。つまり前者では、はりま館遺跡内の東側部分（標高200ｍ前後の平坦な段丘面）を鳥越段丘とし、その西側部分のなだらかな斜面のある210ｍ～245ｍの面をＴＷ１Ｐとしているのに対し、後者では東側部分を関上段丘、西側部分を鳥越段丘及びＴＷ１Ｐとしているのである。ここでは、遺跡周辺の表面地形の観察などから、藤本の見解に従っておく。

第２図１－ａ、１－ｂのスクリーントーン部分は極めて平坦な段丘地形であり、これが関上段丘面である。東側の沖積面との比高差約40ｍで、境界は急峻な崖面となっている。１－ａ部分と１－ｂ部分は、調査区内においては比高差２～４ｍの段差を有し、あるいは段丘面の違いかとも考えられる。境界部分は、明瞭な崖をなす部分と漸移的な部分とがある。いま仮にこれを、１－ａを下位の関上面、１－ｂを上位の関上面と呼んでおく。また遺跡内における関上面には東側から２つ、南側の堤沢川方向から１つの小さな沢が入るが、いずれも短くそれほど浸蝕作用が進んだものではない。鳥越段丘面は、関上段丘面の西側に接して分布する標高215ｍ前後の平坦な面である。関上段丘面との比高差８～12ｍを持ち、境界は明瞭な崖面をなしている。鳥越面の西側は、鳥越段丘面との境界がはっきりしない部分で十和田火山第一期噴出物による軽石流堆積物の面と思われる。もともとは相当になだらかな面であったと予想されるが、現況はやや起状のある面となっている。これは、浸蝕作用が相当に進んだ結果と見られ、大小の沢が枝状に入り込んでいる。

今回のはりま館遺跡の調査にあたっては、インター・チェンジのループ部分から主要地方道への取り付き部分までも含めて全て１つの広大な遺跡と捉えたが、各区の地形などにはかなりの違いがある。このため、これをＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅの５区に分けて行いＡ・Ｅ区はさらに各々４つの区に別れている。なお、Ａ区とＣ区は東北自動車道の本線をはさんで東西に位置するが、基本的には同一の段丘面上にある。調査区のＢ・Ｄ・Ｅ区は、この３つの部分のゆるやかな斜

面及び、馬背状を呈する頂部などに立地している。

第２節　歴史的環境

本遺跡の名称に、中世城館を指す「はりま館」が冠されているが、これは以下に記すような理由による。小坂町下小坂に所在する、慶長15年開山と伝えられる曹洞宗鏡得寺北西側背後の細長い台地及び付近一帯を、地元では「はりま館」と呼び習わしている。昭和57年度の東北縦貫自動車道建設工事に伴う事前調査（本線部分）も、これに隣接する位置であったため、遺跡名として、単に小字名（下モ上ハ山）を付す事とは違った意味で、これを「はりま館遺跡」としたものである。

なお、鏡得寺西側背後の細長い台地は、南北約300ｍ、東西40～100ｍの規模で、標高192～198ｍの平坦な面をなしている。この台地は西側が南から入る深い沢、北側が現況での上面幅約25ｍ、深さ約６ｍの大きな空堀で、他の台地面とは画された明瞭な郭をなしており、東～南側は沖積面との比高差が30～40ｍの急崖となっている。この郭の部分は、『秋田県の中世城館』によれば、下小坂の西側台地に所在する「横館」に連続する一部として捉えられている。しかしながら、これに示された「横館」の中心部に当たると考えられる部分の調査（昭和57年及び今回の調査）結果では、その範囲内から中世に属すると見られる遺構・遺物は検出されていない。従って、「横館」の領域及び時代等については見直す必要がある。未調査の「はりま館」の実相は別としても、これは「横館」とは別の館として、あるいはむしろ「横館」＝「はりま館」（明瞭な郭部分のみ）として捉えておくべきかと考えられる。

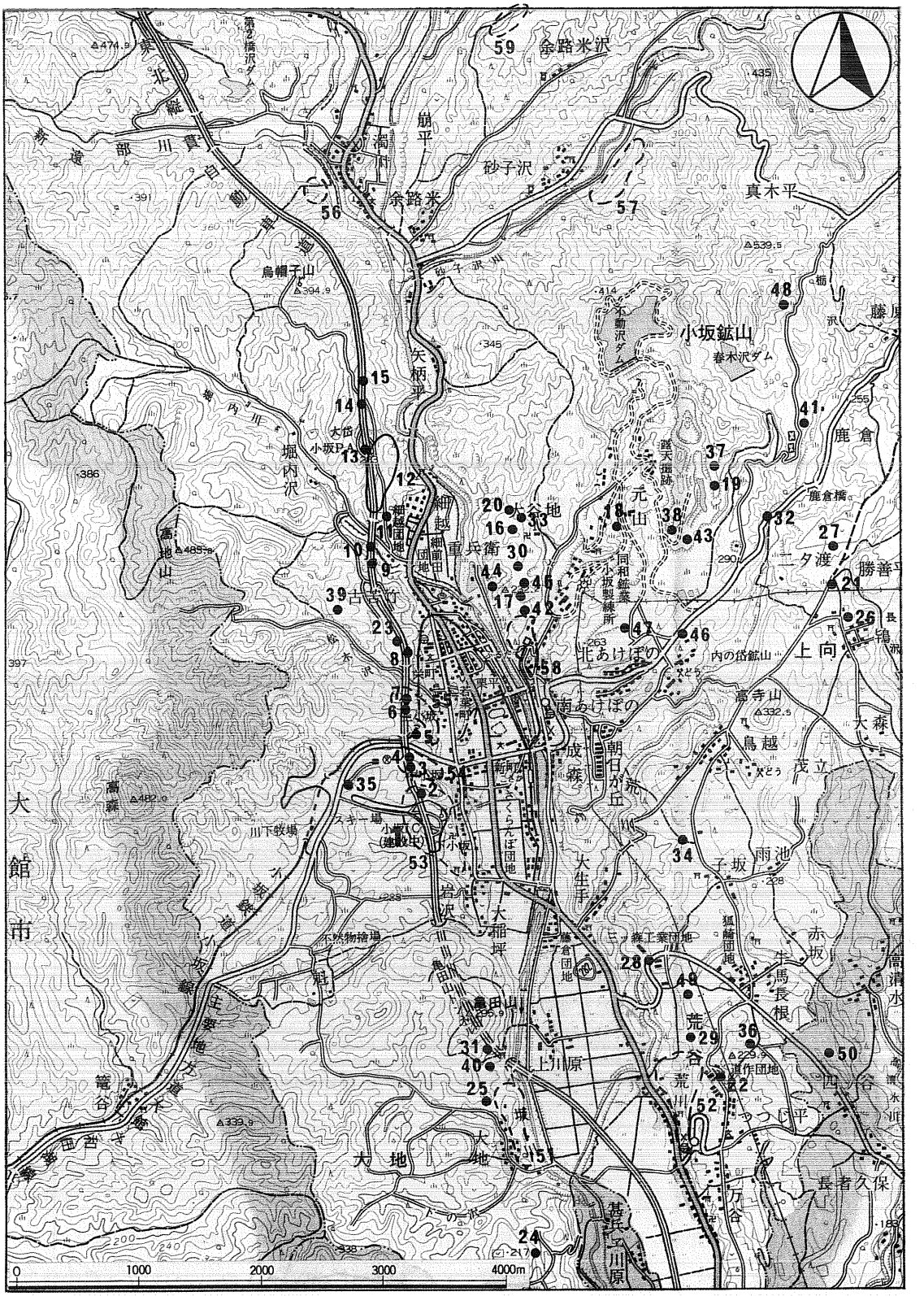
小坂町内にはこれまでのところ、縄文時代～中世までの57遺跡が確認されており、これをまとめたのが、第３図と第１表である。これを見ると、遺跡の大部分は小坂町の中心部に集中している。その主たる理由は、縄文時代～平安時代の遺跡が形成され易いと見られる河岸段丘面が、これまで遺跡の発見されている地域に広く分布し、それ以外は山地であるためと考えられるが、詳細分布調査が実施されていないことにも起因している。例えば、昭和57年に東北縦貫道に関する発掘調査が開始される前までは、小坂川西岸の河岸段丘面上からは、中世城館を除くと８遺跡しか知られていなかった。それが、昭和57、58年の調査によって新たに13遺跡が発見されている。しかもその13遺跡は、直線距離にしてわずか4.5㎞、幅30ｍ前後の帯の中に存在するものである。従って、このことからすれば、発見されていない遺跡がまだ多く存在すると考えられる。これまでのところ、小坂町の遺跡で確実に縄文時代早期まで遡るものはない。これは、十和田火山噴出物の軽石流が数回にわたって堆積した結果、縄文時代早期以前の遺跡のほとんどを覆ってしまっているためと考えられる。

縄文時代前期中葉〜末葉の遺跡は非常に多く、遺物が見つかっているだけの遺跡を含めると、17遺跡に上る。17遺跡のうち6遺跡は発掘調査されており、はりま館（1：以下カッコ内の番号は第3図に対応する）・大岱Ⅰ・Ⅳ遺跡（11）からは竪穴住居跡、横館（2）・大岱Ⅰ遺跡（12）からはフラスコ状ピットなどが検出されている。発掘調査の行われていない遺跡のうち下大谷地Ⅰ（17）・内の岱狸沢遺跡（19）からは、かなりの量の遺物が採集されている。特に内の岱狸沢遺跡からはほぼ完形で、国指定の重要文化財である岩偶が発見されており、多くの考古学に関する本などを飾っている。また、大岱Ⅳ遺跡からも大量の土器・石器とともに、略完形の岩偶が出土している。縄文時代中期の遺跡は、前期に比べると若干少なくなり、発掘調査された7遺跡にあっても、遺構・遺物共に激減する。遺構は、白長根館Ⅰ遺跡（6）で竪穴住居1軒、道合Ⅰ遺跡（9）で竪穴住居跡・フラスコ状ピットが各々1基ずつ見つかっているだけで、遺物も少なく、とても大きな集落が形成されていたとは考えられない状況にある。ただし、未発掘の6遺跡の中で、鴇Ⅱ遺跡（26）からは青竜刀形石器（2点？）、二夕渡北方遺跡（27）からは北陸地方の新保式類似の土器が採集されており、注目される。

縄文時代後期は、中期に比べると遺跡数が大きく増加する。このことは、昭和57・58年に発掘調査された東北縦貫自動車道関係14遺跡中、12遺跡で後期の遺物あるいは遺構が検出されたことからもわかる。小坂町あるいは当地方の後期における遺跡の立地する場所が多岐にわたり、この期になって、あたかも生活領域が拡大したような感さえある。検出された遺構も多い。竪穴住居跡が白長根館Ⅰ（6）・大岱Ⅲ遺跡（14）で各々6軒、中小坂遺跡（5）3軒、大岱Ⅰ遺跡（12）2軒、はりま館（1）・館平館Ⅰ（3）・丑森（8）・大岱Ⅳ遺跡で各々1軒ずつ検出されている。また、秋田県の縄文時代遺跡を代表する遺跡である大湯環状列石に見られるような配石遺構も、大きなまとまりではないが、下大谷地杉沢環状列石（16）で5基、大岱Ⅱ遺跡（13）で9基検出されている。未発掘の遺跡は9遺跡あるが、この中では大地Ⅱ遺跡（31）から多くの遺物が採集されており、かなり大きな遺跡であると予想される。

晩期の遺跡は、発掘調査された遺跡7、未発掘の遺跡が5であるが、後期に比べるとその数は少なく、調査された遺跡にあっても、それ程特筆するべきものはない。このことはまた、通常、縄文時代晩期の大きな遺跡が低位の河岸段丘面あるいは沖積地に立地することが多いのに、小坂町の場合には、十和田火山噴出物との関係で、そのような場所が該期以降をも含めてどのような状況にあったのか不詳であることとも係っていよう。

弥生時代及びこれに後続する時期の遺物は、小坂町内いたるところから出土している。この期の遺構は大岱Ⅰ遺跡から土壙墓2基が検出されているだけであるが、遺物のみ出土している遺跡は14遺跡を数える。この数は縄文時代各期の遺跡数と比べて多いものではないが、県内全体の弥生時代遺跡数の割りには、1つの町における該期の遺跡としては多く発見されている。



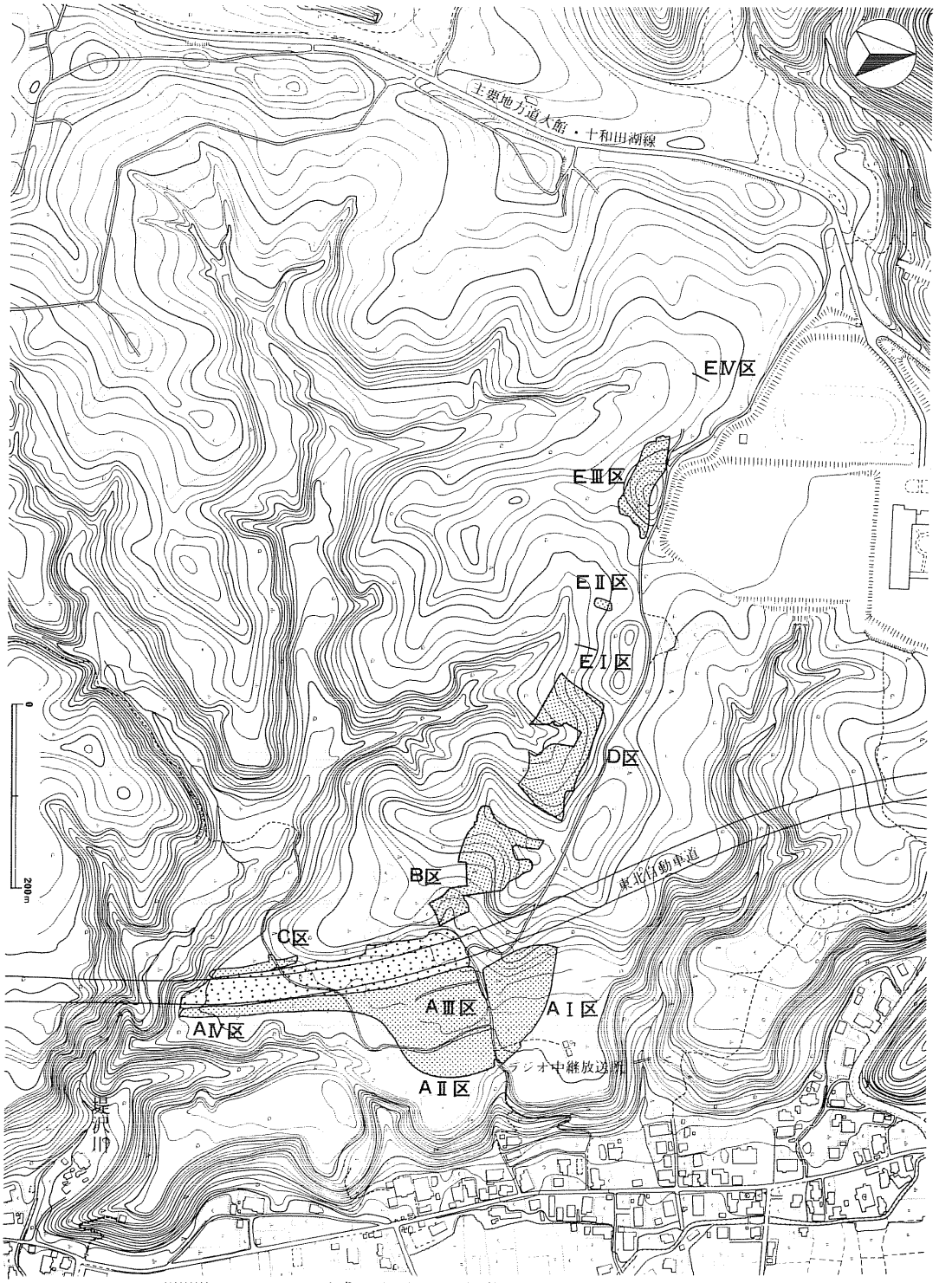
第３図　はりま館遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表　周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	遺構・遺物（数字は発掘調査年）
1	はりま館	竪穴住居(縄文前・後,平安),フラスコ状ピットなど縄文土器（前～晩）・石器,土師器,須恵器　1982
2	横館	フラスコ状ピット・土坑など,縄文土器（前）,弥生土器（後）,石器　1982
3	館平館Ⅰ	竪穴住居（縄文後）など,縄文土器（前・後）,石器　1983
4	館平館Ⅱ	縄文土器（後）,弥生土器（後）　1983
5	中小坂	竪穴住居(縄文後),配石遺構など,縄文土器(中～晩),土偶・岩板など　1987
6	白長根館Ⅰ	竪穴住居（縄文中・後,平安）など,縄文土器(前～晩),石器,土師器・羽口・鉄滓,和鏡など　1983
7	白長根館Ⅱ	フラスコ状ピットなど,縄文土器(後),石器　1983
8	丑森	竪穴住居（縄文後）,土坑など,縄文土器（後）・石器　1983
9	道合Ⅰ	竪穴住居（縄文中）など,縄文土器（中・後）,石器　1983
10	道合Ⅱ	縄文土器（後）,三脚石器など　1983
11	大岱Ⅳ	竪穴住居（前・後）など,縄文土器（前・後）,石器,岩偶など,弥生土器　1983
12	大岱Ⅰ	竪穴住居（前・後）,土壙墓（弥生中）など,縄文土器（前～晩）,弥生土器（中）　1982
13	大岱Ⅱ	配石遺構（縄文後）など,縄文土器（中・後）,石器,弥生土器　1982
14	大岱Ⅲ	竪穴住居（縄文後）など,縄文土器（前～晩）,石器,弥生土器（後）　1983
15	円川原	縄文土器（後・晩）,石器　1983
16	下大谷地杉沢環状列石	組石遺構（縄文後）など,縄文土器（後・晩）,石器,弥生土器,大型蛤刃石斧　1965～1969
17	下大谷地Ⅰ	縄文土器（前）,石器,有孔円盤状石製品など
18	元山	縄文土器（前）,石器
19	内の岱狸沢	縄文土器（前）,石器,岩偶・岩版など
20	寺の沢	縄文土器（前・中・晩）,石器,弥生土器（後）
21	鴇Ⅰ	縄文土器（前）
22	荒川松森Ⅰ	縄文土器（前）
23	一ツ森	縄文土器（前）
24	馬子岱	縄文土器（前）
25	大地Ⅰ	縄文土器（前）
26	鴇Ⅱ	縄文土器（中）,石器,青竜刀形石器など
27	ニタ渡北方	縄文土器（前・中）,新保式類似土器
28	荒川手紙坂	縄文土器（中）,土偶
29	荒川松森Ⅱ	縄文土器（中）,石器,石冠状石製品
30	下大谷地Ⅱ	縄文土器（中・後）
31	大地Ⅱ	縄文土器（後）,石器,土偶,岩版など
32	内の岱ニタ渡	フラスコ状ピット,縄文土器（後）,石器
33	寺上	縄文土器（後・晩）,石器
34	大生手	縄文土器（後）
35	館野	縄文土器（後・晩）,石器
36	牛馬長根	縄文土器（後）,須恵器
37	内の岱火薬庫西方	縄文土器（後）
38	内の岱環状列石	組石遺構（縄文後）,縄文土器（後）,石器
39	松木沢	縄文土器（後）
40	大地	縄文土器（晩）
41	内の岱火薬庫東方	縄文土器（晩）,弥生土器(前・後)
42	下大谷地東方	縄文土器（晩）
43	尾樽部	弥生土器（後）,アメリカ式石鏃など
44	砂山	弥生土器（後）
45	下大谷地	弥生土器（後）,土師器
46	曙台	弥生土器（後）,石器
47	からみ山	弥生土器（後）,土製紡錘車
48	内の岱北方	弥生土器(中)
49	つつじが平	土師器
50	四ツ谷	須恵器
51	大地館	鹿角四十二館の1つ。
52	荒川館	鹿角四十二館の1つ。
53	横館	「はりま館」との関連は不明。
54	館平館	2条の空堀
55	白長根館	2条の空堀など
56	濁川館	鹿角四十二館の1つ。
57	八幡館	鹿角四十二館の1つ。
58	小坂館	鹿角四十二館の1つ。
59	台作館	空堀

参考文献

1・2・11・12・13	秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書X』秋田県文化財調査報告書第109集　1984（昭和59年）
3・4・6・7・8・9・10	秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書XII』
11・13・14・15	秋田県文化財調査報告書第120集　1984（昭和59年）
5	秋田県教育委員会『中小坂遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第177集　1988（昭和63年）
16	小坂環状列石調査団・小坂町教育委員会『小坂環状列石墳墓』　1969（昭和44年）
51～59	秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』　1981（昭和56年）
その他	安保彰　「小坂のあけぼの」『小坂町史』　1975（昭和50年）



昭和63年・平成元年度調査　昭和57年度調査

第４図　はりま館遺跡　各調査区の位置

遺物は、土器を中心とするが、その中では小坂Ｘ式，後北Ｃ式などが目立っている。

平安時代の遺跡は、弥生時代以前の遺跡に比べて、発見された数が少ない。発掘調査された遺跡は３遺跡で、はりま館から８軒（昭和57年現在）、白長根館Ｉ遺跡から11軒、丑森遺跡から１軒の竪穴住居跡が検出されている。これらの竪穴住居跡は、いずれも大湯浮石降下後のものである。

小坂町で、いわゆる中世城館と考えられる遺跡は９遺跡とされている。このうち５館は、いわゆる鹿角四十二館に入るものであるが、残り４館についての詳細は不明である。例えば横館は、かなり広い面積をもつ城館と見られているが、その中心部と考えられるところの調査結果では、これまでのところ中世に属する遺構・遺物とも検出されていない。

註１　内藤博夫　「秋田県米代川流域の第四紀火山砕屑物と段丘地形」『地理学評論』第39巻第７号　1966（昭和41年）

註２　中川久夫ほか　「十和田火山発達史概要」『東北大地質古生物研邦報』№73　1972（昭和47年）

註３　秋田県　『秋田県総合地質図幅』大館　1973（昭和48年）

註４　秋田県教育委員会　『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ｘ』秋田県文化財調査報告書第109集　1984（昭和59年）

第３章　発掘調査の概要

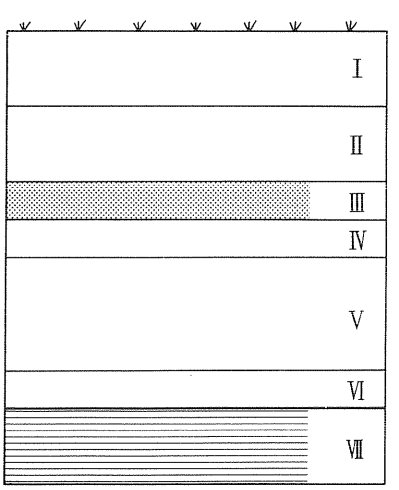
第１節　遺跡の概要

昭和57、63年、平成元年の３ケ年にわたって発掘調査したはりま館遺跡の範囲は広大である。それは、南北約900ｍ、東西約450ｍにも及び、標高差が10～13ｍの２つの段丘面を含んでいる。従って、ここから検出された遺構、出土した遺物には、縄文時代・弥生時代（続縄文時代を含む）・平安時代の各期のものがある。それらはあたかも数遺跡が独立して存在している感さえあるものの、わずかずつではあるがそれぞれ関連を持つようにも見える。

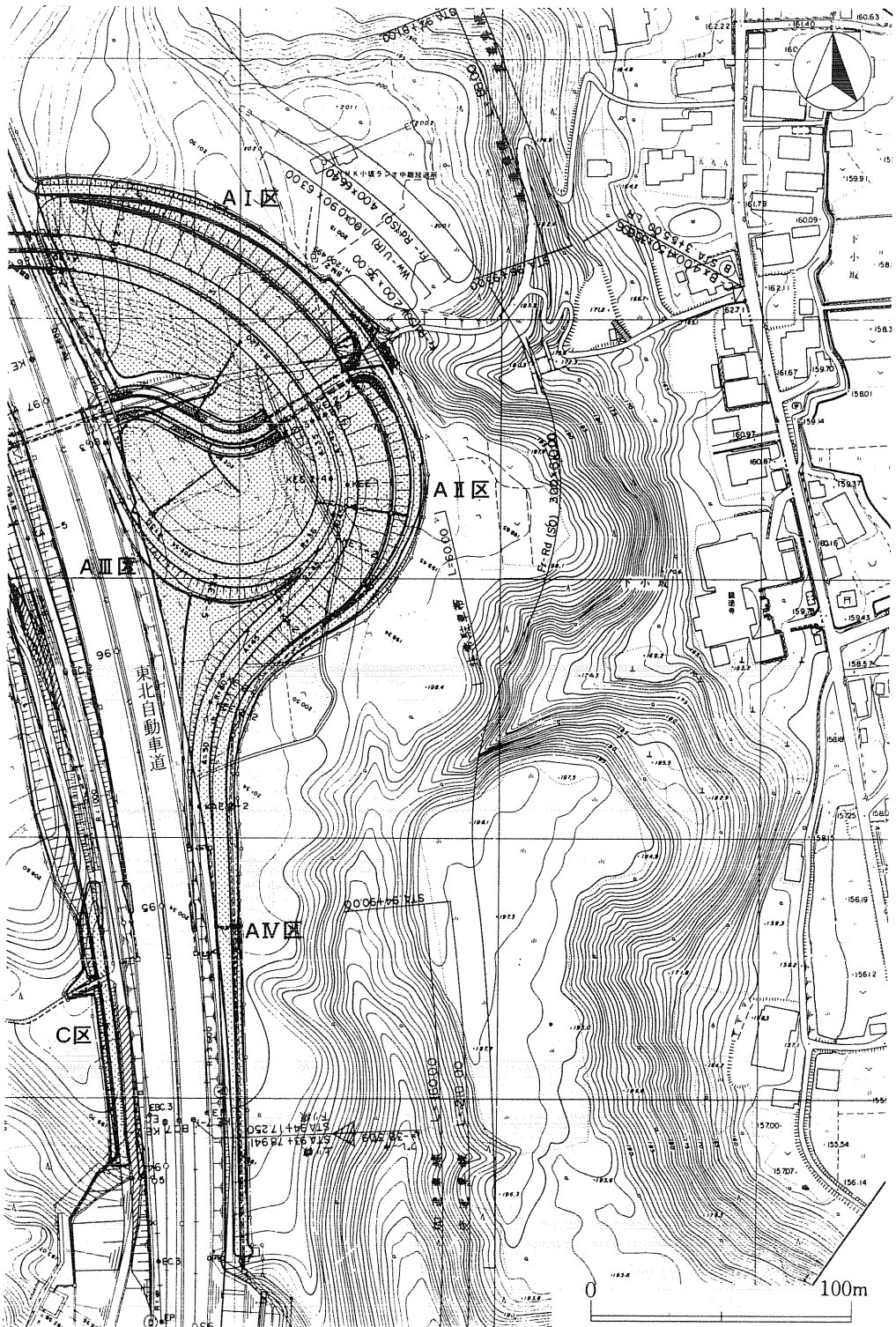
１　遺跡の基本層序

発掘調査前の各調査区の原況は、Ｄ区が山林であった以外は全て畑地と一部山林であった。しかしこの山林も、そのほとんどの部分はかつて（戦前～戦後間もなくまで）畑地であり、第Ⅰ層の大部分は大かれ少なかれ攪乱を受けている。

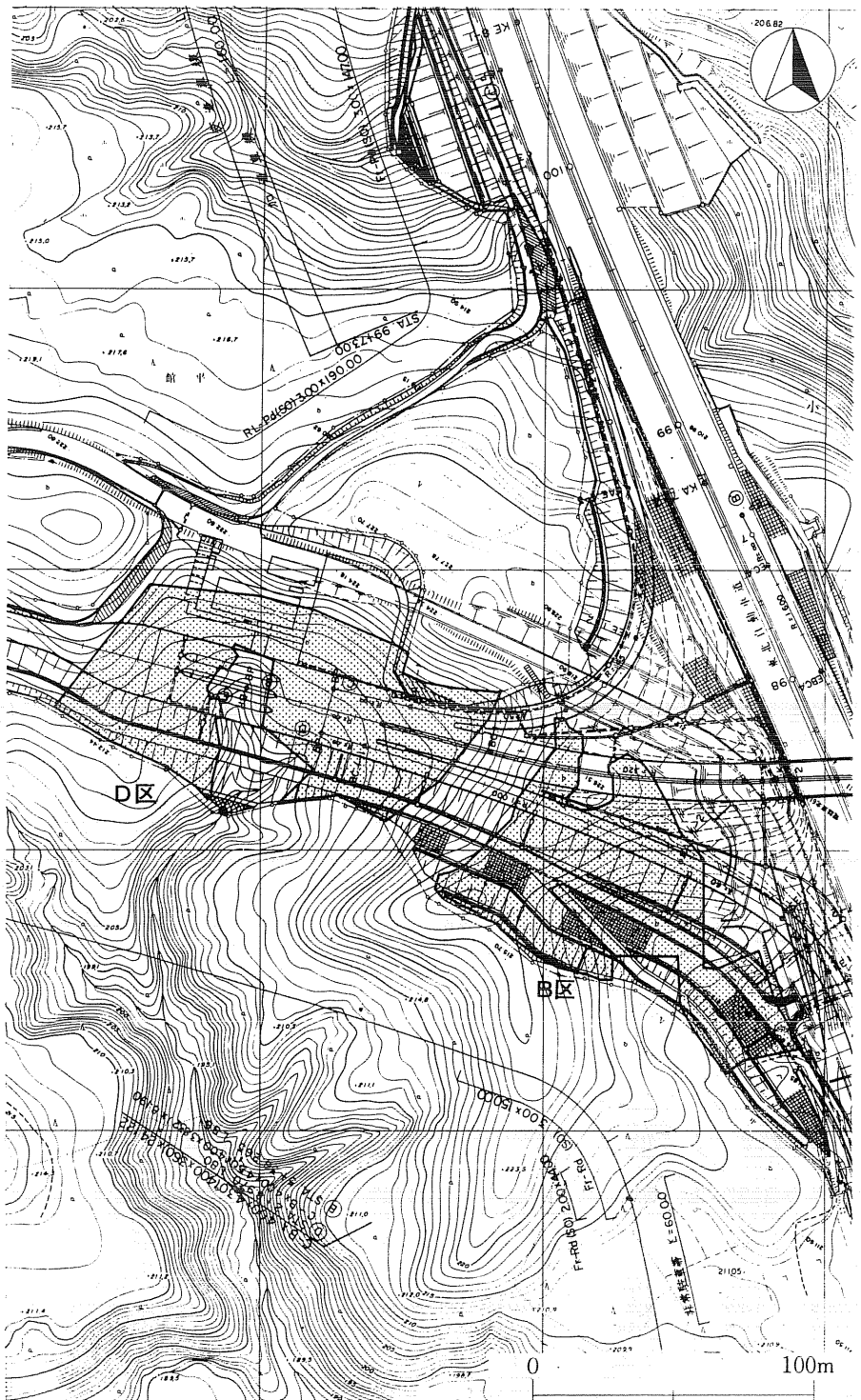
第５図は、はりま館遺跡における基本層序の模式図である。第Ⅰ層は黒褐～黒色の表上で、畑の耕作土である。耕作時に第Ⅱ層上部にまで鍬がはいったところでは、本層中にも大湯軽石が混入している。第Ⅱ層は、攪乱を受けていない黒色表土で、平安時代以降のものである。第Ⅲ層はいわゆる大湯浮石層である。平坦な面での層厚は10～20cmであるが、急斜面にはほとんど見られない部分が存在したり、逆に斜面下端では厚さ50cm以上にも達する部分もある。本遺跡における平安時代の遺構は、全て本層を切って構築されている。また、まれにではあるが、本層の上部に黒色土と大湯浮石の混土で堅くしまった層が存在し、平安時代後葉の生活面と考えられる。第Ⅳ層は見た目にはチョコレート色に見える黒褐色土である。層厚は５～10cmで、第Ⅴ層との層界ははっきりせず、これの存在しない場所もある。弥生時代の遺物の大部分はこの層から出土している。第Ⅴ層は黒褐色のいわゆる黒ボク土である。層厚30～50cmを平均とするが、かなり薄い部分や60cm以上に達するところもある。縄文時代の遺物を包含する層で、該期の遺構もこの層の中位くらいから掘り込まれている場合が多い。第Ⅵ層はいわゆる地山漸移層で、第Ⅶ層は地山土である。本遺跡での一般的な地山土は、火山噴出物と見られる軽石流堆積物であるが、風化が著



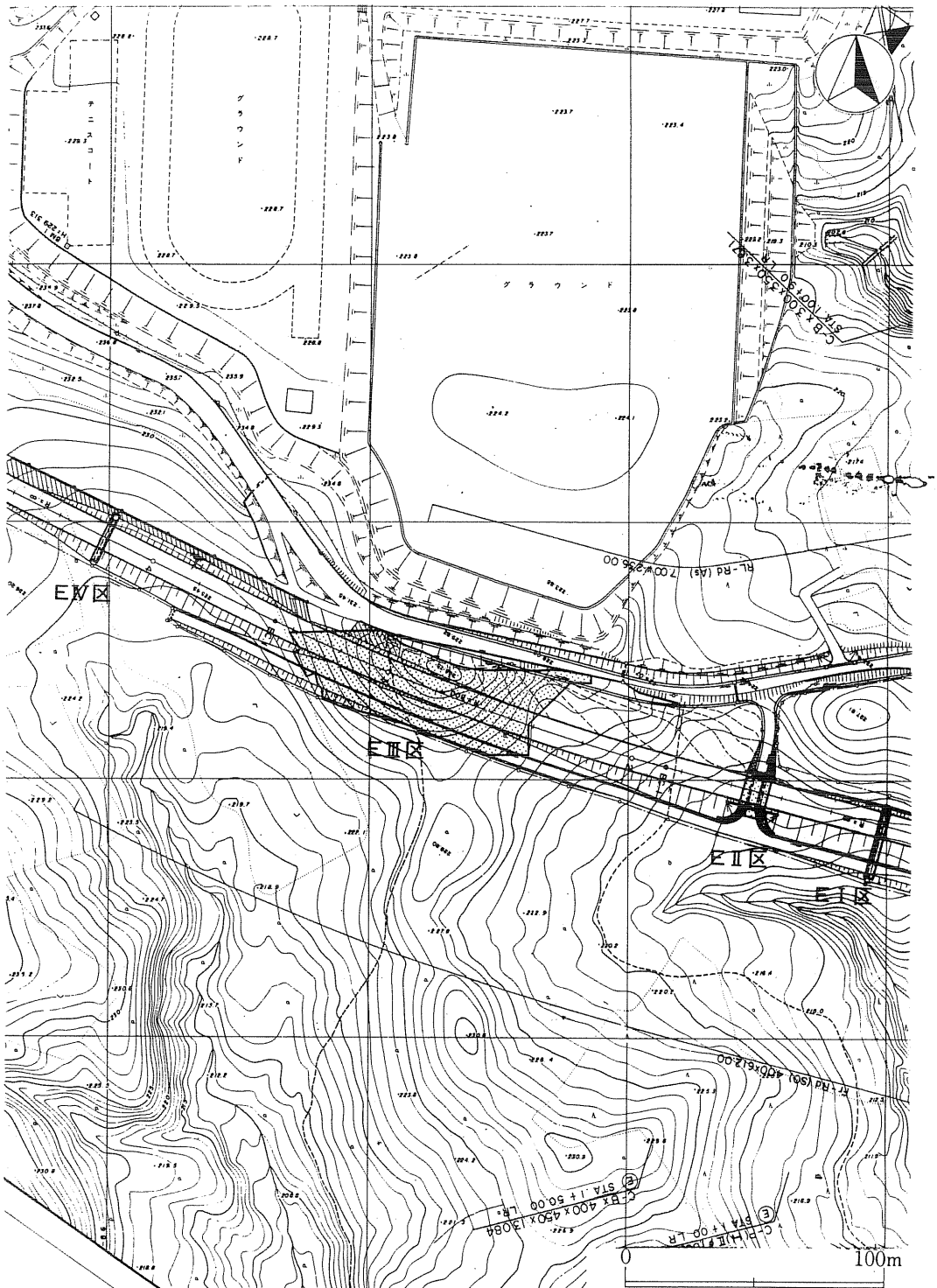
第５図　基本層序模式図



第６図　工事計画図と調査区（１）



第７図　工事計画図と調査区（２）



第８図　工事計画図と調査区（３）

しく土壌化して黄橙色を呈している（以下、これを風化軽石と呼ぶ）。この風化軽石の層厚は地点によってかなり異っており、その下の段丘礫層と考えられる砂礫層が第Ⅵ層の直下に存在している部分もある。

２　遺構と遺物の分布

広大な遺跡内に２面の段丘面が存在する上、開折の進んだ沢地形などが存在し、しかも縄文時代前期以降の各時期にわたって生活の場とされているため、調査区内における遺構と遺物の分布は一様でない。

縄文時代前期の竪穴住居跡を主体とする遺構群は、Ａ区・ＥⅢ区に見られる。Ａ区では主に、平坦な関上面の台地縁辺に分布しており、大きくは調査区南端部に当たるＡⅣ区と、同北東部のＡＩ・ＡⅡ区に分けられる。ＥⅢ区では、小さな沢を臨む南西向きの緩斜面に位置している。ＥⅢ区の遺構群の広がりは十分に捉え得ないものの、Ａ区におけるこの時期の遺構群は比較的密度が濃い。上記以外の区における該期の遺構は、ほとんど存在せず、遺物も稀薄である。遺物が最も濃密に分布するのは、ＡＩ・Ⅱ区北東部で、ここには捨場が形成されている。

中期の確実な遺構は、Ｄ・ＥⅢ区に１～数軒の同期末葉の竪穴住居跡が存在するだけである。Ｄ・ＥⅢ区を含めても遺構は少なく全体に散発的である。

後期の遺構もＡⅡ・Ｂ・Ｃ・ＥⅢ区に竪穴住居跡などがわずかに見られるものの、それぞれ最小単位のものであり遺物も少ない。

晩期の遺構は、ＡⅢ・Ｂ・Ｄ・ＥⅢ区に土坑や焼土遺構が見られるもののその数は少ない。同期の遺物はＡⅢ・Ｂ区にややまとまっている以外は稀薄である。

弥生時代の遺構は、ＡⅣ・Ｂ・Ｄ区にあり、ＡＩ・Ⅱ区を除く調査区から遺物が出土している。この中でも遺構・遺物が最も濃密に分布するのはＤ区である。Ｄ区では、小さな沢を囲んで南面する緩斜面全体に竪穴住居跡・土坑・焼土遺構などが分布し、その中及び周囲から弥生時代の遺物が多数出土している。

弥生時代に後続する時期の遺物としては、後北Ｃ式土器がＤ・Ｅ区からわずかに出土している。

平安時代の遺構は、Ｂ区を除く全ての調査区から検出されている。その中でＡⅡ・Ⅲ・Ⅳ区が特に多く、多数の竪穴住居跡などが関上面の中央部から東端部にかけて分布している。遺物は、遺構数に比べて少なく、遺構のない部分ではほとんど出土していない。なお、平安時代の遺構・遺物は、10世紀前葉と考えられている大湯浮石（十和田ａ）降下後のものである。

第２節　調査の方法

発掘調査では、広大な調査区全体を同一基準による４ｍ四方のグリッド調査とすることとした。これに際しては、昭和57年度調査済の本線部分との位置的な整合性を考慮したが、この時の基線は本線の中心杭ＳＴＡ95＋00から磁北を求めたものであった。このため、その復原がむずかしく、今回の調査ではループ部分の工事杭ＡランプＳＴＡ４＋40,000を基準にすることとした。すなわち、ＡランプＳＴＡ４＋40,000（Ｘ＝＋35,093,8144、Ｙ＝－7,878,8433）を原点とし、国家座標第Ｘ系座標北方向を南北基線、これとの直交方向を東西基線とし、両基線に沿って４ｍ間隔のラインを設定したのである。各ラインには、南北ラインにアルファベット２文字の組み合わせ、東西ラインに２～３桁の数字を付し、４ｍ×４ｍの各グリッドの名称は、その区画の南東隅の交点座標を充てることとした。従って、南北基線はＫＡ、東西基線は50としたので、原点を南東隅の交点とするグリッド名称はＫＡ50のごとくである。なお、南北ラインの場合、例えばＫＡ・ＫＢ・ＫＣ…という具合にアルファベット２文字を順次スライドさせているが、これがＫＴまで行くと次にはＬＡ・ＬＢ…ＬＳ・ＬＴ、ＭＡ・ＭＢ…のごとく１文字目をスライドさせてある。

調査は、昭和62年の範囲確認調査結果を考慮にし、表土約20cmを重機で除去した後人力で行った。遺構の精査は、対象となる遺構によって２分法・４分法などを用い、断面図と平面図を作成した。各図の縮尺は基本的に20分の１であるが、場合によっては10分の１もある。各種の写真は、35mmのモノクロ・カラースライド・ネガカラーを１セットとして撮影し、この他にブローニー版も若干使用した。遺物の取り上げは、遺構内出土以外のものについてはグリッド単位で行ったが、必要に応じて遺物個々の位置・レベル等を記録して取り上げたものもある。

第３節　調査経過

前述のように、小坂インター・チェンジ建設工事に係るはりま館遺跡の発掘調査は、昭和63年・平成元年の２ケ年にわたり実施された。発掘調査に際しては、調査対象地が広大でしかも地形の上でも他とは区分して考えるべき箇所も多く、また、調査の工程と排土置場との関係などから、ＡⅠ・ＡⅡ・ＡⅢ・ＡⅣ・Ｃ・Ｂ・Ｄ・ＥⅠ・ＥⅡ・ＥⅢ・ＥⅣの計11調査区に分けて行った。ＥⅢ区を除く10調査区は昭和63年度に、ＥⅢ区は平成元年度に調査したものである。

遺跡全体の調査経過は大略以下の通りであるが、各調査区の調査経過については、それぞれの報告の項で述べている。また、本遺跡の昭和63年度の調査担当者は第１章第２節に記した通りであるが、この他に、下記の秋田県埋蔵文化財センター職員が期間の一部調査に携わった。

高橋忠彦・栗沢光男（以上文化財主事）、利部修・谷地薫（以上学芸主事）、三嶋隆儀・鎌田茂・小山内透・能登谷宣康・高橋正洋（以上非常勤職員）。

昭和63年度

５月９日に作業員説明会を行い、同日から12日まで機材の搬入、整備等調査準備をし、同月13日にＡⅢ区の調査を開始した。この後順次、ＡⅡ区・Ｄ区・Ｃ区・Ｂ区と調査に入ったが排土置場の関係から、ＡＩ区・ＡⅣ区の調査はＡⅢ区の調査終了後となった。また、５月と９月の各々約１週間はＥ区の予備調査とし、ＥＩ・Ⅱ・Ⅳ区の調査もその後に実施された。各調査区の発掘調査期間は以下の通りである。

ＡＩ区：昭和63年９月２日～12月３日
ＡⅡ区：　〃　５月16日～10月14日
ＡⅢ区：　〃　５月13日～７月22日
ＡⅣ区：　〃　９月26日～11月４日
Ｂ　区：　〃　９月13日～12月７日
Ｃ　区：　〃　７月18日～９月９日
Ｄ　区：　〃　６月16日～12月７日
ＥＩ区：　〃　11月１日～11月18日
ＥⅡ区：　〃　　〃
ＥⅣ区：　〃　　〃

なお、この間12月３日には小坂町公民館を会場に、スライド映写などによる現地説明会を開催した。

平成元年度

Ｅ区については、当初調査範囲には含まれていなかったものであるが、県道からインター・チェンジ料金所に至る取付道路部分にも遺跡の存在することが判明したため、盛土工法で対応できない部分についてのみ、調査を実施することにしたものである。調査期間は、ＥⅢ区については昭和63年度の対応が困難であったため、これを平成元年度に行うこととした。

ＥⅢ区：平成元年４月２日～４月28日

なお、図面・写真・遺物等の整理作業は、現場作業と並行しながらと、平成元年度に行ったが、報告書作成に当たっては、高橋忠彦・武藤祐浩の協力を得た。

第４章　ＡＩ・Ⅱ区の調査の記録

第１節　ＡＩ・Ⅱ区の概要

１　ＡＩ・Ⅱ区の位置と立地・基本層位

はりま館遺跡の東端部には、標高198～200ｍの略平坦な下位関上面が南北約200ｍ、東西約90ｍで広がっており、その中央部東側からは極く短小な沢が入っている。この部分での下位関上面は、その東側で急峻な段丘崖をもって比高差25ｍ～30ｍの沖積地に至る。ＡＩ・Ⅱ区はこの遺跡東端部に当たり、今回の調査対象地は下位関上面の中央西半部で、短小な沢の北側をＡＩ区、南側をＡⅡ区とした。調査前の原況は畑地、植生された杉林、アカシヤの林及び荒地であった。なお、ＡＩ区の西側にはわずかに上位関上面も存在するが、下位関上面から上位関上面への移行は、ＡⅡ区とＡⅢ区のそれに比べるとなだらかである。また、下位関上面は略平坦であるが、微視的に見れば、北側ほど高く、漸次南に向かって低くなっており、これはＡⅢ区からＡⅣ区方向に低くなるのと同様である。

土層はＡＩ・Ⅱ区共、基本的に同じであるが、ＡⅡ区にあっては大湯浮石層の上に平安時代の生活面が存在すること、ＡＩ区においては、主に縄文時代前期の遺物包含層が他に比べて厚いことが若干異なっている。すなわち、第116図の平安時代竪穴住居跡ＳＩ101の土層断面図に見られるように、基本土層第Ⅲ層の大湯浮石層の上部に、黒褐色土と大湯浮石の混土層（かたくしまっているが、崩れ易い）が存在し、この上面は平安時代の集落が形成された時の生活面であると判断される。また、ＡＩ区においては第59図に示した捨場の土層断面図のように、捨場には土器や石器などと共に大量の焼土粒子や木炭の混じる土が捨てられており、縄文時代の遺物包含層である基本土層第Ⅴ層が厚く、また色調も他の地点とは異っている。

２　遺構と遺物の分布

ＡＩ・Ⅱ区からは、平安時代と縄文時代の遺構と遺物が検出されている。

平安時代の遺構は、竪穴住居跡・鍛冶炉・溝状遺構・土坑・焼土遺構などが検出されており、溝状遺構２条、焼土遺構１基を除いてはＡⅡ区内に存在する。これらの遺構は、全て基本層位の第Ⅲ層大湯浮石層を掘り込んで構築されており、大湯浮石降下後のものである。竪穴住居跡はＡⅡ区ほぼ全面から検出されているが、中央部に集中し、北部ほど希薄である。また、ほぼ同時期と考えられるＡⅢ区の竪穴住居群とも比較的近い位置にあるが、両者が分布する段丘面の標高差、ＡⅡ区東側に未調査部分の存在することなどからするとＡⅡ区の竪穴住居群は、下位関上面で１つの集落を構成するかに見える。

縄文時代の遺構は、ＡＩ・Ⅱ区のほぼ全面から竪穴住居跡・Ｔピット・土坑・配石遺構・土器埋設遺構などが検出されており、土坑を除くほとんどの遺構は前期のものである。竪穴住居跡は、調査区内に限って見れば、主にＡＩ区とＡⅡ区の間に東側からはいる短小な沢を中心にして分布している。しかし、これは未調査部分をも考慮すると、必ずしも沢頭を中心に形成されたものではなく、実際には段丘縁辺に分布しているのが、調査した部分が限定されているために、このように見えるものと考えられる。なお、この短小な沢は、最近でもしばしば地滑りを起こしており、縄文時代前期の竪穴住居跡ＳＩ233・237や平安時代の竪穴住居跡ＳＩ119などの東側が削り取られている（中小坂部落からはりま館に至る道路建設の際に削り取られたのが直接の原因ではあるが）。このことは、少なくとも平安時代後葉までには、この平坦面がもっと東側まで存在していたことを示すものである。土坑は、前期のものが同期の竪穴住居跡の分布と重なり、後期などのものがＡⅡ区中央から南側に分布する。

平安時代の遺物は少なく、その大部分は住居カマド周辺から出土している。

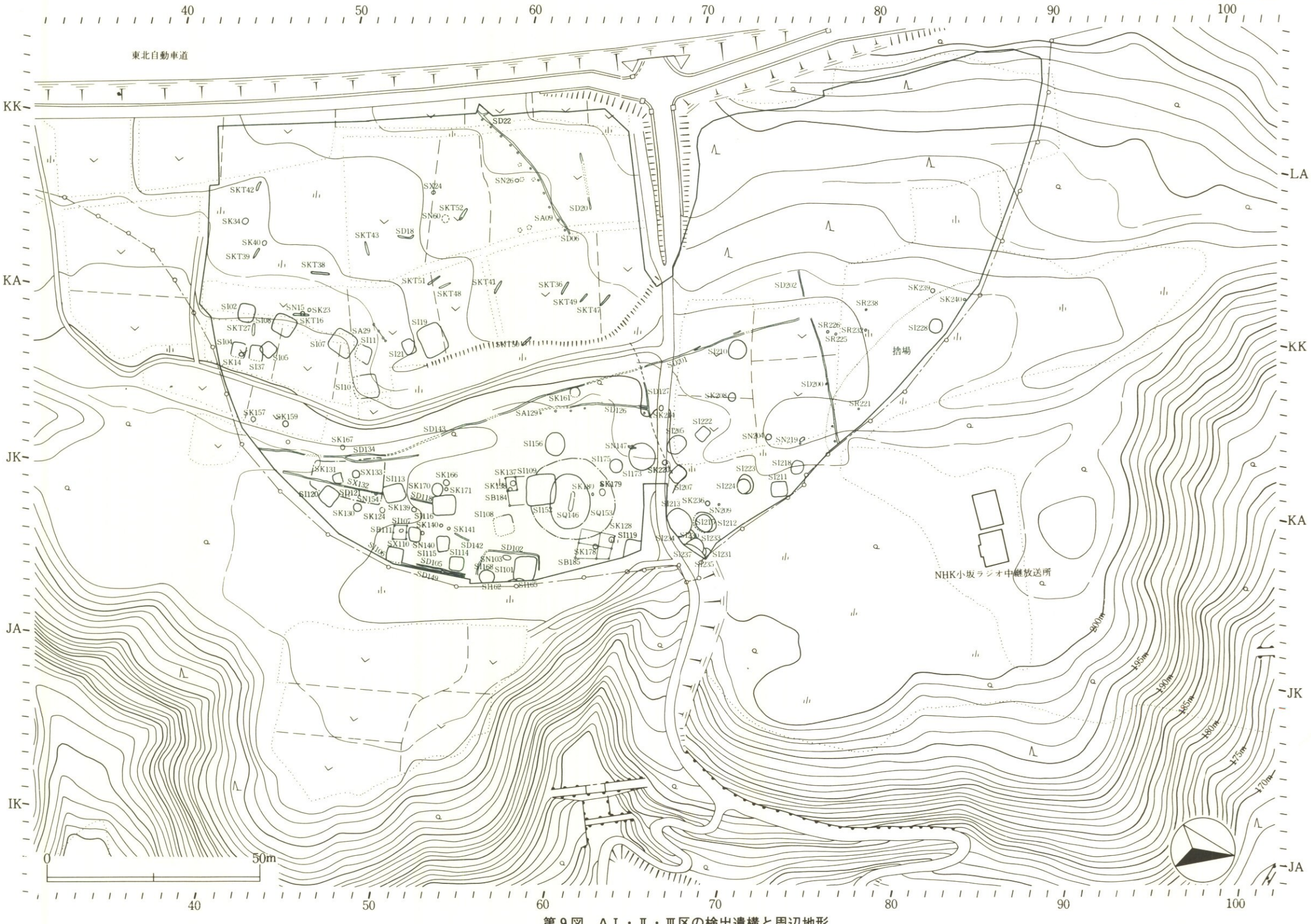
縄文時代前期の遺物は、ＡⅡ区北部からＡＩ区にかけて出土しており、特にＡＩ区北端中央部の捨場と考えられる部分に多い。この捨場は調査区北端の幅杭のライン（南東―北西方向）に沿って長さ約50ｍ、幅10ｍの範囲で検出されており、さらに北側の調査区外に延びていることは確実である。全般的に、竪穴住居跡などの覆土中には遺物が少ない。後期及び晩期の遺物も若干出土しているが、それらは特に集中する部分はなく、ＡⅡ区中央部を中心に散在するに過ぎない。

3　調査経過

ＡＩ・Ⅱ区の発掘調査は排土置場の都合から、ＡⅡ区から入り途中両者を平行して行い、最後にＡＩ区を行った。

ＡⅡ区の調査は、先行して入ったＡⅢ区の調査と平行して６月８日に開始した。予め大湯浮石層の上の黒色表土は重機で除去していたため、大湯浮石層上面を精査したところ、６月10日には早くも平安時代後葉の竪穴住居跡４軒を確認できた。６月13日には確認された遺構順に101番からの遺構番号を付して行き、順次その精査にも入った。６月17日までに平安時代の竪穴住居跡10軒他を確認したが、竪穴住居ＳＩ101は焼失家屋であり、西壁の板材が並んだまま東側に倒れた状態で検出された。その板材は痩せて薄くはなっているものの、存外に遺存状態が良く、手斧痕も明瞭に分かるものであった。この他にも焼失家屋である住居が次々に検出され、またカマドの遺存状態の良好なものもあり、それらの実測作業に時間の費やされることが予想された。

６月29日には、ＳＩ109の北東部床面が貼床状になっており、この部分に縄文時代の遺構の存在することが予想された。このため、７月15日からは、平安時代の遺構部分を除いて大湯浮



第9図　AⅠ・Ⅱ・Ⅲ区の検出遺構と周辺地形

石層を除去してさらに掘り下げ、縄文時代の遺構の検出作業に入った。65ライン北側の掘り下げによって、７月28日までに平安時代の竪穴住居跡ＳＩ109の北側に大湯浮石が広く厚く堆積しており、さらにその外側に無数の礫がドーナツ状に分布していることが判明した。これは後の精査で、縄文時代の大型住居ＳＩ152を構築した際に、周囲に盛り上げた礫混じりの土砂がドーナツ状に廻っており（ＳＱ153）、さらにＳＩ152が、大湯浮石降下時までに埋まり切らず中央部が窪んでいたために、この部分に浮石が厚くレンズ状に堆積したものであると解釈できた。

９月14日までに平安時代の遺構の調査を終え、さらに縄文時代の遺構群を含めたＡⅡ区の調査は10月25日にようやく終了させることができた。

ＡＩ区は、天候などの兼ね合いでＡⅡ区と平行して９月２日から大湯浮石層上面での精査に入ったものの、平安時代の遺構は溝状遺構と１基の焼土遺構しかなく、南側から縄文時代の調査に入った。９月14日までにＡⅡ区北部に分布している礫群がＡＩ区南半にも連続していることを確かめ、この広がりを把握するために計５本のトレンチを入れた。その結果礫群はＡＩ区東半部に限られるものの、このうちの北部の礫群は、地山土が部分的に盛り上がったり風倒木によるものなどであることが判明した。

10月25日頃にはＫＥ84グリッドを中心にして、多量の縄文前期土器・石器の出土を見、これが相当に広がっていることから、ここに捨場の存在が予測された。11月８日にバルーンによる礫群の写真撮影を行い（ＡⅡ区の礫群は９月６日に行っている）、礫群部分の掘り下げを行った結果、11月10日には前期の竪穴住居跡ＳＩ205・207を確認した（ＡＩ区の遺構番号は200番から付した）。その後も続々と縄文時代前期の竪穴住居跡などが検出されたが、それは11月25日にＳＩ228・230・231が確認されたように、雪と霜柱に悩まされながらの作業であった。

このような経過を辿りながらも、12月２日にはＡＩ区の調査を終了させることができたのは、11月からの調査員の増員が大きな力となった。

第２節　縄文時代の遺構と遺物

１　縄文時代の検出遺構と遺物

ＡＩ・Ⅱ区から検出された縄文時代の遺構は、竪穴住居跡35軒、Ｔピット２基、フラスコ状土坑１基、土坑10基、焼土遺構３基、土器埋設遺構５基、礫群と捨場１箇所である。このうち、竪穴住居跡・焼土遺構・土器埋設遺構の全てと土坑８基は縄文時代前期に属し、土坑１基と、フラスコ状ピットは後期に属すると考えられるが、Ｔピットは時期が明らかではない。

(1)　竪穴住居跡

検出された竪穴住居跡の数は35軒としてあるが、これは、大小の竪穴住居跡が重複する場合、平面上では小さい方が大きい方に全て包含されていても、それが異なる竪穴住居跡と認められるものについては別の１軒として、数えたものである。

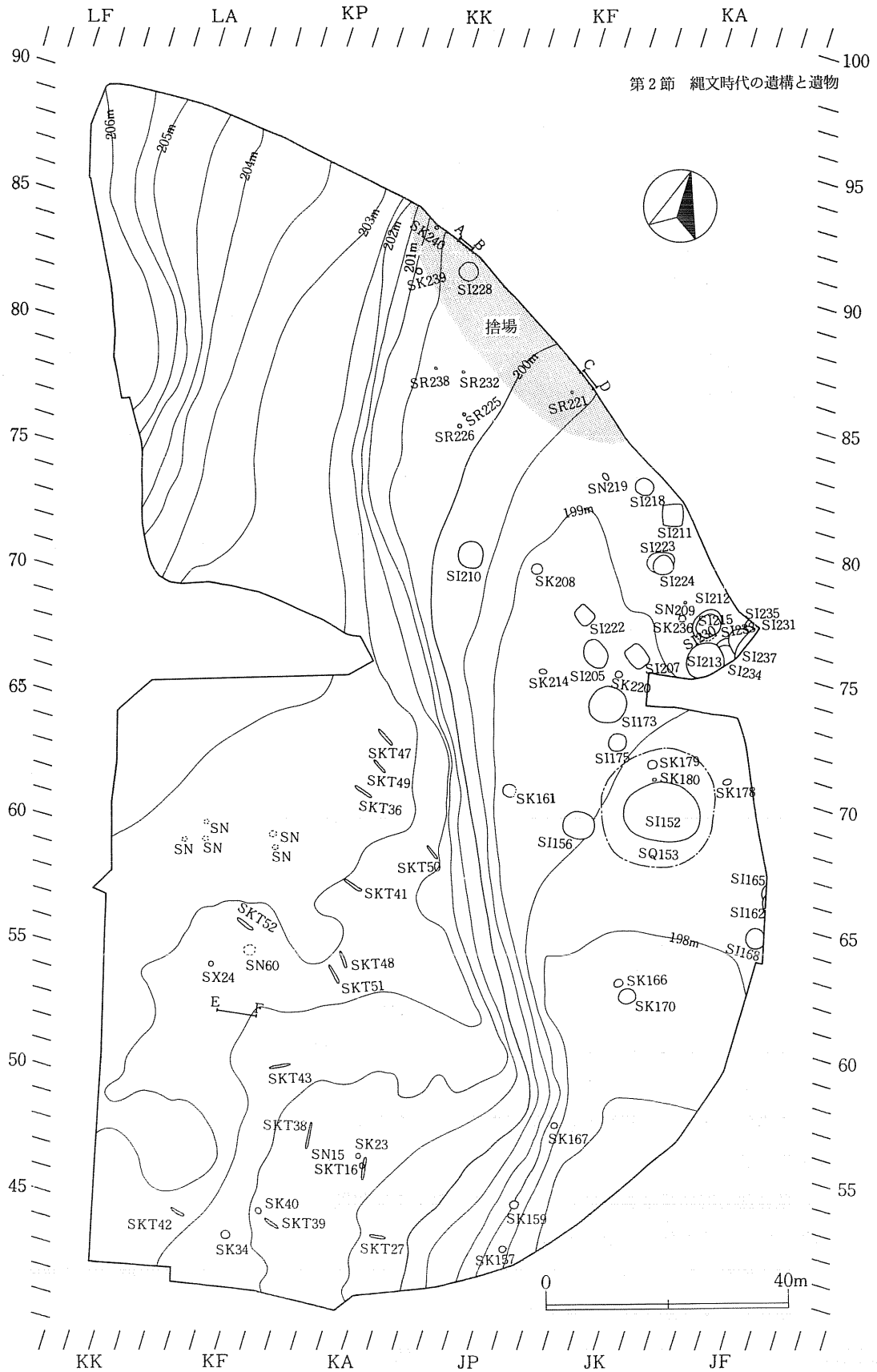
35軒の竪穴住居跡は、特別の場合（例えば、礫群の分布状況からその存在が予想され確認されたＳＩ173など）を除いては、第Ⅵ層地山漸移層上面で検出されたものが多い。また、竪穴住居跡の掘り込みは、深いもので段丘礫層中に達し、浅いものではその上の地山風化軽石層で止まっている。この地山風化軽石層は、関上段丘面の上部を構成しており、大小の軽石が著しく風化し、堅さは普通のややしまりのある土と同じ程度になっているものの、気泡が見え風化した軽石間に間隙のあるものである。

以下、竪穴住居跡の個々の説明を行うが、記述に当たっては次のようにしてある。形態と規模は、検出された住居跡の壁の上部と下部ラインが大きく異なっていない場合には、上部ラインでこれを決めた。壁溝しか残っていないものは、壁溝の外側ラインで規模を求めた。深さは特にことわりのない場合は確認面からのものである。床面積は、壁溝のない場合は壁の下部ラインを、壁溝のある場合には溝の真中を結んで求めた。ピット番号の下の数字は、柱穴の床面からの深さ（単位cm）である。出土遺物の中で土器は、個々の住居跡覆土から出土した破片が住居外から出土したものと接合する場合には、住居跡覆土中から出土したものとして扱った。

ＳＩ207　（第11図、図版４）

位置・確認状況　ＡＩ区南端、ＪＱ73グリッドを中心に、確認した。ＡⅡ区からＡＩ区にかけての礫群も、本住居跡あたりから東側には広がっておらず、亜角礫などがまばらに散布していた程度にすぎない。

形態・規模　長軸方向を南東―北西にとる長軸4.5ｍ、短軸3.7ｍの隅丸長方形プランを呈する。確認面からの深さは20cmで、推定される本来の深さも30cm程度と浅い。床面積は約12.8㎡である。



第10図　ＡⅠ・Ⅱ・Ⅲ区の縄文時代の遺構配置図とグリッド配置図

覆土　６層には地山風化軽石がブロック・粒子となって下部ほど多く（約30％）混入している。同層下部がやや堅くしまっているが、遺物はほとんど含まれていない。

床・壁　掘り込みは、段丘礫層まで達しておらず、その上の風化軽石層までであるため、床面はなだらかである。また、床面の堅さは壁に近い程減じるが、中央部は堅くしまっている。壁はなだらかな部分もあるものの、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝・柱穴　北辺から東辺の一部を除く、全体の略３分の２周ほどに壁溝がある。幅10cm前後、床面からの深さ２～10cmの浅い溝である。Ｐ１～７の柱穴が検出されたが、Ｐ１・２が主柱穴である。Ｐ６・７はその位置から壁柱穴かとも考えられるが、他は不明である。

炉　明瞭な形での炉は検出されなかったが、Ｐ４・５西側のくぼみ部分が心持ち赤変しているようにも見え、この部分が地床炉であったと考えられる。

その他の付属施設　Ｐ１の南東側、Ｐ２の南側に扁平な台石が床面に置かれた状態で出土した。わずかながら上面がすられて平坦になった台石である。この場で使用されていたものと思われる。

出土遺物　覆土中から第41図34～36の縄文前期深鉢形土器胴部破片、第45図Ｓ１～５の石器などが出土している。石器Ｓ５は南辺の床面から出土した。

ＳＩ211　（第12図、図版５）

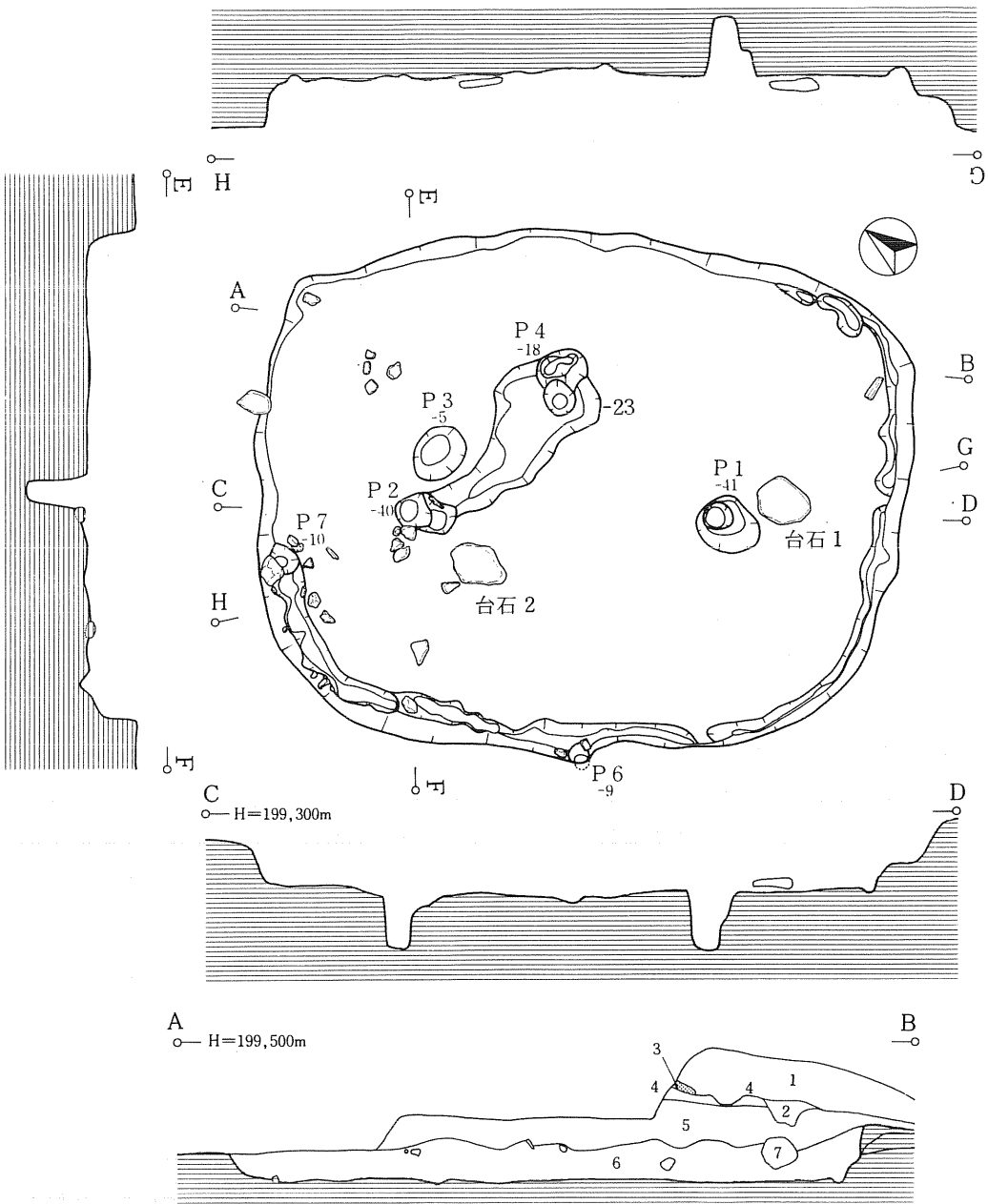
位置・確認状況　ＡＩ区東部北東端、ＪＱ78・79グリッドを中心にして確認された。ＡＩ区礫群も本住居跡付近では比較的まばらであった。本住居跡の南側にＳＩ233・234、北西側にＳＩ218がそれぞれ約４ｍ離れて存在する。

形態・規模　南北にやや長い隅丸方形プランを呈する。南北軸3.9ｍ、東西軸3.6ｍであるが、東辺が若干外側に膨んでいる。確認面からの深さは20cmで、推定される当時の生活面からは約40cmである。床面積は約11.1㎡である。

覆土　２層は下部ほどやや堅くしまっており、床面から約10～20cm上の住居中央部に、亜角礫に混じって意識的に捨てられたと考えられる土器（第33図１、２）が散布していた。４層は、地山土のブロックや粒子、挙大礫の集まりで、堅くしまった部分であるが、この下から多数のチップ、石鏃の未成品（失敗品？）などが出土している。

床・壁　掘り込みが段丘礫層まで達しておらず、床面は平坦で中央部ほど堅くしまっている。壁は部分的にほぼ垂直に立ち上がるが、概して急角度ではない。

壁溝・柱穴　深さ数cm、上面幅10cm前後の壁溝が途切れながら全周する。壁溝の中に特に柱穴様の痕跡は認められなかった。ピットはＰ１～11まであるが、このうち、規模・位置関係からＰ１・２が主柱穴と考えられる。



1．山道の盛土整地部
2．赤黒色(2.5YR 2/1)
3．大湯浮石層
4．黒褐色(5 YR 2/1)
5．赤黒色(2.5YR 1.7/1)
6．黒褐色(5 YR 2/1)
7．地山風化土ブロック
8．黒褐色(5 YR 2/1)
9．地山漸移層、黒褐色(5 YR 2/1)

0　2 m

第11図　SI 207竪穴住居跡

炉　明瞭な焼土は認められないものの、床面中央部に70cm×80cm、深さ７cmのくぼみがあり、この底面が特に堅くなっていた。地床炉と考えられる。

その他の付属施設　北辺中央内側に径約45cm、深さ16cmの柱穴とは考えられないピットがある。本住居に伴う何らかの施設である可能性があるものの、その性格等については不明である。

出土遺物　第33図１・２、41図37～46、45図Ｓ６～９、46図Ｓ10～16が覆土中などから出土している。土器１・２は、住居跡中央部のややくぼんだ覆土中から、亜角礫などと共に破片となって出土した。１は、外に強く張り、武骨な感じのする底部からやや外傾して立ち上がった胴部が、直線的に頸部に移行し、口縁部がわずかに外反する深鉢形土器である。口唇部は丸味を持たず平坦な面をなし、平口縁である。口縁部には、結び目を連ねた原体による不整の綾絡文が横位に、胴部には太いＬＲ原体の単節斜縄文が施されている。口縁部文様帯と胴部の間には隆帯が付されていない。２は、ほとんど外反しない口縁部と胴部との間に太い隆帯が貼付され、隆帯上には指頭あるいは指頭状工具による刺突列が施されている。37と38、39と40はそれぞれ同一個体である。石器Ｓ６は、床面上から出土した剥片やチップに混在していた石鏃である。

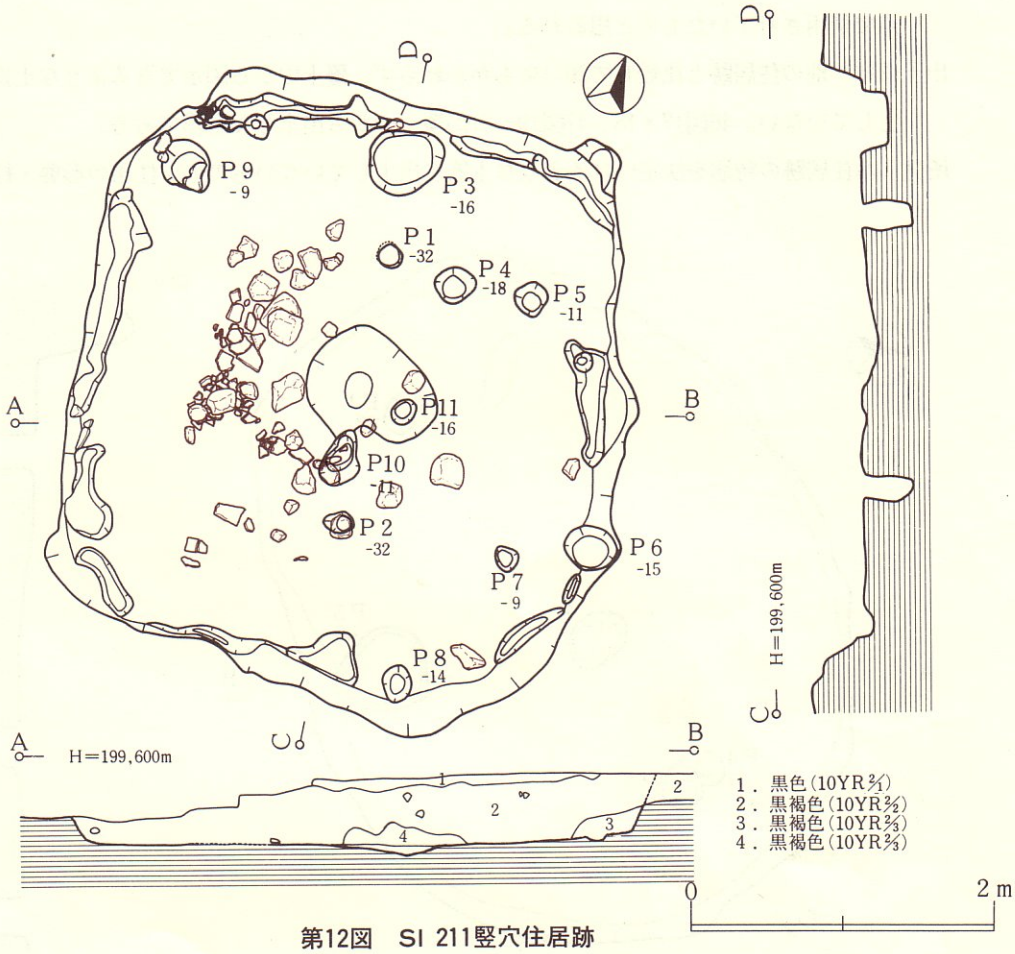
ＳＩ205　（第13図・図版４）

位置・確認状況　ＪＲ72グリッドを中心に、ＡＩ区南端で検出された。ＪＲ72グリッド周辺は、ＡⅡ区北部から北に延びる礫群が広がっており、本住居跡はこの礫群の中でも特に大きめの円礫及び亜角礫が集中する部分の下で確認されたものである。北側にＳＩ222、東側にＳＩ173がそれぞれ約３ｍ離れて存在する。

形態・規模　長軸方向を南東―北西とする長径約4.7ｍ、短径3.6ｍの楕円形プランを呈するが、南東辺は弧を描かず直線的である。確認面からの深さは50～55cmであるが、推定される掘り込み面からの深さは60cm強で、さらに周囲の礫群からの深さは約70cmにも達する。床面積は約11.9㎡である。

覆土　３・４層は基本層位の第５層に相当し、上位ほど礫群を構成する亜角礫を多く含む。９層以下には礫及び砂利、地山風化軽石粒子や炭化物を含み、堅くしまっている。住居外からの流入土と思われるが、相当に堅いブロック状になっている部分もあることから、住居外の周堤部分が崩れて流入したか、それらの土で人為的に埋められたものと思われる。中央南壁側での土層の乱れは、小さな風倒木痕によるものと思われる。

床・壁　地山段丘礫層まで掘り込んでいるため、かたくしまり部分的に礫が顔を出しているものの、その上に厚さ１cm前後の粘性のある黒色土が敷かれており、これが床面と考えられ



第12図　SI 211竪穴住居跡

る。床面は全体的に平坦であるが、南東隅部が若干高くなっている。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝・柱穴　壁溝は認められず、床面上にＰ１～５のピットが存在する。主柱穴は位置及び深さからＰ１・３の２本と考えられる。Ｐ３は浅いＰ４を切っており、あるいは本住居跡にも新旧２時期があるのかもしれない。Ｐ２は、その周囲に藁灰状の黒色炭化物が分布しているところから、地床炉としての掘り込みの可能性がある。Ｐ５の部分は風倒木痕の底面部分と思われる。

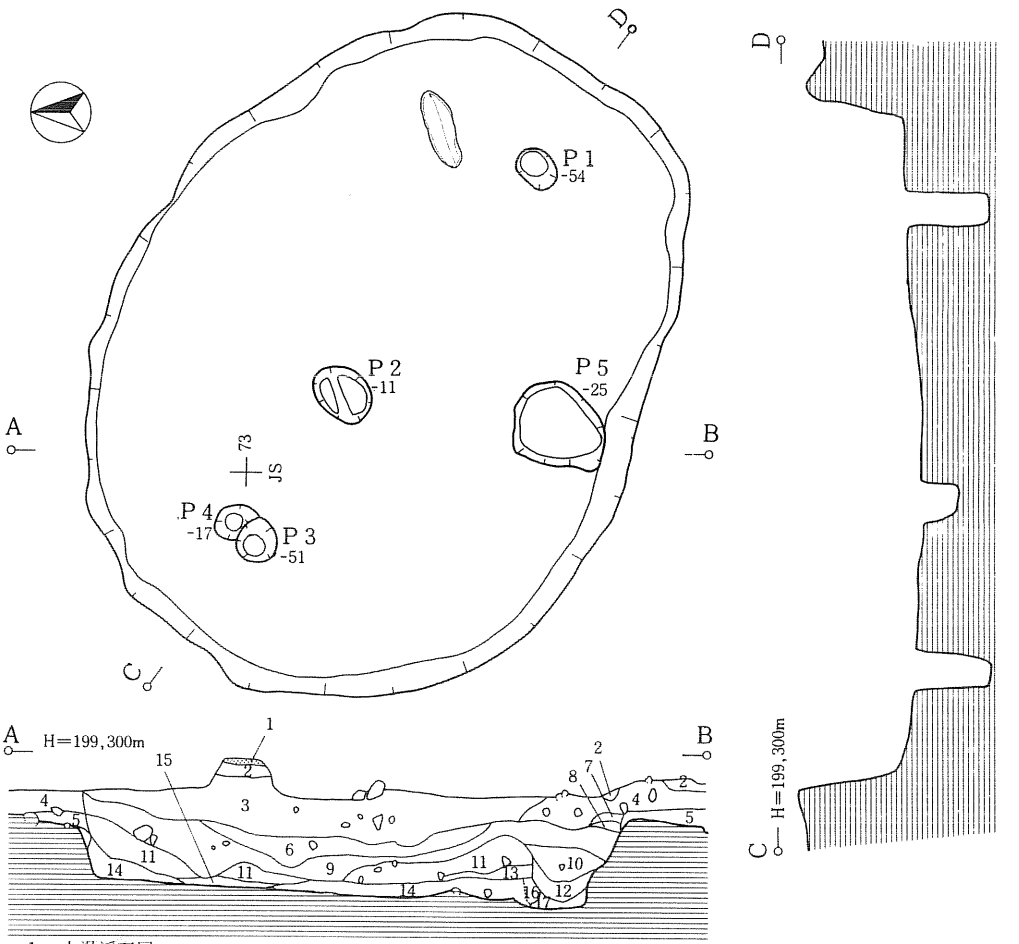
炉　明確な炉は認められなかったが、Ｐ２の周囲が浅くくぼんでおり、上述したような炭化物も存在するところから、地床炉であった可能性が強い。

その他の付属施設　Ｐ１の北側から長さ55㎝、最大幅20㎝の扁平な緑色凝灰岩製の台石（一部表面がすられている）が１点出土している。床面から数㎝浮いているものの、出土した地

点で使用されていたものと思われる。

出土遺物　他の住居跡と比較して深いにもかかわらず、覆土中から図示できるような土器が出土していない。46図17・18、47図19〜21が覆土中から出土した石器である。

所見　本住居跡の時期を決定づけるような土器は出土していないものの、住居の形態・柱穴配



1．大湯浮石層
2．黒褐色（5YR2/1）〜赤黒色（2.5YR2/1）基本層位の第Ⅳ層
3．赤黒色（2.5YR1.7/1）
4．赤黒色（2.5YR1.7/1）＋黒褐色（5YR2/1）
5．黒褐色（5YR2/1）＋黄橙色（10YR5/6）地山漸移層
6．黒褐色（5YR2/1）
7．黒褐色（7.5YR2/2）
8．黒褐色（5YR2/1）
9．黒褐色（10YR2/3）
10．黒褐色（10YR3/1）
11．黒褐色（10YR3/2）
12．黒褐色（10YR3/2）
13．黒褐色（10YR3/2）
14．黒褐色（5YR2/1）
15．黒褐色（10YR3/2）
16．黒褐色（5YR2/1）
17．黒褐色（5YR2/1）

0　2m

第13図　SI 205竪穴住居跡

置などから、他の住居跡と同じく縄文時代前期のものと考えられる。

ＳＩ230・231・233・234・235・237　（第14図・図版７）

ＳＩ213の北側で検出されたこれらの竪穴住居跡は、重複が著しく、規模の半分以上の原型を留めているものはＳＩ233のみであることから、ここでは、ＳＩ233を中心にこれらをまとめて述べることにする。

位置・確認状況　ＳＩ233はＡＩ区南東端部に密集する竪穴住居跡群の１つで、ＪＭ75グリッドを中心として確認された。

ＳＩ233など７軒の竪穴住居跡が重複する部分は、ＡＩ区とＡⅡ区を分ける小さな沢の沢頭に当たる。しかし、この沢は前述したように現在でも時々崩落をくり返すようなごく小さく短いもので、いわば形成途中にある沢と見ることもできる。また、この部分には中小坂部落から字下モ上ハ山に至る道が通っており、山道の整備のために沢頭部落（段丘崖面にも相当）がかなり削平を受けている。従ってこのような部分に竪穴住居跡の存在を予想していなかったが、ＳＩ213の精査を進める中で、山道の法面をきれいにしたところ、竪穴住居跡の床面らしき平坦面が認められ、土器埋設炉が検出された（ＳＩ230）。このことから、周囲を掘り下げ精査した結果、ＳＩ213・230・231・233・234・235・237の順に確認されたものである。

これらの住居跡は重複しており、その切り合い関係や貼床の存在などから、古い順に以下のように考えられる。（古）ＳＩ235→231→233→230→234→213（新）。なお、ＳＩ237は233より新しいと考えられるが、230との前後関係は不明である。すなわち、ＳＩ235は231に、233は237に、230は234にそれぞれ切られ、233を埋めて230の貼床としており、また、233は土層断面から231を切っている。さらに、ＳＩ231Ａ・Ｂは、壁溝が埋められておらず、ＳＩ234の床面をわずかに掘り込んでいることからこれより新しい。

形態・規模　ＳＩ233は東半分をＳＩ237に切られて不明であるが、Ｐ２、５の２本を主柱穴とすると、略東西を長径あるいは長軸とする楕円形か不整の隅丸長方形を呈すると思われる。この場合の長径は4.5ｍ前後になる。当時の生活面からの深さは70㎝と推定される。ＳＩ233以外の住居跡については、原形の大半が失われており、形態・規模は不明である。ただし、ＳＩ237の西辺は直線的で、北西隅と南西隅が丸くなることから、隅丸の長方形か隅丸方形を呈するプランと考えられる。各々の床面の深さはエレベーション図のとおりであるが、ＳＩ237は深さ１ｍ前後あったと推定される。

覆土　多数の住居跡が重複している部分であるため、覆土は複雑である。土層断面図の２層は基本層位の第Ⅲ層大湯浮石層である。５、12、19層がＳＩ230の、14～18層がＳＩ234の、

22層がＳＩ231の覆土で、20層を除く他の全てはＳＩ233の覆土である。20層はＳＩ230の貼床部分で、堅くたたきしめられている。ＳＩ233の覆土中には、地山土ブロックや礫が多く混入しており、大部分投げ込まれたものと思われる。

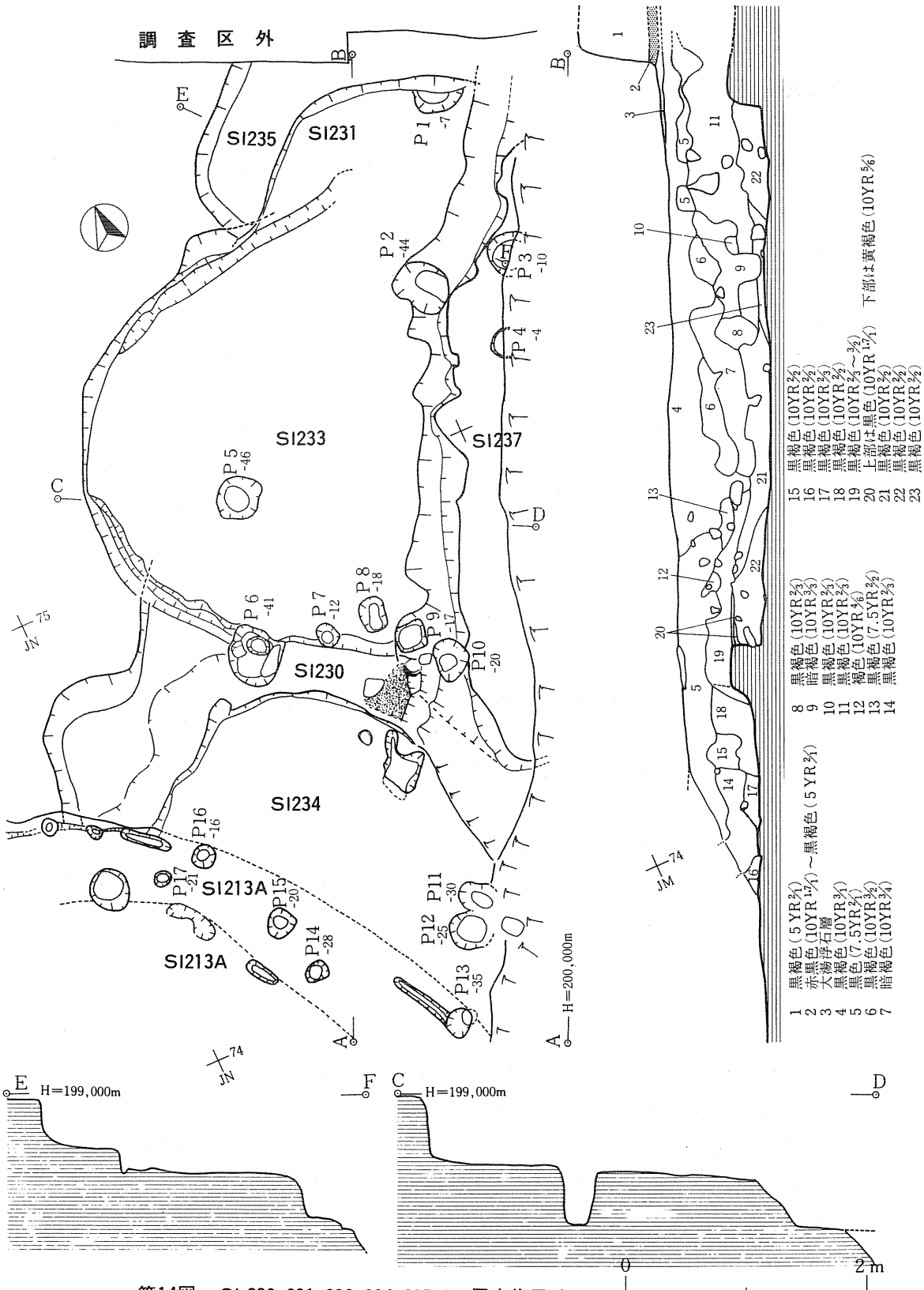
床・壁　ＳＩ235は地山風化軽石層まで、他は段丘礫層を掘り込んでいるが、全体に平坦で堅くしまっており、わずかに見える礫の露頭もほとんど気にならない程度である。壁はＳＩ230の西壁が判然としないものの、他はしっかりしておりほぼ垂直に立ち上がる。特にＳＩ233の壁は垂直である。

壁溝・柱穴　壁溝は、ＳＩ233の北辺と南西辺にのみ認められる。上面幅が10～15cm、深さ数cmのものである。柱穴はＰ１～一部ＳＩ213Ａの床面にあるＰ17まで検出したが、この中で明らかに主柱穴と考えられるのはＰ２、５でＳＩ233に伴うものであろう。

炉　明らかな炉は、ＳＩ230のものと考えられる土器埋設炉１基のみである。埋設土器の大半は、山道整備による削平で失われ、底部のみが残存している。しかし、土器が埋まっていた形は西側でわずかに残っており、これによると埋設された土器の高さは30cm前後であったと推定できる。埋設土器の南西側に焼土が認められる。

出土遺物　これらの住居群の調査では、ほとんどの精査が終了した後に、７軒の住居跡の存在することが判明したという状況であったため、個々の竪穴覆土に含まれる遺物を分けることができなかった。従って、ＳＩ231だと思っていた部分が結果的にＳＩ233との重複であったという例も多く、そのような場合には、その遺物をＳＩ231・233出土のものとしている。各住居跡ともに、床面に接した状態で出土した遺物はなかった。

第33図３が、ＳＩ230の炉に埋設されていた土器の底部で、これによると胴部下半には単節の撚糸文か木目状撚糸文が縦位に施されていたと考えられる。この他ＳＩ230からは41図47・48の土器が出土している。33図４はＳＩ231・233、41図49がＳＩ231、50がＳＩ231・233、51がＳＩ233、52がＳＩ234、53～55がＳＩ235、56がＳＩ237の覆土中から出土した土器である。33図４は、ＬＲ縄文原体の側面圧痕文が施された口縁部文様帯下端に、細い隆帯を有している。隆帯上にはＬＲ縄文原体が斜位に押圧されており、胴部は縦走する無節の撚糸文である。33図５はＳＩ234覆土中から出土した石製の器である。底部から胴部下半の一部しか残存していない。比較的緻密な凝灰岩を、鋭利な工具で成形し、最後にこれを研磨して仕上げている。全体の形状をうかがい知ることはできないが、低い高台の付く碗に近い形と思われる。非常の珍しい例である。石器は47図Ｓ22～48図33が、ＳＩ231・233やＳＩ234から出土している。



第14図　SI 230・231・233・234・235・237竪穴住居跡

ＳＩ210　（第15図・図版８）

位置・確認状況　ＡⅡ区北東部からＡＩ区南東部に集中する竪穴住居群のうち、最も西側に位置している。ＫＤ75グリッドを中心に、基本層位の第Ｖ層精査中、本住居跡付近に礫が少なく、円形の黒色土部分の存在が認められたものである。

形態・規模　径4.1～4.3ｍの略円形を呈する。深さは60～65㎝あり、これがほぼもとの深さであると考えられる。床面積は約11.9㎡である。

覆土　２・３層は住居外からの流入土と考えられ、礫や砂利、地山風化土粒子、炭化物などが混入し、かたくしまっている。１層の上部には礫があまり目立たないものの、中～下部に挙大の礫が多い。周囲からの流入か、人為的に捨てられたものと思われる。

床・壁　段丘礫層をも深く掘り込んでいるために、全般的に堅くしまって平坦であるが、一部で段丘礫が露頭していて細かい凹凸がある。特に南西壁際では、大きな亜角礫が掘り上げられず、住居床面に露出されたままになっている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝・柱穴　Ｐ１～Ｐ６のピットを検出した。このうちＰ１・３の２本が、位置・規模などから主柱穴と考えられる。壁溝は認められなかった。

炉　床面中央部に径１～1.1ｍ、中央部での深さ７㎝の不整なくぼみがあり、この中のやや南側にわずかに焼土が認められた。地床炉である。くぼみの内側は堅くなっている。

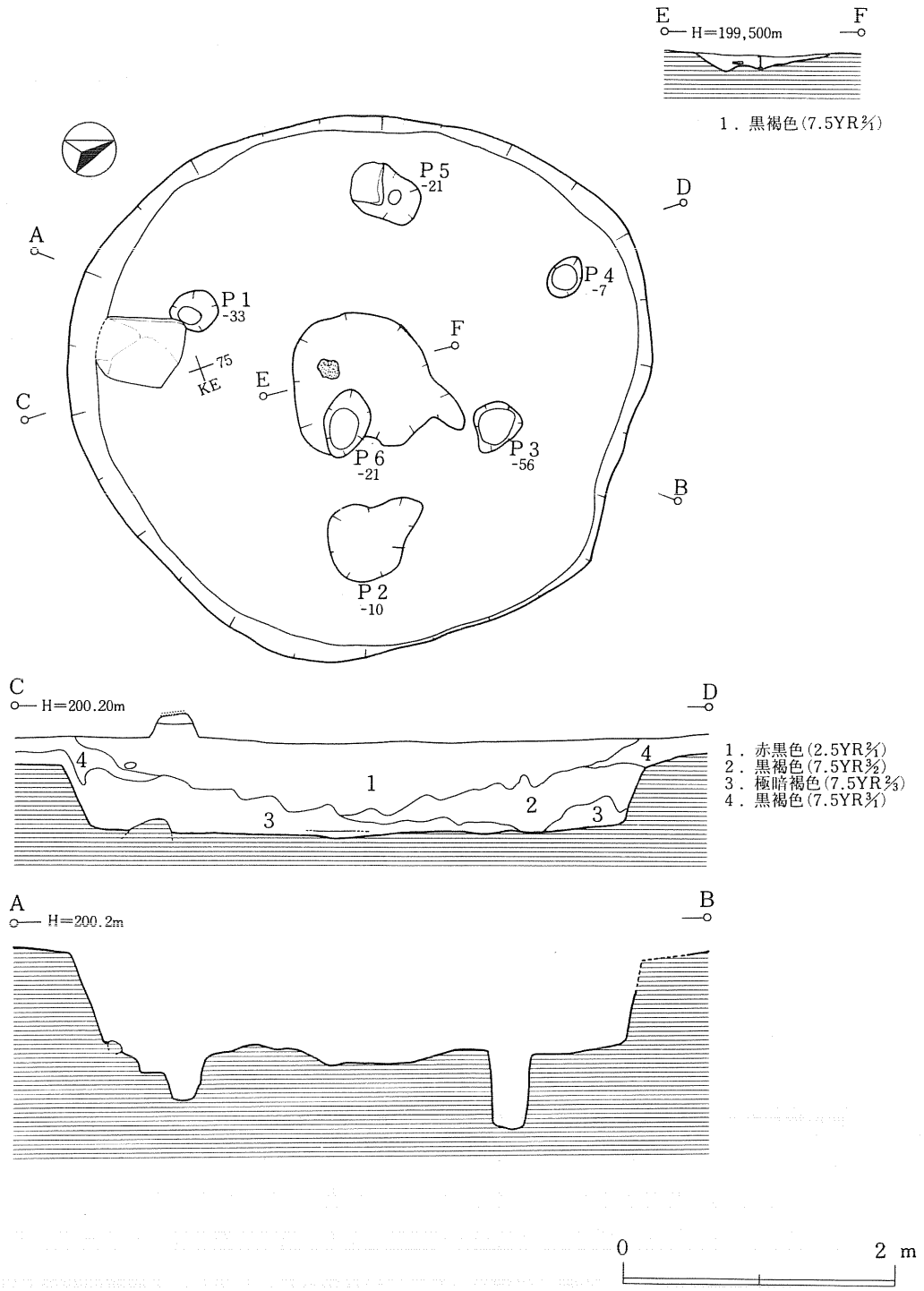
出土遺物　覆土中から、33図６、42図57・58の土器と、48図Ｓ34～37の石器が出土している。33図６は小型の深鉢形土器で、口縁部から胴部には結束第１種の羽状縄文が施され、頸部には撚糸の側面圧痕文が３条付されている。

ＳＩ212Ａ・Ｂ、215Ａ・Ｂ　（第16図・図版８）

位置・確認状況　ＡＩ区南東端ＪＮ75グリッドを中心として検出された４軒の重複する竪穴住居跡である。全体の西半分は第Ⅵ層地山漸移層で、東半は本住居跡掘り込み面である第Ｖ層中位で確認された。南側には30㎝離れてＳＩ173が、東側には１ｍ弱でＳＩ233などが存在する。

ここに竪穴住居跡が存在することを確認した時には、１軒だけ存在しているものと考えられたため、これをＳＩ212とした。しかし掘り下げ途中で、ＳＩ212はこれより深い他の住居跡を埋めて構築していることが判明し、埋められた住居跡をＳＩ215とした。さらに、両者の床面精査によって、新たに壁溝と考えられる溝がそれぞれに検出されたため、それぞれを図のようにＳＩ212Ａ・Ｂ、ＳＩ215Ａ・Ｂとしたものである。

形態・規模　全体のプランが明らかなのはＳＩ215Ａだけである。ＳＩ215Ａは直径４ｍの円形プランを呈し、本遺跡内の縄文時代前期の竪穴住居跡中にあっては、最も整った形のもの



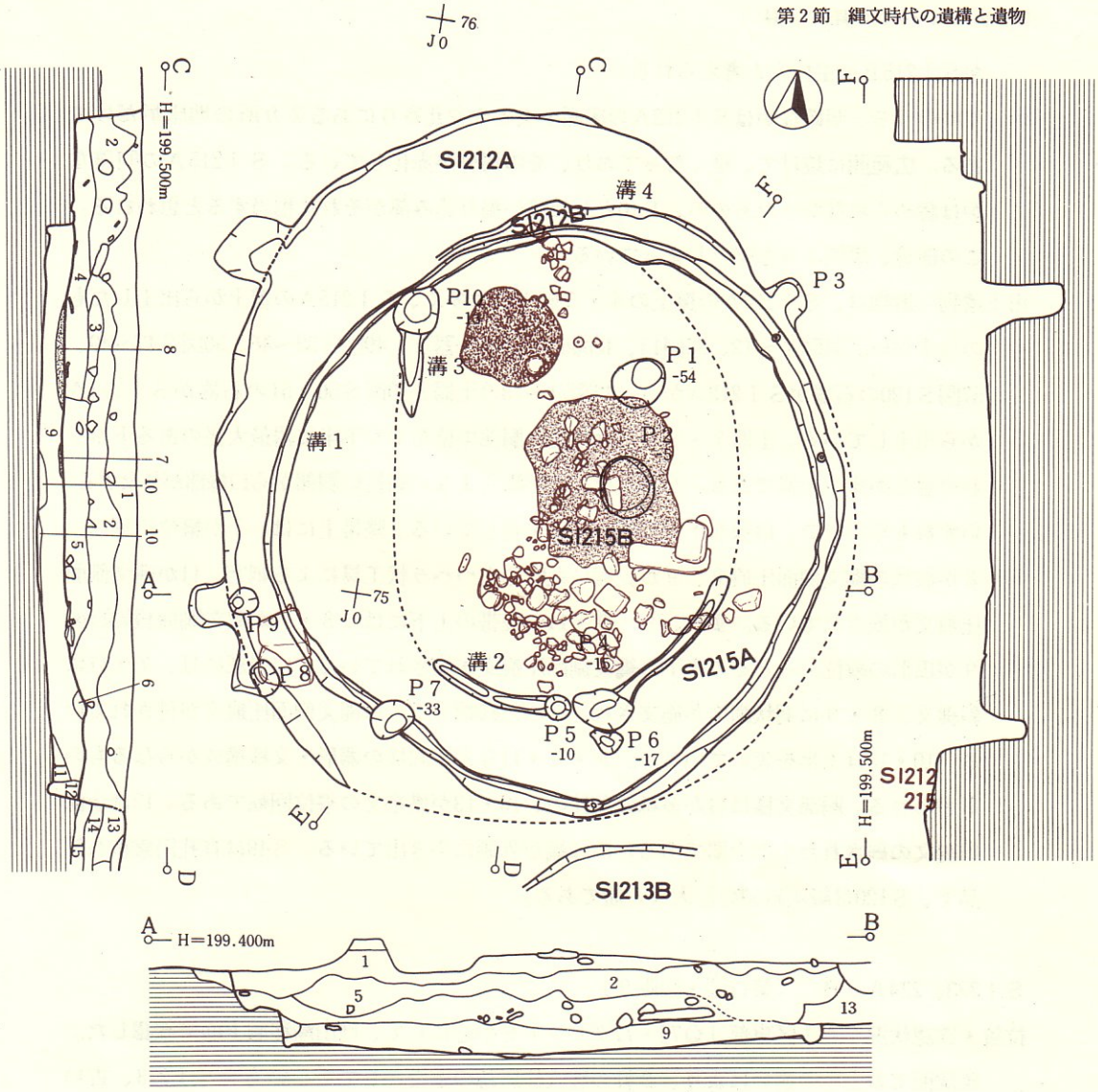
第15図　SI 210竪穴住居跡

の１つである。堀り込み面から床面までの深さは65～70cmで、ＳＩ212Ａ床面よりも20cm深い。床面積は約11.2㎡である。ＳＩ212Ａは東～南辺が判然としないが、南北約4.8ｍ、東西約4.4ｍの略円形を呈するものと思われる。東辺の一部床面が残っているように思われるものの、実際には存在したにもかかわらず我々が確認できなかったもので、ＳＩ212Ａの床面とレベルをほぼ同じにする他の竪穴住居跡等との重複とも考えられ、明確にはできなかった。掘り込み面から床面までの深さは50cmである。ＳＩ212Ｂは、北辺の壁溝（溝４）の痕跡を認めただけにすぎないが、ＳＩ215Ａとほぼ同規模程度と考えられる。ＳＩ215Ｂは、ＳＩ215Ａの床面に検出された溝２・３によって推定されるものであるが、溝２が小さな弧を描くのに対し、溝３は直線的にすぎ、あるいは関連を持たない可能性もあるが、ここでは推定で南北3.3ｍ、東西2.5ｍの不整楕円形としておく。床面レベルはＳＩ212ＢがＳＩ212Ａと、ＳＩ215ＢがＳＩ215Ａとほぼ同じである。

覆土　１～８層がＳＩ212Ａの、９～12層がＳＩ215Ａの覆土である。１層は基本土層の第Ⅴ層とほぼ同じで、２層は地山風化土粒子や砂礫を含み、周囲からの流入土と思われる。３層は焼土粒子を含み、投棄されたものであろう。４・５層は、礫・砂利・遺物を多く含み、しまって堅い部分が多い。４・５層の下部には比較的遺物が多く、１個体あるいは大きな破片の土器などが捨てられた状況で出土している。４・５層全体も投棄されたものと思われる。７・８層はＳＩ212Ａの地床炉である。上面ほど堅く平坦である。９層は、砂や地山風化土粒子を多く含み、堅くたたきしめられており、ＳＩ212床面構築の際に、ＳＩ215Ａを埋めて貼床としたものである。10層は堅くしまっており、ＳＩ215Ａの床面上に貼られたものと思われる。11層はＳＩ215Ａの壁の崩落土で、12層はＳＩ215Ａの壁溝の埋土である。

床・壁　ＳＩ212Ａ・Ｂは地山風化軽石部分まで、ＳＩ215Ａ・Ｂは段丘礫層上部まで掘り込んでいる。いずれも平坦で堅緻である。ＳＩ215Ａ・Ｂ床面の露頭礫は微細なものばかりで、床面の状態を悪くするような状況にはない。壁は、ＳＩ212Ａ・215Ｂともに垂直に立ち上がっており良好である。

壁溝・柱穴　壁溝がＳＩ212Ａを除いて存在する。ＳＩ212Ｂの壁溝（溝４）は、ＳＩ212Ａ床面に痕跡程度に残っているもので、深さ１～２cmしかなく、ＳＩ212Ａよりも古いと考えられる。ＳＩ215Ａの壁溝（溝１）は全周しており、底面幅５～10cm、深さ３～10cmである。ＳＩ215Ｂの壁溝は溝２・３と考えられるが、両者の形に差がありすぎる。あるいは溝３は、ＳＩ215Ａに伴う何らかの施設の可能性もある。溝２の深さは３～４cmで、ＳＩ215Ａの床面検出の際に、明瞭には埋められてはいなかった。しかし、土層断面観察では、ＳＩ215Ａ・Ｂの前後関係を決定できる程の土層の差が認められなかった。



1．黒色（5YR 1.7/1）
2．黒褐色（10YR 2/3）
3．褐色（7.5YR 4/4～10YR 4/6）
4．黒褐色（10YR 3/3～3/2）
5．黒褐色（10YR 2/3）
6．黒褐色（10YR 2/3）
7．褐色（7.5YR 4/4）の焼土部分
8．明褐色（7.5YR 5/8）焼土
9．黒褐色（10YR 2/2）
10．黒色（10YR 2/1）
11．黒褐色（10YR 3/2）
12．黒褐色（10YR 2/3）
13．黒褐色（5YR 2/1）
14．黒褐色（10YR 2/2）
15．黒褐色（10YR 3/2～3/3）

0　2 m

第16図　SI 212A・B、SI 215A・B竪穴住居跡

柱穴はＰ１～Ｐ10を検出した。Ｐ２とＰ７あるいはＰ８がＳＩ212Ａの（Ｐ２はこの部分での床面からの深さが５㎝しかないが、これはこの周囲のＳＩ212Ａ床面がやや低くなっているためであり、底面レベルはＰ７よりも低い）、Ｐ１・６がＳＩ215Ａの、Ｐ３・９

がＳＩ215Ｂの主柱穴と考えられる。

炉　４軒のうち、明確な炉はＳＩ212Ａの床面中央とやや北寄りにある２カ所の地床炉だけである。広範囲に焼けて、堅くなっており、その部分が赤化している。ＳＩ215Ａの明確な炉は認められなかったものの、Ｐ10とした浅い掘り込み部がそれに相当すると思われる。この部分、周囲よりも堅くしまっている。

出土遺物　遺物は、ＳＩ212Ａの覆土の４・５層下部に多く、ＳＩ215Ａの覆土から出土したものは少ない。34図７～12、35図13、42図59～70の土器と、49図Ｓ38～46、50図Ｓ47～49、57図Ｓ120の石器がＳＩ212Ａから、42図71～73の土器と50図Ｓ50・51の石器がＳＩ215Ａから出土している。土器７・８・11は細長い胴部中位かやや下半に器最大径のある下ぶくれの感じがする土器である。９は、ほとんど膨らまない細長い胴部から口縁部が外反する。いずれも平口縁で、口縁部下端に低い隆帯を有している。隆帯上には、７が縦位の刻み、８が波状の縄文側面圧痕文、９が先端に丸味をもつヘラ状工具による刺突、11が縄文側面圧痕文が施されている。また、８・９・11の隆帯の上下には、８・11が縄文側面圧痕文が、９が瓜形の縦位刻みとその上下に縄文側面圧痕文が施されている。口縁部には、７・11に斜縄文、８・９に羽状縄文が施文され、９の口縁端と11には縄文側面圧痕文が付されている。10・13は上半を欠いているが、８・９・11などと同様の器形・文様構成からなるものと思われる。胴部文様は11が多軸絡条体の、10・13が撚糸文の縦位回転である。12は全面斜縄文の施された小型土器である。口縁端が外側に突き出ている。Ｓ49は有孔円盤状石製品で、Ｓ120は凝灰岩製の巨大な石皿である。

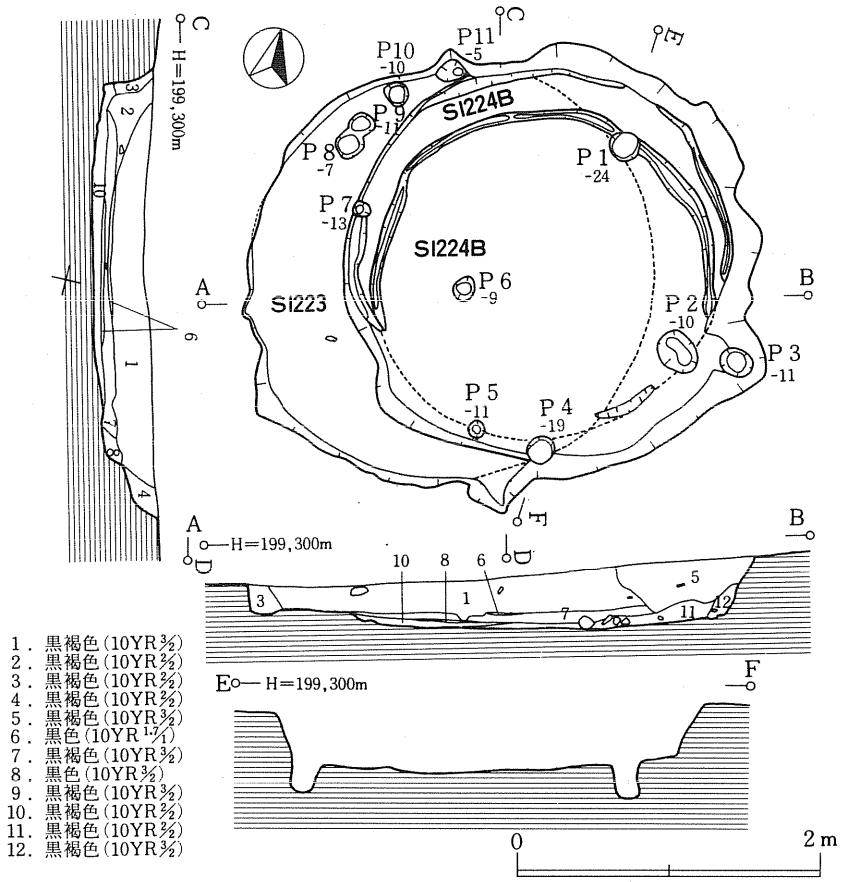
ＳＩ223、224Ａ・Ｂ　（第17図・図版９）

位置・確認状況　ＡＩ区東部ＪＱ76・77グリッドを中心にして、地山漸移層上面で確認した。確認面での土色の違いにより、２軒の竪穴住居跡の重複として新しい方をＳＩ223、古い方をＳＩ224としたが、ＳＩ224の掘り下げ精査中に、さらに古い住居跡のあることが認められたため、前者をＳＩ224Ａ、後者をＳＩ224Ｂとした。

形態・規模　３軒ともほぼ円形のプランを呈する。ＳＩ223は径約2.7ｍ、ＳＩ224Ａは径2.7～2.9ｍ、ＳＩ224Ｂは径約2.2ｍである。床面積はＳＩ223が約5.7㎡、ＳＩ224Ａが約5.0㎡、ＳＩ224Ｂが約3.7㎡である。

覆土　概略は土層注記に示した通りである。７層はＳＩ223床面の、10・11層はＳＩ224Ａ床面を構築するための貼床で、両者共に堅くたたきしめられている。

壁溝・柱穴　ＳＩ224Ａ・Ｂに浅い壁溝が認められ、各々途切れながらも半周～２／３周する。小さくて浅い柱穴Ｐ１～11があるが、配置・埋土からＰ４とＰ10がＳＩ223の、Ｐ３とＰ



第17図　SI 223・224A・B竪穴住居跡

７がＳＩ224Ａの、Ｐ１とＰ５がＳＩ224Ｂの主柱穴と考えられる。

炉　ＳＩ223・224Ａの貼床ほぼ中央部に厚さ２cm前後の炭化物層があり、これが地床炉かと考えられるが、焼土は認められない。ＳＩ224Ｂはそれが痕跡程度で判然としない。

出土遺物　ＳＩ223の覆土中から、35図14、42図74～77の土器と、50図Ｓ52・53の石器が出土している。土器14は、覆土上部と本住居跡周辺から出土した破片が接合したものである。口縁部と胴部上半には羽状縄文、それ以下には多軸絡条体回転文が施されている。口縁部下端には幅広であるが低い隆帯が貼付され、その上に縦長の刻みが付されている。

ＳＩ175Ａ・Ｂ　（第18図・図版10）

位置・確認状況　ＡⅡ区北部ＪＱ69グリッドを中心にして、確認された。本住居跡の北西2.5ｍにはＳＩ173竪穴住居跡があり、この南～南東側で、基本土層の第Ｖ層下部精査中に、弧を描く黒色土を確認したものである。

形態・規模　当初、1軒の竪穴住居跡と考えていたが、床面精査中にもう1軒存在することが判明し、新しい方をＳＩ175Ａ、古い方をＳＩ175Ｂとした。ＳＩ175Ａは長径3.8m、短径3.3mの長軸方向を南東－北西にとる円に近い楕円形プランを呈する。ＳＩ175Ｂは径2.45～2.55mの円形である。床面積はＳＩ175Ａが約8.0㎡、Ｂが約4.4㎡である。当時の生活面からの深さは、75cm前後に達するものと推定される。

覆土　1層は、砂利をほとんど含んでいなく、基本層位第Ⅴ層の流入土と思われる。2層中には砂利・砂や大小の礫が含まれ、北～北西側にかけて厚いことから、ＳＩ175の周堤状部分の流入土と考えられる。2層の中央部から4層にかけて大きな礫とともに1～2個体の土器が投げ込まれた状況で出土している。3層は壁外側の土の崩落土か。4層は砂利・礫を含み、堅くしまっていることから人為的に埋められた可能性がある。5層も堅くしまっており、一時床面であった可能性もある。

床・壁　ＳＩ175Ｂの床面は平坦であるものの、Ａはゆるやかに南側に下降している。両者の床面ともに堅くしまっており、段丘礫層まで掘り込んでいるが、礫の露頭はほとんど見られない。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝・柱穴　ＳＩ175Ｂは上面幅10～20cm、深さ数cmの壁溝が北西の一部を除いて全周するが、これはＳＩ175Ａの床面構築の際に埋められていた。175Ａでは認められない。柱穴はＰ1～6まであるが、位置や埋土の状況などから、Ｐ1・3がＳＩ175Ａに、Ｐ5がＳＩ175Ｂに伴うものと考えられる。Ｐ1とＰ3では深さが10cm異なっているが、これは床面のレベル差のためであり、底面レベルはほぼ同じである。

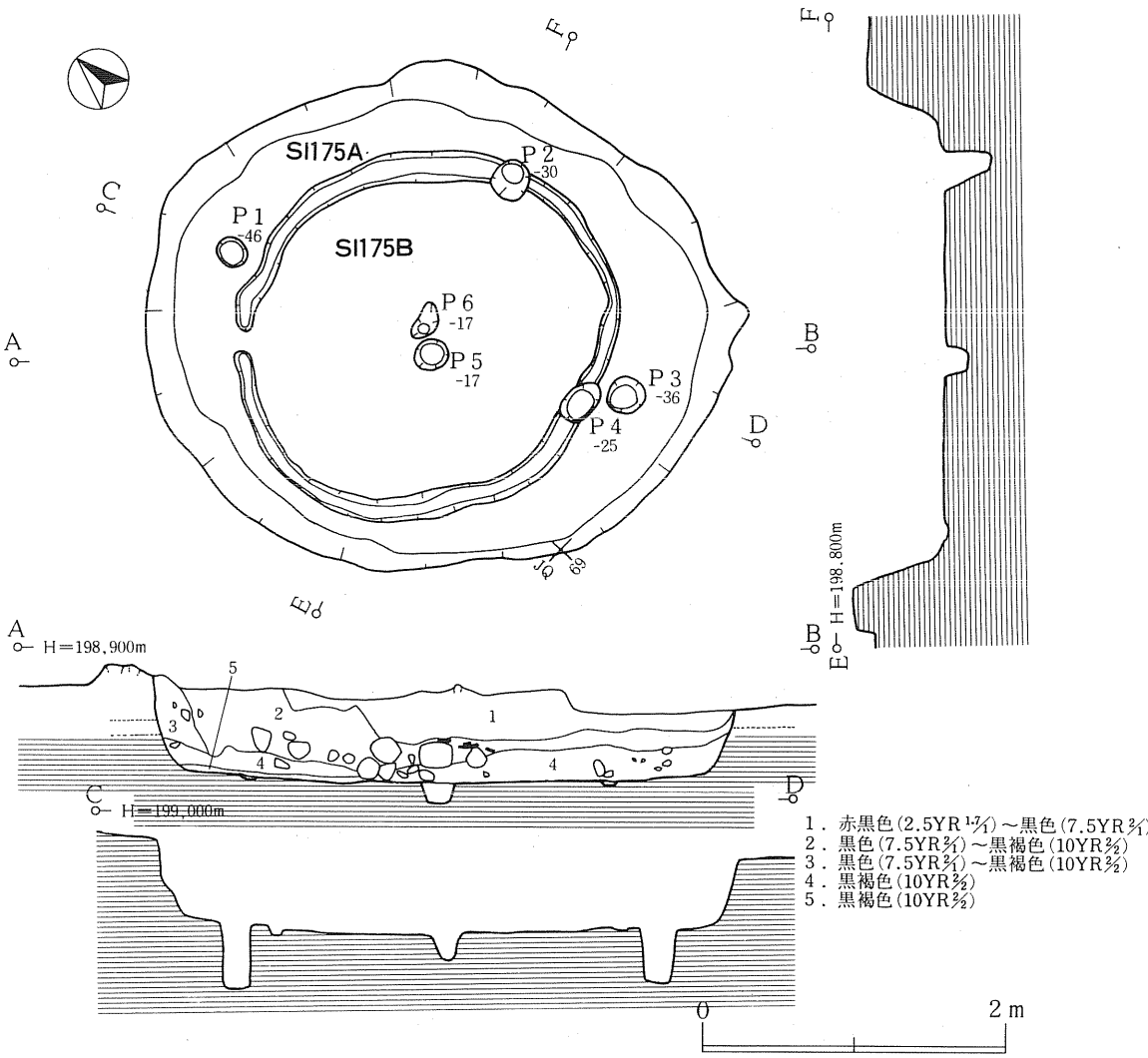
炉　ＳＩ175Ａ・Ｂともに明確な炉は認められなかった。

出土遺物　ＳＩ175Ａの覆土中から、35図15、42図78・79の土器、50図Ｓ54～56の石器が出土している。土器15は、覆土中央部の主に4層から亜角礫などと共に出土した。比較的ずんぐりした胴部から口縁部が屈曲して外反する。口縁は4つの波頂部を持つ小波状を呈する。口縁部の上下端と屈曲部には半截竹管による刺突列の施された低い隆帯があり、文様体が上下に分けられている。文様は撚糸の側面圧痕文が施され、上部は4単位である。側面圧痕文の原体は、普通の撚糸と、回転施文した場合に網目状撚糸文になるものである。

ＳＩ156　（第19図・図版10）

位置・確認状況　ＡⅡ区ＪＱ65グリッドを中心にして、基本層位の第Ⅵ層上面で検出された。大型住居ＳＩ152の西側約5mの地点である。

形態・規模　床面などの精査の結果、少なくとも新旧2時期の竪穴住居跡と判明した。新い方をＳＩ156Ａ、古い方をＳＩ156Ｂとした。しかし、2時期に分け得るのは炉と柱穴におい



第18図　SI 175A・B竪穴住居跡

てだけであり、炉と柱穴以外の記述は新しいと考えられる最終プランについて行う。南西隅が風倒木痕によって攪乱されており、平面形は、推定ラインながら直径4.1～4.5ｍの不整円形を呈する。しかし壁が直線的な部分もあり、或は不整の隅丸方形プランと見ることも可能である。確認面から床面までの深さは40～45㎝を測るが、住居中央部に床面から現表土までを観察できる部分があり、これによると、本住居跡が第４層中位から掘り込まれたとして、その深さは約50㎝程度であったと考えられる。床面積は推定約12.8㎡である。

覆土　１～５層は自然堆積土、６～10層は壁の外側にあった土の崩落あるいは流入したものと思われる。大湯浮石層が遺構以外の部分よりも少し厚くレンズ状に堆積しているが、これ

は風倒木痕によるものであろう。11～18層は床面直上あるいはこれに近い覆土であるが、いずれも堅くしまっており、人為的なものと考えられる。土層断面図の中央部12・14層などは新しいＳＩ156Ａの床面（貼床？）である可能性もある。

床・壁　掘り込んだ地山をそのまま床面とした場合、地山に段丘礫や亜角礫が露出する。このため、地山風化軽石粒子を僅かに含んでやや粘性のある黒色土を、地山の上に厚さ２～３cmに貼って床面とした可能性があり、16層がこれに当たる。床面は、中央部がややくぼむものの略平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、東辺と西辺の一部が乱れている。南辺に壁から内側に小さく張り出した部分があるが、その性格は不明である。

壁溝・柱穴　壁溝は認められなっかた。床面から柱穴と考えられるピットが17個検出されており、埋土や深さからＰ１・２・６・７がＳＩ156Ａの、Ｐ１・３・５・７がＳＩ156Ｂの主柱穴と考えられる。柱配置からそれぞれを４本主柱とすれば、Ｐ１・７はＳＩ156Ｂの主柱であったものが、ＳＩ156Ａにも柱穴がそのまま使用されたとすることも出来る。

炉　床面中央部に２つの地床炉ａ・ｂがある。ａ・ｂは隣合っており、判然としないもののａがｂを切っているように見え、ａがＳＩ156Ａ、ｂがＳＩ156Ｂの炉と考えられる。２つの炉は床面を浅く中華鍋状に掘り込んで構築しており、その底面中央の地山が焼けて赤化しているものの焼土はあまり堆積していない。

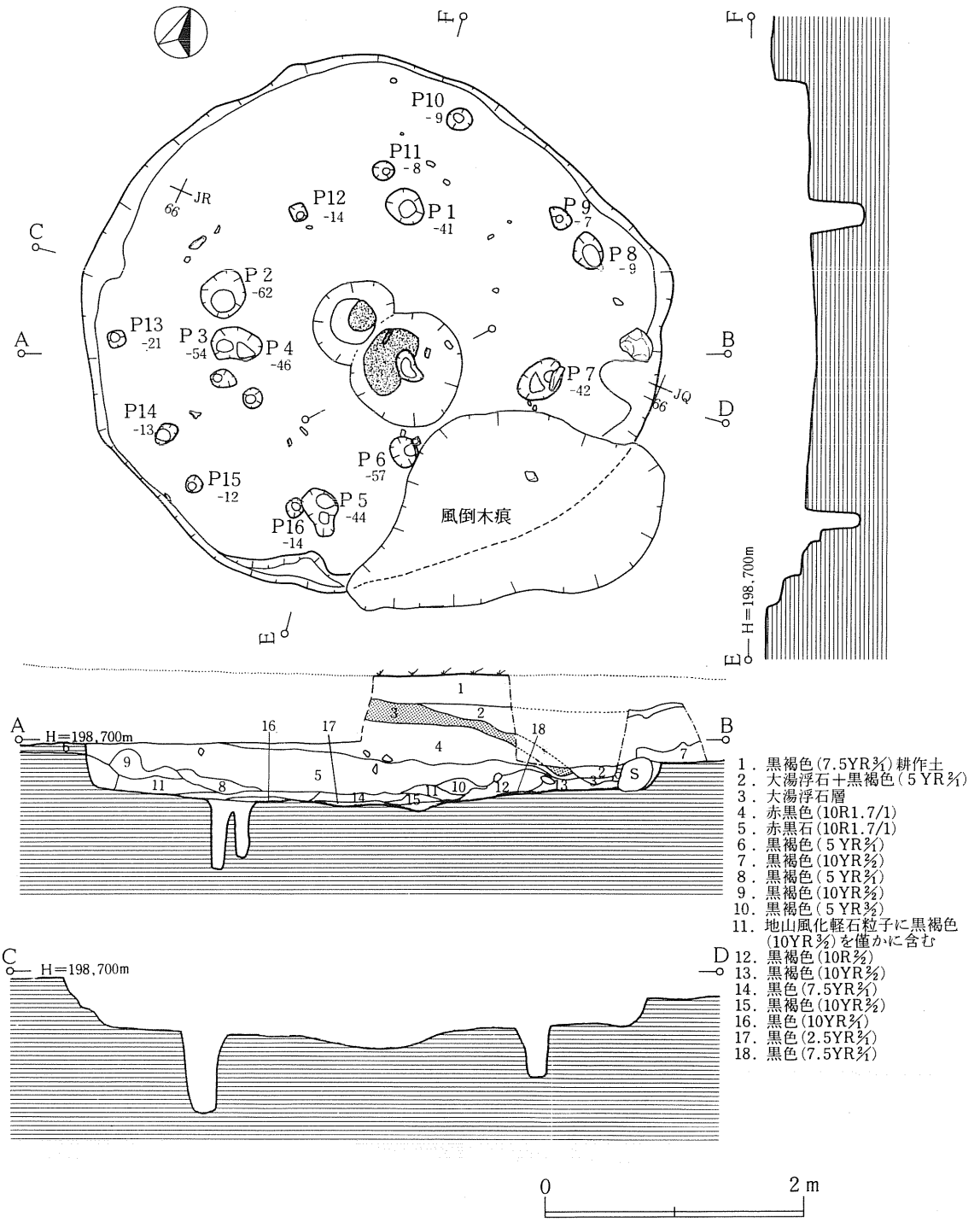
出土遺物　覆土中及び床面から出土した遺物は少ない。42図80・81は床面からわずかに浮いて出土した土器である。51図Ｓ57～64が石器で、Ｓ61の磨製石斧は地床炉の直上から出土した。

ＳＩ173Ａ・Ｂ・Ｃ　（第20図・図版11）

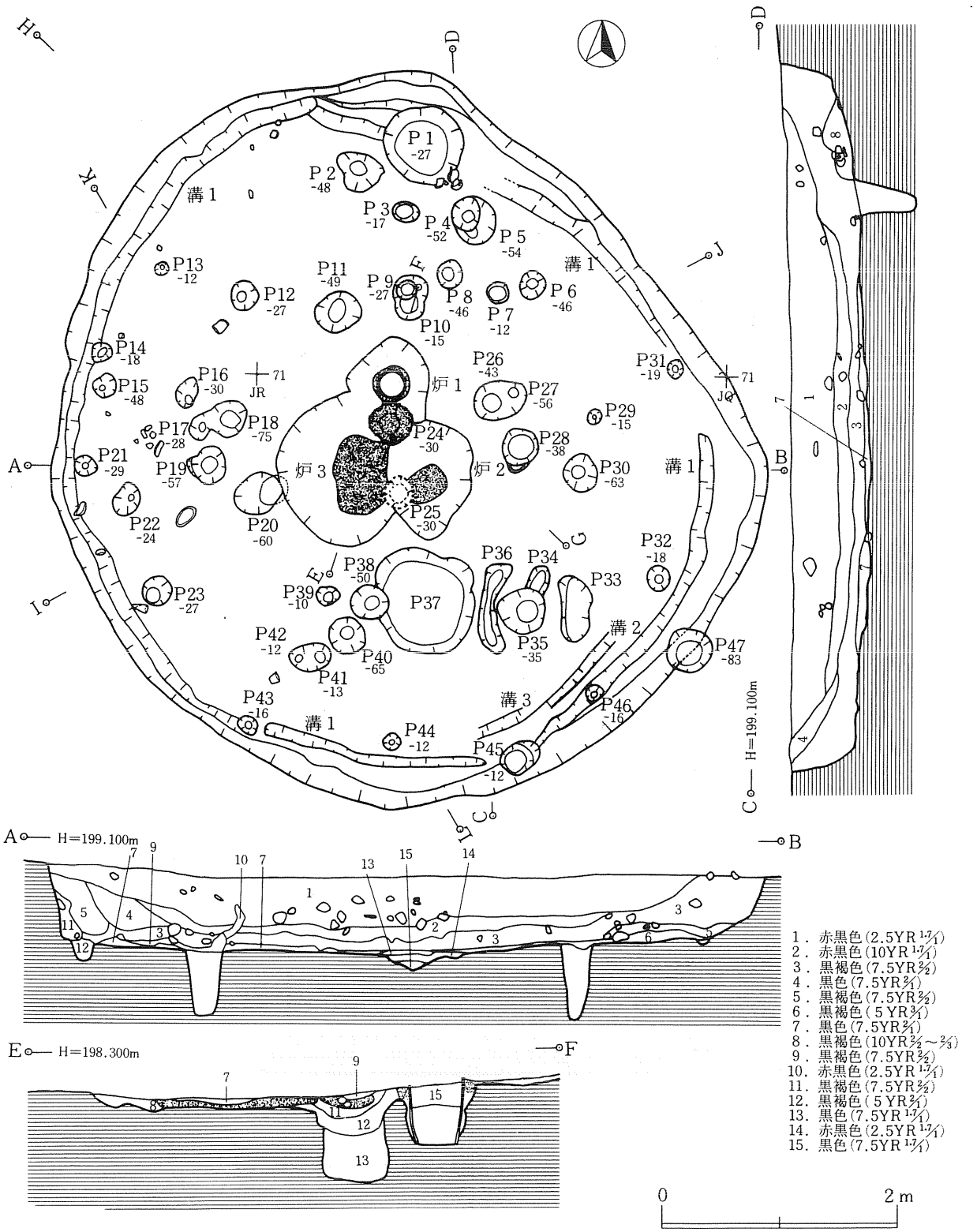
位置・確認状況　ＡⅡ区北端ＪＱ70・71グリッドを中心に、第Ｖ層上位で確認できた竪穴住居跡である。本住居跡の東側を除く周辺には、第Ｖ層上位で大小の礫・砂利・地山風化土粒子などが広く分布していたが、ＪＱ70・71グリッドを中心に径約６ｍの範囲にはそれがほとんど見られなかった。このため、第Ｖ層上面からボーリングによる探査を行い、本住居跡の存在を確認したものである。

形態・規模　当初、一軒の竪穴住居跡と考えられていたが精査の結果、少なくとも時期の異なる３つの炉があること、主柱穴と考えられる柱穴も３軒分以上存在すること、壁溝も痕跡程度のものを含めて３期はあることなどから、複数の竪穴住居跡の重複であると判明した。ある程度明らかにし得る３軒の住居跡を新しい順にＳＩ173Ａ・Ｂ・Ｃとした。従って、本住居跡は４軒以上の重複とすることができる。

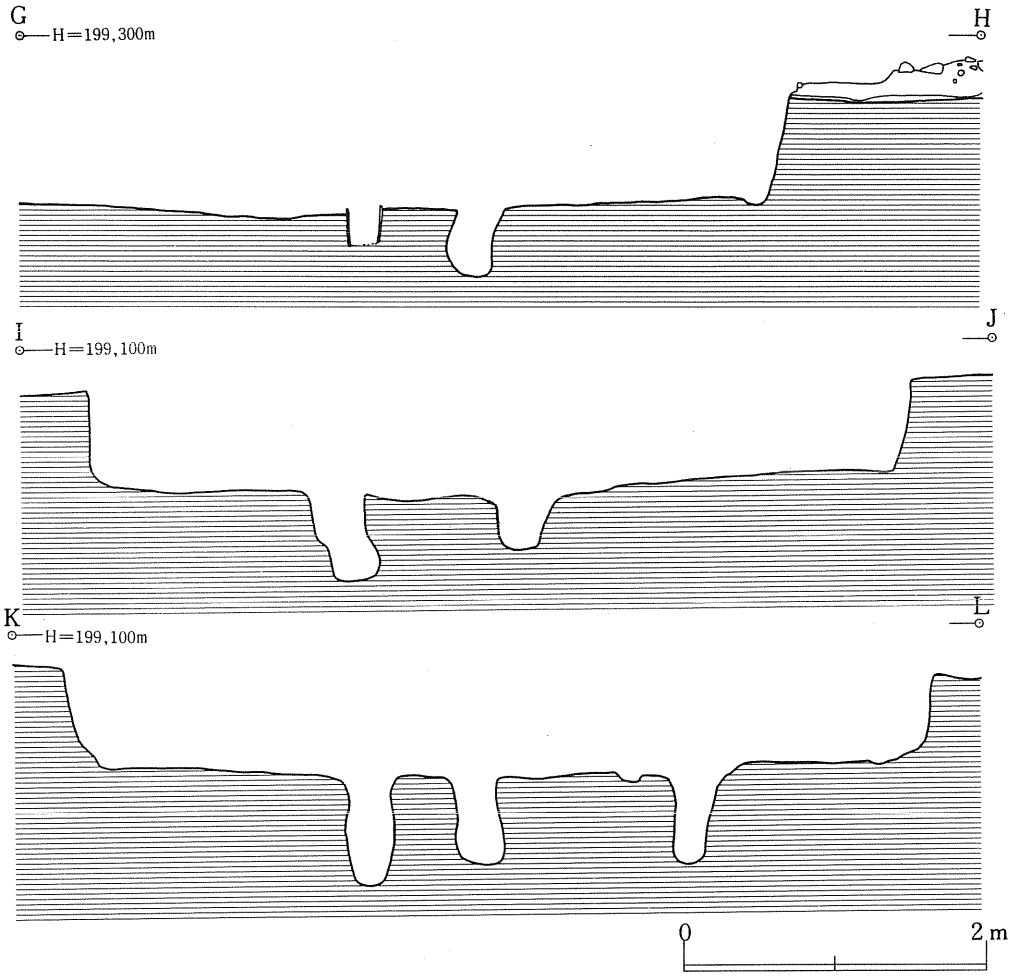
ＳＩ173Ｃは炉３を中心とし、Ｐ11・19・28・40と溝２か３がこれに伴うものと考えられる。ＳＩ173Ｂは炉２を中心とし、溝１がこれに伴うが柱穴は判然としないものである。



第19図　SI 156A・B竪穴住居跡



第20図　SI 173A・B・C竪穴住居跡（1）



第21図　SI 173A・B・C竪穴住居跡（２）

ＳＩ173Ａは炉１を中心とし、Ｐ２か４・18・30・38などによって構成されるものである。従って規模の分かるものはＳＩ173Ａ・Ｂだけである。ＳＩ173Ａは、径6.1～6.3ｍの不整円形を呈するが、北東辺が直線的であり、その分だけ形がゆがんでいる。床面積は25.5㎡である。ＳＩ173Ｂは径5.5ｍの略円形を呈するが、やはり北東辺が直線的である。推定床面積は22.9㎡。ＳＩ173ＣもＡ・Ｂの形状とほぼ同様のものと考えられるが、規模は両者よりも若干小さくなるものであろう。３軒とも生活面から約70㎝の深さを有している。

覆土　ＳＩ173Ａ・Ｂ・Ｃ共に床面レベルがほぼ同じであるため、覆土についてはＳＩ173Ａのものについてしかわからない。１，２層は基本層位第Ⅳ・Ⅴ層に似た自然堆積土であるが、中央部ほど周囲から転落した礫が多い。３・４・５層は礫・砂利・砂等を含んで堅くしまっており、住居外にあった周堤状高まりの流入土とも考えられるが、焼土や木炭片を含んでいるので、人為的に投棄された可能性もある。７層は砂粒や地山風化土粒子を含む黒色土

で、堅くしまり粘性が若干あるところから、住居床面に貼られたものである可能性がある。11層は壁崩落土か。13・14・15層は炉3の埋土である。これらの覆土のうち、主に3・4・5層に遺物が含まれている。

壁溝・柱穴　壁溝は3条認められる。溝1はＳＩ173Ｂに伴うものと考えられ、深さ2～10cmで、ＳＩ173Ａの床面構築の際に埋められている。溝2・3は南辺にわずかに認められるが、痕跡程度のものである。やはり埋められている。

柱穴は床面からＰ1・33・36・37を除くＰ1～Ｐ46を検出した。このうち主柱穴と思われる40cm以上の深さをもつのはＰ1・4・6・8・11・18・19・20・26・28・30・38・40で、そのうちＰ2・4・18・28・38以外のピットは人為的に埋められていた。柱穴の埋土・位置・配置・規模などから、Ｐ4（あるいは2）・18・28・38がＳＩ173Ａの、Ｐ11・19・28・40（あるいはこれにＰ6）がＳＩ173Ｃの、Ｐ8・20・28・40がＳＩ173Ｂの主柱穴と考えられるが、ＳＩ173Ｂについては判然としない部分もある（Ｐ28・40は共用）。また、これ以外の柱穴の性格や組み合わせについては不明である。なお、Ｐ47は一部壁を掘り込んでおり、ＳＩ173Ａよりも新しく、これらの住居跡とは係わりのないピットであると考えられる。

炉　炉は中央部から3基が検出された。炉1は土器埋設炉でこの中では最も新しく、ＳＩ173Ａに伴うものである。炉2・3は地床炉で、炉2が炉3の焼土を切っており、炉2がＳＩ173Ｂに、炉3がＳＩ173Ｃに伴うものである。炉2・3ともに床面を中華鍋状に掘り込んでおり、中心の焼土の周囲に粉状の炭化物と思われる土を主体とする黒色土が分布している。特に炉2では、土層断面図で明らかなように、焼土がこの黒色土の上に形成されている。

また、Ｐ24の上の焼土は炉1に伴う焼土と考えられるが、このＰ24は、その位置及び埋土の状況から土器埋設炉の掘方で、これから土器が抜き取られたものと推測される。このＰ24も炉であったとすれば、炉は全部で4基存在し、Ｐ24が最も古い炉と考えられる。

その他の付属施設　Ｐ1とＰ37は大きく浅い掘り込みで、柱穴とは考えられないものである。またＰ33・36も細長い溝状の掘り込みである。またＰ1の埋土は土層断面図の8層とほぼ同じで、他は炉2・3の黒色土に似た埋土であったが、いずれも性格等は不明である。

出土遺物　覆土中から36図18、43図82～93の土器、51図Ｓ65～68、52図Ｓ69～72の石器が出土している。36図17は、ＳＩ173Ａの土器埋設炉に用いられた土器である。胴部下半が打ち欠かれ、口縁部上半を失っている。口縁部文様帯の撚糸の側面圧痕文がわずかに残っており、下端の極く低い隆帯上には、右→左に施された刺突列が付されている。胴部には、上から3段の羽状縄文、その下に施文方向を一度も変えない木目状撚糸文が施されている。18は、Ｐ4付近の床面から5～10cm浮いて出土した小型土器である。4つの頂部を持つ波

状口縁を呈する。口縁に沿う形で、２条の縄文側面圧痕文が付されている。82・83は同一個体で、平口縁であろう。漫然と盛り上がった感じの隆帯の下に刺突列があり、口縁部には４単位と思われる浅い沈線文が描かれ、口縁端部に斜縄文が施されている。また、93は、口縁部から胴部上半の破片を用いた円盤状土製品である。中央部からややずれたところに盲孔が一つある。

ＳＩ213Ａ・Ｂ　（第22図・図版13）

位置・確認状況　ＡＩ区南東端ＪＮ73グリッドを中心にして第Ⅴ層中で確認された。この部分は沢側に向かってわずかに傾斜してはいるものの、第Ⅲ層大湯浮石層が若干厚く堆積しているため、先に確認されていたＳＩ212のセクションベルトを延長し調査したところ検出されたものである。当初１軒の住居跡と見ていたが、土層断面及び壁溝の存在などから、少なくとも２軒以上の重複と判断されたため、新しい方をＳＩ213Ａ、古い方をＳＩ213Ｂとした。ＳＩ213ＡはＳＩ213Ｂを縮小する形で構築されたものと考えられる。北側約30cmでＳＩ212・215があり、北東側はＳＩ230・234と重複し、南東側は山道造成の際に削り取られている。

形態・規模　ＳＩ213Ａは、ＳＩ213Ｂの床面上にわずかに残った壁溝と柱穴配置によって大略の形態・規模が推定できる。長径（南北方向）6.0m、短径６ｍ未満の略楕円形を呈すると考えられる。推定床面積25.5㎡である。ＳＩ213ＢはＳＩ213Ａよりも１回り大きく、径約７ｍのほぼ円形を呈すると考えられる。推定床面積34.6㎡である。当時の生活面からの深さは70cmと深い。

覆土　土層断面図中の４は、いわゆるチョコレート色を呈する基本土層の第Ⅳ層である。５～10層がＳＩ213Ａ・Ｂの覆土で、５～８層がＳＩ213Ａの、９・10層がＳＩ213Ｂの覆土である。８層と９層はほぼ似た色調・堅さながら、礫や砂利、地山風化土の混り方に若干の差があり、また両者の層界の８層側が軟いことから分層できたもので、このラインはＳＩ213ＡとＢの切り合っている部分に当たっている。９・10層はＳＩ213Ｂの外周の流入土であるが、10層が軟かくしまりがない。

床・壁　ＳＩ213Ａ・Ｂともに段丘礫層を掘り込んでいるものの、床面は平坦で堅くしまっている。両者の床面レベル差はほとんどない。ＳＩ213Ｂの壁は垂直で、一部オーバーハングしている部分もある。

壁溝・柱穴　ＳＩ213Ａはその規模を溝１・２・３によって確認できるもので、これがＳＩ213Ａの壁溝である。上面幅約10cm、深さ１～数cmで、北辺は痕跡程度しか残在しておらず、東辺は見えない。ＳＩ213Ｂの壁溝は北辺（溝４）と西辺の一部にわずかに見られるのみ

である。柱穴は、ＳＩ213Ａ・Ｂの床面から、Ｐ１～Ｐ38までを検出している。柱穴の埋土・深さ・配置から考え、Ｐ２・３・17・19がＳＩ213Ａの、Ｐ１・５・13・20・22がＳＩ213Ｂの主柱穴と考えられる。ＳＩ213Ｂはその配置から推定して、Ｐ35の南東側に検出できなかったもう一本の主柱穴が存在する計６本の主柱穴と考えられる。また、ＳＩ213Ｂの壁に接して（ほとんど半分壁に入っている）小さなピットが検出されている。約0.5～1.2m間隔に配されており、ＳＩ213Ｂの壁柱穴と考えられる。

上記以外にも、深くて太いしっかりした柱穴が存在するので、ＳＩ213Ａ・Ｂ以外にも、これらと重複する竪穴住居跡が他に数軒存在したものと思われる。

炉　焼土を伴うしっかりした炉は認められなかったが、Ｐ１からＰ12の間の床面が緩くくぼんで床面の他の部分よりも堅くしまり、火熱を受けているようにも見えた。この付近にＳＩ213Ａ・Ｂの地床炉があったものと推測される。

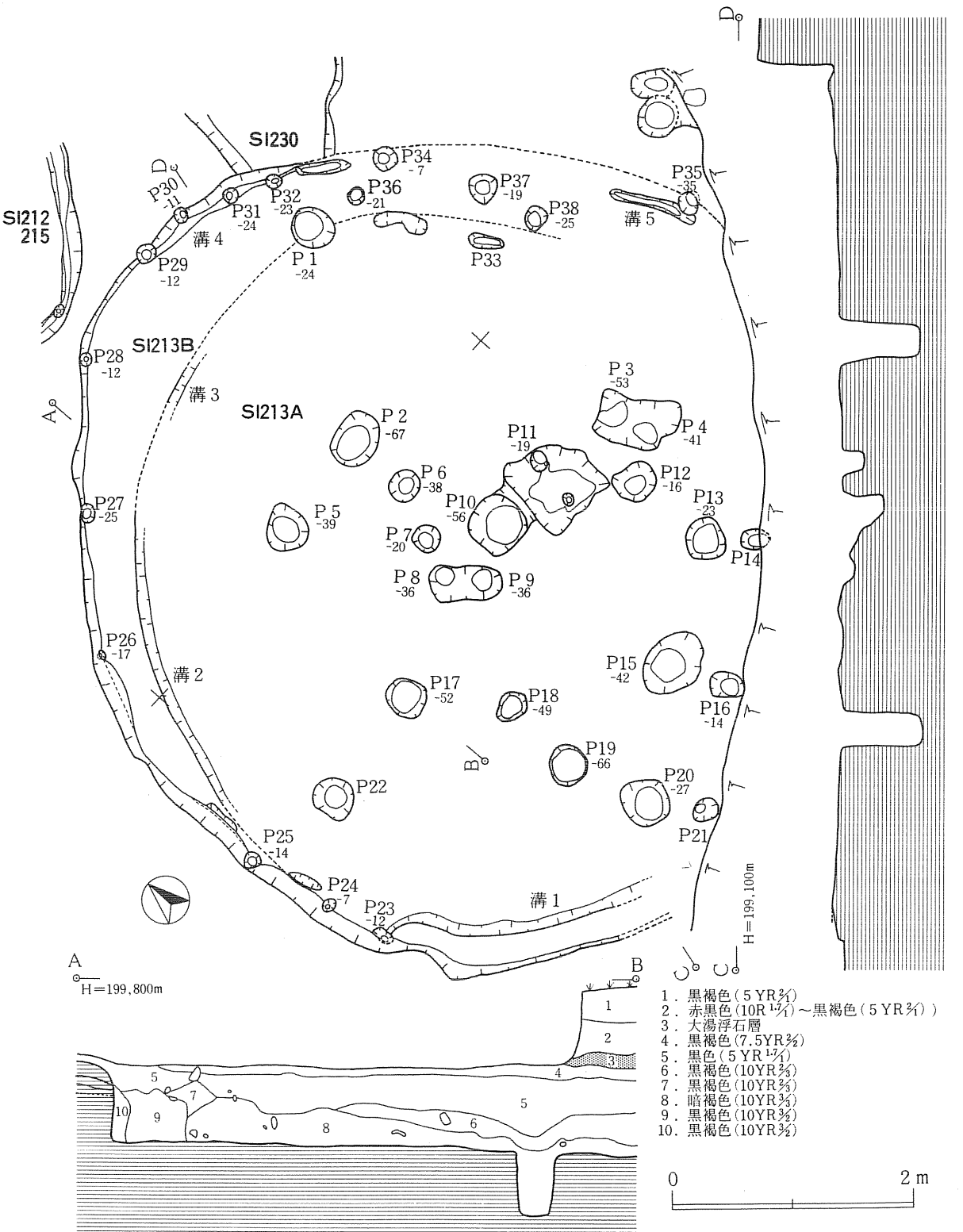
出土遺物　ＳＩ213Ａの覆土中から43図94～100の土器と、52図Ｓ73～77、53図Ｓ78～84の石器が出土している。土器94・95の口縁部には網目状撚糸文が横位に施文されている。

ＳＩ152Ａ・Ｂ、ＳＱ153　（付図１、第23図・図版15）

位置・確認状況　ＡⅡ区北部ＪＭ・ＪＮ・ＪＯ—66・67グリッドを中心に、第Ⅴ層上面で確認された。南辺西側が平安時代の竪穴住居跡ＳＩ109によって切られ、東辺の一部が風倒木痕によって乱されている。

平安時代の竪穴住居跡ＳＩ109の北辺と東辺北部の壁及び床面の精査時に、この部分に縄文時代の何らかの遺構の存在することが予想された。ＳＩ109は段丘礫層まで掘り込まれ、壁に段丘礫が露頭しているにもかかわらず、北辺の西部及び東辺の北部でこれが途切れており、北部の床面が貼床状を呈していたからである。また、その後、第Ⅲ層大湯浮石層がＳＩ109北側の平安時代の集石遺構ＳＱ146の下に、レンズ状に厚く堆積していることがわかり（図版14）、これがかなり広く認められたため、ここに大きな竪穴住居跡の存在することが予測された。これをＳＩ152として縦横にセクションベルトを設定し、住居覆土の掘り下げと住居外の精査を行ったところ、住居外の第Ⅳ層及び第Ⅴ層上部相当面から無数の礫が累々と検出された。礫は大小の亜角礫や円礫、砂利などで、固結こそしていないもののそれらは段丘礫層の構成とほぼ同様のものであった。そしてこれらの礫群は疎密の差こそあれ、幅４～７ｍの帯状をなしてＳＩ152竪穴住居跡をドーナツ状に取り囲んでいることが分かった。これがＳＱ153であり、ＳＩ152を構築する際に、掘り上げた土砂を住居外に周堤状に積み上げたものであると考えられる。

形態・規模　床面の精査の結果、ＳＩ152には少なくとも新旧２時期のあることが判明したた



第22図　SI 213A・B竪穴住居跡

め、新しい方をＳＩ152Ａ、古い方をＳＩ152Ｂとした。ＳＩ152Ｂは、柱穴配置からプラン等が推定されるものであるが、その形態はＳＩ152Ａにほぼ等しく、規模もわずかに小さい程度と思われる。ＳＩ152Ａは長径12.6ｍ、短径8.4ｍの楕円形を呈し、床面積は約79.5㎡である。ＳＩ152Ｂは長径11.7ｍ、短径8.4ｍで、長軸方向は両者とも東北東－西南西である。当時の生活面からの深さは約1.0ｍと本遺跡の竪穴住居跡の中では最も深い。

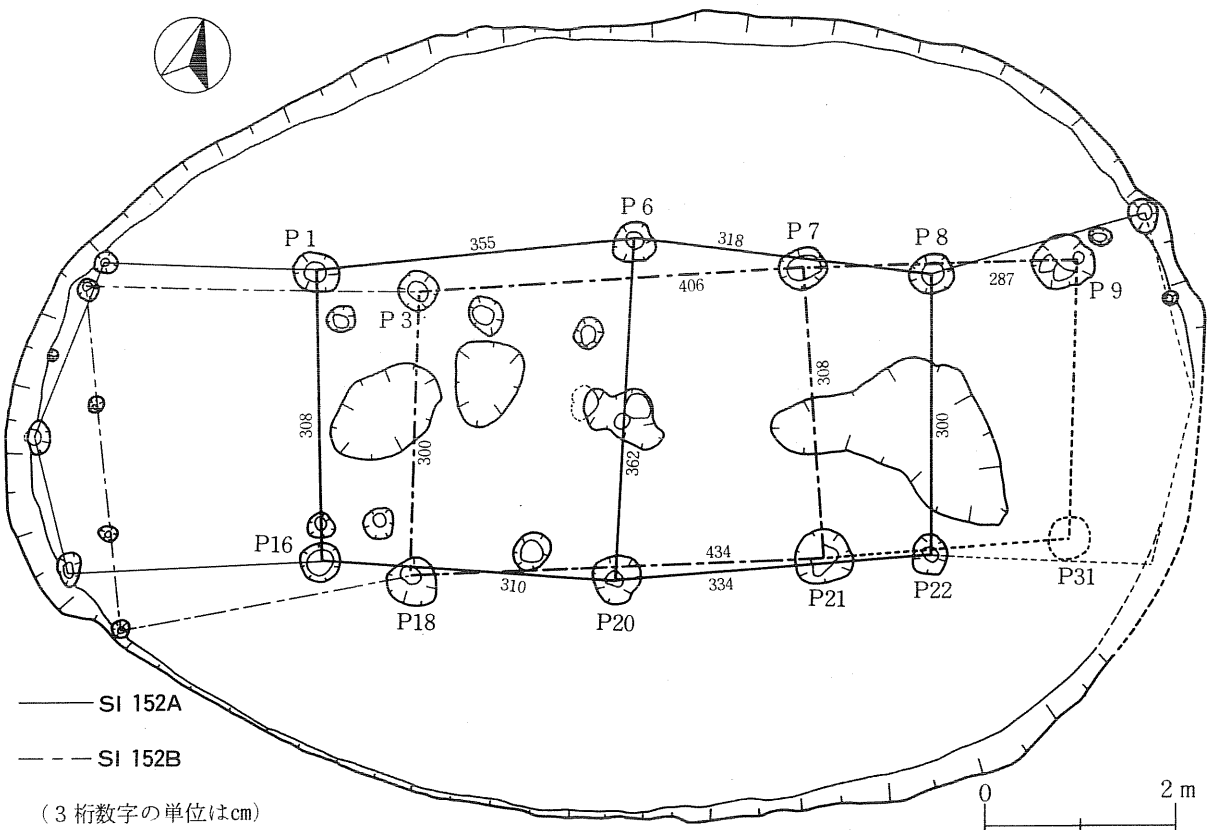
覆土　土層断面図の３層は大湯浮石層、１・２層はＳＱ146周辺の平安時代の生活面である。４層は基本層位の第Ⅳ層に相当し、６層は第Ⅴ層の一部に当る。４・６層ともＳＩ152Ａ廃棄後、周囲の周堤部が崩落・流入した後に堆積したものであろう。６層中には亜角礫・円礫の他、土器は少ないものの、剥片類が含まれている。７・８・９層中には礫・砂利が多量に含まれており、堅いブロック状をなす部分も多く、しまっている。10層は粘性のある黒色土で、あるいは床面として敷かれた土である可能性もある。12・13層はＳＩ109の貼床部。14～17層は風倒木に伴うものである。

18・19層はＳＱ153（周堤部分）を構成する土層で、基本層位の第Ⅴ層に相当する20層の上に亜角礫・円礫・砂利・地山風化軽石土が混然一体となっている。堅い部分（18層）と比較的軟い部分（19層）とがある。21層は地山漸移層である。

床・壁　段丘礫層を深く掘り込んで床面としているため、床面上には段丘礫の露出も見られるものの、全体的には平坦で堅くしまっている。特に北西側にかけては、段丘礫層中の砂鉄を含む砂層を床面としているため、非常に堅く平坦である。

壁は東辺で一部攪乱を受けているものの、全辺ほぼ垂直に立ち上がり、壁面の段丘礫の露出もさほど目立たない。

壁溝・柱穴　壁溝は認められなかった。柱穴はＰ１～Ｐ30が検出され、それらは壁際小ピット群と、壁から離れている大ピット群に分けられる。大ピット群のうち、ＳＩ152Ａの主柱穴と考えられるＰ１・６・８・16・20・22の埋土が軟かい黒色土を主体とするのに対し、他の柱穴は砂利等で人為的に埋められていた。人為的に埋められたピットのうち、配置・規模などから、Ｐ３・７・９・18・21がＳＩ152Ｂの主柱穴と考えられる。他のＰ２・４・５・13・14・15・17・19のピットは、その位置・規模からＳＩ152Ａ・Ｂに伴う柱穴とは考えにくく、これらのうちの数本で、ＳＩ152Ａ・Ｂとは別の小さな竪穴住居になると思われるが、そのプランを確認することができなかった。なお、ＳＩ152Ｂの主柱穴はＰ21の東側にもう一本存在したものと（これを仮にＰ31とする）考えられるが、その部分が風倒木痕によって攪乱されており、検出することができなかった。壁際の小ピットは、住居長軸方向の両端にのみ認められるもので、それ以外は全く存在しない。西壁部分の小ピット群のうち、その配置からＰ23・27・29がＳＩ152　Ａに、Ｐ24・26・28・30がＳＩ152に



（３桁数字の単位はcm）

第23図　SI 152A・B竪穴住居跡柱穴配置図

伴うものと推測される。

ＳＩ152Ａ・Ｂの柱配置及び柱間距離等を示したのが（計測は柱穴の中心を結んだ距離で行った）第23図である。主柱穴配置は両者共に桁行２間で、ＳＩ152Ｂの桁行き方向が直線的で全体的に長方形を呈するのに対し、ＳＩ152Ａでは中間の梁間が広く全体として長方形に近い六角形を呈する。ＳＩ152Ａの桁行２間のうち、Ｐ１－６間（335cm）とＰ16－20間（310cm）、Ｐ６－８間（318cm）とＰ20－22間（334cm）ではそれぞれ距離が異なっているものの、北側桁行（Ｐ１－８間646cm）と南側桁行（Ｐ16－22間640cm）はほぼ同じである。ＳＩ152Ｂもこのように推定した場合、桁行距離は690cm前後になる。なお、ＳＩ152Ａの主柱穴Ｐ１の埋土断面で柱アタリが推定できた。これによると、Ｐ１の掘方口径は40～50cm、底径は約20cm、深さ63cmで中央部から東側壁側に径16～19cmの軟かい黒色土があり、その周囲が砂利などで堅く埋められていた。壁際の小ピット群は、桁行方向の延長線上にのみ存在することから、ＳＩ152Ａ・Ｂの上屋構造に大きく係わる柱穴と考えられる。これらの柱穴はＰ27のように、推定される柱の上端が住居中央部に向かってやや斜めになるものもあるが、他はほぼ垂直に掘り込まれている。

炉　焼土を伴う明瞭な炉は確認できなかったが、住居跡床面の長軸線上が緩やかにくぼんで、その中が堅くわずかに火熱を受けたと推定されるような部分もあったことから、図中のくぼみ部分が地床炉かと思われる。

出土遺物　ＳＩ152Ａの覆土中から、35図16、43図101・102、44図103～106の土器と、53図Ｓ85・86、54図Ｓ87～98、55図Ｓ99～107、57図Ｓ121・122の石器、58図の垂飾品が出土している。16は、覆土上位から出土した縄文時代後期の土器である。ＳＩ152Ａが大湯浮石層降下時にも完全に埋まりきっていない状態であり、後期頃にはもっとくぼんでいたと推定される。従ってこの土器は、後期にそのくぼみに捨てられたか、その後流入したものであろう。土器104と105は同一個体で、床面近くの覆土から出土している。ゆるい波状口縁をなし、口縁部に撚糸の側面圧痕で４単位の文様が描かれたものである。頸部には細く低い２本の隆帯を有し、その上に刺突列が施されている。石器にはＳ89のように、完形で床面直上から出土したものもあるが、大部分は欠損品で覆土に混在していた。Ｓ121・122は４点出土した台石のうち２点で、Ｓ121はＰ６の西に接してあったもので、周囲の床面には多数の剥片チップが散乱していた。石製品２は、住居床面から出土した。美しい淡青色を呈する緑色凝灰岩製で、先端に両面から穿孔された小孔を持つ垂飾品である。

ＳＱ152の中からも、44図107～110の土器や55図Ｓ108～110の石器、57図１の岩偶はＳＩ152の南辺やや東側から約2.3ｍ南側の礫群中から出土した。胴中央部から２つに折れており、双方が約30cm離れて他の礫と混然となった状況で出土したものである。凝灰岩を鋭利な工具で滑かに削っており、接合すると、全長12.1cm、肩部に最大幅があり6.3cm、厚さ2.6cmである。表裏面共に、頭部と、頭部から肩にかけての髪と思われる部分、肩部、脚部が浮彫的に表出されている。ほぼ全身に、わずかな欠損部やキズなどがあるが、概ね原形を留めている。

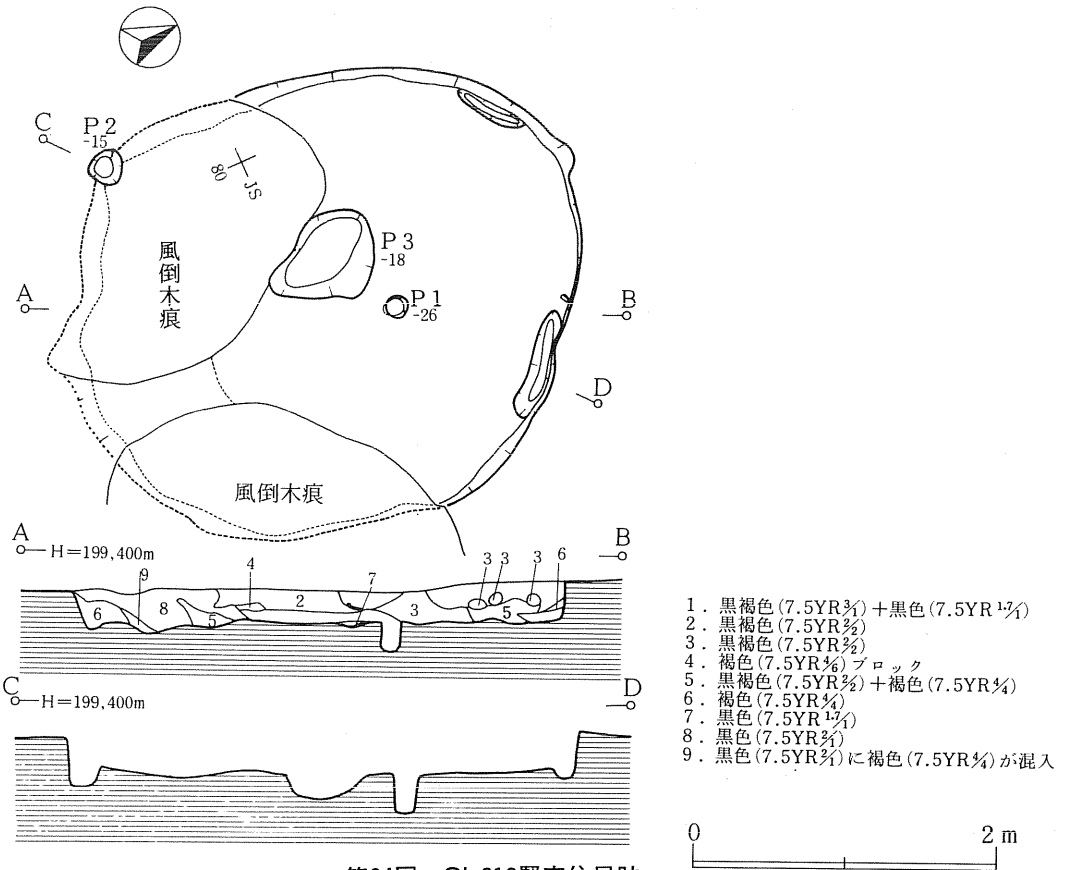
ＳＩ218　（第24図・図版18）

位置・確認状況　ＡＩ区東部北西端・ＪＲ79グリッドを中心に基本土層第Ⅵ層上部で確認された。本住居跡の南東側約４ｍにＳＩ211がある。

形態・規模　住居跡南半を２つの風倒木痕によって壊されており、正確な規模は不明である。Ｐ１の一本主柱の住居跡とすれば、径3.0～3.5ｍの不正な円形あるいは楕円形を呈するプランと考えられる。深さは20～25cmで、推定床面積は7.7㎡である。

覆土　土層断面図では、４層より右側が本住居跡の覆土を示し、その左側は風倒木痕に伴うものであるが、全体的に多少なりとも風倒木の影響を受けており乱れている。

床・壁　床面は風倒木痕の影響を受けていない部分では、平坦で堅くしまっている。掘り込み



第24図　SI 218竪穴住居跡

底面への礫の露出はほとんどない。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝・柱穴　北辺～東辺の一部に短い壁溝が認められる。深さ３～４㎝である。柱穴は、Ｐ１～３のうち、Ｐ１が主柱穴であろう。Ｐ３は風倒木痕との関連から本住居跡に伴うものか否か判然としない。

炉　明確な炉は存在しないが、Ｐ１の南側床面がわずかにくぼんで、特に堅くなっており、この辺りに地床炉を推定できるかもしれない。

出土遺物　覆土中から出土した破片が、住居跡周囲から出土した土器と接合するため、復原できた土器が多い。36図19・20、37図21・22、38図23・24がそれである。この６個体は器形がわずかずつ異なるものの、平口縁で、外反する口縁部には不整の綾絡文を施し、やや太めの隆帯上に縄文の側面圧痕文を斜位に付したものである。綾絡文は、１本の縄あるいは軸に巻き付けた縄に結び目を連続して作り、これを回転施文したもので、綾絡文帯となっている。胴部には縦走する撚糸文が多く付され、20・22・24では底部に同一原体による横走する綾絡文

が施されている。23の隆帯上には、胴部に施されたいずれかの撚糸文原体が回転施文されており、胴部には少なくとも３種類の撚糸文が用いられている。また、底部内面中央部が突起状に盛り上がっており、同様の破片が住居外からも１点（433）出土している。この他の遺物としては、44図111～115の土器と、56図Ｓ111・112の石器などが出土している。

ＳＩ228　（第25図・図版18）

位置・確認状況　ＡＩ区中央北端、基本層位の第Ｖ層下部で確認した。捨場の範囲内にあり、住居上部には多量の土器・石器が散在していた。本住居跡の北側が調査区外であることもあり、周辺10ｍ以内には他の遺構が存在していない。

形態・規模　径2.8～3.2ｍの不整円形プランで床面積は約6.0㎡である。確認面からの深さは約40㎝を測り、生活面からの深さは約50㎝と推定される。

覆土　図示した土層断面図は住居西端のものであり、中央部での正確な土層を反映していないが、大略においては変化ない。埋土の主体を占めるのは２・３層で礫や遺物を多く含み、しまっている。意識的に捨てられた土であると考えられる。４・５・６層は壁の崩壊土と思われる。比較的軟かく、しまりもない。

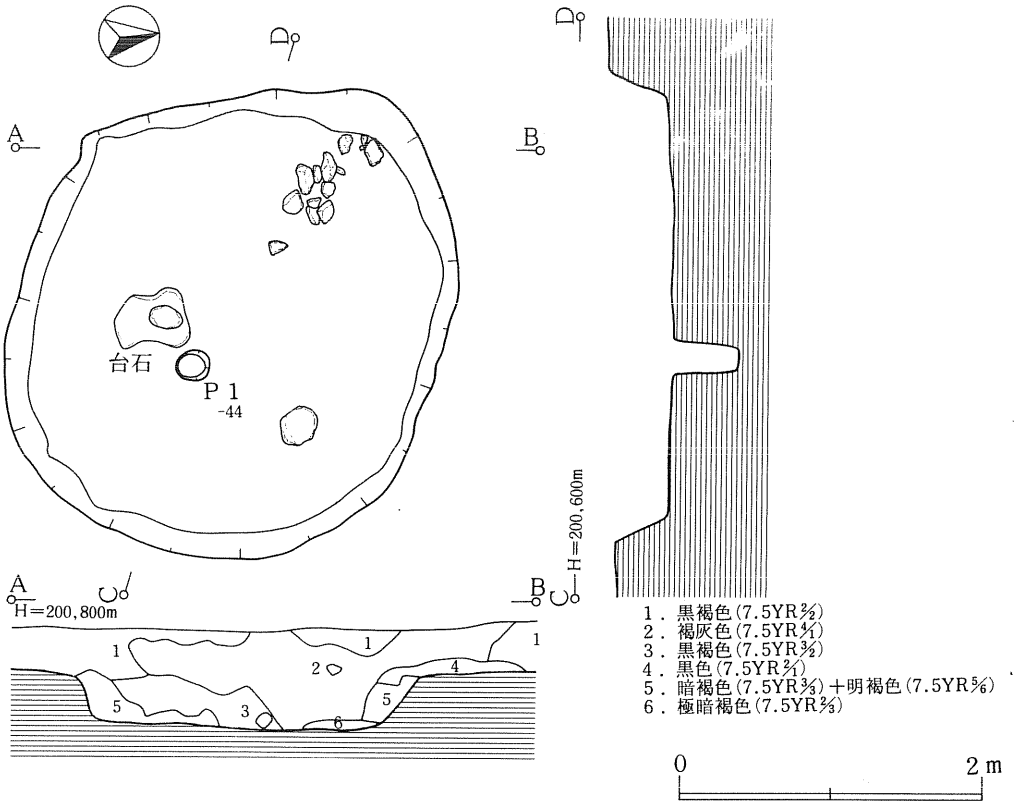
床・壁　段丘礫層まで掘り込まれているものの、床面上に大きな礫の露出はなく、平坦で堅くしまっている。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝・柱穴　壁溝は認められず、主柱穴はＰ１の１本である。

炉　明確な炉は認められないが、Ｐ１の北西側床面がわずかにくぼんで、その内面が堅く細かな凹凸のあるところから、これが地床炉と考えられる。

その他の付属施設　Ｐ１の南西側に大きく扁平な台石がほぼ床面に接して、置かれている。

出土遺物　覆土中から、38図25、39図26・27、44図116～119の土器と、56図Ｓ114～119の石器が出土した。ほぼ復原できた３個の土器のうち、接合された全ての破片が覆土中から出土したのは25だけで、26・27は周囲から出土した破片と接合したものである。25は、平口縁と大差ないようなゆるい波状口縁で、強く外反する口縁部には、縄文の側面圧痕による４単位の文様が施されている。この文様は、波頂部下に４条１組で描かれた菱形の空間が設けられ、その中にやはり４条１組の×印を配したものである。×印の外側の条に沿って刺突列が加えられている。また、口縁部下端には細い隆帯が貼付されているが、その上下に１条ずつの側面圧痕文が施されているため、隆帯の断面形は矩形をなす。26は、全面にＬＲの太い単節斜縄文が施され、その上に合計９条の綾絡文が縦位に付されている。頸部には、胎土の異なる粘土紐による低い隆帯が、地文施文後に貼付され、その上には節のない原体（ツル科の植物茎か？）の斜位圧痕が施されている。なお、胴部下半から底部までの



第25図　SI 228竪穴住居跡

幅約５cmは無文で平滑になでられている。27は原体の明瞭でない回転文が口縁部に施されておりその下端には、上面に施文のない隆帯が２本貼付されている。

ＳＩ168　（第27図・図版19）

位置・確認状況　ＡⅡ区中央東端部のＪＩ63グリッドを中心に、第Ⅴ層中位で確認された。第Ⅴ層中位で本住居跡覆土上位とその西側に、亜角礫を主体とする大小の礫が密集する部分があり、これを精査したところ判明したものである。風倒木痕によって南辺をわずかに乱されている。北側約３ｍにＳＩ162が位置する。

形態・規模　東辺の一部が調査区外で未調査であるが、北西辺に少し丸味のある隅丸方形プランを呈する。一辺は2.4～2.7ｍで、深さは50cmである。推定面積は4.7㎡である。

覆土　１層は基本層位第Ⅴ層に相当し、本住居の覆土の主体をなすのは、２～４層である。覆土中央部を中心に多量の礫が地山砂利・ブロックなどと共に捨てられており、いずれの層も堅い。５層は砂質土で堅くしまっている。

床・壁　掘り込みは段丘礫層まで達しており、わずかに円礫や砂利が露出しているものの、平

坦で非常に堅くしまっている。壁も良好で垂直である。

壁溝・柱穴　南東壁下に浅く短い溝が認められるものの、この部分だけであり、これをして壁溝とすることもできない。主柱穴は、床面中央にあるＰ１である。

炉　Ｐ１の北東側床面がかすかに赤化しているようにも見えるが、明確に炉とするものは認められなかった。

出土遺物　覆土中から、44図120の土器と、56図Ｓ113の石器が出土している。

ＳＩ170　（第27図・図版19）

位置・確認状況　ＡⅡ区中央南部ＪＭ59グリッド第Ⅵ層上面で確認した。当初その規模からして土坑として調査したが、床面中央部に柱穴が存在することから住居跡としたものである。東辺の一部を平安時代の竪穴住居跡ＳＩ116に切られており、北側には縄文時代後期の土坑ＳＫ166がある。

形態・規模　南北2.5ｍ、東西2.1ｍの隅丸長方形を呈する。深さは、20〜25㎝である。推定床面積は、約4.1㎡である。

覆土　２・３層は流入土。１層は第Ⅴ層に似ているが、下位ほど小石から人頭大の亜角礫が含まれている。

壁溝・柱穴　壁溝は認められず、床面中央やや西側に主柱穴Ｐ１がある。Ｐ２は本住居跡よりも新しいものである。

床・壁　掘り込みが浅いにもかかわらず段丘礫層まで達しており、床面西半部では礫の露出があり凹凸があるものの、全体的に堅い。壁は残存している部分が少ないものの、ほぼ垂直に立ち上がる。

炉　明確な炉は認められなかった。

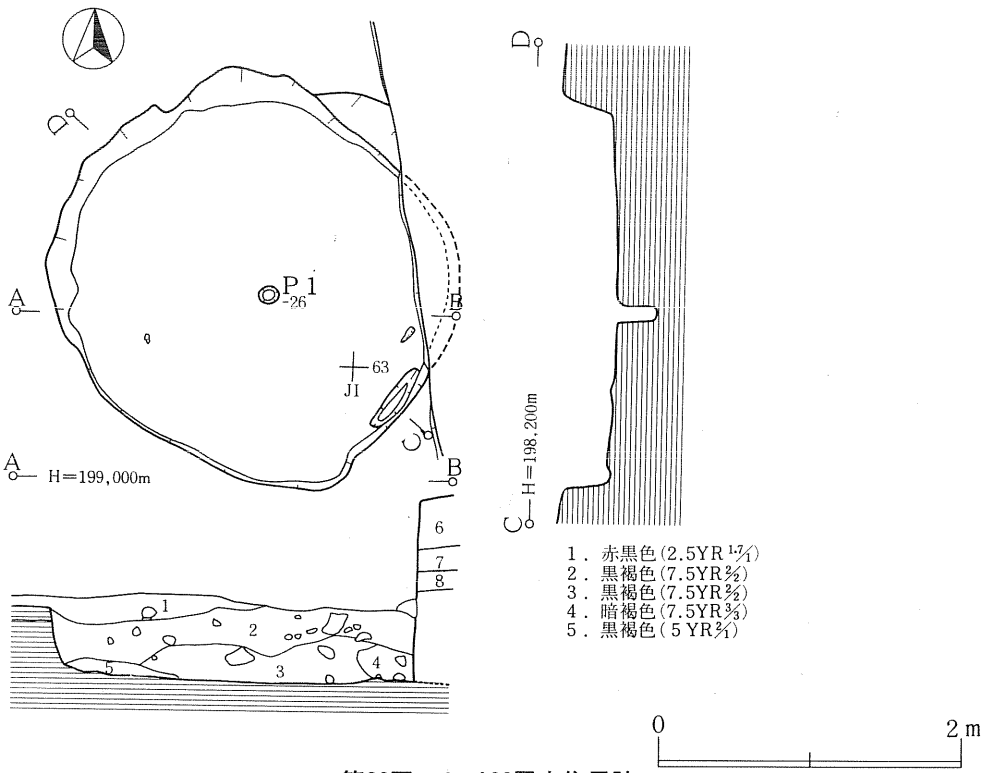
出土遺物　図示できるような遺物は出土していない。

ＳＩ222　（第28図・図版20）

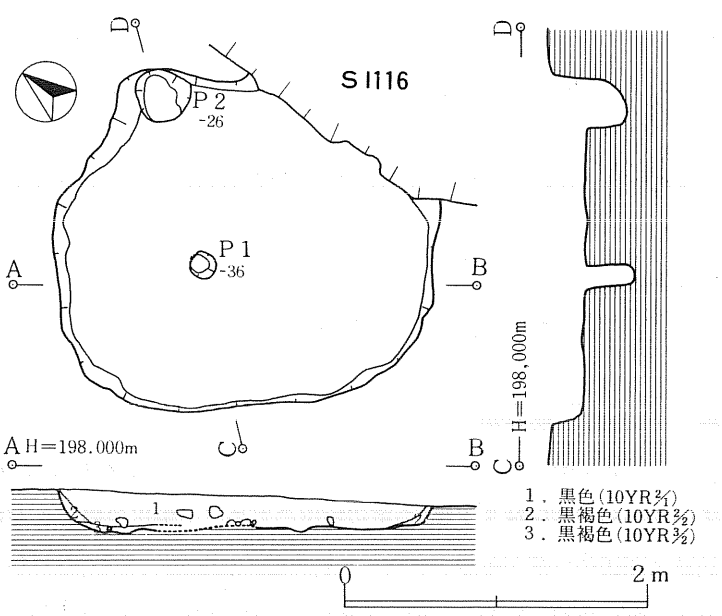
位置・確認状況　ＡＩ区南部ＪＳ74グリッドを中心にして、第Ⅵ層上面で確認された。ＡⅡ区北部からＡⅡ区南東部に集中する竪穴住居群の中の、最も西側に位置する。

形態・規模　北西辺が風倒木痕の影響を受け、他にも攪乱を受けた部分があり、原形を正しく留めてはいないが、3.0ｍ×2.3ｍの隅丸長方形を呈すると考えられる。深さは約20㎝である。推定床面積は、約5.6㎡である。

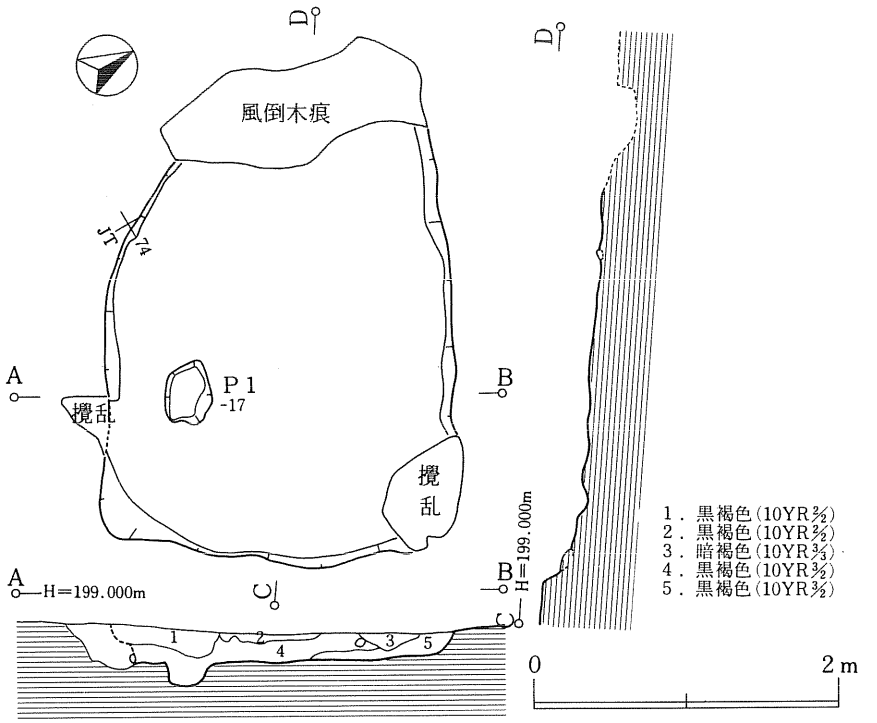
覆土　１〜５層共に周囲からの流入土と考えられる。５層が比較的堅くしまっているだけで、１〜４層は他の住居跡の覆土に比べて軟い。



第26図　SI 168竪穴住居跡



第27図　ＡＩ・Ⅱ区　SI 170竪穴住居跡



第28図　SI 222竪穴住居跡

床・壁　掘り込みが浅いにも拘わらず、段丘礫層まで達しており、小礫の露出が若干見られるものの全体的には平坦でよくしまっている。壁はコーナーが緩いものの、他は急角度で立ち上がる。

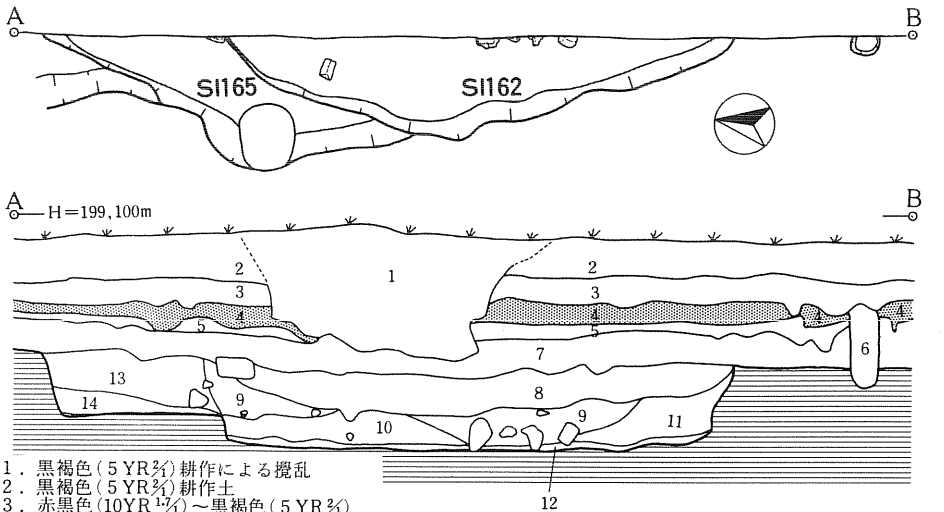
壁溝・柱穴　壁溝は認められず、Ｐ１が主柱穴かと思われるが、中央からずれており確定できない。

炉　明確な炉は認められなかった。

出土遺物　図示できるような遺物は出土していない。

ＳＩ162・165　（第29図・図版20）

位置・確認状況　ＡⅡ区中央東端部、ＪＩ64、65グリッドで検出された２軒の竪穴住居跡である。平安時代の竪穴住居跡ＳＩ101の東辺検出のため、工事用の幅杭まで掘ったところ、竪穴住居跡の西辺の一部が確認された。１軒の竪穴住居跡（ＳＩ162）かと思われたが、精査の結果２軒の重複と判明し、他の１軒にＳＩ165を付した。ＳＩ162がＳＩ165を切っており新しい。



1．黒褐色（５YR2/1）耕作による攪乱
2．黒褐色（５YR2/1）耕作土
3．赤黒色（10YR1.7/1）～黒褐色（５YR2/1）
4．大湯浮石層
5．黒褐色（7.5YR2/2）基本層位の第４層
6．赤黒色（2.5YR1.7/1）と大湯浮石の混土。平安時代の柱穴
7．赤黒色（2.5YR1.7/1）
8．黒褐色（５YR2/1）と黒褐色（7.5YR2/2）の混土
9．黄褐色（10YR5/6）～褐色（10YR4/6）の地山風化軽石と砂利・亜角礫・黒褐色（7.5YR2/2）砂質土の混土
10．黒褐色（7.5YR2/2）
11．黒褐色（7.5YR2/2）
12．黒褐色（7.5YR2/2）
13．黒褐色（10YR5/6）～黒褐色（10YR4/6）
14．黒色（7.5YR2/1）
15．黒褐色（7.5YR2/2）
16．黄褐色（10YR5/6）の地山土。風化軽石に砂・亜角礫が混じる

0　2 m

第29図　SI 162・165竪穴住居跡

形態・規模　ほんの一部を検出したのみでその形態・規模共に不明である。当時の生活面からの深さはＳＩ162が55cm、ＳＩ165が40cmはあったと推定される。

覆土　７～12層がＳＩ162の、13・14層がＳＩ165の覆土である。いずれも住居外からの流入土と考えられるが、９～11層は堅い部分が多く礫も多い。12層はＳＩ162の床面に敷かれた土か。堅くしまっており、わずかに粘性もある。６は平安時代の柱穴である。

床・壁　両住居跡の掘り込みは段丘礫層にまで達しており、わずかに礫の露出も見られるが、床面の状態に影響はなく、平坦で堅い。壁は垂直に立ち上がる。

壁溝・柱穴　炉も含め、調査した範囲内には認められなかった。

出土遺物　遺物は出土しなかった。

(2)　Ｔピット　（第30図、図版21）

円筒状を呈する土坑の、底面中央部に小さなピットを有する遺構で、Ｔピットと呼ばれるものである。ＡⅡ区南端からＳＫＴ159・167の２基が検出されている。２つのＴピットとも、ＡⅡ区からＡⅢ区側に向かって上昇する斜面に構築されており、掘り込みは段丘礫層まで達している。ＳＫＴ159は口径1.6～1.7m、底径約0.8mの円形を呈し、深さは約1.0mで、底面中央部

に深さ15cmの小ピットを有している。ＳＫＴ167は口径約1.1ｍ、底径0.8〜0.9ｍの円形を呈し、深さは約0.9ｍで、底面中央部に径約20cm、深さ55cmのピットを有している。底面は平坦で比較的堅くしまっており、ピットには、しまりのない軟らかい土が入っている。なお、ＡⅢ区からＡⅣ区・Ｓ57調査区・Ｃ区にかけての上位関上面からは、溝状を呈するＴピットが多数検出されているにも拘わらず、下位関上面であるＡＩ・Ⅱ区からはそれが全く検出されていない。両者の比高差は２〜４ｍあるものの、いずれも平坦面である。ＡⅢ〜Ｃ区を猟場とした人々は、隣接するＡＩ・Ⅱ区を猟場としなかったものか、あるいはＡＩ・Ⅱ区に集落を形成した人々がＡⅢ〜Ｃ区に溝状のＴピットを設置した可能性も考えられないわけではない。

(3)　フラスコ状ピット　（第30図、図版21）

ＳＫＦ157が１基だけ、ＡⅡ区最南端ＪＯ47・48グリッドから検出されている。口径0.8〜0.9ｍ、底径1.0〜1.3ｍの略円形を呈し、深さは65cmである。断面形は整ったフラスコ状ではなく、袋状を呈する。底面は平坦ではなく、中央部がやや高くなっている。本フラスコ状ピットの南東側から第86図240の土器が出土しており、ほぼ後期前葉頃のものと見られる。

(4)　土坑

ＡＩ・Ⅱ区は広範な調査区ではあるが、土坑は10基しか検出されていない。10基の土坑は、特に集中する傾向はなく調査区全体に散在する。以下、個々の土坑について述べる。

ＳＫ240　（第30図）

ＡＩ区中央部北端ＫＪ87・88グリッドで検出された。北側半分は調査範囲外である。口径あるいは短径が70cm、深さ35cmの円形もしくは楕円形を呈すると思われる。この部分はＡＩ区の捨場の西端に当たり、土器等の取り上げ中に確認された。覆土上位から39図28の土器が出土している。28は、口縁部と胴部は接合しないが、図のように復原した。平口縁と考えられ、口唇部は丸味がなく、尖っている。口縁部には羽状縄文、胴部には縦位の撚糸文が施されている。胎土には繊維を多く含み、器外面は他の土器と大差ないが、内面は繊維痕が見えて、凹凸が著しい。わずかにみがきの施された部分も残っており、表面が剥落したものと考えられる。また、底部の胎土には幅６〜７㎜、長さ1.5cm、厚さ５㎜前後の植物片でも入っていたと思われ、この部分が内面から盲孔状になっており、そこを外面からたたいて穿孔している。

ＳＫ239　（第30図、図版21）

ＡＩ区中央北部ＫＪ85・86グリッドで検出された。径70cmの不整円形を呈し、深さは10〜15cmである。覆土上位西寄りから第39図29の土器が出土している。29は胴部上半以上を欠いている。残った胴部には付加条の羽状縄文が施されている。薄手の土器であるが、器内面の剥落が著しい。

ＳＫ208　（第31図）

ＡＩ区南部中央ＫＡ・ＫＢ75グリッドＶ層上位で、黒色土の広がりが見られたことから確認された。当初、他の土坑に比べ深く覆土の状況などからも、小さな竪穴住居跡かと考えられたものである。北側が風倒木痕によって破壊されているため判然としないが、東西２ｍ、南北1.7ｍの円形に近い楕円形を呈する。掘り込みは段丘礫層まで達しており、深さ60㎝を測る。底面はしまりがありやや堅いものの、段丘礫の路頭が目立つ。土層の４・10〜12層は風倒木痕に伴うものである。北西壁際に小ピット（深さ12㎝）があるが、性格は不明である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ236　（第31図）

ＡＩ区南東端部ＪＯ75グリッド第Ⅵ層上面で確認された。径1.2〜1.3ｍの不整円形を呈し、深さ10㎝である。覆土は黒褐色土で明瞭なプランをなすが、底面は堅さしまりともに無い。東側約２ｍにＳＩ212・215がある。遺物は出土しなかった。

ＳＫ220　（第31図）

ＡＩ区南端ＪＱ72グリッド第Ⅵ層上面で確認された。径75〜85㎝の円形を呈し、深さ20㎝を測る。壁・底面ともしっかりとした土坑である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ214　（第30図）

ＡＩ区南端中央部ＪＴ71グリッド第Ⅶ層地山上面で確認された。長径1.5ｍ、0.9ｍの楕円形を呈し、底面は中央部に向かって緩くくぼんで、ここでの深さが15㎝である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ179　（第31図）

ＡⅡ区の北部ＪＯ68・69グリッドで、礫群ＳＱ153除去後に確認された。口径約１ｍの円形、深さ30㎝を測る。壁・底面ともにしっかりしてしている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ180　（第31図）

ＳＫ179の南側1.5ｍにある。口径60〜80㎝の不整円形を呈する柱穴様の小さな土坑である。深さは10〜20㎝で、底面北側が深い。遺物は出土していない。

ＳＫ178　（第31図）

ＳＩ152を囲む礫群ＳＱ153除去後に、その下に浅く不定形な土坑状のプランがいくつか見えたが、精査の結果それらは、壁・底面ともに凹凸が著しく、人為的な遺構とすることができなかった。そのような中にあって本土坑は、比較的良好なものである。長径1.5ｍ、短径1.0ｍの楕円形を呈し、深さは10〜20㎝を測る。本土坑の周囲は地山風化軽石層がうすく、段丘礫層がⅥ層下に見られる場合がある。ＳＫ178の壁・底面ともに段丘礫が路頭しており、特に底面は凹凸が著しい。覆土中にも砂利・礫が多く含まれている。遺物は出土していない。

ＳＫ166　（第31図）

ＡⅡ区中央部ＪＮ59グリッドで確認された。ＡⅡ区中央部からは、縄文時代後期前葉の土器が半～１個体分まとめて捨てられているという状況が、数ケ所で見られたが、本土坑の上部にも第86図236の土器が小破片となって散布していた。この土器片とやや集中する亜角礫を除去したところ、その下部から本土坑が検出されたものである。土坑は、径約1.3ｍの不整楕円形プランを呈し、深さ18㎝である。確認面と覆土の２層に焼土粒子が認められた。他の覆土には木炭が比較的多く混入しており、堅さ・しまりともに弱い。底面のしまりは良好であるが、小さな段丘礫の路頭が見えている。覆土中から遺物は出土していない。

ＳＫ161

ＡⅡ区北西部の、上位関上面の崖面下方で確認された。掘り込みが浅く、東辺は検出できなかったが、径2.2～2.5ｍの略円形プランを呈するものと考えられる。この規模は、一本主柱穴の竪穴住居跡に匹敵する大きさであるが、柱穴・炉等はなく、また床面も堅くないことから土坑とした。わずかに残る西壁は斜めに立ち上がっている。遺物は出土しておらず、周囲からは、縄文時代前期と後期の土器が少量出土している。

(5)　焼土遺構

確実な焼土遺構はＳＮ209・217の２基がＡＩ区東部から検出されている。２基以外にも焼土粒子が散布する部分は数箇所に見られた。

ＳＮ209はＪＯ75グリッド第Ⅴ層下部で確認された。径約20㎝の円形に良好な焼土がある。最も赤化の著しい中央部分の厚さは５㎝である。縄文時代前期の所産と考えられる。

ＳＮ217はＪＴ79グリッド第Ⅴ層中位で確認された。風倒木痕に伴う黒色土の上に、東西1.2ｍ、南北0.5ｍの範囲で焼土粒子の散布が見られ、その中の５ケ所に径10～20㎝の良く焼けた焼土（厚さ３～５㎝）が分布している。縄文時代前期の土器が近くに同じレベルで散布するので、同期のものと考えられる。

(6)　土器埋設遺構（第32図、図版21）

ＡＩ区中央部から北部にかけて、完形～半完形の土器が正立あるいは倒立の状態で５基検出された。ＳＲ221（ＫＢ82グリッド）・225・226（ＫＦ80）・232（ＫＧ82）・238（ＫＨ82）とした土器埋設遺構である。ＳＲ221は捨場の中にあるが、他の４基は捨場の南西外側に当たり、比較的遺物の少ない部分である。従ってこれらは、人為的に埋設されたものと考えられるが、埋設された土器の下端が第Ⅴ層下部かⅥ層中にあるため、その掘り方などは確認できなかった。また、土器の上面や中及び周囲からは、特にこれらに伴うと考えられるような施設や遺物は検出されなかった。正立して底部まで残存しているのはＳＲ226１基だけで、ＳＲ225は正立だが底部を欠き、ＳＲ221・232・238は倒立で底部あるいは胴部下半以下を欠いている。しか

し、ＳＲ226を除くこれらの埋設土器が、底部あるいは胴部下半以下を欠いた状態で埋設されたものか、単に接合できなかっただけけなのかは判然としない（ただし、ＳＲ225は検出時に底部は存在しなかった。）。以下、埋設された土器について述べるが、これらはＳ57調査区南西部及びＣ区から検出された土器埋設遺構とは、埋設された土器が比較的小型である点で異っている。

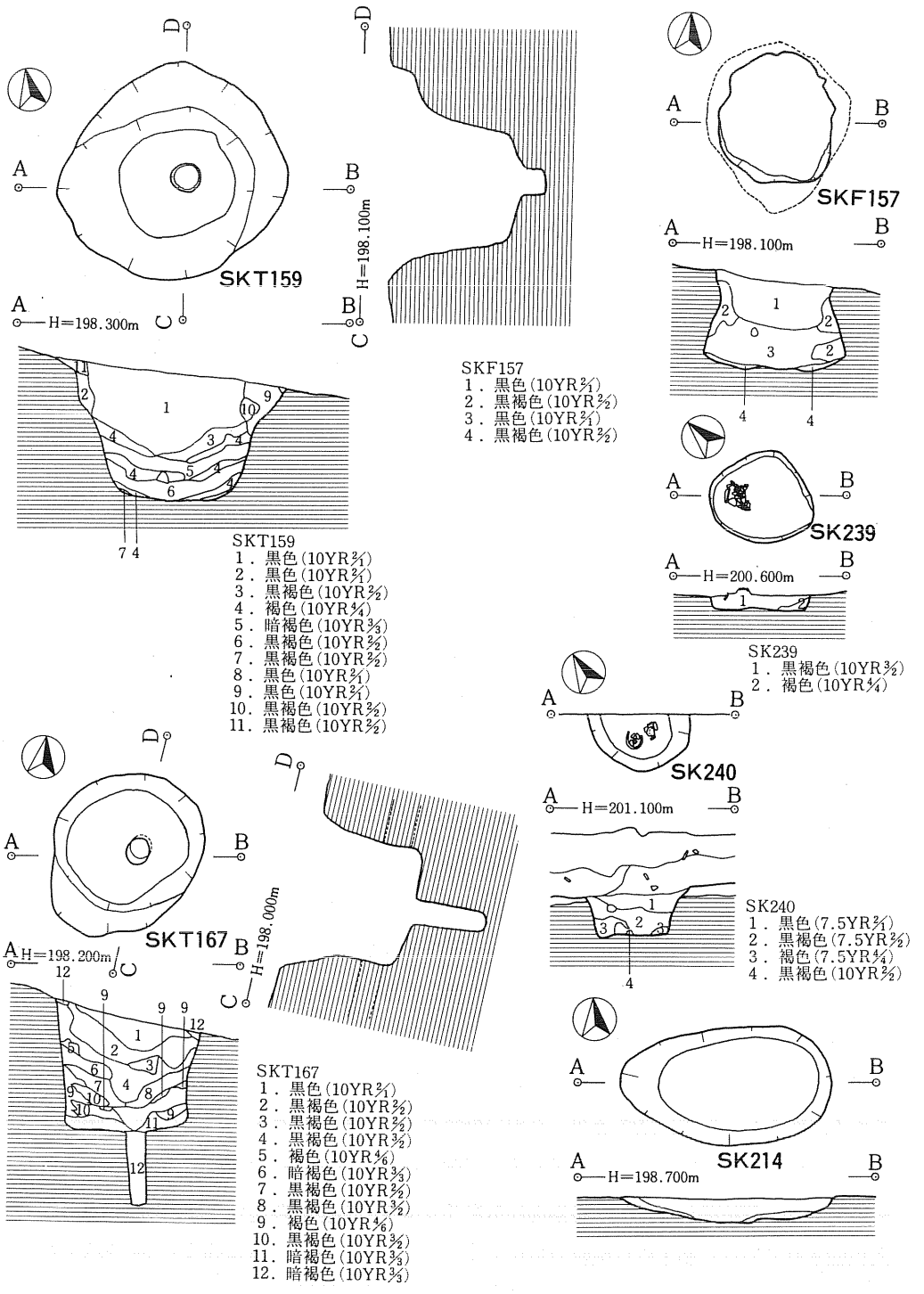
40図30がＳＲ221に埋設されていた土器である。胴部下半を欠いている。器形は、外傾して立ち上がった胴部が、すぼまることなく外反する口縁部に至るもので、４つの頂部を持つ波状口縁を呈する口縁部にはシンプルな縄文の側面圧痕文が施され、その下端には低い隆帯が貼付されている。刺突列の施された隆帯の上下には、各１条の側面圧痕文が付されている。胴部には、多軸絡条体の縦位回転文のみが施されている。欠損している胴部下半以外は、全て接合されており、それほど厚くない割りには重く感じる土器である。内面の調整は、口縁部が横方向、それ以下が縦方向にみがかれ、滑らかである。外面胴部下半が二次的火熱によって赤化している。器内外面の所々と、使用時に生じた割れヒビに煤状炭化物が付着している。焼成は良好である。

40図31がＳＲ226の土器で、ほぼ完形に復原できた。底部からわずかに外傾して立ち上がった胴部は、ほぼ垂直になり、若干外反する口縁部に至る。口縁部から胴部には、同一原体による羽状縄文が施され、頸部に低い隆帯が付されている。隆帯上の刺突列は、先端が丸くなったヘラ状の工具で施されたもので、正立させた土器に向かってやや下方から刺突している。器外面は、ＳＲ221の土器と同様のていねいなみがきが施されている。胎土には繊維を多く含み、器外面胴部下半は二次的火熱によって赤化し、若干脆くなっている。割れヒビに煤状炭化物の付着が認められる。

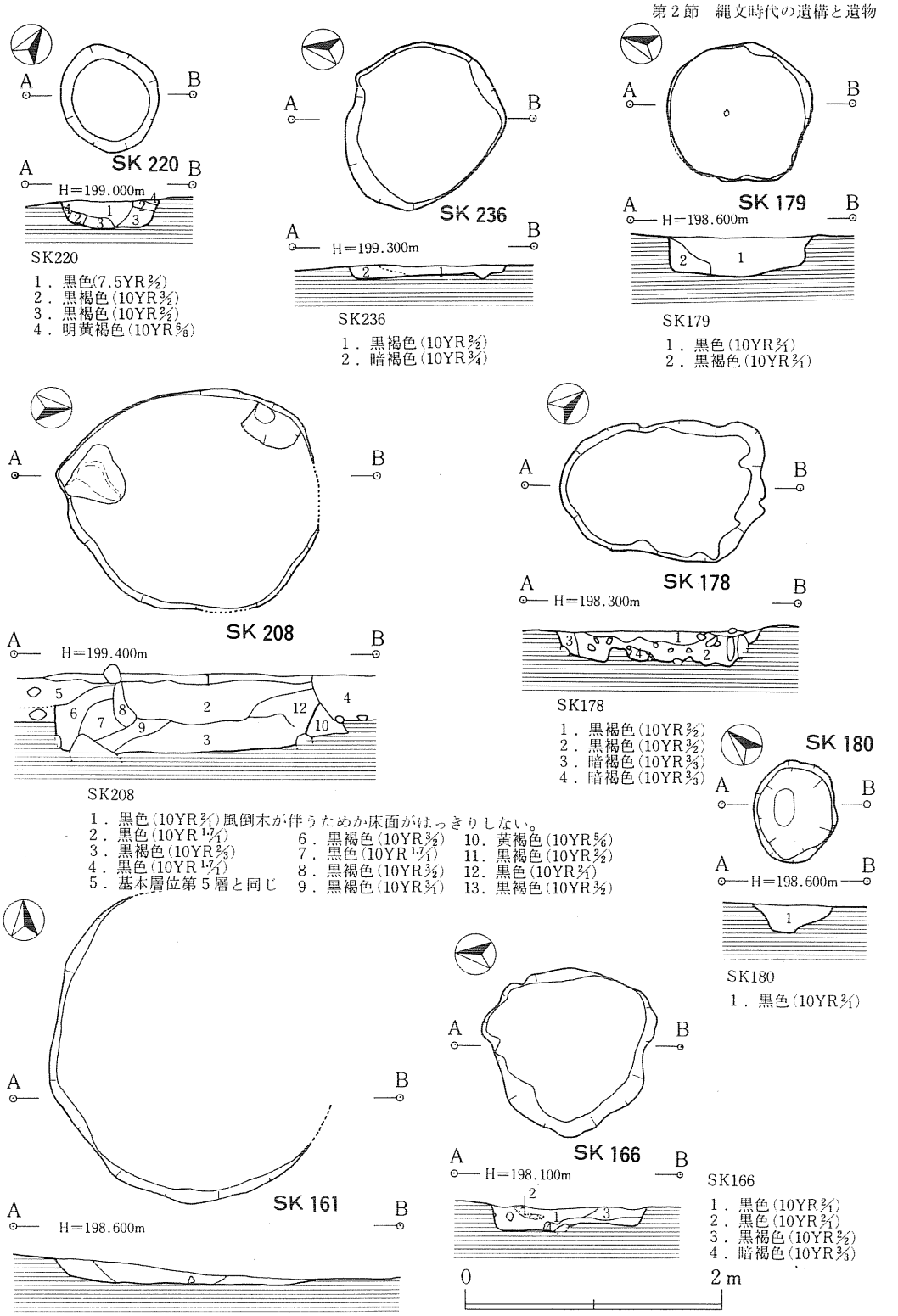
40図32がＳＲ225の土器で、底部と胴部上半以上を欠いている。胎土には繊維を含むが、全体的に薄手に作られており、軽い。胴部上半には羽状縄文、中位以下には縦位の撚糸文が施されている。また、器外面胴部中位以下は、二次的火熱によって、表面が剥落している部分があり、割れヒビには煤状炭化物が入りこんでいる。

40図33がＳＲ238の土器で、底部と胴部の一部を欠くが、ほぼ完全に復原できた小型の土器である。底部から外傾に立ち上がった短い胴部がそのまま、ほとんど外反しない口縁部に至るもので、極めてゆるい波状口縁を呈する。口縁部には、無文面に施された縄文の側面圧痕文が４条めぐり、波頂部からは３条の側面圧痕が垂下している。胴部には複節の原体を用いた撚糸文が施されている。胎土には繊維の他に若干目立つ程度に砂粒が含まれている。焼成は普通で、内面は平滑であるが、みがきはそれ程顕著ではない。

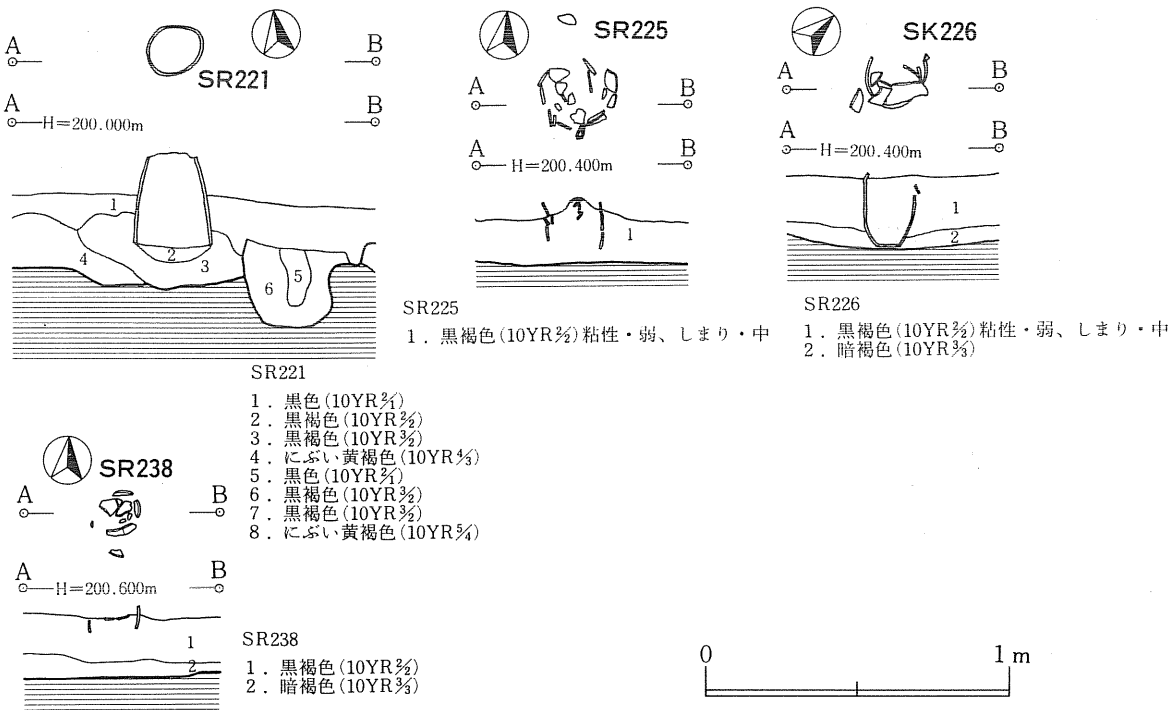
ＳＲ232の土器は破片が少なく、復原することができなかった。44図121・122が口縁部から



第30図　ＡⅠ・Ⅱ区　SKT 159・167Tピット、
SKF 157フラスコ状ピット、SK 239・240・214土坑

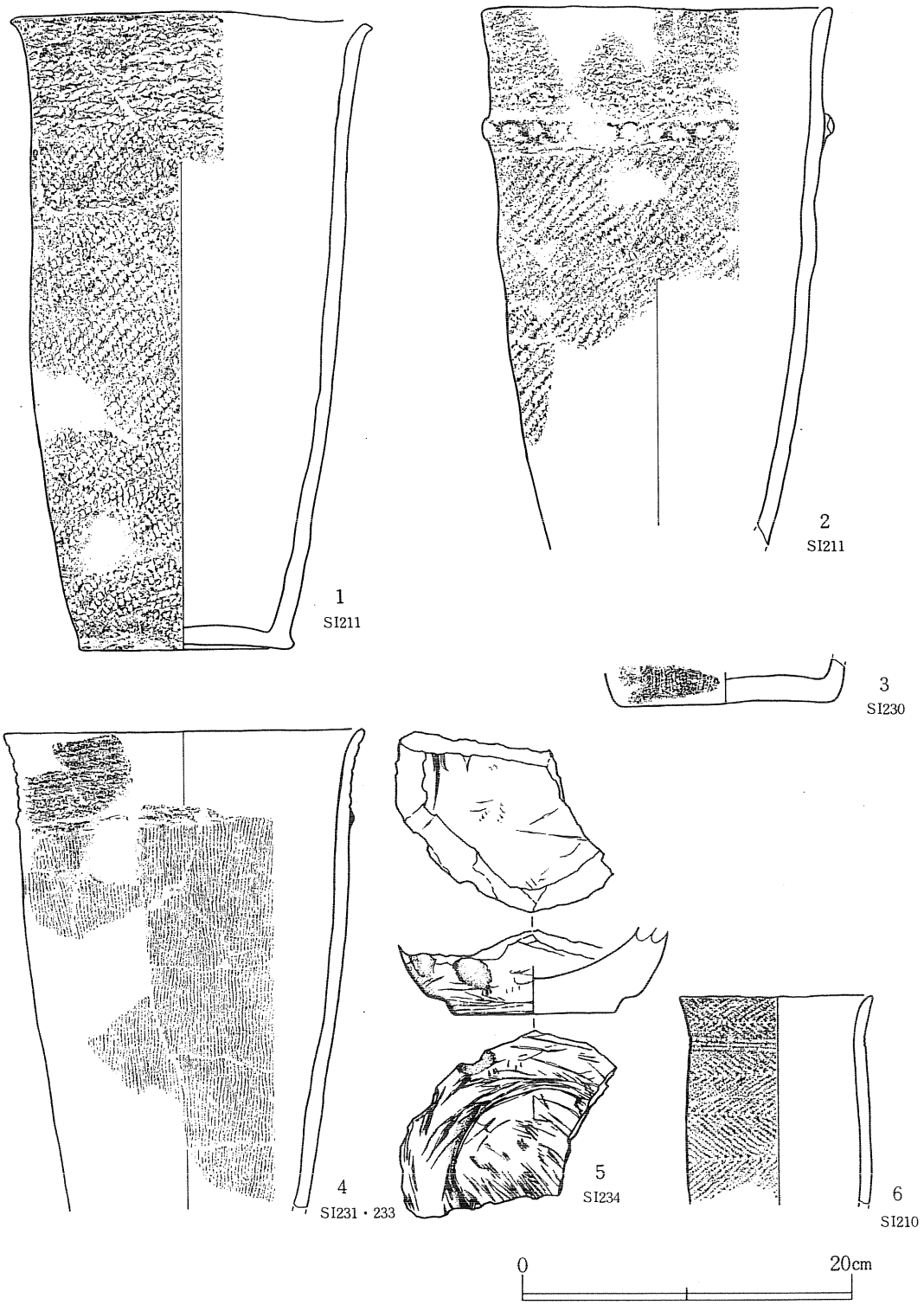


第31図　SK 220・236・179・208・178・180・161・166土坑



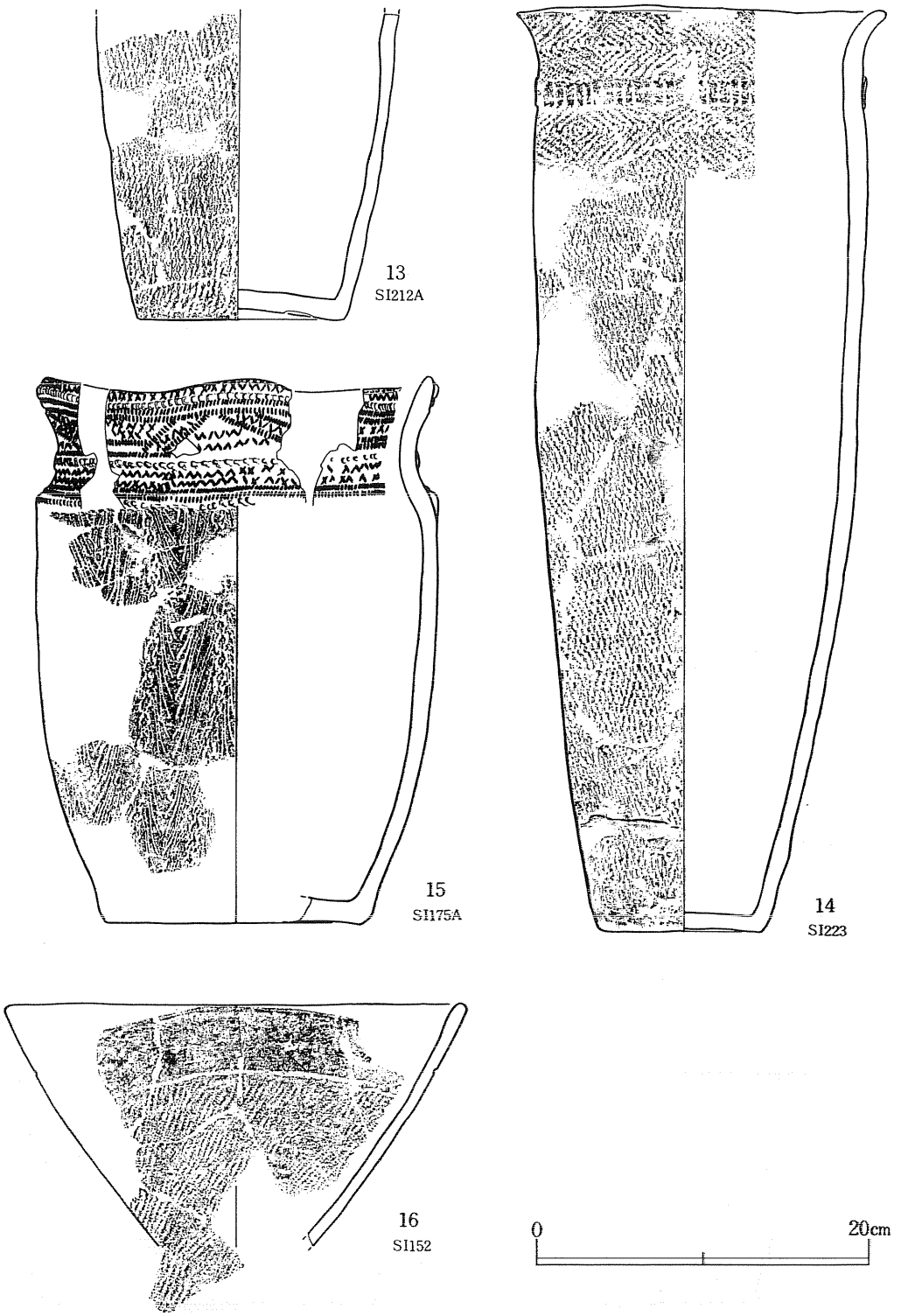
第32図　SR 221・225・226・238土器埋設遺構

胴部上半の破片である。口径約15cmの筒状を呈するものと考えられ、平口縁であろう。口縁部の上下端には、縄文側面圧痕文が2条ずつ施されているが、その間を埋めている横走する文様が側面圧痕文なのか、胴部と同じ撚糸文なのか、摩滅が著しく判然としない。前者であるとすれば、口縁部上下端に施された側面圧痕文とは原体が異なる。胎土には繊維を多く含むが薄手の土器である。

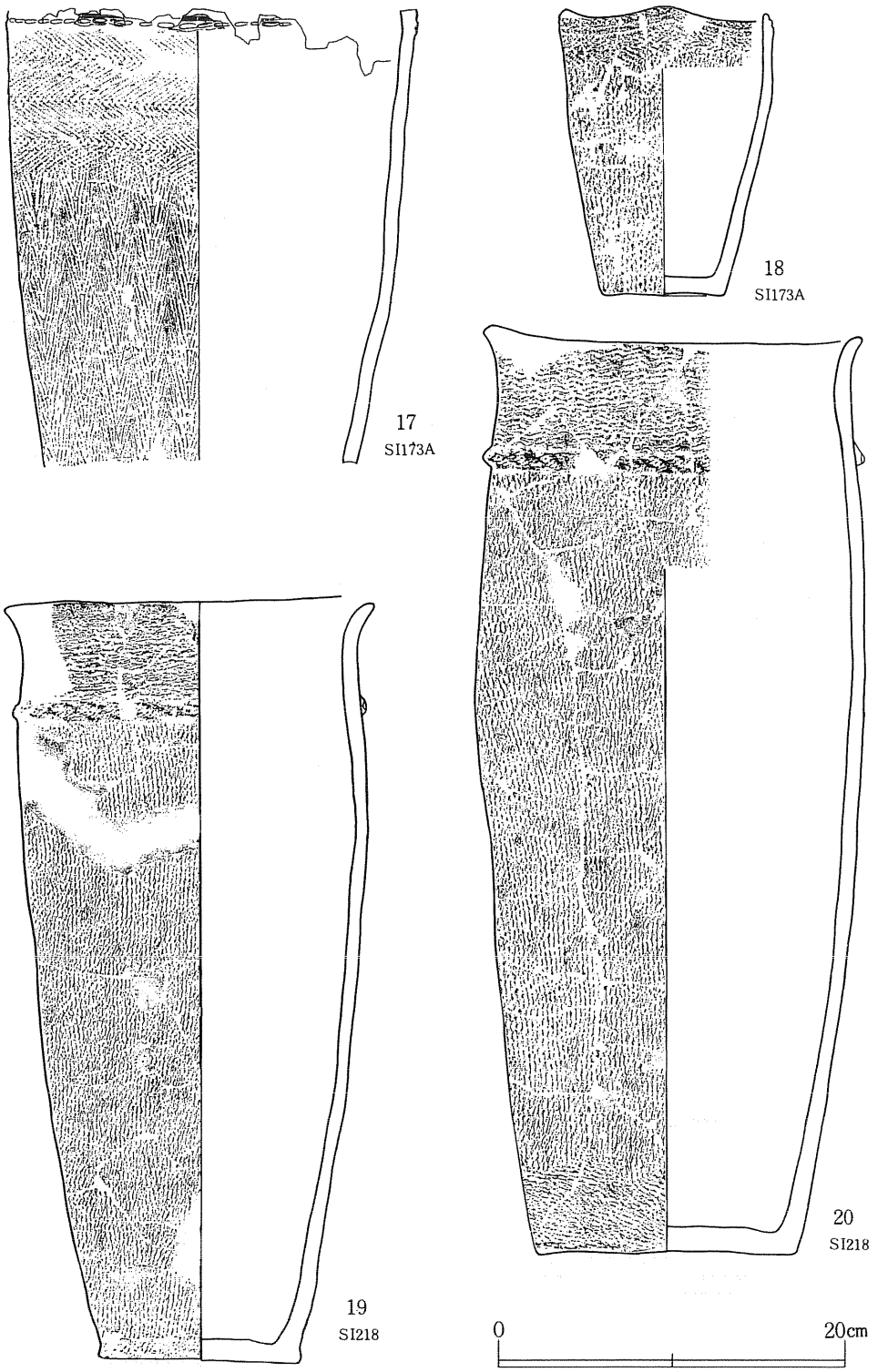


第33図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（１）・土器（１）　SI 211・231・233・234・210
（５は石製で縮尺½）

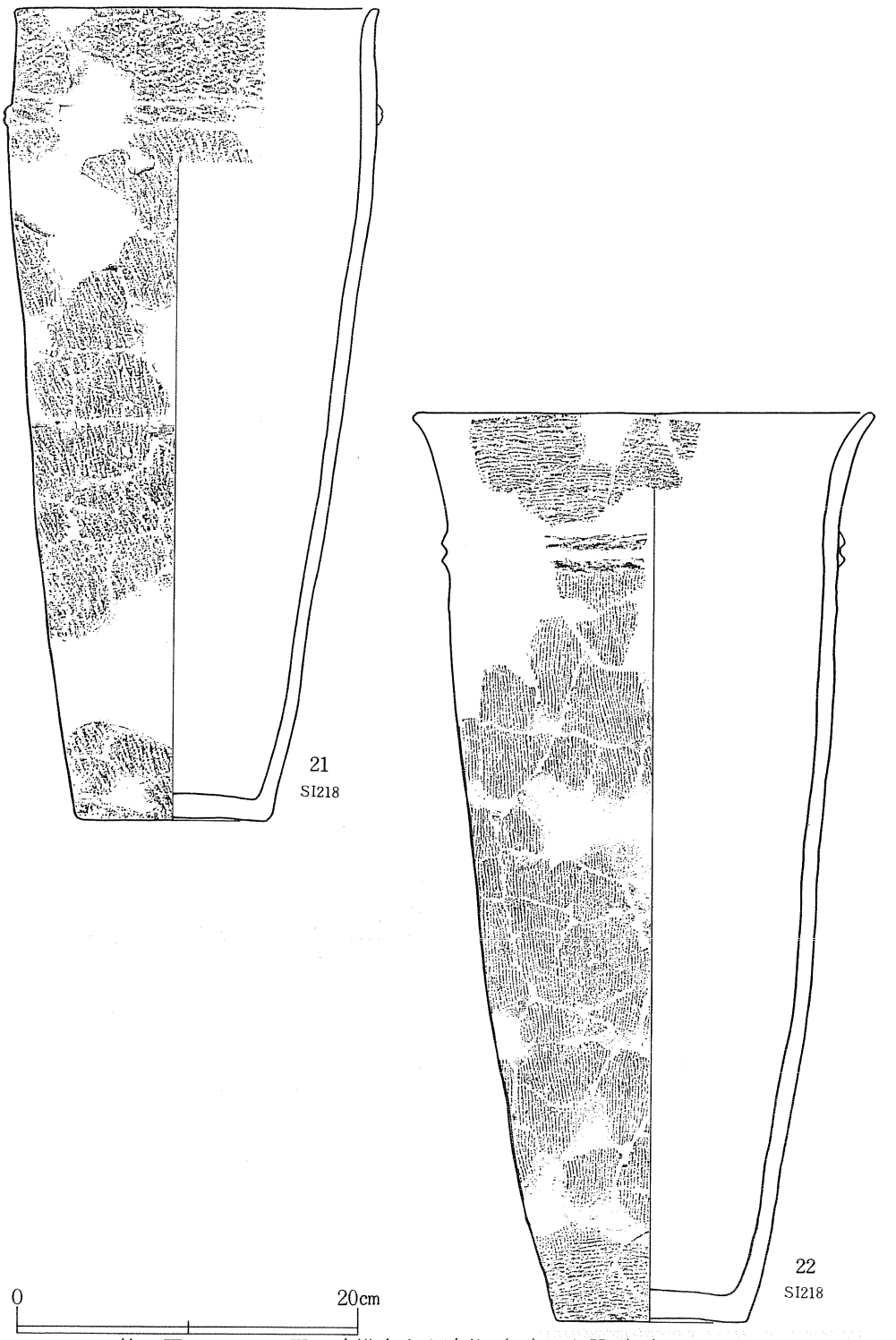
第34図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（２）・土器（２）　SI 212



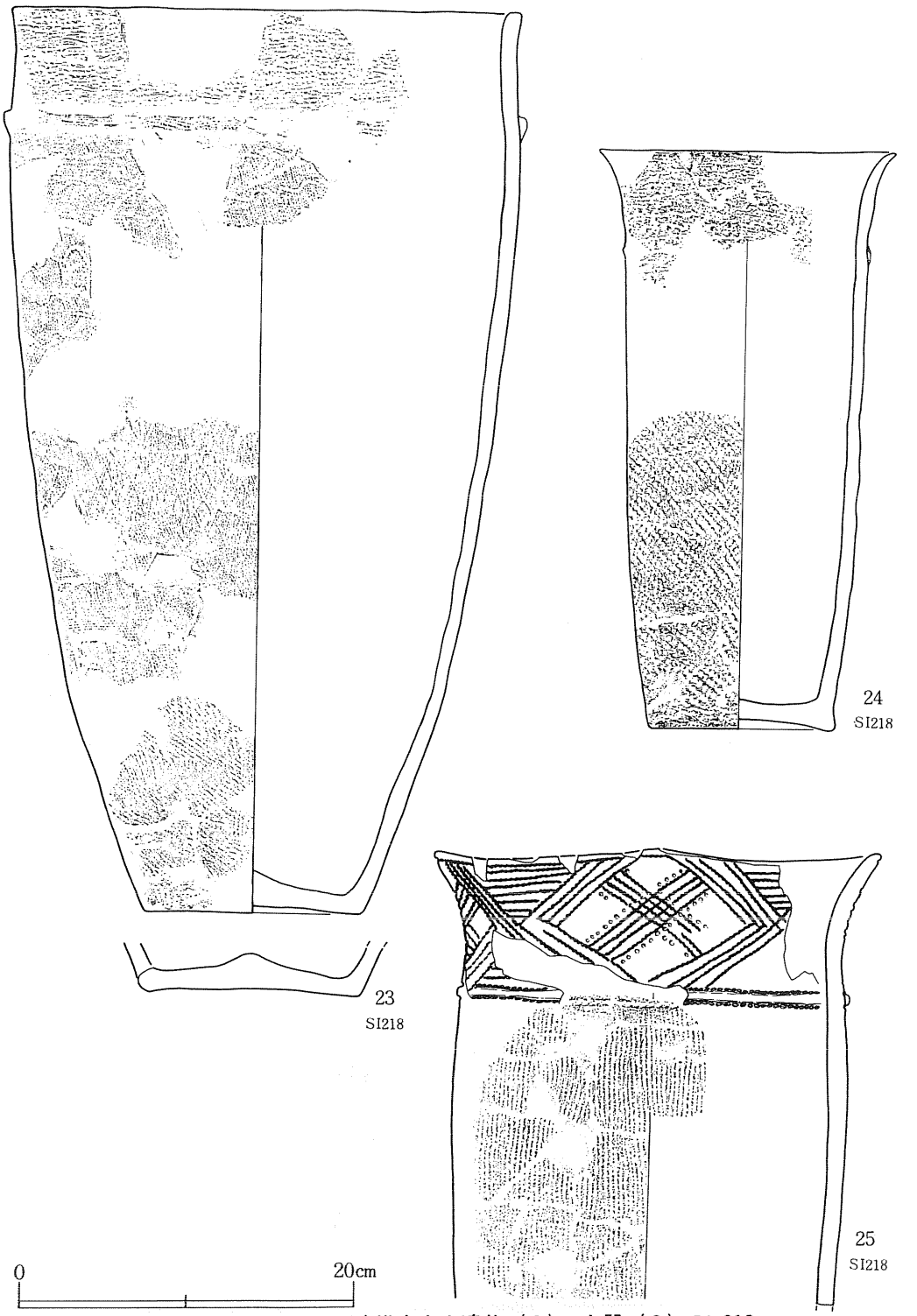
第35図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（３）・土器（３）SI 212・223・175・152



第36図　AⅠ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（4）・土器（4）SI 173・218

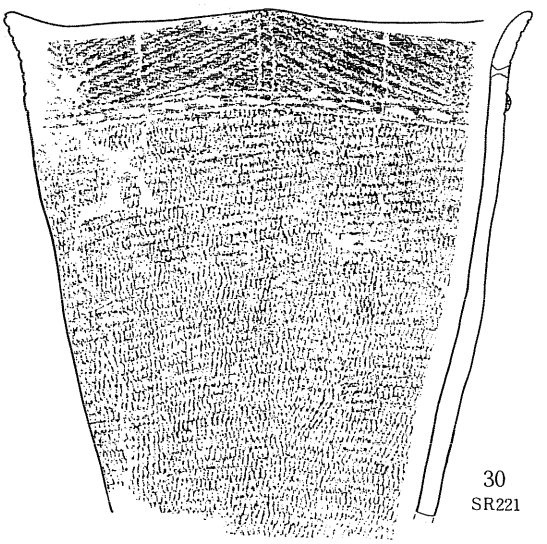


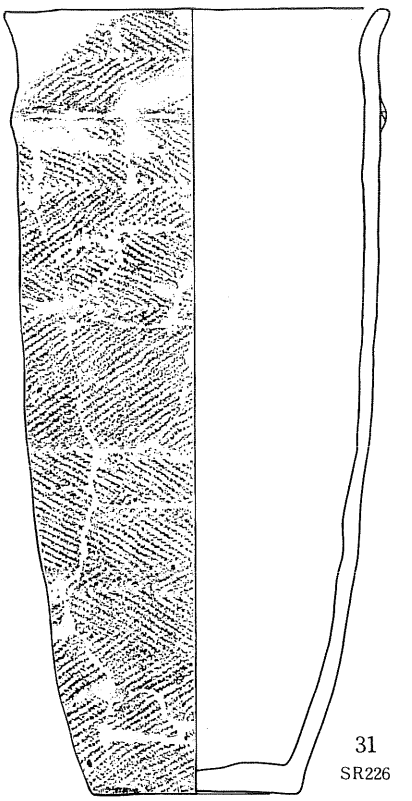
第37図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（５）・土器（５）SI 218

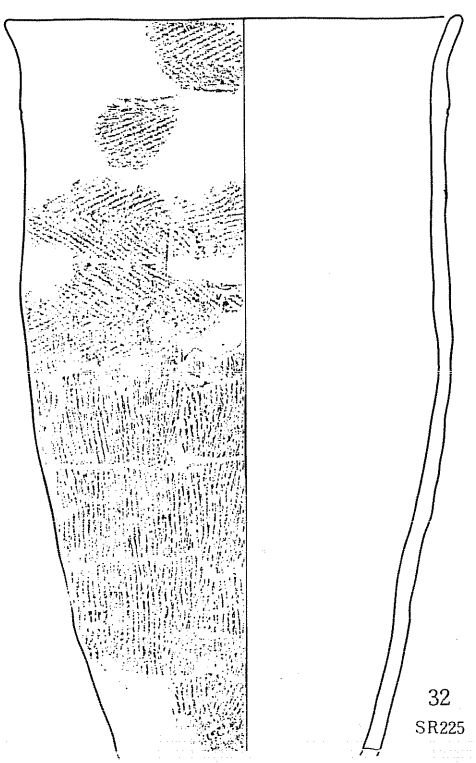


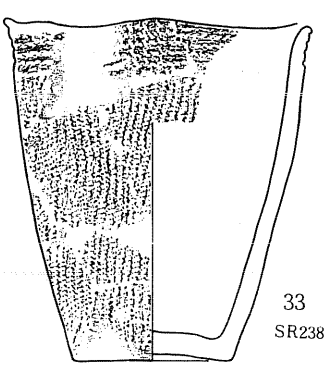
第38図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（６）・土器（６）SI 218

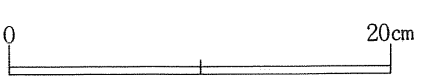
第39図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（７）・土器（７）SI 228・SK 240・239



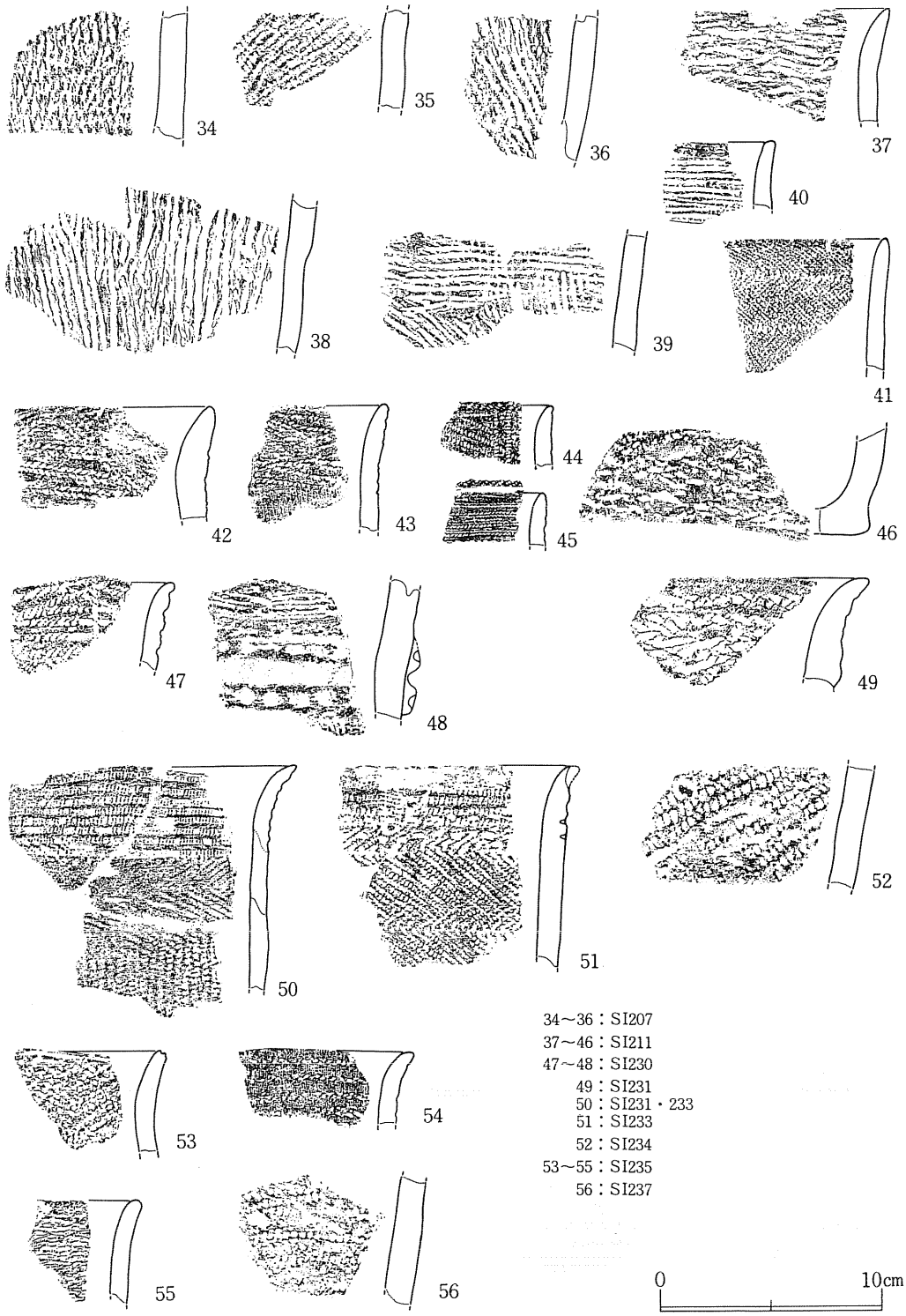




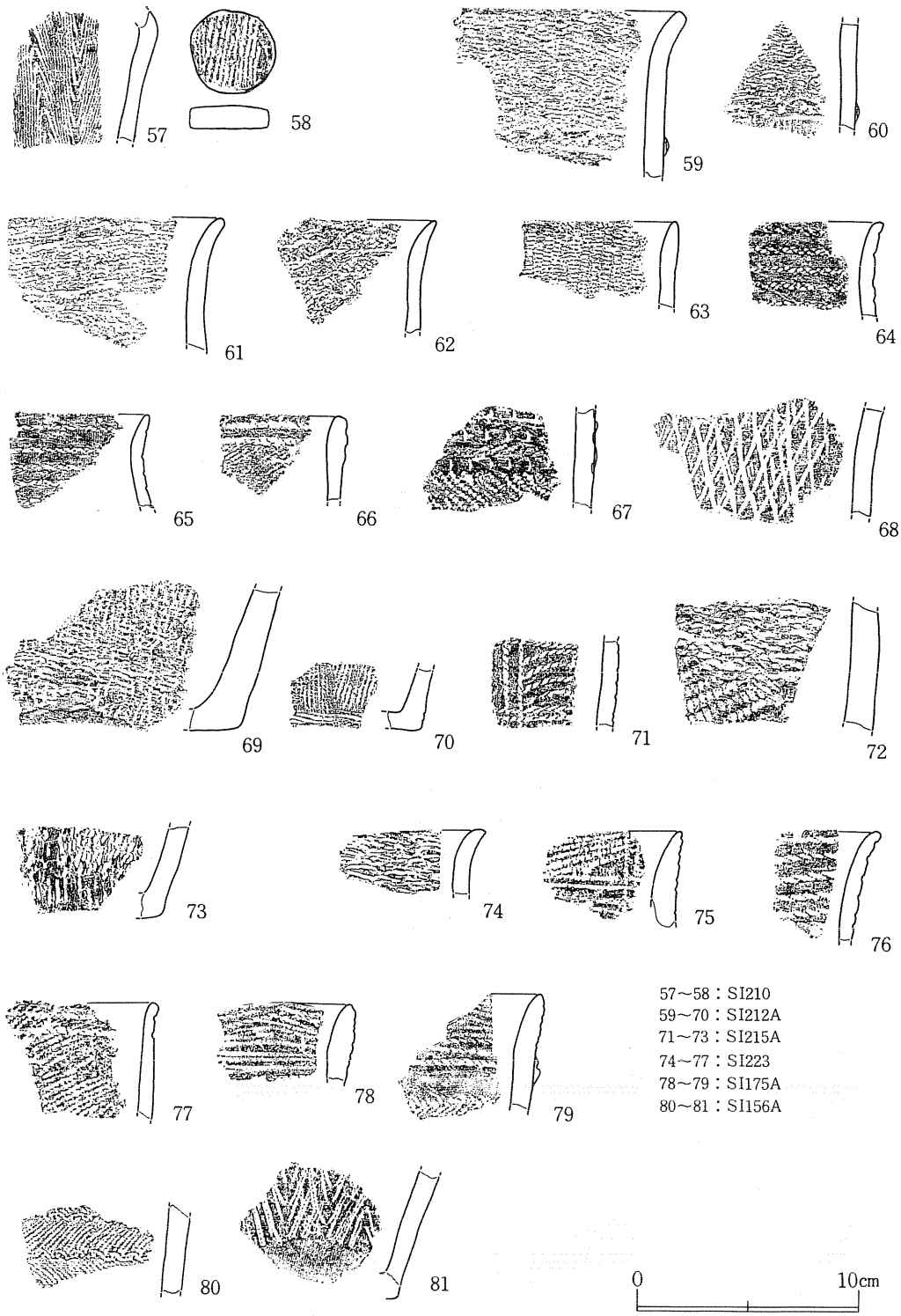




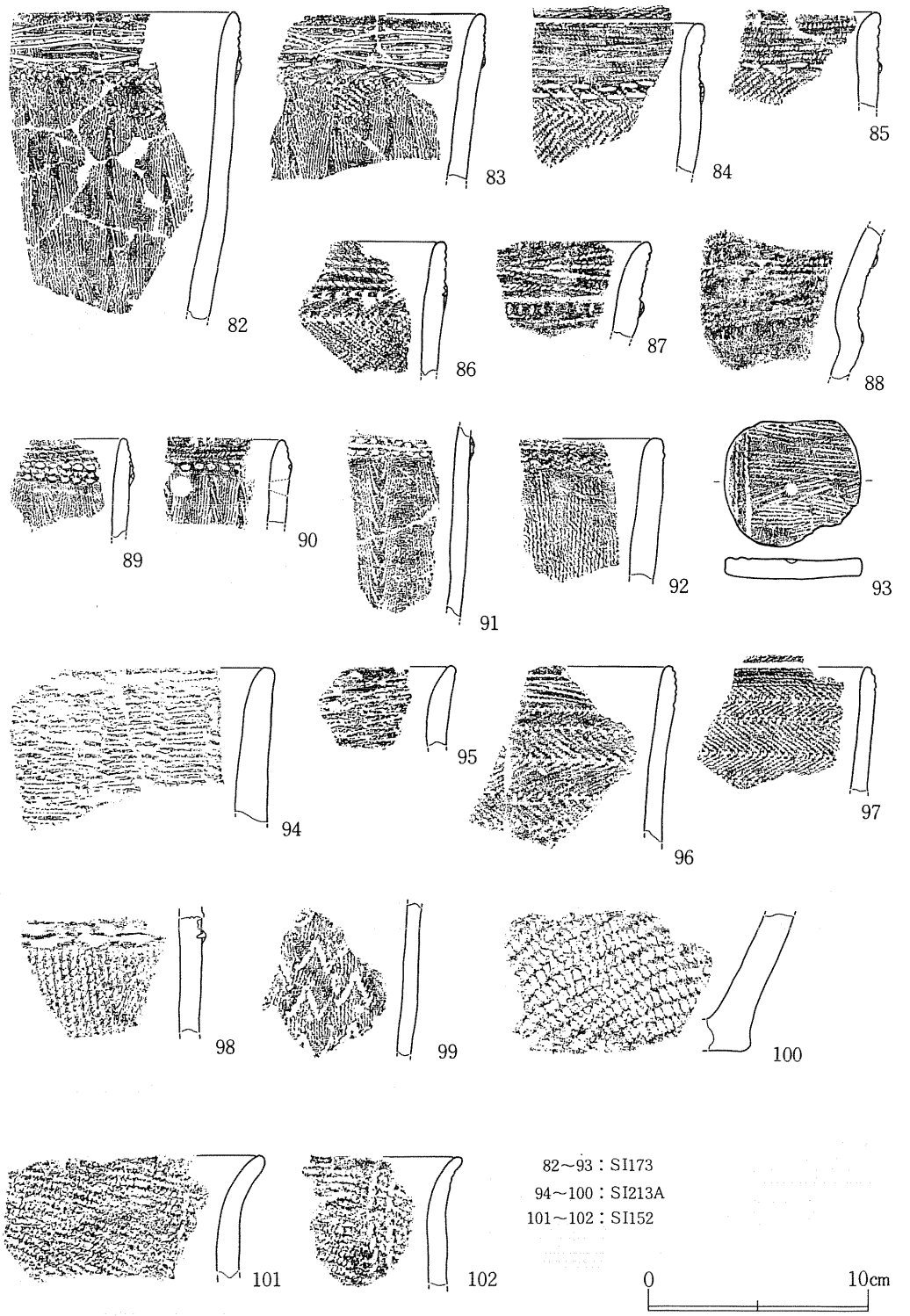
第40図　AⅠ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（8）・土器（8）SR 221・226・225・238



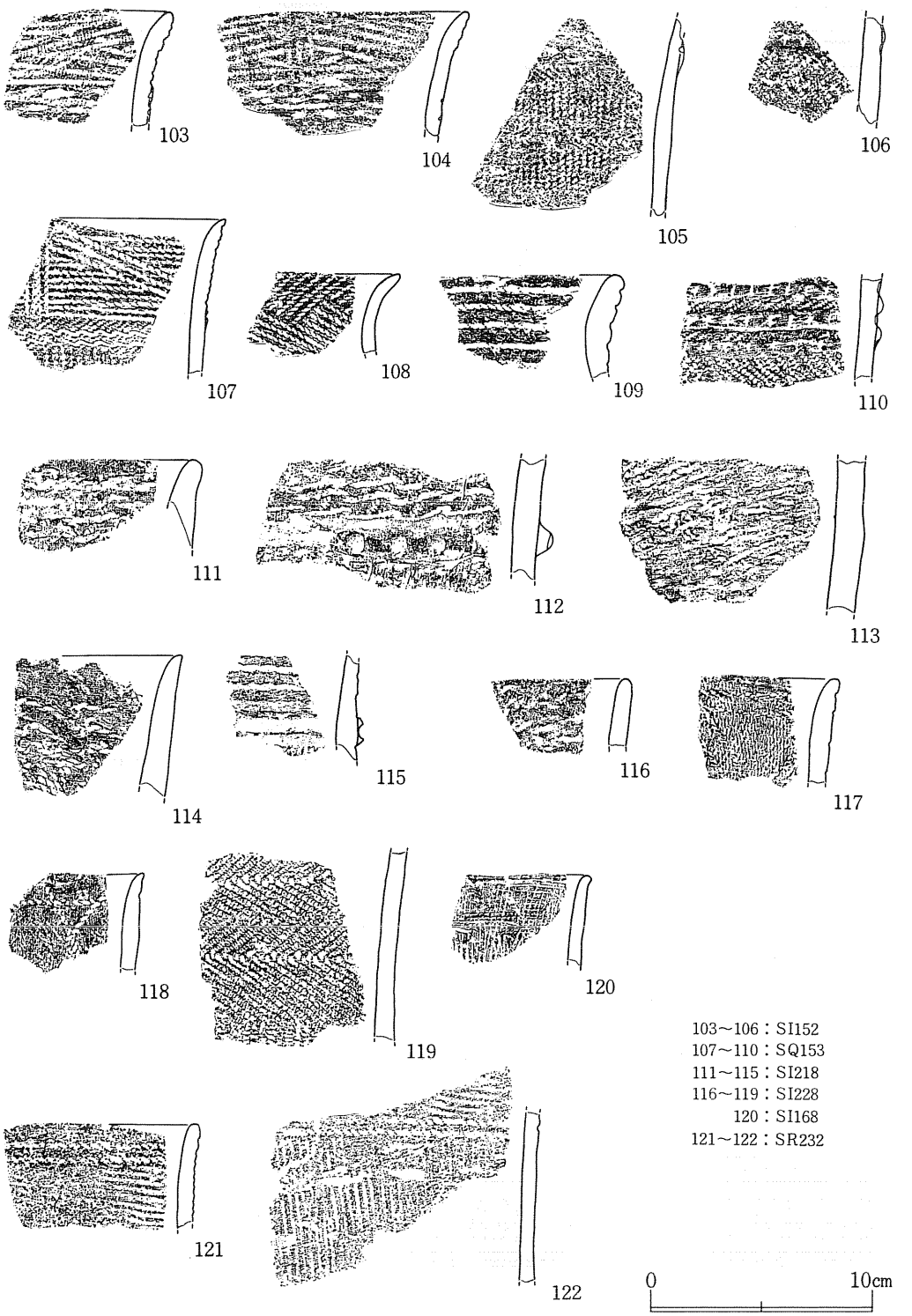
第41図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（９）・土器（９）



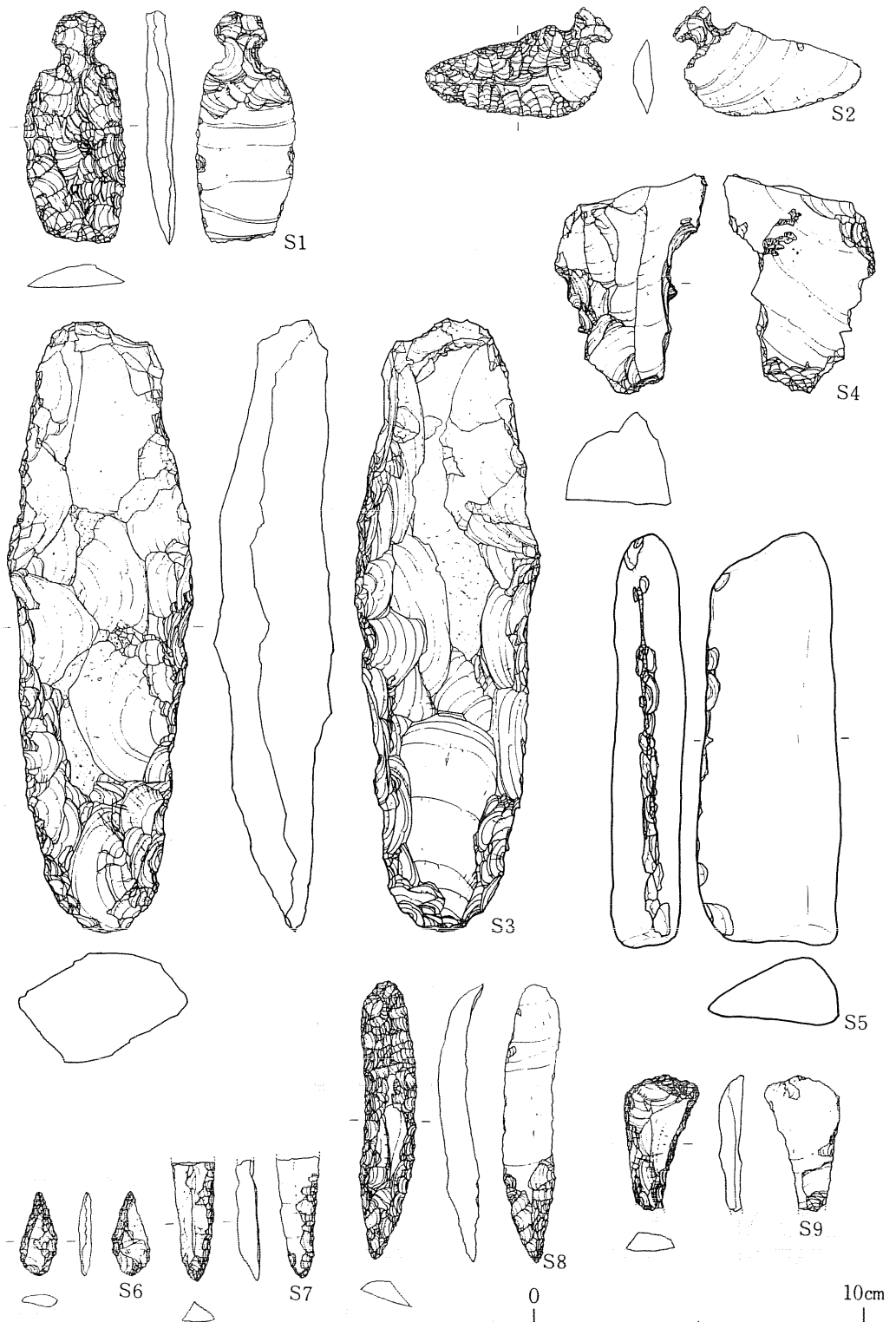
第42図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（10）・土器（10）



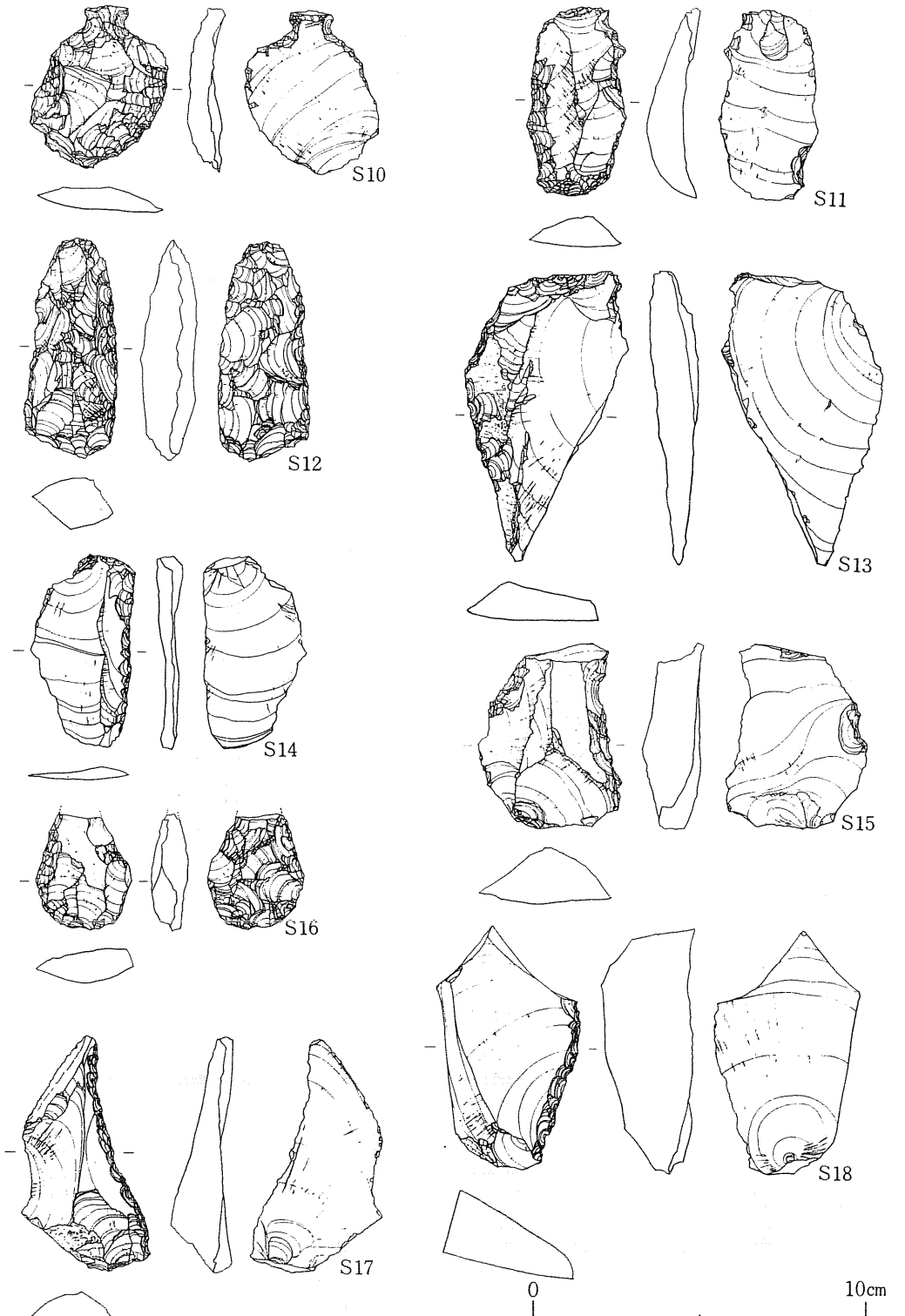
第43図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（11）・土器（11）



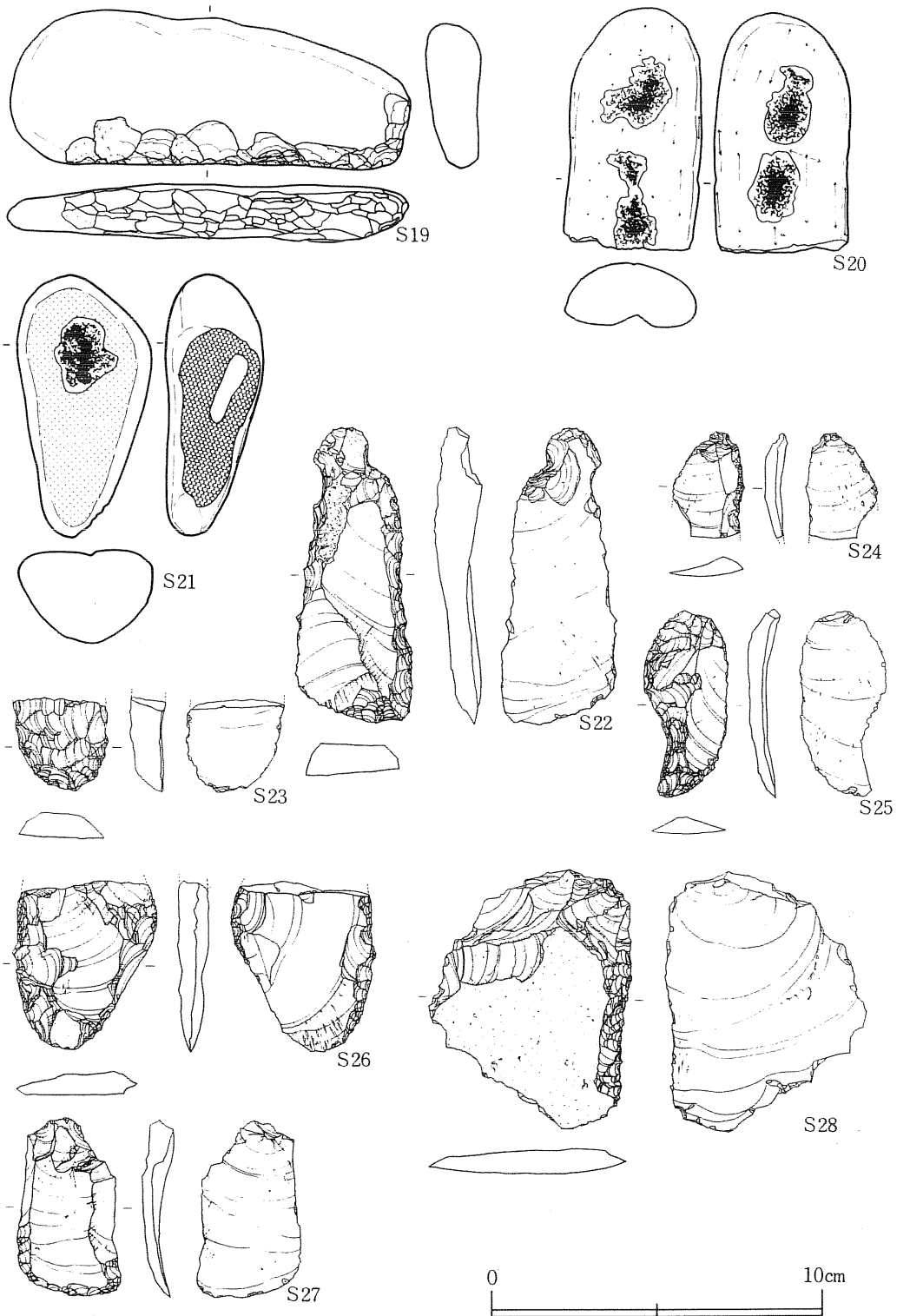
第44図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（12）・土器（12）



第45図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（13）・石器（１）　１～５：SI207　６～９：SI211（Ｓ５は縮尺½）

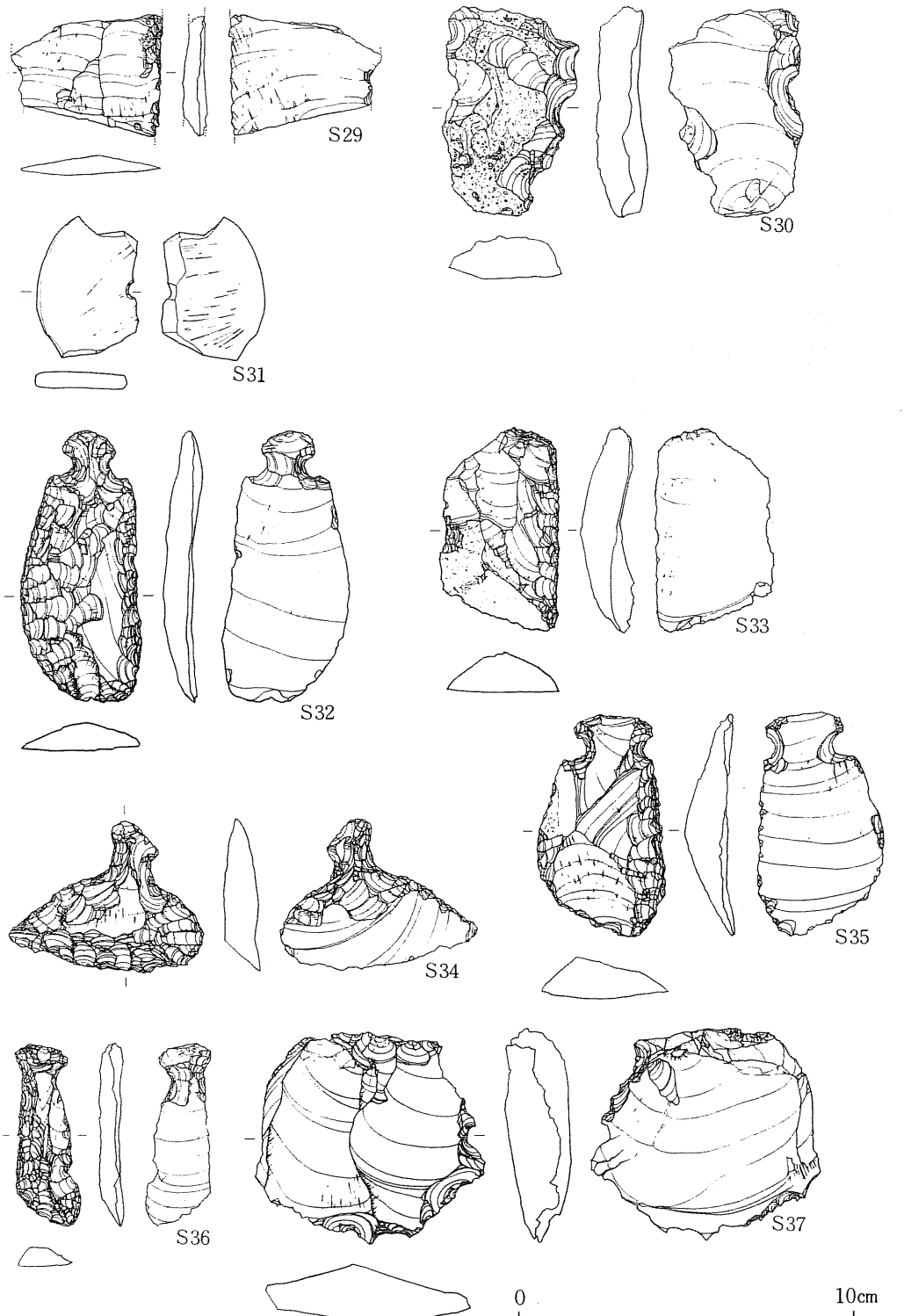


第46図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（14）・石器（２）　10～16：SI211　17・18：SI205

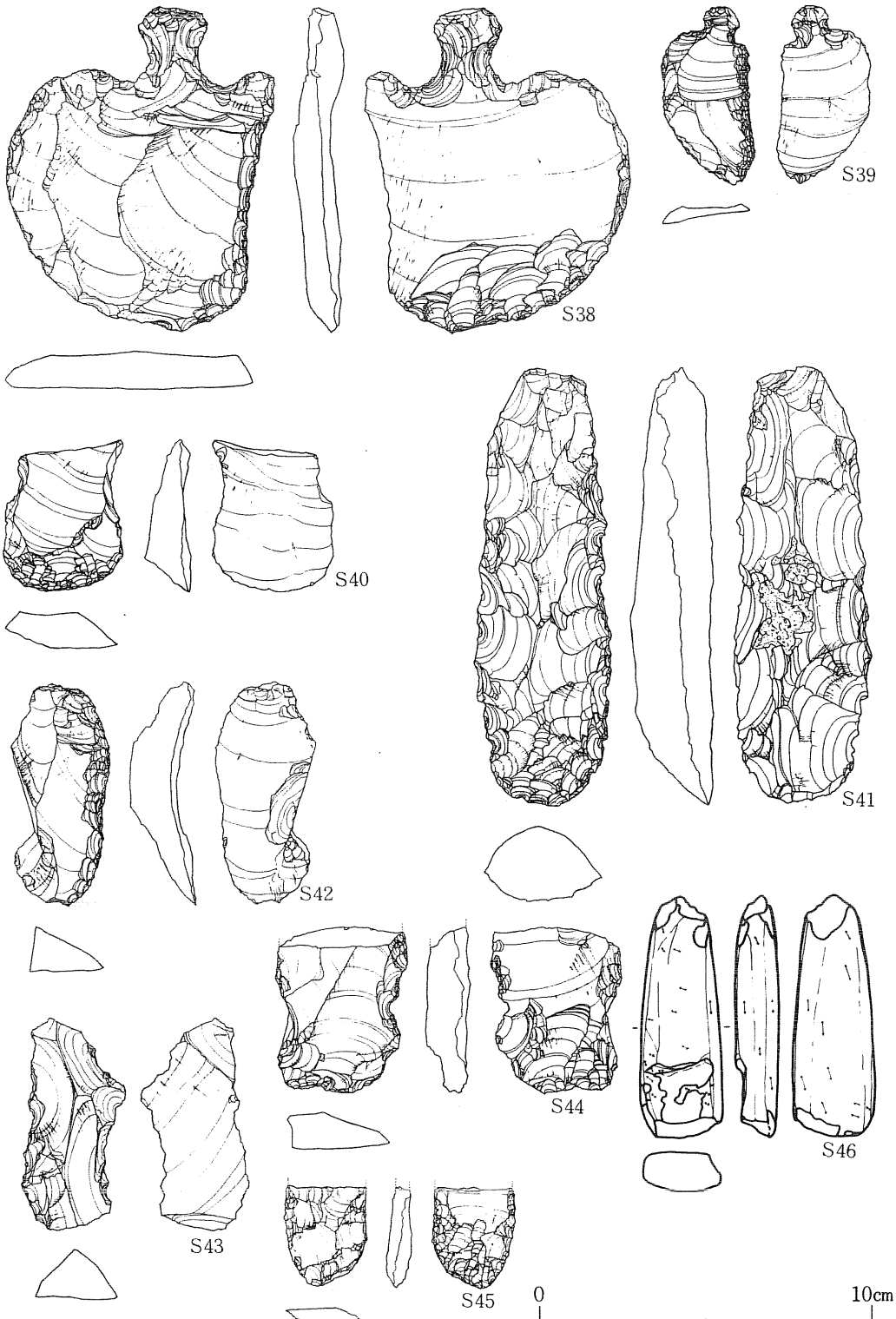


第47図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（15）・石器（３）　19～21：SI205　22～28：SI231・233

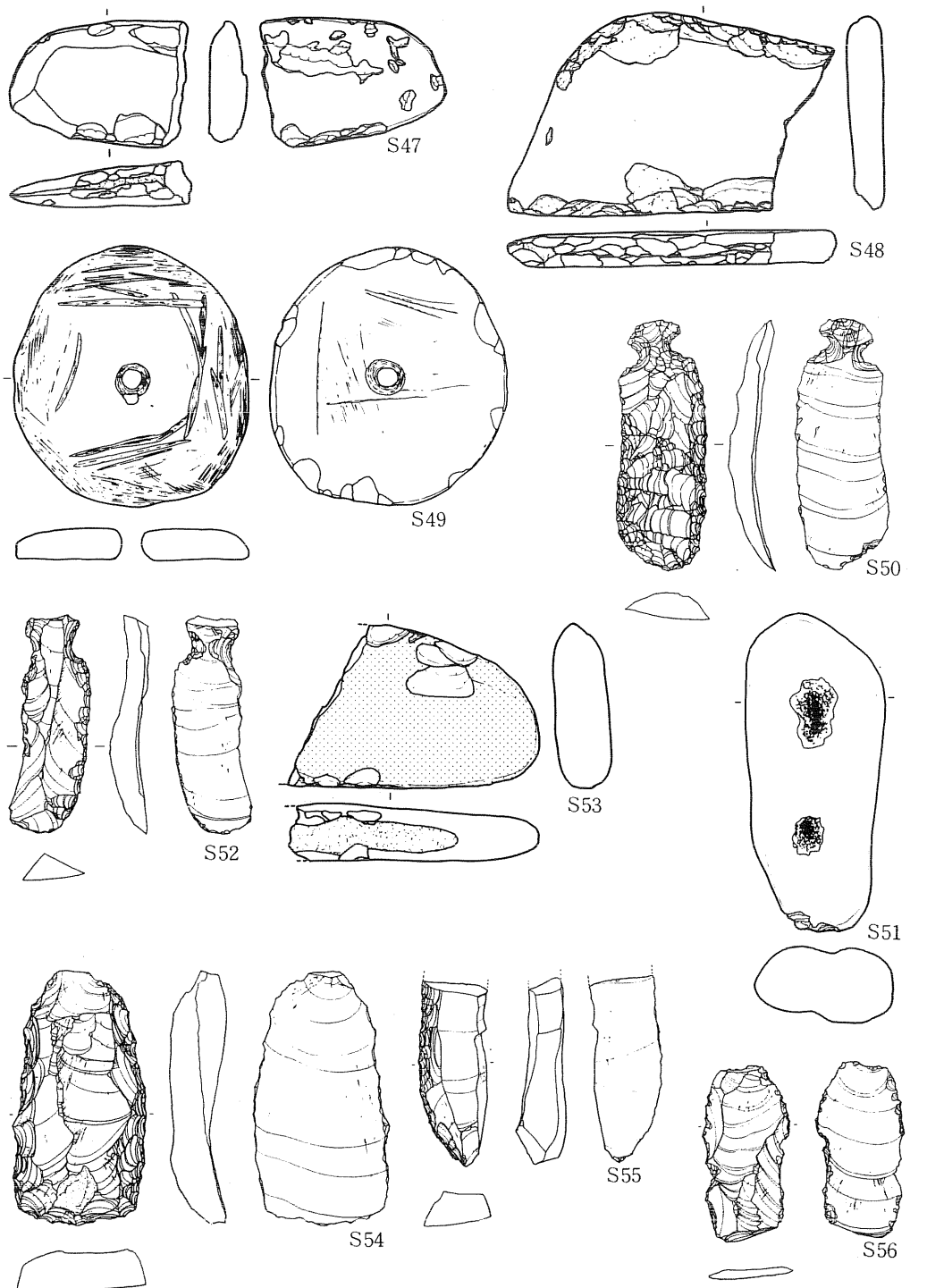
（19～21は縮尺1/3）



第48図　AⅠ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（16）・石器（4）　29～31：SI231・233　32、33：SI234　34～37：SI210

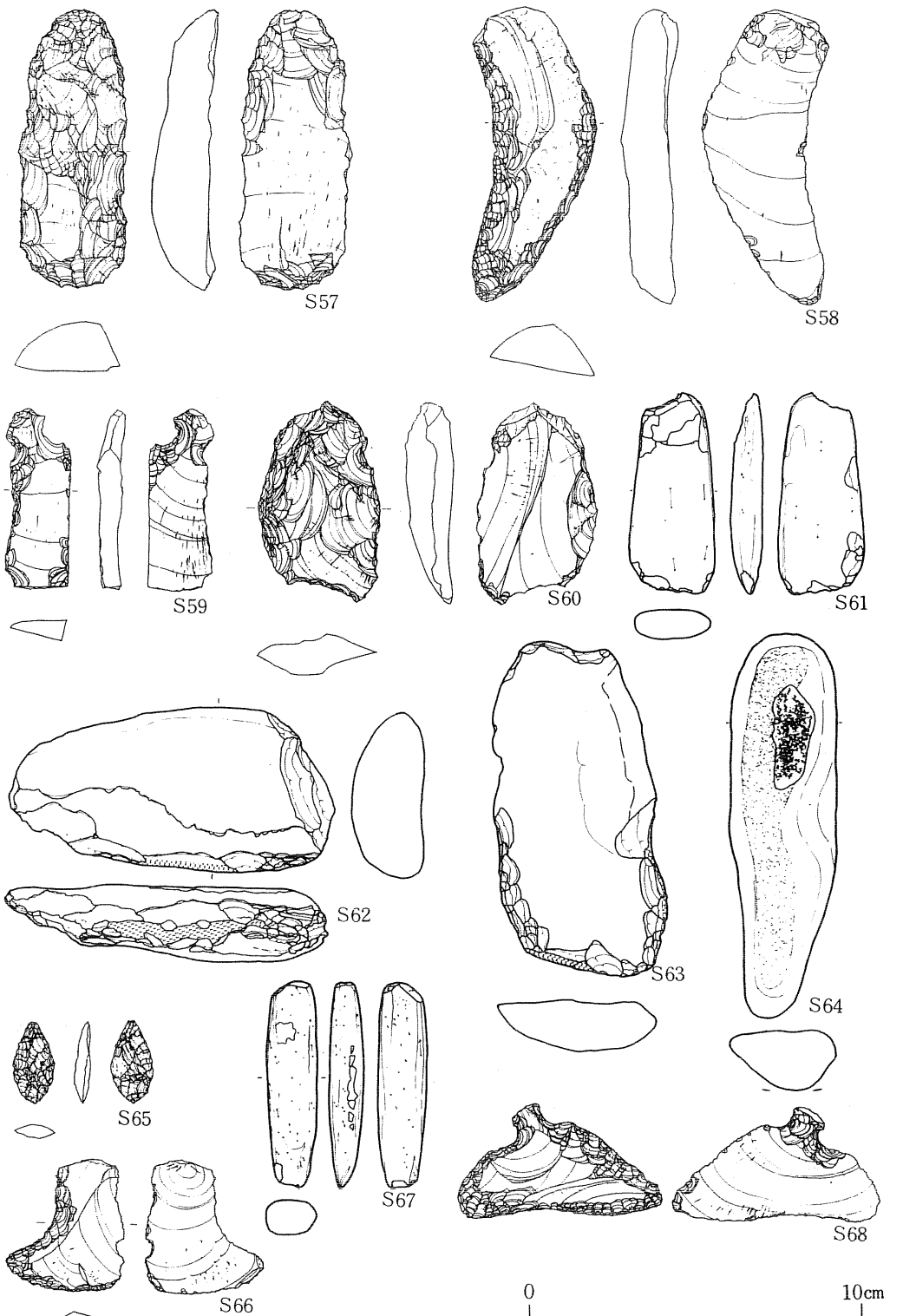


第49図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（17）・石器（５）　38～46：SI212A（S46は縮尺1/3）



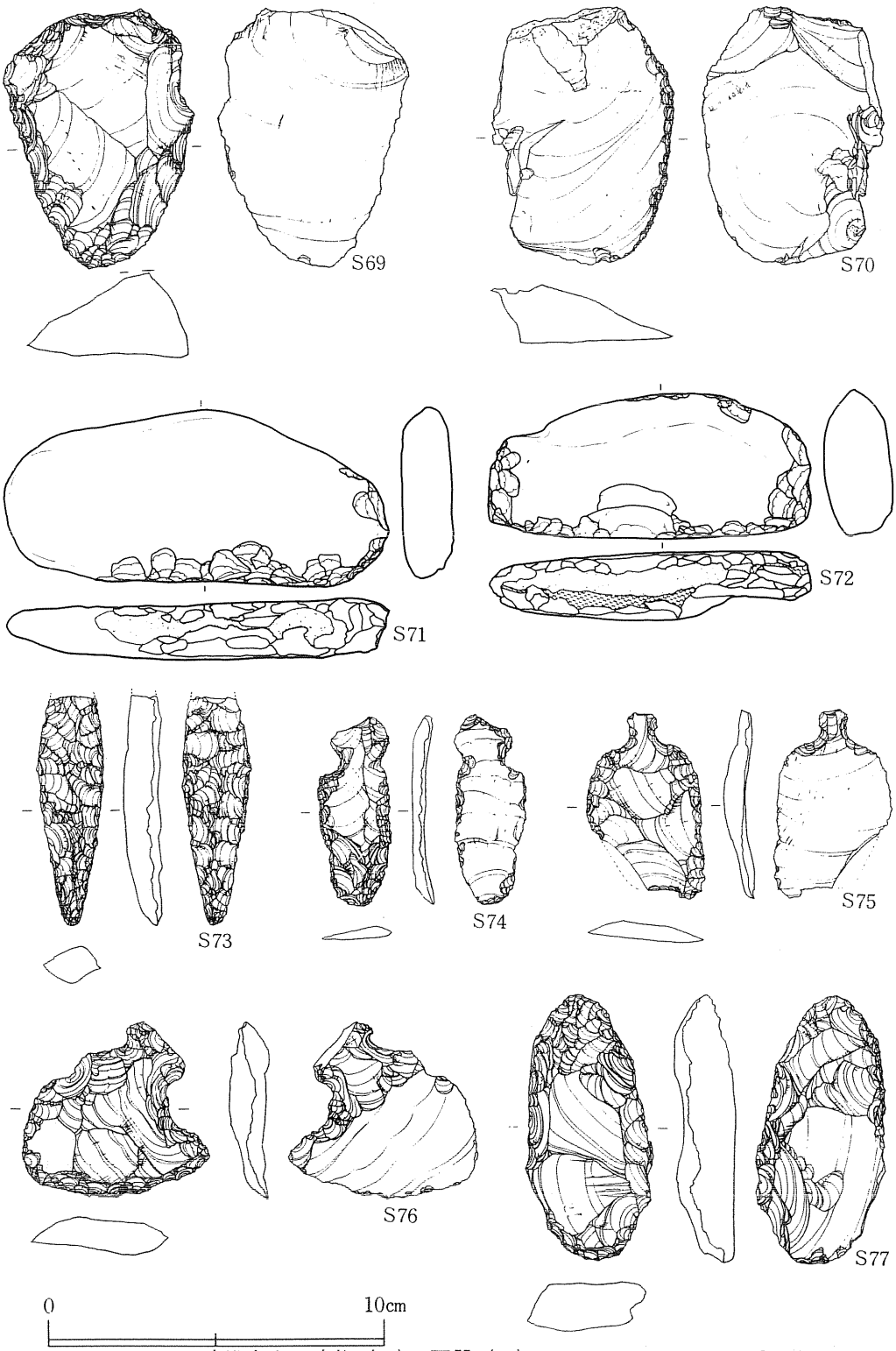
第50図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（18）・石器（６）

47～49：SI212A　50、51：SI215A
52、53：SI223　54～56：SI175A



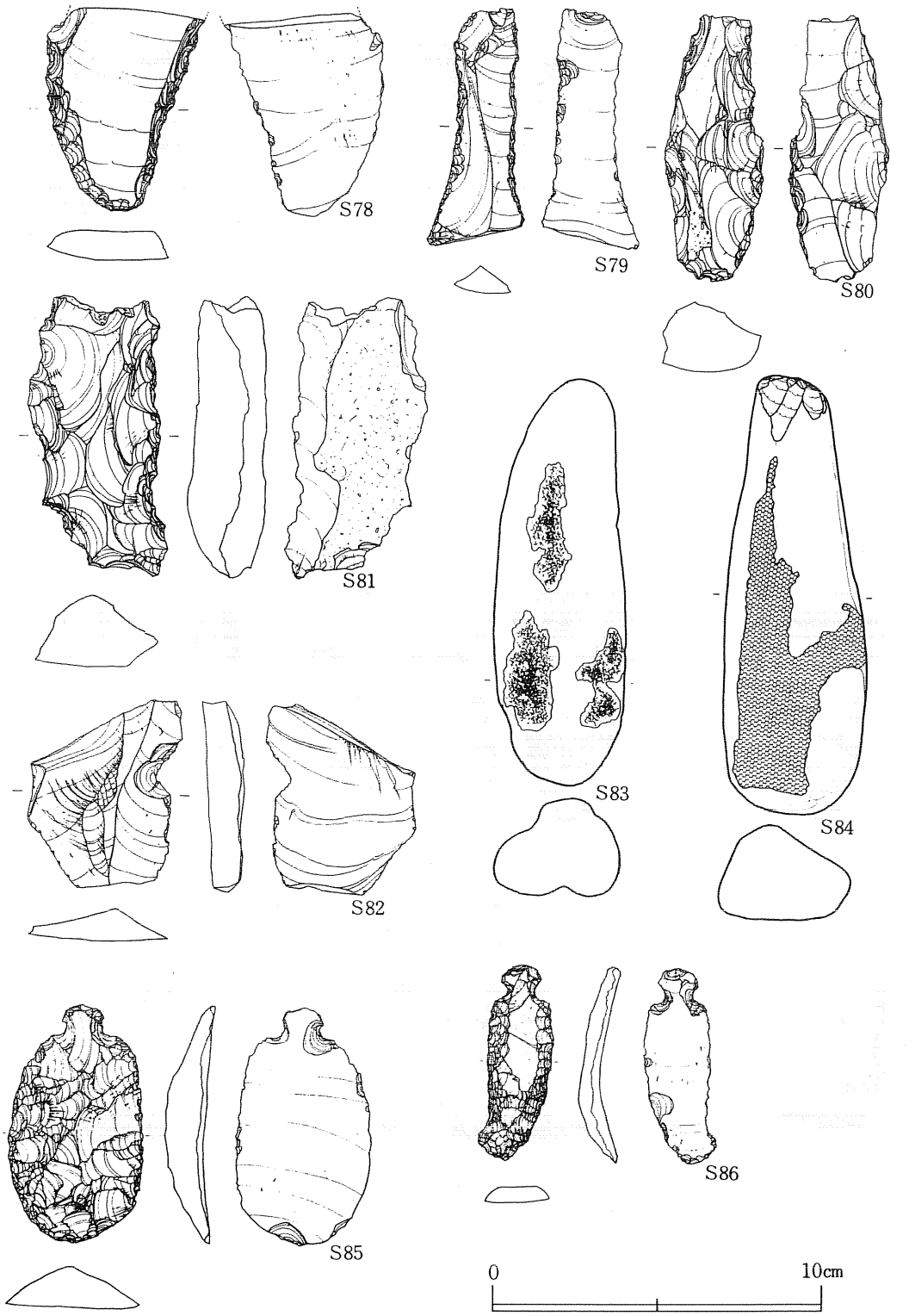
第51図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（19）・石器（７）　57～64：SI156　65～68：SI173

（S61～64、67は縮尺1/3）



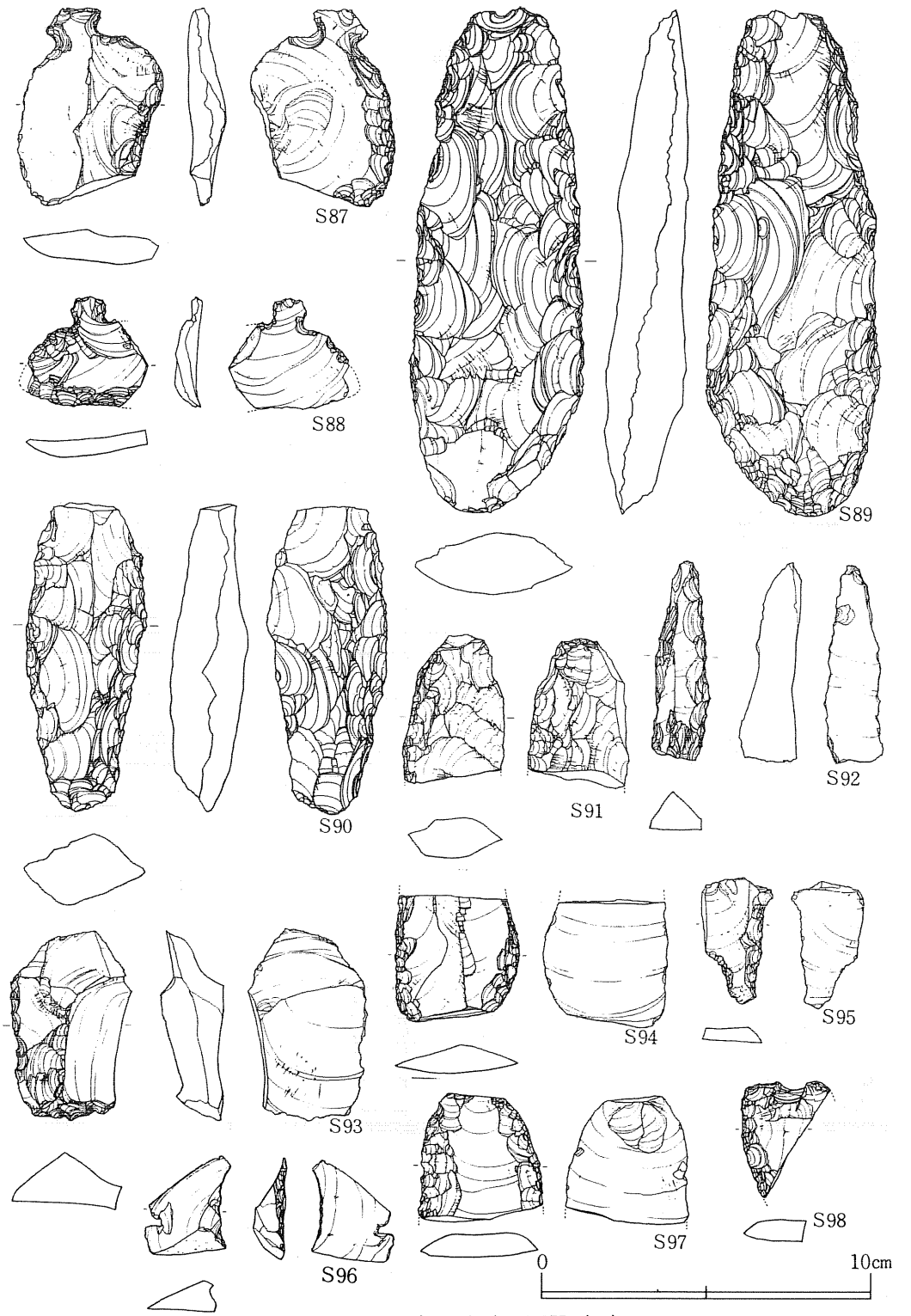
第52図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（20）・石器（８）69～72：SI173　73～77：SI213A

（S71、72は縮尺1/3）

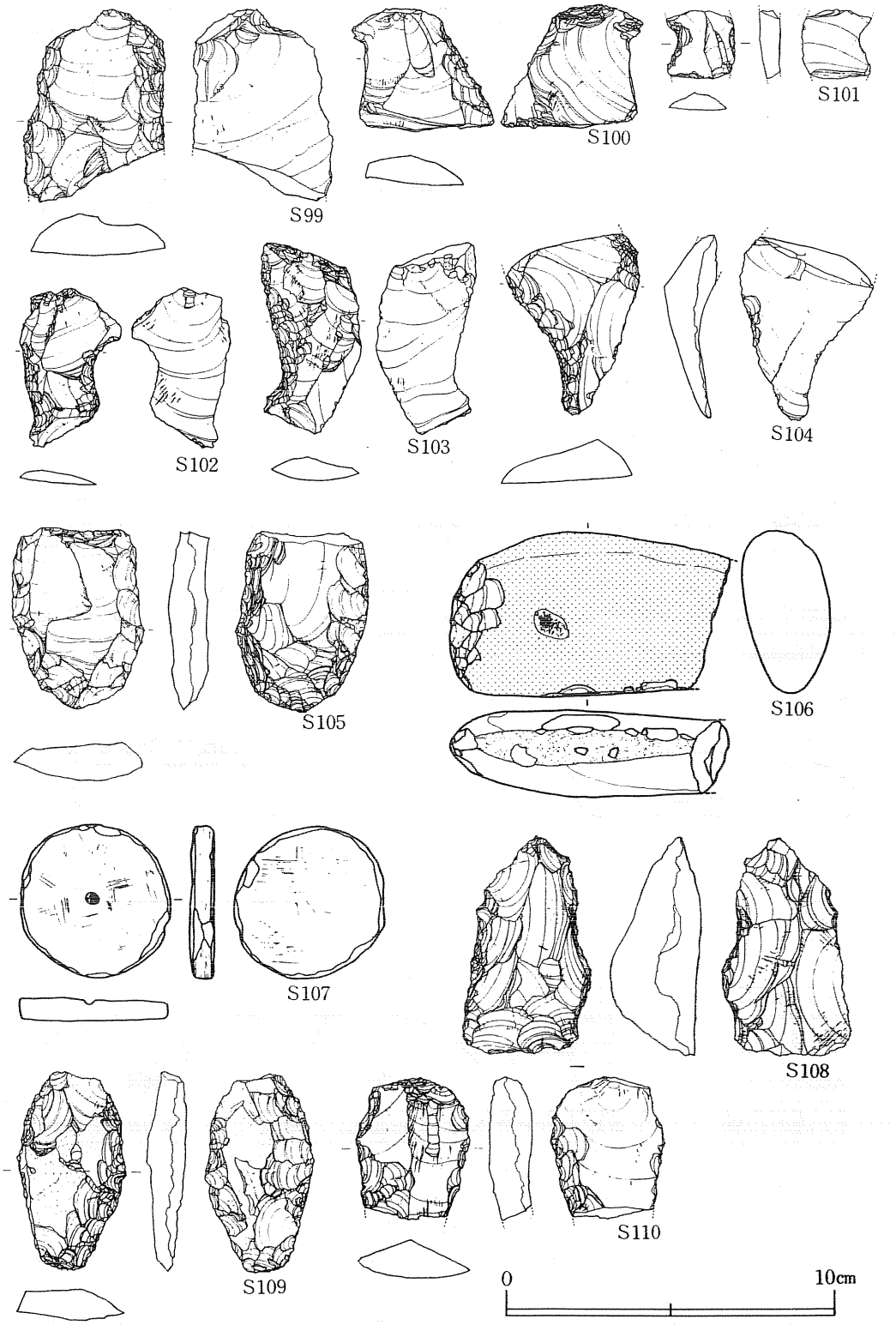


第53図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（21）・石器（９）　78～84：SI213A　85、86：SI152

（S83、84は縮尺1/3）

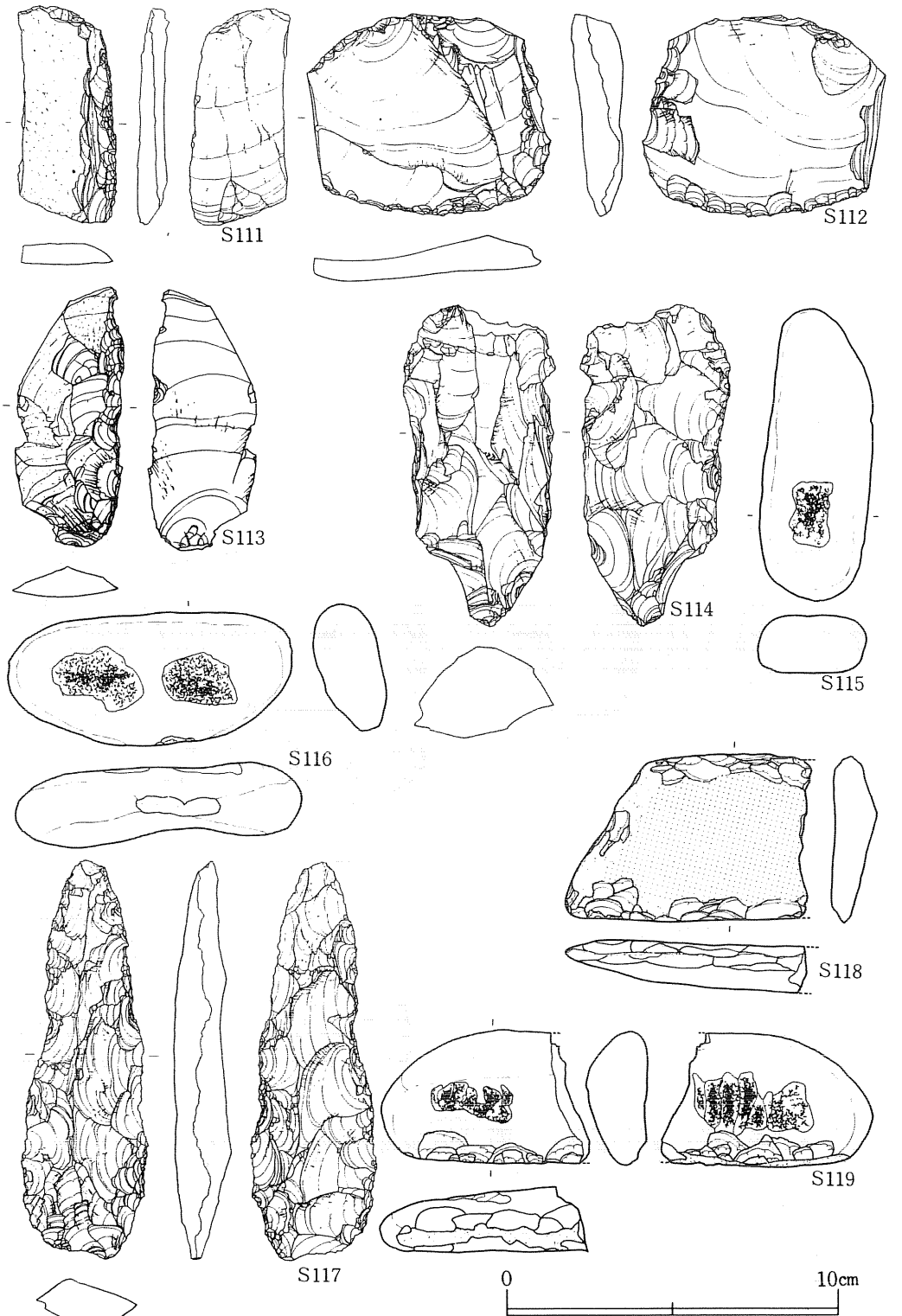


第54図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（22）・石器（10）　87～98：SI152

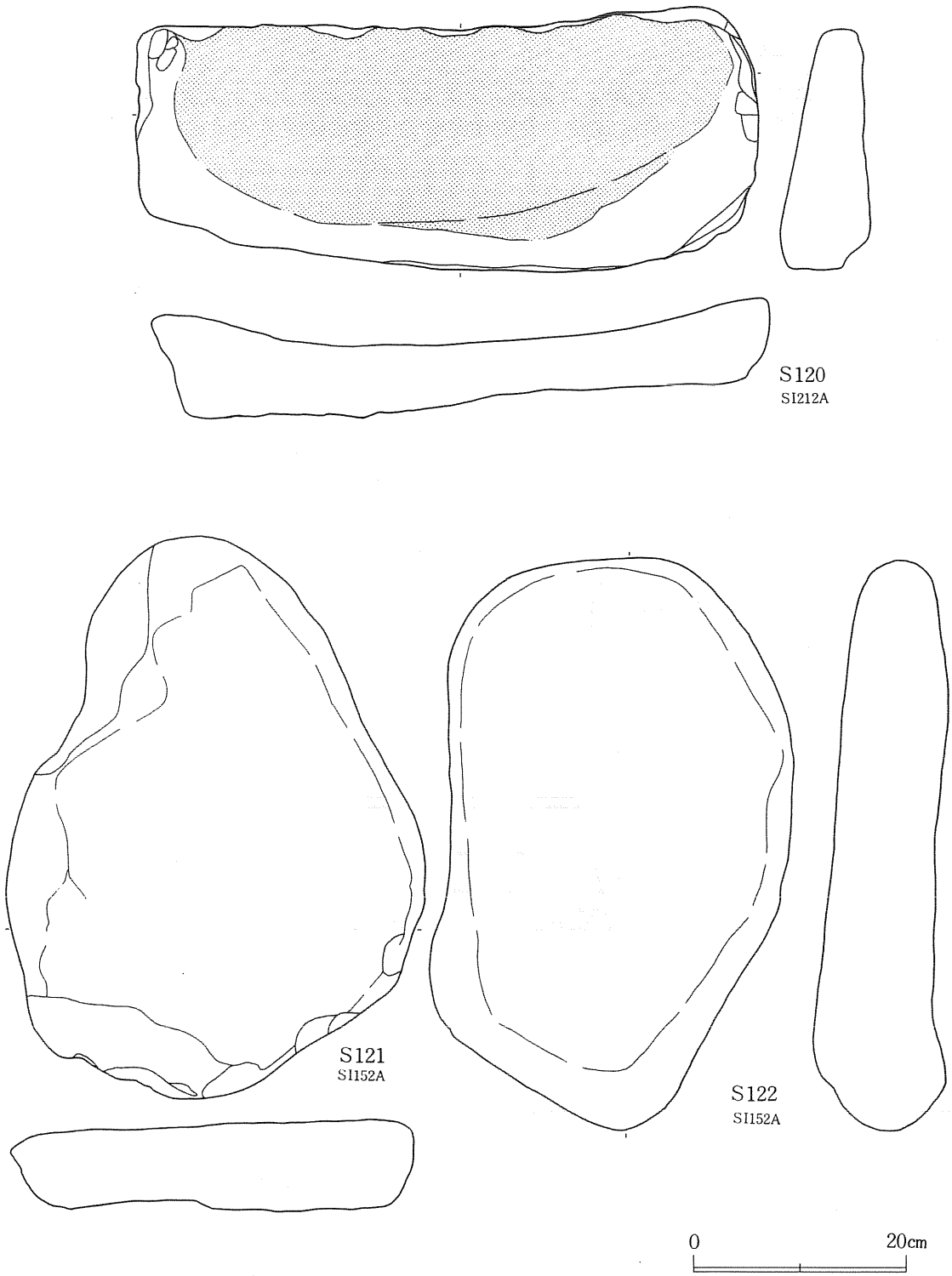


第55図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（23）・石器（11） 99～107：SI152　108～110：SI153

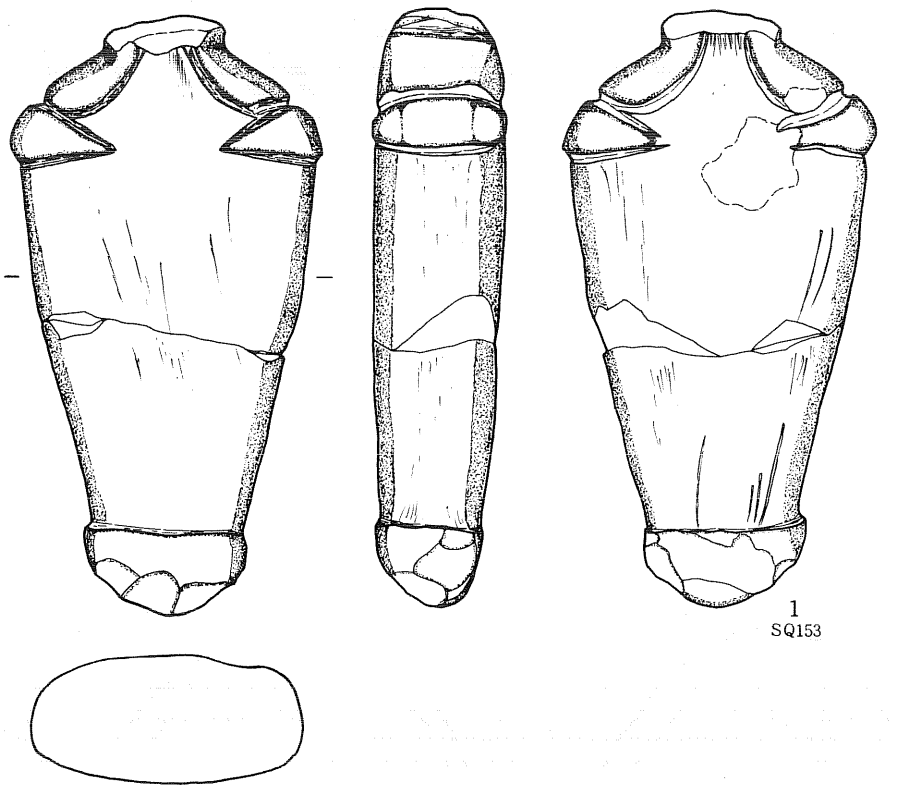
（S106は縮尺⅓）

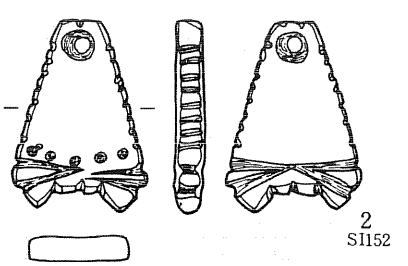


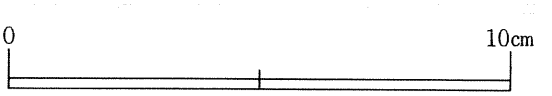
第56図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（24）・石器（２）　111・112：SI218　113：SI168　114～119：SI228　（S115・116・118・119＝⅓）



第57図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（25）・石器（13）







第58図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（26）・石製品　岩偶・垂飾品

２　遺構外出土の遺物

ＡⅠ・Ⅱ区の遺構外から出土した遺物は、その大部分が土器と石器で、土製品・石製品は極く微量である。また、これらの遺物の多くは、ＡⅡ区北部からＡⅠ区中央部にかけて出土しており、特にＡⅠ区の捨場に集中している。

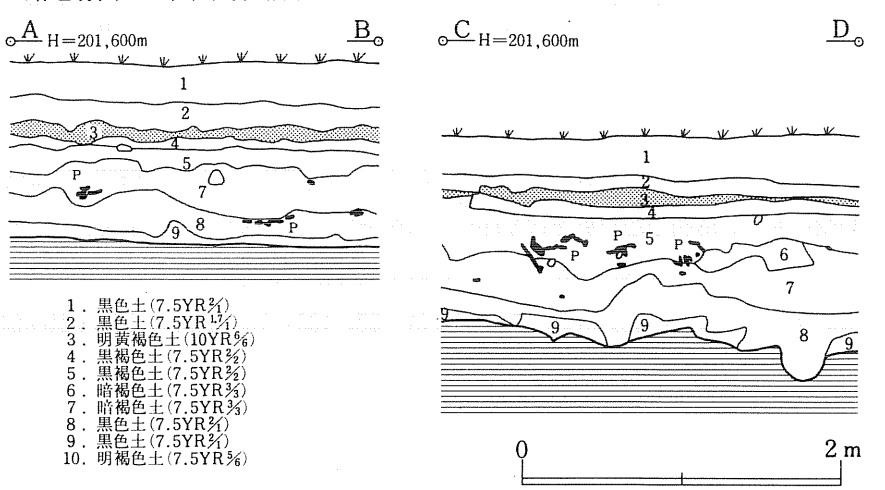
(1)　土器

出土した縄文時代の土器で図示し得たのは、前期と後期のものである。出土した土器の９割以上を占める前期の土器の出土地域は、ＡⅡ区北半からＡⅠ区にほぼ限られ、ＡⅡ区南半ではほとんど出土していない。これとは逆に後期の土器は、ＡⅠ区にはあまり見られず、ＡⅡ区全域で散発的に出土している。

第59図は、前期の土器が集中するＡⅠ区中央北部の捨場の土層断面図である。表土から地山までは、合計９層に分けることが出来た。このうち縄文時代の主な遺物包含層は５・６・７・８層で、少量ながら４層下部からも出土している。この５～８層は基本層位の第Ⅴ層に相当し、全ての層に木炭片が含まれており、特に７層などは焼土粒子を含む部分が多い。また、４層と５層の層界は比較的水平に近い線が引けるものの、５～９層の各々の層界は大きく波打っており、各層中でも軟らかい土の部分と比較的堅くしまっている部分がある。このようなことから、この捨場には、土器や石器の他に焼土なども捨てられたと考えられる。また、このように各層が波打っていることから、形式差が考えられる土器が同一レベルから出土することもあった。なお、遺物の取り上げに当たっては、層位毎に上げることを原則としたが、これを覆行出来なかった。従って出土した土器についての、層位的な関係については明らかにできなかった。

ａ：前期の土器

はりま館遺跡出土の縄文時代前期の土器群は、極く一部の明瞭さを欠くものを除けば、全て



第59図　ＡⅠ区捨場土層断面図

円筒土器下層様式に含まれるものである。

以下出土した土器についてその概略を述べるが、これらの土器を、器形及び文様の構成や施文部位、種類などによってⅣ群に分け、それぞれを細分した。なお、同じ前期の土器が、後述するＡⅢ・Ⅳ区、Ｃ区、Ｂ区、ＥⅢ区からも出土しており、分類に当たっては、それらの土器も考慮に入れ、遺構内出土のものについても必要に応じて引用した。文章中の土器番号は、33図１～44図122、60図123～95図437の番号のみを記載した。

第Ⅰ群土器

原則として、口縁部に回転施文による各種の縄文が施された土器群である。器形・口縁部文様帯の作出、隆帯の有無などによって６類に分類される。

a　１類

明瞭な口縁部文様帯を持たない類である。従って、口縁部と胴部には同じ原体による文様が施され、区画施設としての隆帯は貼付されない。Ｅ－Ⅲ区出土のものにわずかに見られる。

a　２類（１、433・436）

この類から明瞭な口縁部文様帯を有する。口縁部に、結び目を複数個連ねた原体を横位回転させた文様（綾絡文あるいは結節回転文などと呼ばれるが、以下、ここでは綾絡文と呼称する）を施すが、胴部との間に隆帯等を持たない類である。器形は、胴部が底部からわずかに外傾して立ち上がり、そのまま直線的に口縁に至るバケツ状のものと、胴部から口縁まで筒状を呈し口縁部が外反しない形のもの、口縁近くで外反するものなどがあり、口縁部の外反しないバケツ状のものが多い。底部は若干外に張り出す形のものが多く、わずかに上げ底気味の底部外面には縄文の施されている例が多い。口縁は平口縁が多いと思われ、幅１cm近い平坦面を持つ口唇部の約半数には、縄文などの回転文、押圧文や刺突列が施されている。胴部の縄文には、単節の斜縄文（１）がある。また、底部に縄文の施される例がＥⅢ区に多く、433・436はこの類と考えられる。

a　３類

口縁部文様帯の下端に隆帯を有する点では、次の４類に同じであるが、隆帯が４類のものに比べて極端に高く、隆帯上と口唇上に指頭による刺突列などを施すものである。ＥⅢ区の中にわずかに存在する。大きな器形の割りには、口縁部文様帯の幅が狭い。

b　４類（２、７～９、11～14、19～24、26・27、31・32、123～125、127～129、224～247、250～291）

口縁部文様帯の下端に、隆帯を有する類である。隆帯は、粘度紐を貼り付けたもので、１本のものが多いが２～３本のものもある。通常、Ⅱ群土器の隆帯よりも太い。

器形は、わずかにカーブを描く細長い胴部に、外反する口縁部の付く深鉢形で、器高に対し

て口径、底径が小さい。口縁部は、Ⅱ・Ⅲ群土器に比べて幅が広く、平口縁のものがほとんどで、波状口縁は少ないと考えられる。底部はⅡ・Ⅲ群土器が平らで接地面が大きいのに対して、わずかながら中央部が上がっている。

口縁部文様帯には、不整の綾絡文（２、19～24、124、244～247、250～255、245～254）、各種の網目状撚糸文（263～268）、羽状縄文（８・９、14、32、123、127、128、269、272など）、斜縄文（７、26、27、276、278など）等が施される。そして、これらの文様の上に縄文・撚糸の側面圧痕文を、横位あるいは斜位に施する例（11、123、286～291）も少数存在する。また、口縁部に不整の綾絡文や網目状撚糸文が施されたものにあっては、胴部の文様を変え、羽状縄文や斜縄文の場合には胴部にも同一の原体を用いているのが通常である。なお、羽状縄文はこの後のⅡ・Ⅲ群土器と共に、結束第１種がほとんどで、結束第２種は少ない。（この後、特にことわりのない限り羽状縄文は結束第１種のものを指す。）

隆帯上には、まれに何の施文もないもの（27）も存在するが、各種の刺突列や圧痕列、縦位の刻みなどが施されている。刺突列には、棒状（124、129、269、283、285）や先端が丸味を持つヘラ状（31）の工具によるものや、爪形のもの（９、279～283）などがある。圧痕列には、指頭によるもの（２、123、254）や縄文原体を斜位に押圧したもの（26、19～22、126～128など）、縄文の側面圧痕文を沈線状に付したもの（11、263）がある。縦位の刻みは、短いもの（７）と長いもの（14）がある。また、少数例ながら撚糸（23）や縄の結び目（288）を回転施文したものが存在する。なお、隆帯の上下に縄文の側面圧痕文を１条ずつ付したもの（８、９、128）がある。このような土器から隆帯を除去すれば本群第６類の土器になり、Ⅱ群１・２類土器への変遷も考えられる。

胴部には、羽状縄文・斜縄文の他、縦位の撚糸文・多軸絡条体などが単独で施文される例が多く、23、32、125のように２～３の原体が用いられる例は少ない。125は口縁部を欠くが、斜縄文の中に綾絡文が施されており、この類に入るものと考えられる。

244～247は、ＪＲ68グリッドを中心に広く散在して出土したもので、本類の大型土器の同一個体であるが、うまく接合しなかった。縄文の側面圧痕文が斜位に押圧された隆帯は太く、口縁部に施された不整の綾絡文が胴部にも２～３段施されている。

これらの土器の胎土中には繊維を多量に含んでおり、器断面の観察では、器肉中央部ほど繊維が多い。このことと割れ方、器表裏面の剥落の状況から、これらの土器の製作に当たっては、繊維に粘土や砂粒を混ぜた紐を板状に延ばし、これに両側から粘土を主体とする土を上塗りするかのように貼り付けたものと推測される。用いられている繊維が、Ⅱ群３類以下にあっては短く少量であるのと異なっている。みがき等の器面調整は良好なものとそうでないものがあるが、概してⅡ群以降の土器よりも良好なものが少ない。焼成もほぼ同様である。

なお、127は器長に対して口縁部が短く、外反しない。胎土には繊維をほとんど含まず大小の砂粒を多量に含んで、厚い。127はこのように、本類中の他の土器との違和感が強く、破片もＫＧグリッド出土のものがやや多いものの、捨場及びその周辺から散らばって出土している。この破片の出土状況は、小破片を人為的に散らしたと考える方が妥当であり、この土器が他の土器とは違った性格を有していたことを示していると思われる。

5類（4、25、129〜131、302〜319）

第1群土器の原則とした〝口縁部に回転施文による各種の縄文が施される土器群〟からは外れ、隆帯を有するものの、幅が広く無文の口縁部に縄文・撚糸の側面圧痕文が施された類である。口縁部の幅、隆帯の状況、胎土などが次の第Ⅱ群以下の土器群とは区別される類である。側面圧痕文の施文状況などによってａ、ｂに細分される。

ａ：口縁部に、口縁に平行する数条の太くやや粗い感じのする縄文の側面圧痕文が施され、その下端に太い隆帯が貼付けされたものである。

130、248、249がこれで、隆帯上には指頭状の刺突が付されている。130は、小さな底部から立ち上がったふくらみの少ない細長い胴部が、上端でわずかにくびれ、直線的な頸部を経て外傾する口縁に至る器形である。口唇部は幅1㎝弱の平坦な面をなし、ここに縄文が回転施文されており、このことが器形とも相俟って本類ｂや第Ⅱ群土器との大きな違いとなっている。胴部には、太い原体の結束のある木目状撚糸文が施文されている。胎土には繊維を多く含み、砂粒も目立つ。248・249は胴一個体で、やはり幅広の口縁部に130と同様の縄文の側面圧痕文が6条以上施されている。隆帯は2本で、やはり指頭状の押圧が付されている。胴部文様は斜縄文を主体とするが、上端には不整の綾絡文帯があり、これが胴部に2〜3段施されている可能性がある。

ｂ：地文のない口縁部に縄文や撚糸の側面圧痕文によって種々の文様が描かれるものである。器形は、口縁部のくびれ自体は少ないが、大きく外反するものが多い。底部まで復元できたものは少ないが、第Ⅰ群土器の中では、器長に比較して大きめの底部を持つと推定される。平口縁のもの以外に、ゆるい波状口縁（そのほとんどは4つの頂部を持つ）を呈するものがある。

縄文の側面圧痕文によるものは4・25・129・302・303・305などで、撚糸の側面圧痕文は131・304・308・319などである。側面圧痕文は通常1条ずつ施されると考ええられるが、原体2本を1組にして施しているものもある。

隆帯は太いもの、細いもの、幅広だが低いものなど種類が多く、2本付されているものが多い。

胴部には、Ⅰ群4類と同様のものの他に、木目状撚糸文が用いられているようである。

6類（6、292〜301）

復原できたのは６が１点だけであり、口縁部下端に隆帯を持たず、縄文の側面圧痕文などで、胴部との区画を行っているものである。器形の詳細は不明であるが、膨らみの少ない円筒形の胴部に外反あるいは外傾する口縁部が付くものと考えられる。

第Ⅱ群土器

原則として、無文地の口縁部文様帯に縄文や撚糸の側面圧痕文により直・曲線的な文様を施すものである。Ⅰ群土器に比較して器高がやや減じ（高さ30～40㎝前後のものが多い）、細長い胴のものが少なくなる。また、口縁部文様帯の幅もせばまり太い隆帯も見られなくなる。

１類（30、132～145、332～354）

口縁部文様帯がⅡ群土器の中では幅広で、器最大径に比して器高のある細長い類である。

本遺跡出土の縄文前期土器群の中では、土器の大きさに比較して器厚が最も小さい。

器形は、細長いが若干膨らみを持つ胴部が上端で一度すぼまり、口縁部が外反するもの、底部からわずかに外傾して立ち上がった胴部がそのまま少し外反する口縁部に至るもの、両者の中間形のものなどがある。口縁は、比較的明瞭な波状をなし、頂部を４つ持つものがほとんどで口縁部の文様も波頂部に合わせた４単位で展開される。胴部には、羽状縄文・縦位回転の撚糸文、多軸絡条体などがそれぞれ単独で、あるいはこれらが組み合わさって施文されている。しかし以下の２～４類も含めて複数原体の組み合わせで施文される場合には、極く少数を除いては、胴部文様の最上端に羽状縄文が１～２段施されている。口縁部の施文も含めた縄文あるいは撚糸文の原体は、Ⅱ群３類などに比べてやや太めで粗い感じがする。またⅡ群４類に多く存在する口唇部への縄文の回転文は少数である。胎土への繊維の混入はこの類までが多い。隆帯の有無によって細分した。

ａ：口縁部文様帯の下端に、低い隆帯を持つものである。隆帯上には、棒状工具による刺突列（30・132～134）やヘラ状工具による刺突列（135）、縄文原体を列点状に押圧したも（136）などがある。また、隆帯の上下には134を除いて縄文押圧や撚糸の側面圧痕文が１条ずつ施され、132ではそれが２段にわたる刺突列間にも付されている。

ｂ：口縁部文様帯の下端に隆帯を持たないものであるが、隆帯の代りに、ａに見られた隆帯上下の縄文の側面圧痕文がそのまま残り、平行する２条の側面圧痕文として、胴部との区画文様となっている。しかしこれも、138・139・140では、口縁部文様あるいは垂下する側面圧痕文が２条の側面圧痕文に及んでいないものの、141・142・143・144では両者が重複している。このあり方は、ａの隆帯と垂下する側面圧痕文との関係に似ている。

ｃ：口縁部文様帯の下端に隆帯を持たず、刺突列を施している例である。145がこれで、この刺突列は、口縁端と計８箇所で垂下する撚糸の側面圧痕文にも付されている。

２類（146～155、355～369）

口縁部文様帯の幅がせまく隆帯を持たない類である。

器形は、下半でわずかに丸味を持った胴部が直線的にそのまま口縁に至るもの（146・147・148・149）と、口縁部でごくゆるく外反するもの（150・151）とがある。口縁は、平口縁か、平口縁と大差ない波状口縁（波頂部は4つ）である。

胴部文様には羽状縄文・縦位の撚糸文・木目状撚糸文が用いられ、羽状縄文では146のように結束第2種の例が初めて登場している。なお、148は口縁端部でわずかに内湾しており、その胎土と平滑な器面調整などは第4類土器に近いものである。

胎土に含む繊維の量は本類あたりから、これ以前のものに比べて少なく、含まれる繊維自体も短いものが多いように観察される。

なお、口縁部に地文を有し、その上に縄文側面圧痕文を施したやに見える一群がある。152・153・154・155などがそれであるが、これらの土器の口縁部を仔細に観察すると、地文が確実にすり消された部分と、すり消しが不完全で残った部分のあることがわかる。すり消されずに残った地文は羽状縄文で、153・155は全面が羽状縄文、152の胴部文様は木目状撚糸文の下に羽状縄文、154は撚糸文である。従って、152・154の胴部文様は、「複数の原体を用いた胴部文様の場合、羽状縄文が最上位に施される」という、本類の土器の主体をなす文様構成とは異なるものとなっている。従ってここでは、これらの土器が比較的小型であるということも加味して、羽状縄文に対する製作者達の思い入れが、意識的に羽状縄文をすり消さずに残した可能性もある、と推測しておく。

d1

3類（156～173、370～380）

幅のせまい口縁部文様帯の下端に細く低い隆帯を持ち、隆帯上に縄文あるいは撚糸の側面圧痕文を1条付した類である。隆帯は次の4類も同じで、つまみ出したような形の低いものが多い。

器形は、底部から外傾ないし内弯気味に立ち上がった胴部が、ほぼ垂直かごくゆるいカーブを描いて口縁に至る形である。口径・底径共に大きく、全体にずんぐりして安定した形となっている。口縁部のくびれはほとんどなく、口縁は直立するか心もち内傾する。また、底面も上げ底にならず真平に近いものが多く、接地面が大きくなっている。平口縁と波状口縁のものがあるが、波状口縁のものでもごくゆるい波状で、口縁部の破片ではその区別のつかないものが多い。

口縁部文様は、単節（まれに複節）の縄文原体（1本かあるいは2本1組にして）か撚糸原体を巧みに押圧したもので、これに細い棒状工具による刺突列を加えたもの（156）は少ない。描かれた文様は、口縁に平行する条だけのものを除けば全て4単位で、楕円形の小孔を持つもの（158）もある。

胴部文様は羽状縄文（159～166など）や縦位の撚糸文と羽状縄文を互層にしたもの（156・

167・168など）、縦位の撚糸文（157・158・168〜172）などがある。しかし縦位の撚糸文が施される場合、170のように単独のものはごく稀で、他は最上位に1段以上の羽状縄文が付されている。173は胴部文様である木目状撚糸文の上に、細い原体による綾絡文が3段前後連なっており、これがほとんど隆帯上にかかっている。この綾絡文が隆帯上に施文しようとしたものか、胴部最上端のつもりであったかは判然としない。

本類以降再び、口唇部に回転縄文の施される例が増えるが、口唇というよりも口縁上端部に施されているのものも見える。

4類（174〜202、389〜426）

3類と同様、幅のせまい口縁部文様帯の下端に形ばかりの隆帯を設け、その上に刺突列あるいは刻目を施した類である。

器形等も3類とほぼ同じであるが、口縁部あるいは胴部上端でわずかにくびれている形のもの（174・175）もある。1・2類に比べ、器厚が増し、繊維の混入も少なくなり、器内面や底部外面の磨きもていねいで平滑である。

隆帯上などに施された刺突列の刺突具は、先端がやや尖った小さな棒状ものが大部分で、竹管は少ない。棒状工具による刺突は、土器を正面から見てほとんど例外なく右→左に行われており、器に対して直角ではない。そしてこの刺突の角度が鋭角的になって、176のようにあたかも短沈線列のように見えるものもある。179は刺突列が2段に付され、180は刺突間に縦位の刻みが施されている。181は浅い縦位の刻目列であるが口縁部文様帯の狭さなどから、この類に含めた。竹管は細い竹の截断面をそのまま用いた場合（177）と半截したもの（178）があるが、半截の場合でも$\frac{1}{2}$截はほとんどなく$\frac{3}{4}$截が主である。

口縁部文様は、縄文と撚糸の側面圧痕文が圧倒的に多く、これに刺突列を加えたものや、刺突列だけのもの（182・183）が若干存在する。縄文の側面圧痕文は原体1本のもの（176・184〜187など）と2本組みの（177・184など）がある。撚糸側面圧痕文には、1本の縄を軸に巻きつけてこれを押圧したもの（174・178・191〜193・195など）と、2本の縄を逆方向に巻いたもの（これを回転させれば、斜格子状の網目状撚糸文となる—175・179・180・194など）がある。

196〜199は口縁部を欠いており判然としないものの器形・胎土などからこの類に入るものと思われる。

胴部文様は復原できた28個体のうち羽状縄文だけのもの10、羽状縄文＋縦位撚糸文9、木目状撚糸文だけのもの6、羽状縄文＋木目状撚糸文2、羽状縄文＋多軸絡条体1という内容である。これからもわかるように、これまで述べてきた土器群の中では木目状撚糸文の多用が目立ち、しかも単独で用いられている例も多い。これまで羽状縄文以外の文様が、単独で胴部文様

に用いられることのほとんどなかったことに比べれば、極立った特徴と言える。また、これまでの土器群中における羽状縄文は、結束第１種のものが多かったのに対し、本類では結束第２種（187・189・196など）も多くなっている。口唇部への縄文施文は、約半数において認められる。

なお190は、胴部文様である羽状縄文の上に２～３条一組と見られる細かな綾絡文帯が胴部中位より上に３段、波頂部の下方に垂下させて４列施されている珍しい例である。また、201の口縁部には羽状縄文のみが施され、202は撚糸の側面圧痕文の間に刺突列帯を設け、やや幅広の隆帯上にも２～３段の刺突列を施しているが、器形・胎土・口縁部文様の狭さ、低い隆帯上への刺突列などの点から本類に含めた。

d2 ５類（203～207、427・428）

本群中のこれまでの類の器形と異なり、胴部に丸味を持ち、頸部ですぼまり、口縁部がわずかに内弯気味に外傾する類である。

口縁ははっきりした波状をなすもの（203・204）と、平口縁とほとんど変わらないような波状をなすもの（205～207）がある。波頂部はいずれも４つである。

縄文・撚糸の側面圧痕文が施された口縁部文様帯の下端には、刺突列の施された隆帯を持つ。隆帯は206を除いては極く細く低い。206は低い隆帯であるがやや幅があり隆帯上には、上から縄文の斜位押圧列、刺突列、縄文の側面圧痕文が施されている。

胴部文様は、羽状縄文（203～205）と木目状撚糸文（206・207）が多く、206の上端には、結束第２種羽状縄文の結束部が１段施文されている。204・205の羽状縄文は横位回転であるが、203は、上端に１段の横位回転の後縦位回転にし、これが計16列で器を１周している。また、口縁端（口唇部外側）にも胴部の羽状縄文と同じと考えられる原体を回転させており、口縁部内面と底部外面を除く全面には煤状炭化物が厚く付着している。内面が黒く光沢を放つ程によくみがかれ、非常にていねいな作りの優品である。

d2 ６類（15・208～212、429、430）

口縁部が幅広となり、大きく屈曲あるいは屈折する類である。

口縁は４つの頂部を持つ波状口縁が多く、その端部下方には新たに粘土紐が貼付されるか、口唇部が尖るように整形されるため断面形が三角形となり、その部分の外形はあたかも内弯するように見えている。

口縁部文様帯は、撚糸や縄文の側面圧痕文で細やかに飾られるが、網目状撚糸文の原体による側面圧痕文が多用される。また、波頂部口縁端から１～２本の隆帯を垂下させるものが多い。

胴部の文様は５類とほとんど変わらない。胎土には繊維の混入が少なく、混入物がほとんどなくて緻密なものや、細かい砂粒を含むものなどがある。

ａ：胴部上端で内側に屈折して頸部ですぼまってから外反する類である。15・208・209がこれで、屈折部とくびれ部に刺突列の施された低い隆帯が付されている。15と208の胴部文様は木目状撚糸文であるが、208の胴部上端には２つ以上の綾絡文帯が横位に、15には結び目１つの綾絡文が縦位に施文されている。

ｂ：胴部上端が、内側に屈曲して頸部ですぼまってから外反する類である。210・211がこれで、最もくびれの強い部分に隆帯が付されている。210と211は、器形や口縁部と胴部文様、胎土までうり二つの土器である。211が210の未発見の波頂部かとも思われたが、接合点がなく、仮にその部分に置いたとすると210のその部分の波頂部が異常に高くいびつとなる。このため現段階では同一者によって同時に作られた２つの土器と解釈している。両者の口縁端には、径の小さな丸ノミ刀で削られたような刻目列が施されている。

ｃ：下半で大きくすぼまった後開いた胴部が、上半で内側に折れ曲がって外反する口縁部に至る器形の類である。212がこれで、底部が外に突き出て、胴部上半部の断面形が算盤珠状を呈する。頸部には横位の、４つの波頂部からは垂下する隆帯が付され、隆帯上には半截竹管による刺突列が施されている。また、口縁端部の刻み目は、各波頂部単位に斜めに刻まれている。胴部には縦位撚糸文が施されているが、その上に結び目１つの綾絡文が４つの波頂部下とその中間の計８条付されている。なお、212はＡⅢ区北東端の斜面から出土したものである。しかし、この部分はＡⅠ・ＡⅡ・ＡⅢ区の境界部分に当たるため、あえてＡⅢ区出土とせず、ここで扱うことにしたものである。

ｄ：底部からほぼ垂直に立ち上がった胴部が、上半で球形状に膨らみ外反する口縁部に至る器形のものである。Ｃ区から出土している。

d2

７類

ＡⅣ区のＳＩ332Ａ竪穴住居跡床面から出土した土器である。底部から外傾して立ち上がった長い胴部が口縁部ですぼまることなく外傾する形の類である。口縁は波状口縁をなすが、これは平口縁の４箇所に山形の突起を付した形のものである。口縁部文様帯の下端に明瞭な隆帯をもたず、４箇所の山形突起の一方からは、下端でボタン状に丸くなる隆帯が垂下している。

第Ⅲ群土器

Ⅰ・Ⅱ群には含まれなかった前期の土器群で、Ⅳ群には含まれないものをまとめてⅢ群とした。

C

１類（213・219）

土器を真上から見たときの平面形が、小判形を呈する類である。２個体が復原できた。

213はこの類の土器としては高さがあり、底部からほぼ直線あるいはごくゆるいカーブを描いて口縁部に至っている。胴部には、上方に三段の羽状縄文、その下に縦位の撚糸文が施文さ

れ、下半は無文で、幅3～4㎝にわたってヘラ状工具で削られた後、磨かれている。口唇部にも縄文の回転文が付されている。内面は上方が横位の、中位以下が縦位のみがきによって平滑に仕上げられている。外面の所々と内面中位あたりに煤状炭化物の付着が見られるが、それほど著しくはない。またこの煤状炭化物は、胴部下半の使用時に生じた割れヒビの中にも入り込んでいる。口縁部を除いて器厚がありどっしりした土器である。胎土への繊維の混入は多い。

219は、213に比べ底径・器高共に小さいが、底部から大きく外傾して口縁に至る器形であるため、口径が大きい。わずかに内弯するように見える口縁部には、2条の沈線が口縁に平行しているが、これは縄文の側面圧痕文を施した後指ですり消して沈線風に仕上げたものである。胴部には縦位の撚糸文が隙間なく施文されている。器内外面には、いわゆる化粧土が塗布されたと見え、赤紫色のきれいな発色である。また、器内面の口縁部には横位の、それ以下には縦位のていねいな磨がき痕が残っている。胎土には細かい繊維が混入されたものか微細な間隙があり、それほど厚くない器肉であるが全体として軽い感じがする。しかし、このように美しい土器であるにもかかわらず、焼成時か使用時に生じた器面の焼けただれ状の痕跡が胴部下半から底部にかけての所々に見られ、この土器の美観を若干損ねている。器内外面共に煤状炭化物の付着は認められない。

2類（214～218、220～228）

これまで分けたⅠ・Ⅱ群の中に明瞭な形で所属させることのできなかったもので、小型のものや胴下半部だけのものが多い。

215は台付土器の台部で、214は胴部下半のすぼまり具合から台の付くものと思われ、両者は胎土等も似ていることから同一個体である可能性がある。216は、口縁部に刺突列が1列、217は2列めぐる。217は4つの頂部を持つ波状口縁で、口唇部に刻みがめぐっている。胴部文様は、214・227・228を除いて、全て羽状縄文であるが、225と226にあってはこれが縦位（226の下半は横位）に施文された例である。

227と228は、胎土に繊維を比較的多く含んでおり、Ⅰ群3類以降の土器に含まれるものと思われるが、判然としない。227は、胴部に施された細い撚糸文が、口縁端部と胴部下端に横位に付されている。

第Ⅳ群土器

これまで述べて来たⅠ～Ⅲ群の土器とは、施文された文様や施文具が明らかに異なる土器群を一括した。施文具や施文方法、文様などの違いによって2類に分けたが、それぞれ1～2点しか出土していない。

1類（229・230）

沈線によって文様の描かれた類である。

ａ：幅広の口縁部文様帯に、半截竹管による平行沈線で同心円状の連弧文が描かれたものである。230がほぼ半個体分復原されたもので、これ以外には431の破片があるが、431は摩耗が著しく230と同一個体かどうかわからない。口縁部下端の隆帯上と若干肥厚する口縁端部には、指頭による刺突列が施されている。連弧文は口縁部中位やや下方に引かれた平行沈線によって上下に分けられ、それぞれ横位に展開するように見えるが、それぞれが連絡を取り合うように接したり重なる個所もある。この連弧文が収束しさらに次の連弧文に移る個所などに平行沈線が垂下する。しかし、復原された部分のみでは平行沈線間の間隔がまちまちで、垂下する平行沈線が何条あったのか捉えることができない。

230の器形は、胴部が底部からわずかに外傾して立ち上がり、ほとんどくびれのない頸部を経て、ゆるく外反する口縁に至る平口縁の土器である。胴部には付加条の複節斜縄文が施され、間隔をおいて綾絡文が垂下している。胴部下半は５㎝以上の幅で文様がなく、ていねいにみがかれている。胎土には繊維と砂粒を含み、器の大きさに比較してそれほど厚くない。焼成は普通である。

ｂ：胴部・口縁部共に沈線で文様が施されたものである。229がこれで、１点のみの出土である。229は、小さくてごくゆるい曲面を持つ底部から直線的に立ち上がった胴部が、わずかに外反する口縁部に至る小型深鉢形土器である。平滑にみがかれた胴部には、先端の鋭利な工具によって施された浅い沈線が縦走し、口縁部にはやや深い沈線が若干斜行しながら横走する。胴部と口縁部のと境には特別な区画施文を有しないが、口縁部には、沈線を施す前に縄文の側面圧痕文が付されており、各所にうすく残っている。口縁は、平口縁と違わないくらいのゆるい波状口縁（４つの波頂部）をなす。外面のていねいなみがきに比べて内面の調整はそれほどていねいではなく、繊維痕が見えている。焼成は良好で、使用時に生じた割れヒビには煤状炭化物が入り込んでいる。

２類（231・232・233）

細い粘土紐を器面に貼り付けて文様を描いた類である。

ａ：口縁部文様帯と口唇部に極く細いソーメン状の粘土紐を貼り付けて、幾何学的な文様を描いたものである。231がこれである。231は、細長いやや下ぶくれの胴部が上半でゆるやかにすぼまり、内弯気味に外反する口縁部に至る深鉢形土器である。口縁部下端には断面三角形を呈する明瞭な隆帯が付き、口縁部にもほぼ同様の隆帯が付されたが剥落してしまい、その痕跡のみを留めている。上下の隆帯にはさまれた口縁部の両端に、隆帯に平行する粘土紐が付され、その間を屈曲する粘土紐で連絡して、横に間延びした菱形の空間を作出している。さらにこの空間には、横長でその間を細い粘土紐による斜格子文で埋めた菱形が描かれている。この二重になった菱形は、横位に４（あるいは５か）単位描かれたと考えられ、各単位の接続する部分

の上方には何らかの貼付文があった痕跡がある。口縁には、１～２箇所に山形の突起が付され、口唇上には短い粘土紐が付されている。また、頸部の隆帯直下にも１本の粘土紐が廻っていた跡が見える。胴部文様には、短い原体の端を結んだ跡が明瞭に残る羽状縄文が、間隔をおいて縦位に施されており、各羽状縄文間には地文がなく、すり消し縄文風に仕上がっている。原体の端を結んだ一方は、ほとんど直線に見えるくずれた綾絡文で、他の一方は整っており美しい綾絡文が新たに施文されたように見えている。胎土には繊維と砂粒を含んでいるが薄手に作られている。焼成は普通である。

ｂ：器面に貼付した細い粘土紐の上を、半截竹管の内面側で細かく押引きしたものである。233は、短い胴部の中位にくびれを作り、外反する口縁部を付した小型の土器で、胴部の器形はあたかも、上下から押し潰した球形を２つ重ねたような形を呈している。口縁部のほとんどを欠き、粘土紐も剥落している部分が多い。胴部文様は、２段になった球形の胴部の各々の上半に１本の粘土紐を、さらにその下に１本の粘土紐を波状に１周させている。粘土紐の上には半截竹管で細かい刺突を施している。球形の胴部下半にのみ、地文としての単節斜縄文がかすかに残っている。胎土には繊維・砂粒共に少量しか含まれていない。焼成は良好である。

232は口縁部の破片で、器形全体は不明であるものの、208あるいは209に似た胴部を有し、４つの波頂部をもつ波状口縁を呈していたと考えられる。口縁部中位には幅はせまいが高い隆帯が付され、あたかも２重口縁のようになっている。この隆帯上と下端の低い隆帯上には、半截竹管による左から右方向への押引きが施されている。また、大部分を失っている口縁部には、口縁に沿う形で３本の粘土紐が貼付され、山形となる波頂部ではその下方を１本の粘土紐で連絡している。各粘土紐の上には、やはり半截竹管による押引きが行われている。さらに波頂部間には、口縁と中間の隆帯を結ぶ筒状の橋状把手が付されている。この橋状把手上には、単節の斜縄文を施した後に半截竹管による沈線文が両端に各１条、その間にタスキ掛け状に、１条ずつ付され、２個の素朴な小孔が穿たれている。胎土には繊維を含むが薄手に作られている。焼成は普通である。

３類

口縁部文様を、全て半截竹管の外側を器面にあてて押引いた沈線（背竹管）で文様を描くものである。234がこれであるが、胴部破片はこれまでのところ見つかっていない。234の大部分はＫＧ85グリッドから出土したが、接合したうちの１片はＫＰ84グリッドから出土したものである。ＡＩ区の中でもＫＰ84グリッドは上位関上段丘面にあり、この付近から土砂が下方のＫＧ85グリッド側に流れた痕跡があり、はこの土器の大部分も流されて、離れ離れになって出土したのが接合したものと思われる。234は丸味を持つ胴部に、「く」の字形に外反して口縁端がわずかに内弯する口縁部を持つ器形と考えられる。口縁は、４つの波頂部を持つきれいな波

状口縁を呈する。口縁部文様帯の上下端には１条の沈線が引かれ、さらにこの文様帯は屈曲部に引かれた沈線で上下に分けられる。上段の文様帯は、波頂部下に付された上下２個のラグビーボール様の突起を同心円状に囲む沈線と、それらの中間に設けられた重弧文状の沈線文によって構成される。ラグビーボール様の突起の上側には半截竹管によって３個の刻み状の刺突が付され、４箇所の突起部のうち３箇所には、これを囲む重弧文に対向するような沈線が施文されている。下段の文様帯は残存部が少なくて判然としないものの、反時計回りの計８つの渦文によって構成されるようである。胎土には、細かい砂粒を多く含むが繊維は少ない。焼成・内面の磨き等も良好である。

ｂ：後・晩期

ＡⅡ区全域とＡＩ区南部にかけて、後期と晩期の土器が散発的に出土しており、このうち図示できたのが、86図236～87図243である。

236・237・239～240が後期前葉に、238が後期後葉に、244が晩期中葉に属するものと考えられる。

(2)　土製品

土製品は出土した土器量に比較して非常に少ない。

85図235は、砲弾形の土製品である。大きな粘土塊で先端から一気に作ったと思われ、継ぎ目等は観察されない。全面をていねいにナデており、断面形は整った正円に近い。使用によるキズ等は見当たらないが、先端部にヘラ状の工具で押さえたような痕跡がある。製作時に故意に面取りしたものか、偶然に付いたものか判然としない。焼成は良好で、重量感がある。前期の土器群と共に出土しているが明確な時期は不明である。95図437～439は、前期の土器片を使用した円盤状土製品である。439は土器底部破片を使用している。

(3)　石器

遺構外から出土した石器の総数は726点で、その大部分はＡＩ区から出土している。各石器の時期を明確にし得ないものも多いが、ＡＩ区から出土した石器のほとんどが前期の土器と混在したことから、大半の石器は前期に属するものと考えられる。以下、各器種毎に概略を説明するが、石鏃など極く一部の器種を除いては、出土した石器の一部しか掲載していない。石器に用いられている石材は、剥片石器が頁岩、磨製石斧は緑色凝灰岩と粘板岩、礫石器は安山岩がほとんどである。

石鏃　（第96図Ｓ123～Ｓ135）

ＡＩ区９点、ＡⅡ区４点の計13点が出土している。基部に茎のない、いわゆる凹基式あるいは平基式のものが多い。135はＡⅡ区出土で、基部周辺にアスファルトが付着していることから、後期か晩期のものと思われる。

石錐　（第96図Ｓ137～第97図Ｓ146）

大小の剥片の尖った部分に調整を加えて錐部を作出している。ＡＩ区から12点、ＡⅡ区から１点の計13点が出土している。Ｓ138・144・145のように、部厚い刃部を持つ削器の先端部に錐部を持つものも含めた。

石匙　（第97図Ｓ147～99図Ｓ171）

つまみの軸線方向と、刃部の線との関係で、縦型（両者が平行する）・斜型（両者が約45°で交わる）・横型（両者が直角に交わる）に分けた。縦型（Ｓ147～Ｓ159）はＡＩ区で50点、ＡⅡ区で３点の計53点が、斜型（Ｓ160～Ｓ166）はＡⅡ区で26点、ＡＩ区で２点の計28点、横型（Ｓ167～Ｓ171）はＡＩ区で13点、２点の計17点が出土しており、その他分類不能の破損品が13点ある。Ｓ147は、ａの右側辺が刃部である。この石器の製作に際しては、表面に整った押圧剥離を施すために、ａの左側の側面（ｃ）に、表面側からの加撃で平坦面を作出している（表面と平坦面のなす角度は60～70°）。この平坦面からの押圧剥離は、図の上方から下方に順に施されている。通常、このような押圧剥離のための平坦面は、押圧剥離と共にその大部分が失われてしまうことが多いようであるが、Ｓ147の場合、それが2.5～４㎜の幅で残されており、Ｃ側から見た押圧剥離の断面がジグザグになったままである。さらに、ｂの下辺にも平坦面が作され、そこから押圧剥離が施されているが、この平坦面はほとんど残っていない。

掻器　（第99図Ｓ172～100図Ｓ184）

刃部が部厚い縦長剥片の先端（Ｓ172～Ｓ173）や、大きな剥片の尖った先端部（Ｓ177）に作出されたものの他に、平面形が円形を呈するもの（Ｓ179～Ｓ184）がある。剥片の多くは、主要剥離面が背面側に反る。ＡＩ区から28点、ＡⅡ区から３点の計31点が出土している。

箆状石器　（第100図185～103図201）

短冊形を呈し、裏面両側辺を直線的に調整したもの（Ｓ185）、楕円形～撥形を呈し片面調整のもの（Ｓ186・187）、半両面調整のもの（Ｓ188～190）、両面調整のもの（Ｓ191～201）がある。ＡＩ区から42点、ＡⅡ区から２点の計44点が出土している。刃部の側面観は片刃状のものが多く、Ｓ192は大型で重量感があり、先端の刃部はわずかに湾曲している。

削器　（第103図Ｓ202～106図220）

大小の剥片の主に１側辺に刃部を作出したものである。刃部は、直線的なもの（Ｓ202～205）、外側に張り出した孤を描くもの（Ｓ206～210）、内側に湾曲する孤を描くもの（Ｓ211～216）などがある。ＡＩ区から165点・ＡⅡ区から34点の計199点と最も多い。Ｓ213は大型のもので、頁岩製であるが、裏面にくぼみ石のくぼみ部のような敲かれた痕跡がある。

ノッチのある石器　（第106図Ｓ221～224）

剥片の側辺の一部に、孤状の抉りが施された石器である。抉りは、表・裏面いずれか一方か

らの加撃で作出されており、これが長い側辺に連続的に作られると鋸歯縁石器となるが、ＡＩ・Ⅱ区からはそのような整ったものは出土していない。ＡＩ区から16点出土している。

その他の石器（第106図Ｓ225・226）

Ｓ225は、平面形状が片面調整の篦状石器に似るが、刃部の形状や厚さなどの点でそれとは異なる。表面右側縁を刃部としたナイフ状の石器と考えられる。

Ｓ226は、良質の頁岩を用いた黒褐色を呈する石器である。両端が尖るために先端と基部が判然としなかったが、図のように置いた場合の基部に一部調整の及んでいないところがあり、このように考えた。器中位の両側に両面からの加撃によって、３ケ所の抉りを入れ、この部分のみ鋸歯縁にしている。先端から約２㎝までは、摩滅して剥離の稜線が消えかかっており、使用によるものと考えられる。

磨製石斧（第107図Ｓ227～236）

磨製石斧はＡＩ区から10点、ＡⅡ区から３点の計13点と少なく、それもほとんどが破損している。Ｓ227の側面には製作時の擦切痕が、Ｓ234には製作時の剥離痕が残っている。また、Ｓ228の両側面と裏面には固いものを敲いたような痕があり、刃部には半円状扁平打製石器底面のすり痕のような使用面がある。いずれも、この磨製石斧が破損した後の二次使用と考えられるものである。

半円状扁平打製石器（第107図Ｓ237～110図Ｓ256）

ａ：扁平な自然礫の一側辺に剥離を加え、これを潰し擦った痕跡のあるもの（Ｓ237～Ｓ244）、ｂ：ａの１側辺以外の辺にも剥離や潰しを加えているが、表裏面を磨いていないもの（Ｓ245～250）、ｃ：ほぼ全面を擦っているもの（Ｓ251～256）などがある。これらの中には、くぼみ石に転用されたと考えられるもの（Ｓ29・241・242）もある。ＡＩ区から65点、ＡⅡ区から５点の計70点が出土している。

くぼみ石（第110図257～260）

いろいろな形状の円礫にくぼみを有する石器であるが、Ｓ257～259のように全面磨がかれているものが多く、いわゆる磨石を兼ねているものが大半を占める。ＡＩ区から145点、ＡⅡ区から25点の計170点が出土している。

角棒状石製品（第110図Ｓ261～263）

節理等によって、断面形が四～六角形を呈するように割れた棒状の石の、稜線部分をわずかに擦っている石器である。これまでは、このような棒状の石が縄文土器と共伴しても、石器としての認定が難しかったが、Ｓ261・262のように人為的に擦ったものがあることから石器とした。Ｓ263のように人の手が加わっていないように見えるものが大半を占めるが、それらの中には火熱を受けたり、故意に割られて、それが接合したりするもの（Ｓ263）があることから、

これらは、縄文人が何らかの目的で遺跡に持ち込んだものであると考えられる。AⅠ区から33点、AⅡ区から11点の計44点出土しており、石材は凝灰岩や小さい石英安山岩などである。

(4) 石製品

計31点の石製品が出土しており、大半は前期に属するものと考えられる。

有孔円盤状石製品　（第111図S264〜272）

0.5〜1㎝の厚さで板状に割れた自然石を、打ち欠いたり擦ったりして円形に仕上げ、中央に小孔を穿孔したものである。9点出土しているが、完形品はS265が1点だけである。表裏面は、自然に割れた面そのままのものもあるが、大半はわずかに擦られている。泥岩や凝灰岩など、軟質の石材が多い。S269・271・272は小孔が見えていないが、この石製品の破損品と考えられる。

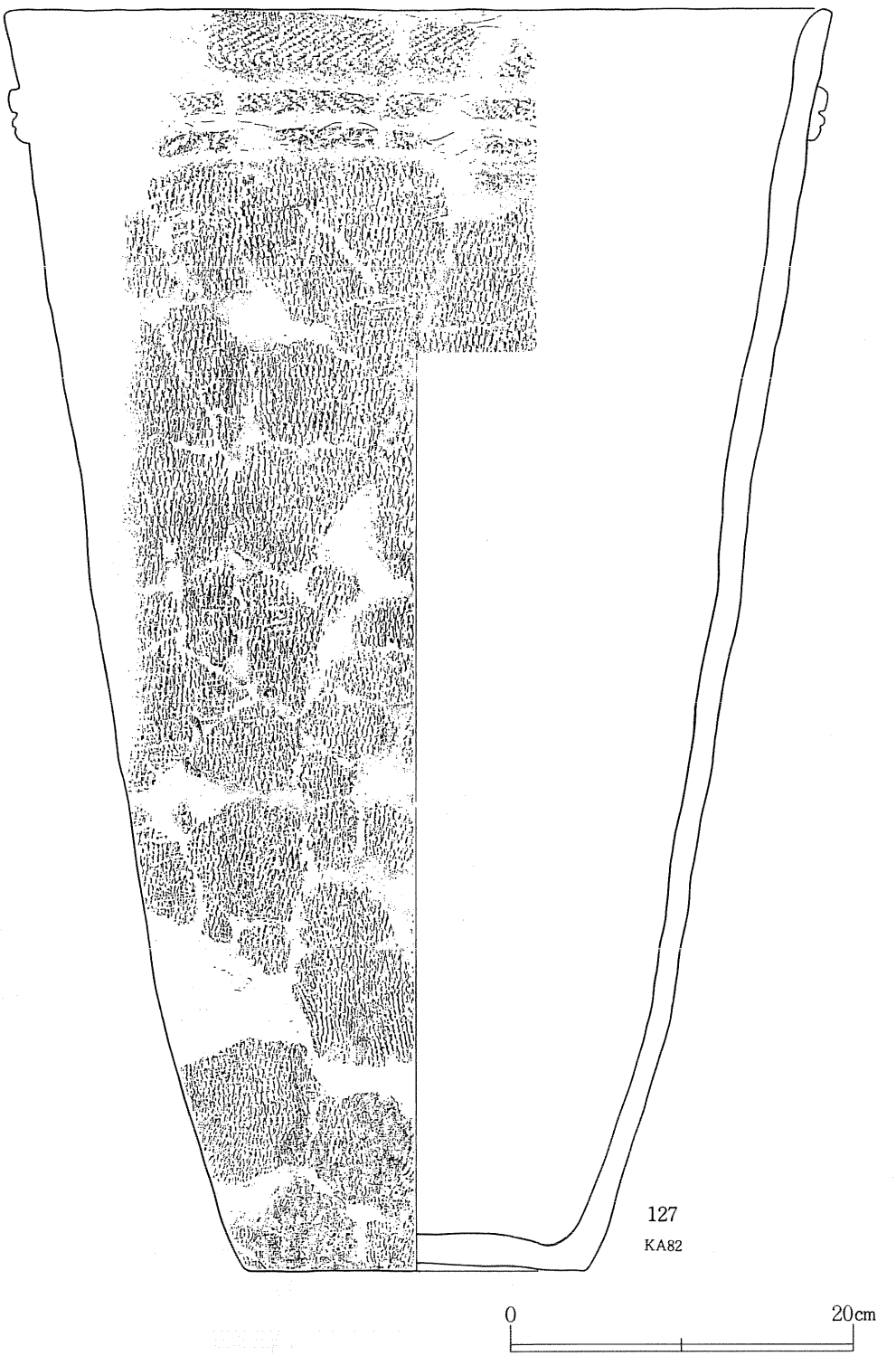
円盤状石製品（第112図273〜286）

板状に割れた軟質の凝灰岩や泥岩を、粗く打ち割った後に周囲や表裏面を擦って円形に仕上げた石製品である。10点出土している。

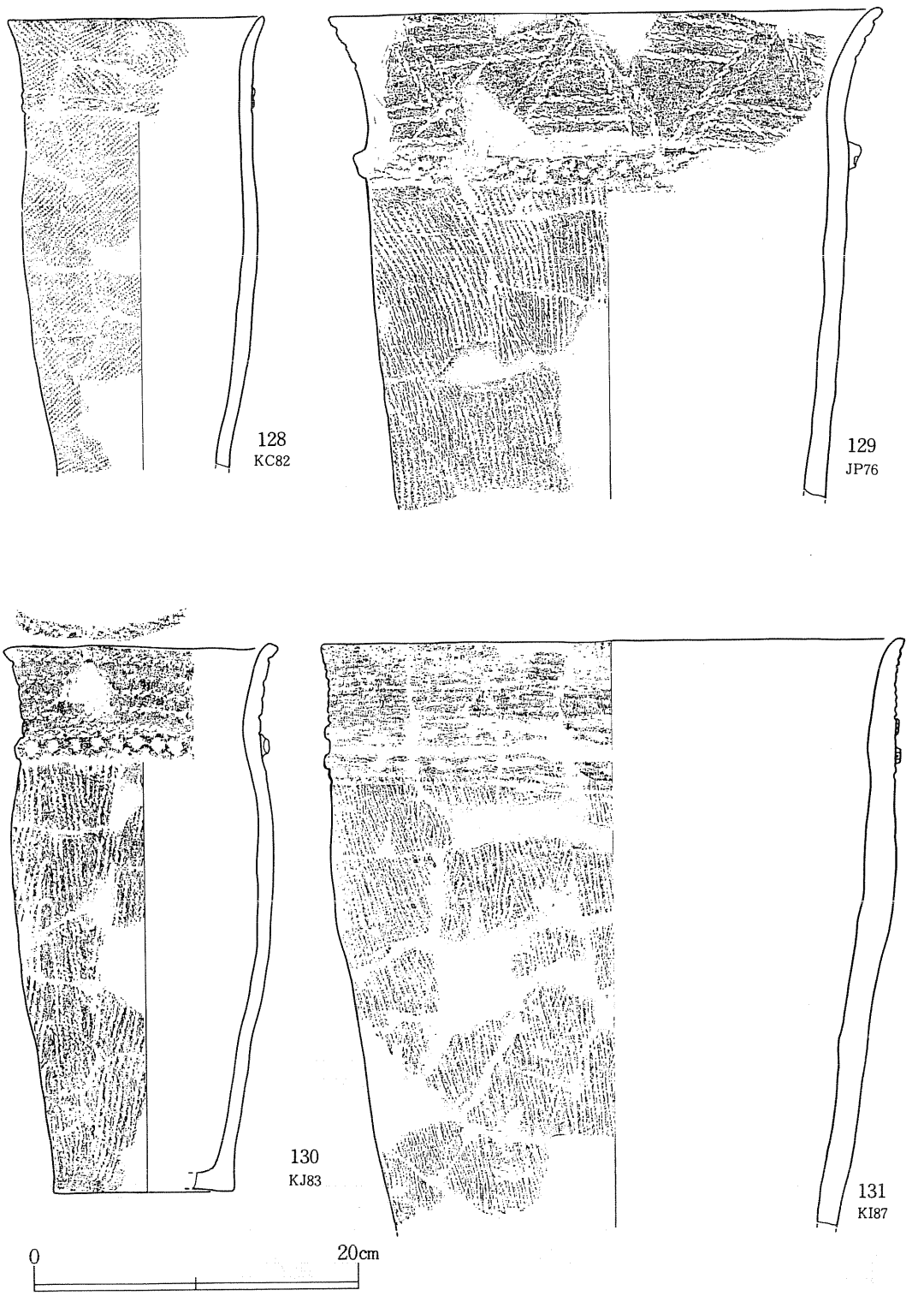
その他の石製品　（第113図S283〜294）

定型化した石製品としての名称を付すことが難しいものを一括した。S283〜286は、板状に割れた凝灰岩の表裏面を擦っているもの。S287は、擦って円形に仕上げた後に、中央部に小孔を穿っているが、その形状及び大きさと厚さとの比から、有孔円盤状石製品には含めなかった。S289は、棒状を呈する石製品が輪切り状に割れたもの、S289は、角棒状石製品の先端部にくびれ部を作出したものである。S290は、中央に浅い小溝を有する。S237〜290までの石材は、凝灰岩である。S292・293は黒色の頁岩をきれいに磨いている。S294は、石英安山岩の円礫の擦られたものである。

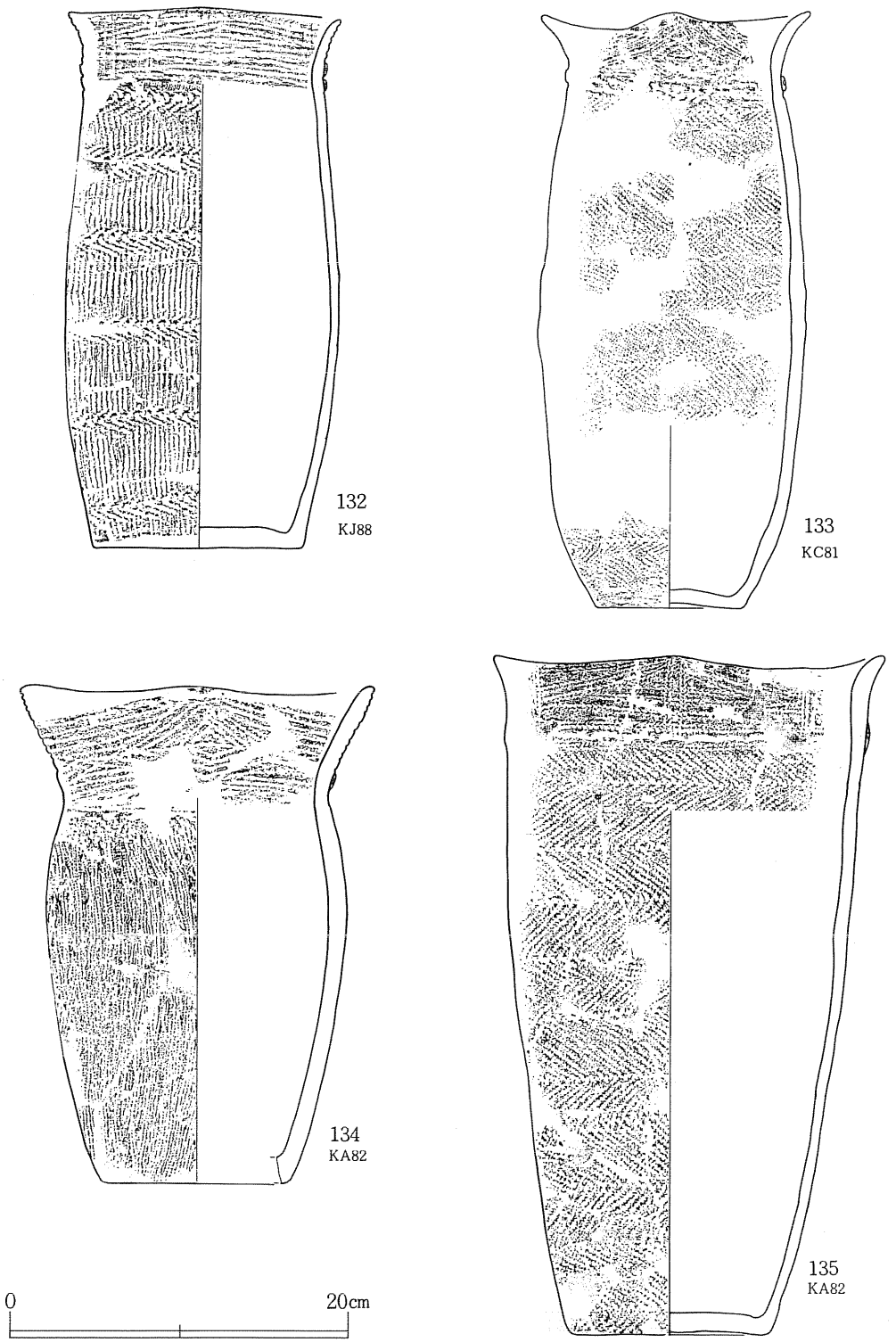
第60図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（１）・土器（１）



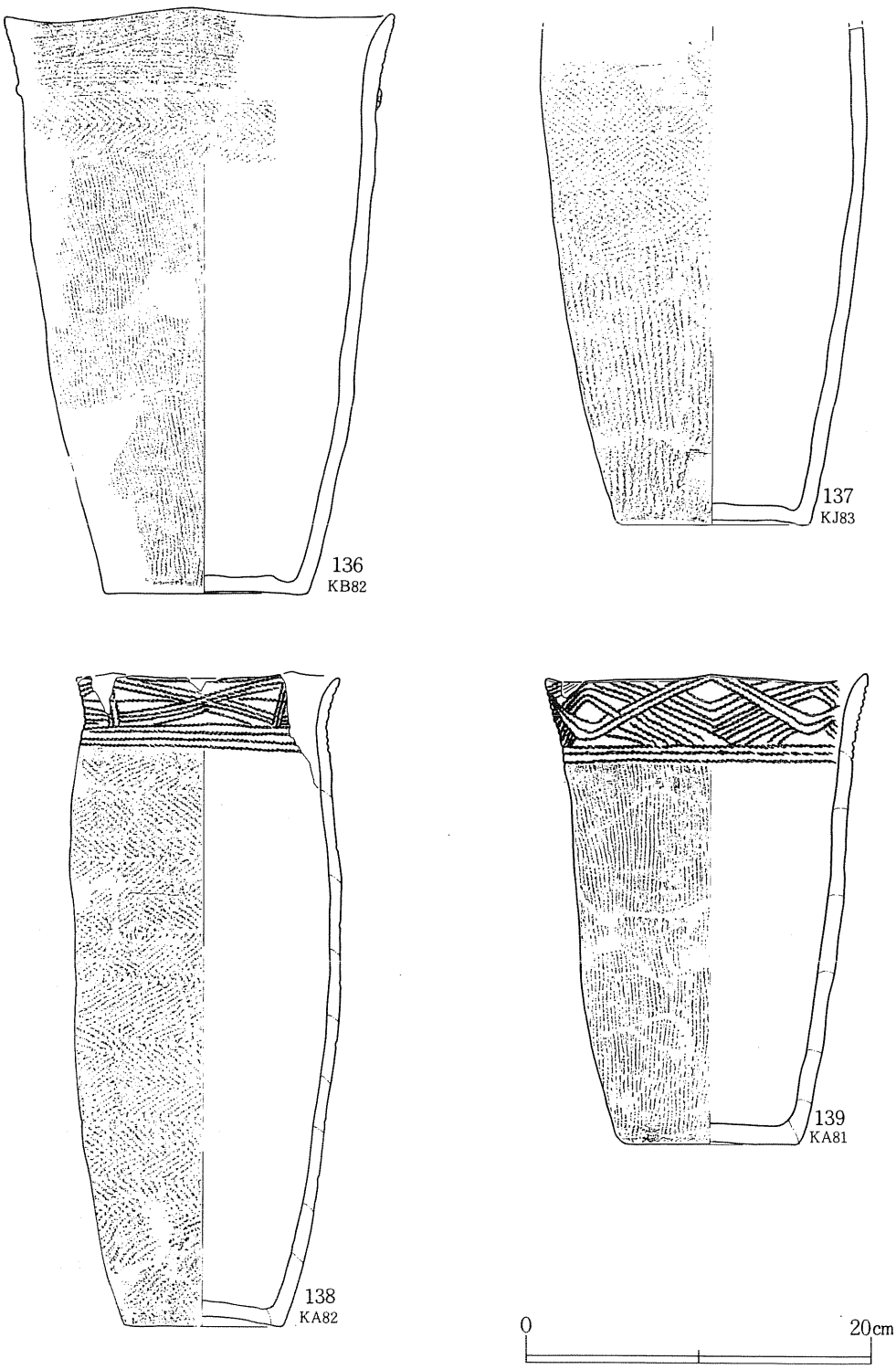
第61図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（２）・土器（２）



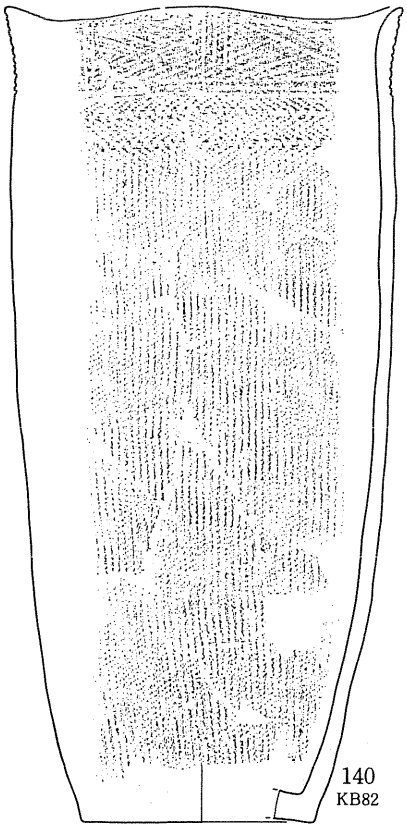
第62図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（３）・土器（３）

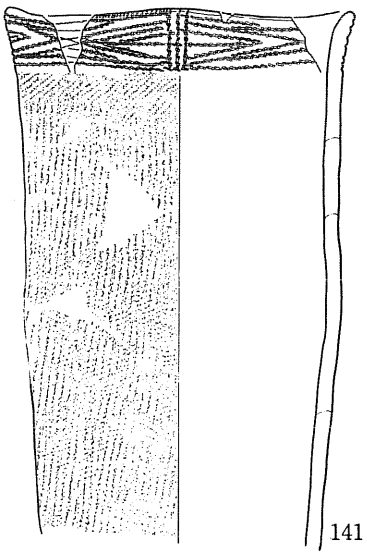


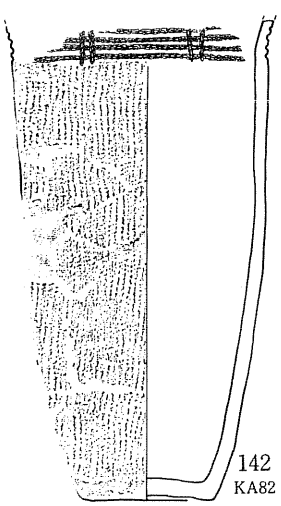
第63図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（4）・土器（4）

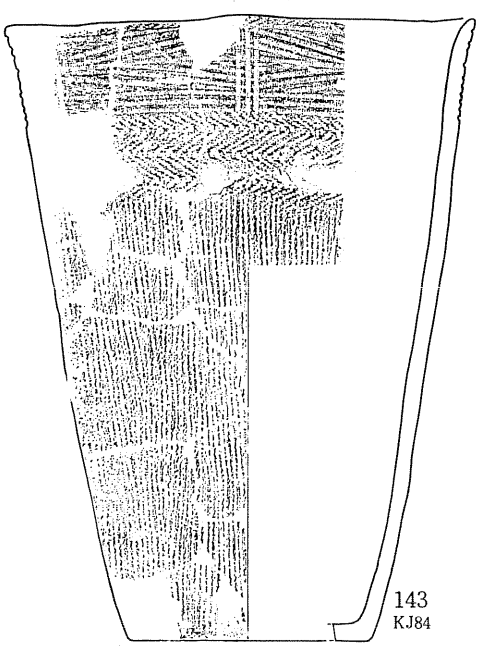


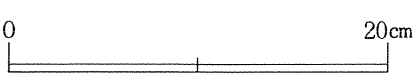
第64図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（５）・土器（５）



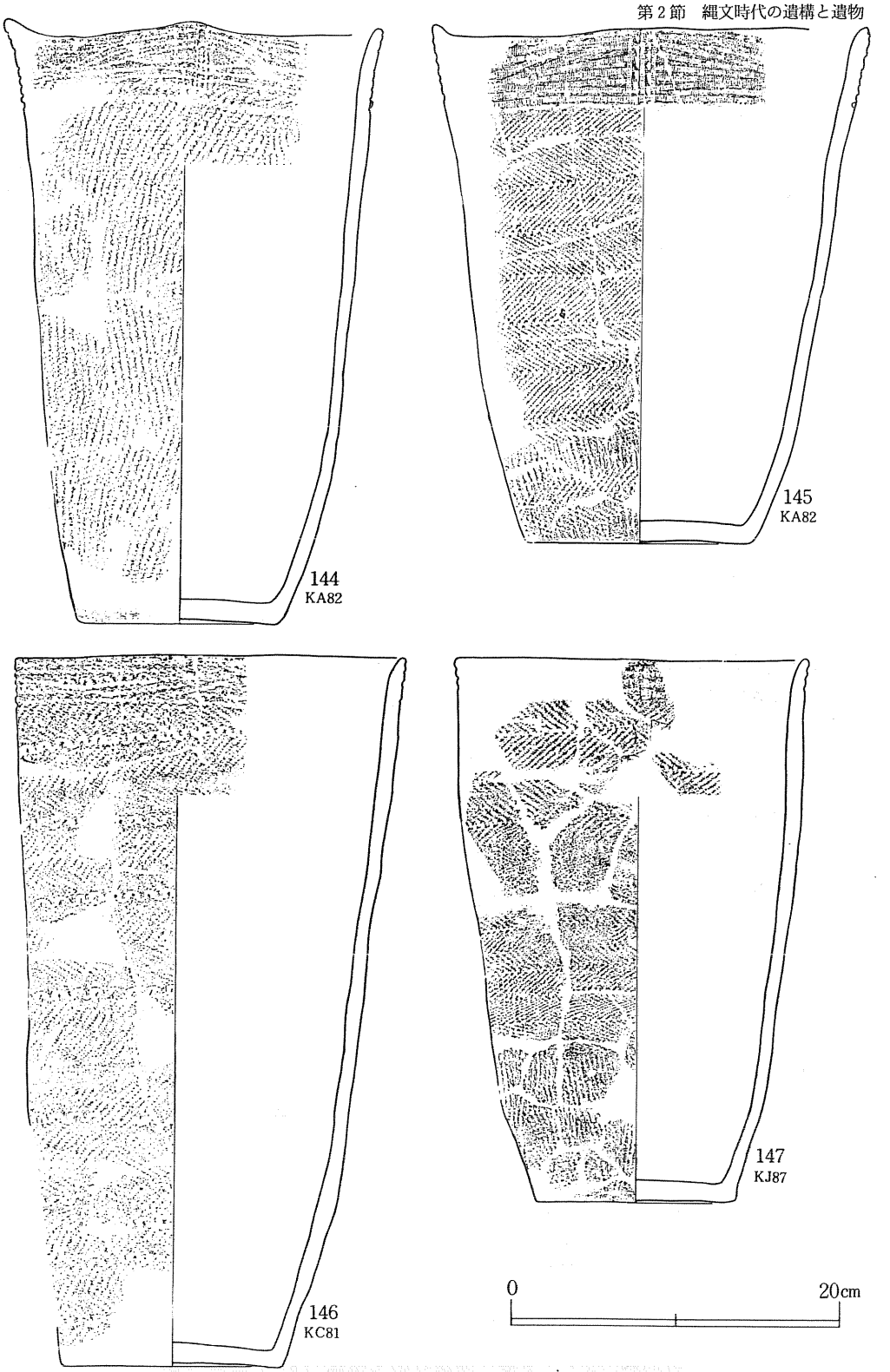




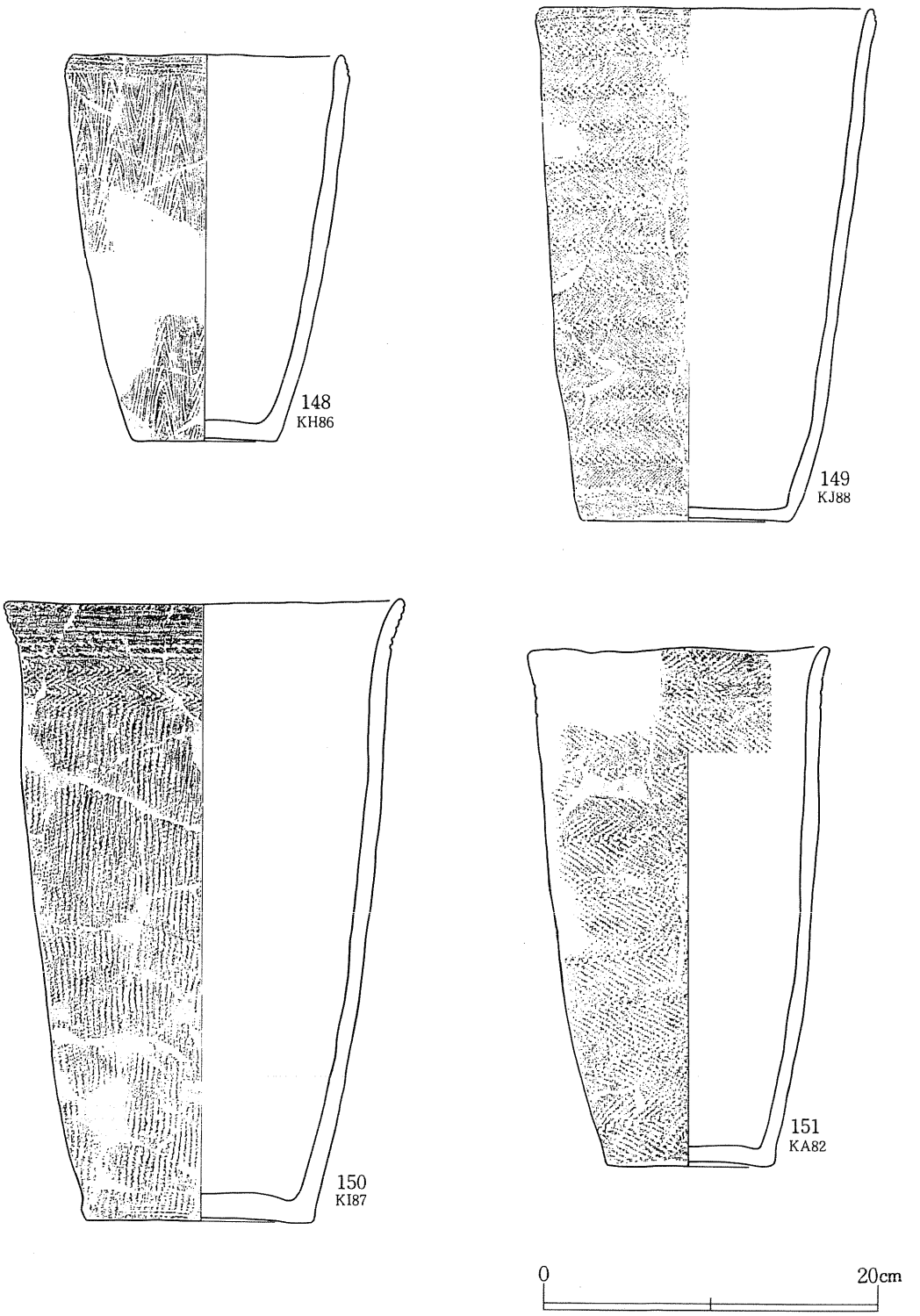




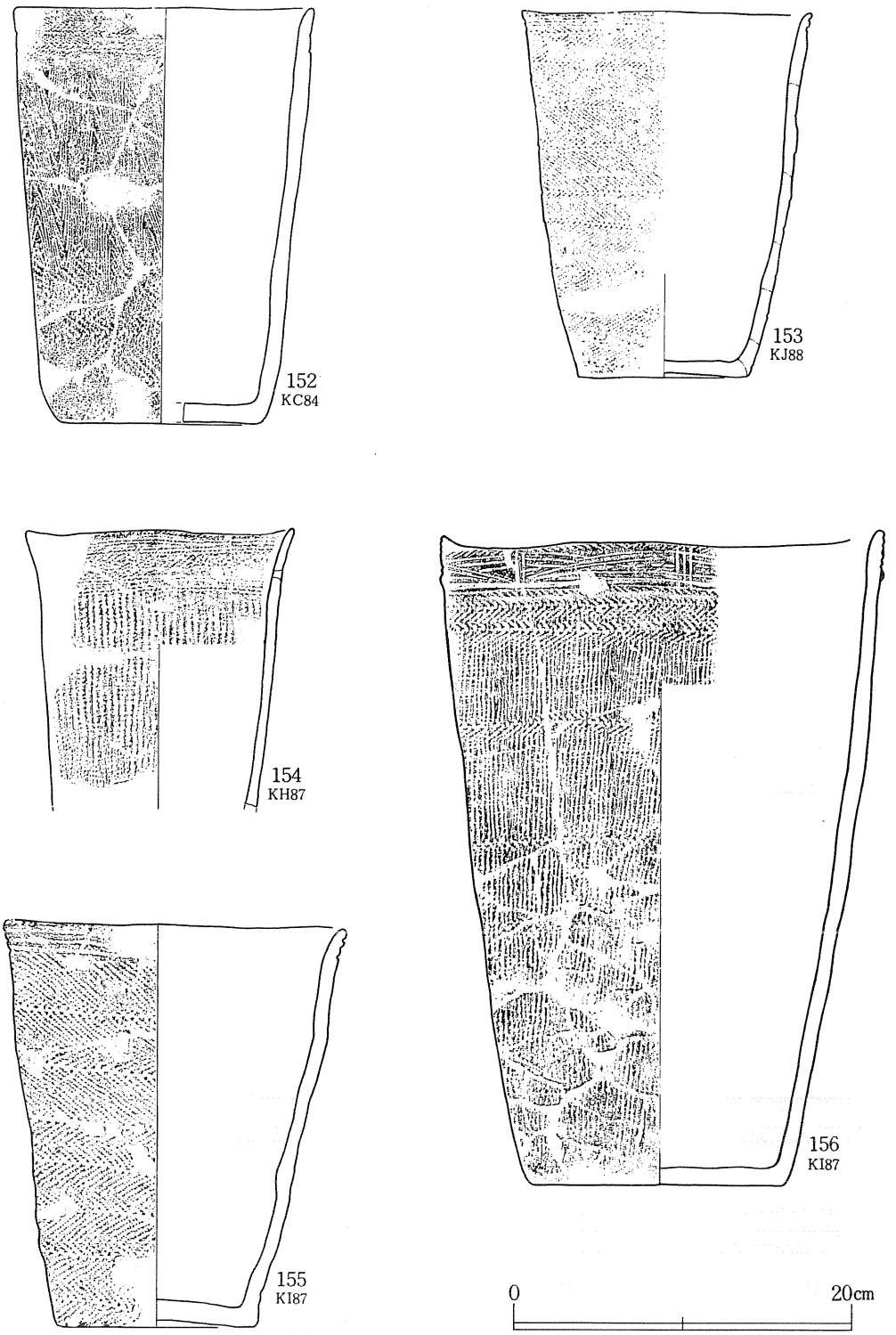
第65図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（６）・土器（６）



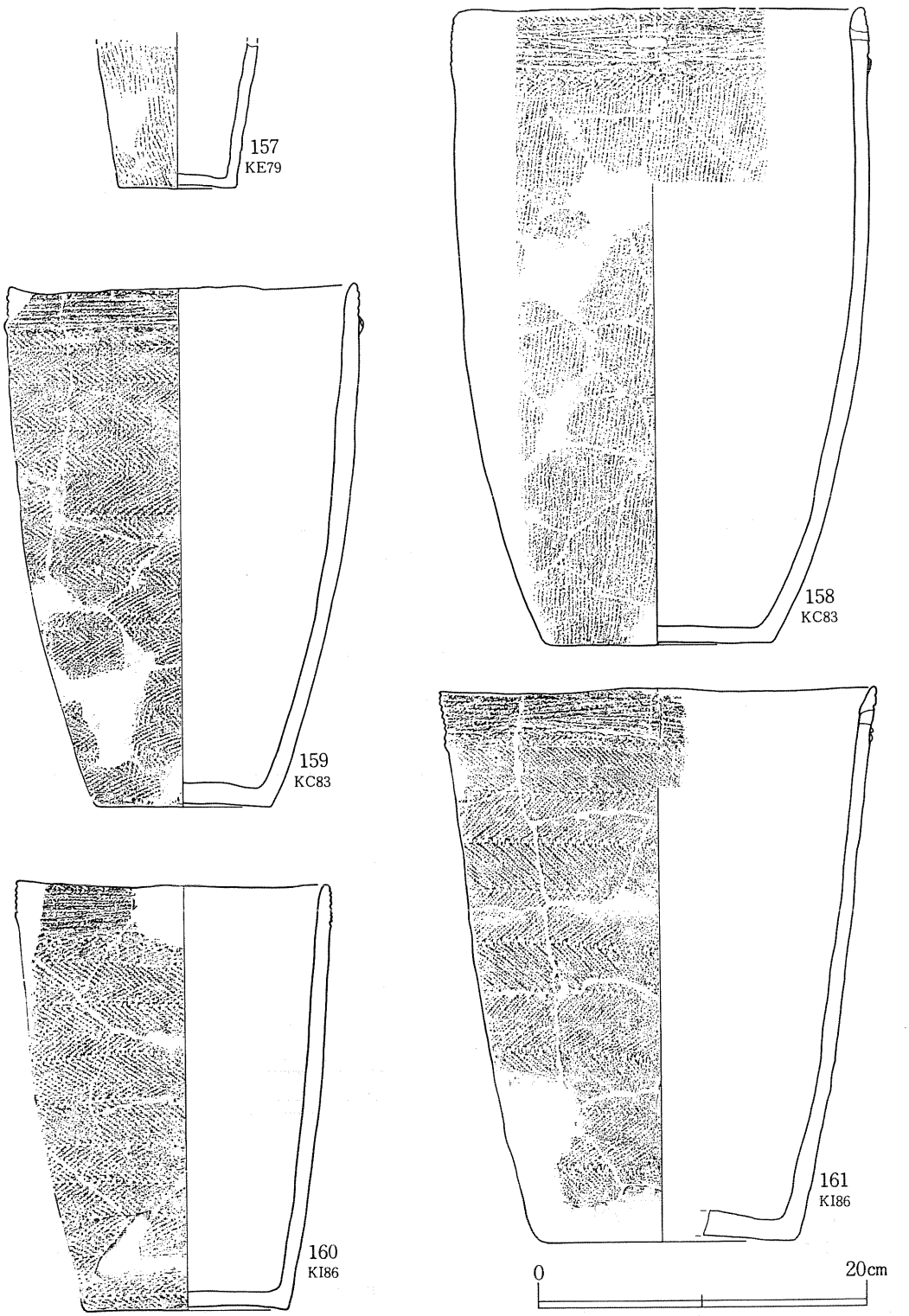
第66図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（７）・土器（７）



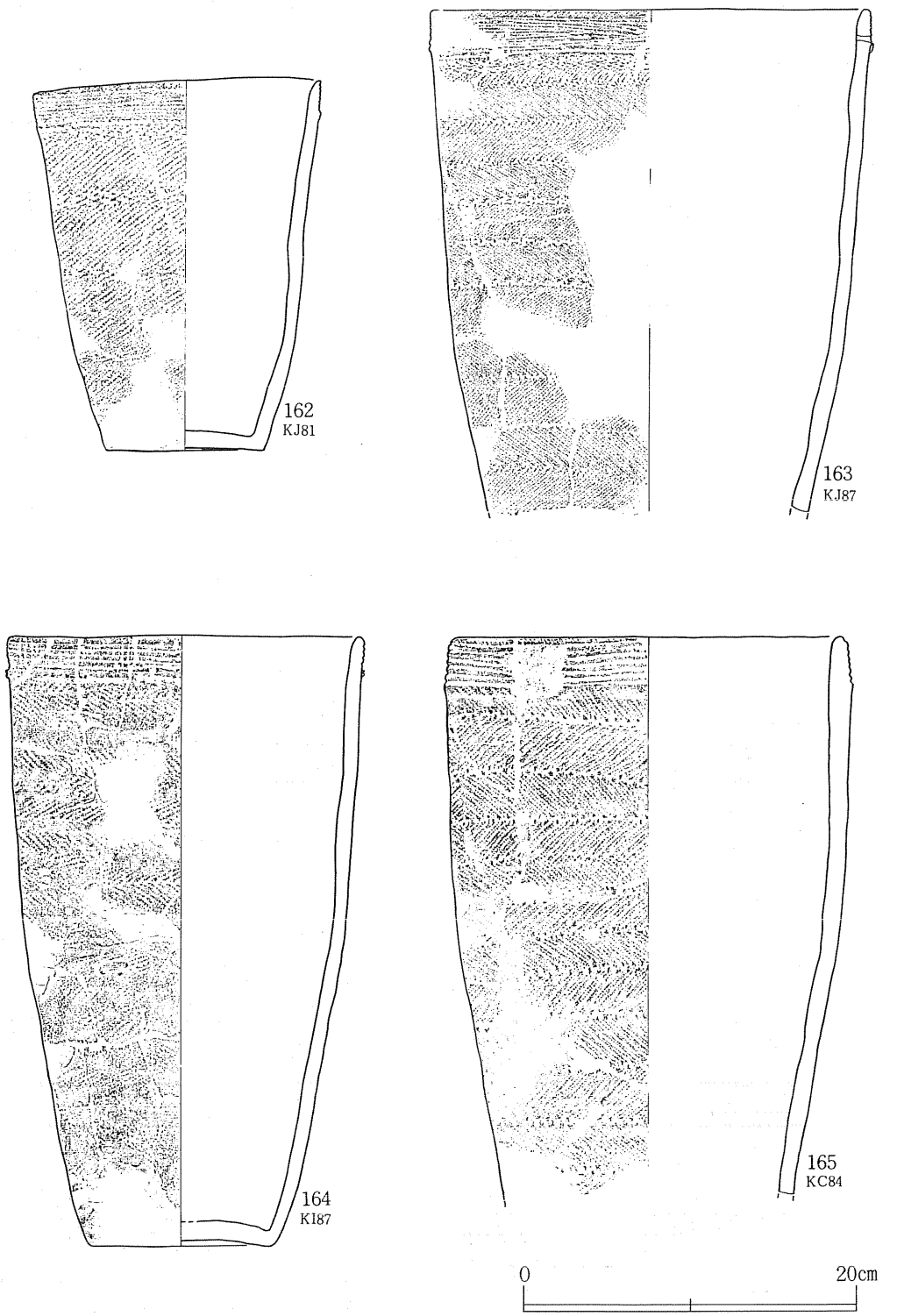
第67図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（８）・土器（８）



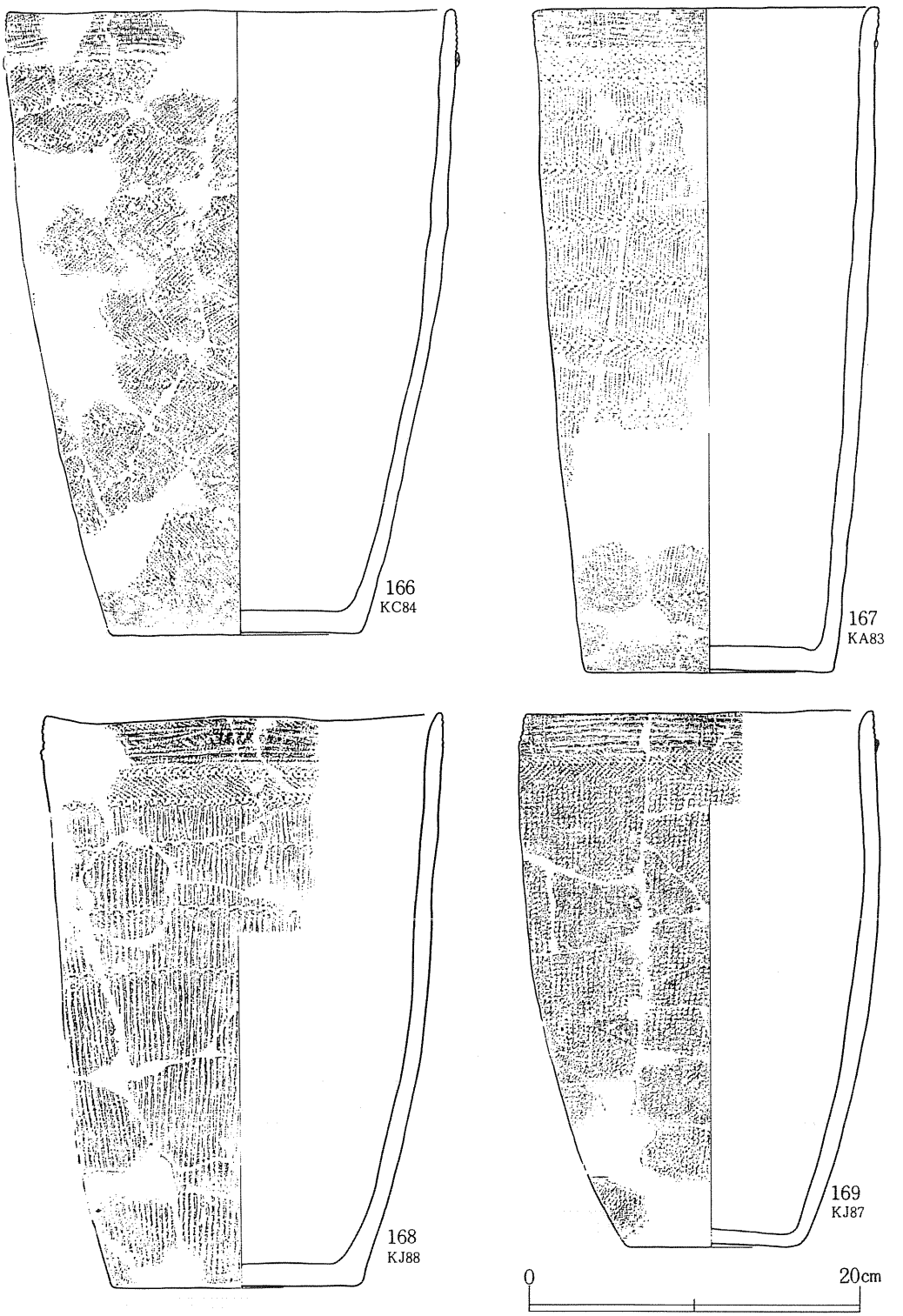
第68図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（９）・土器（９）



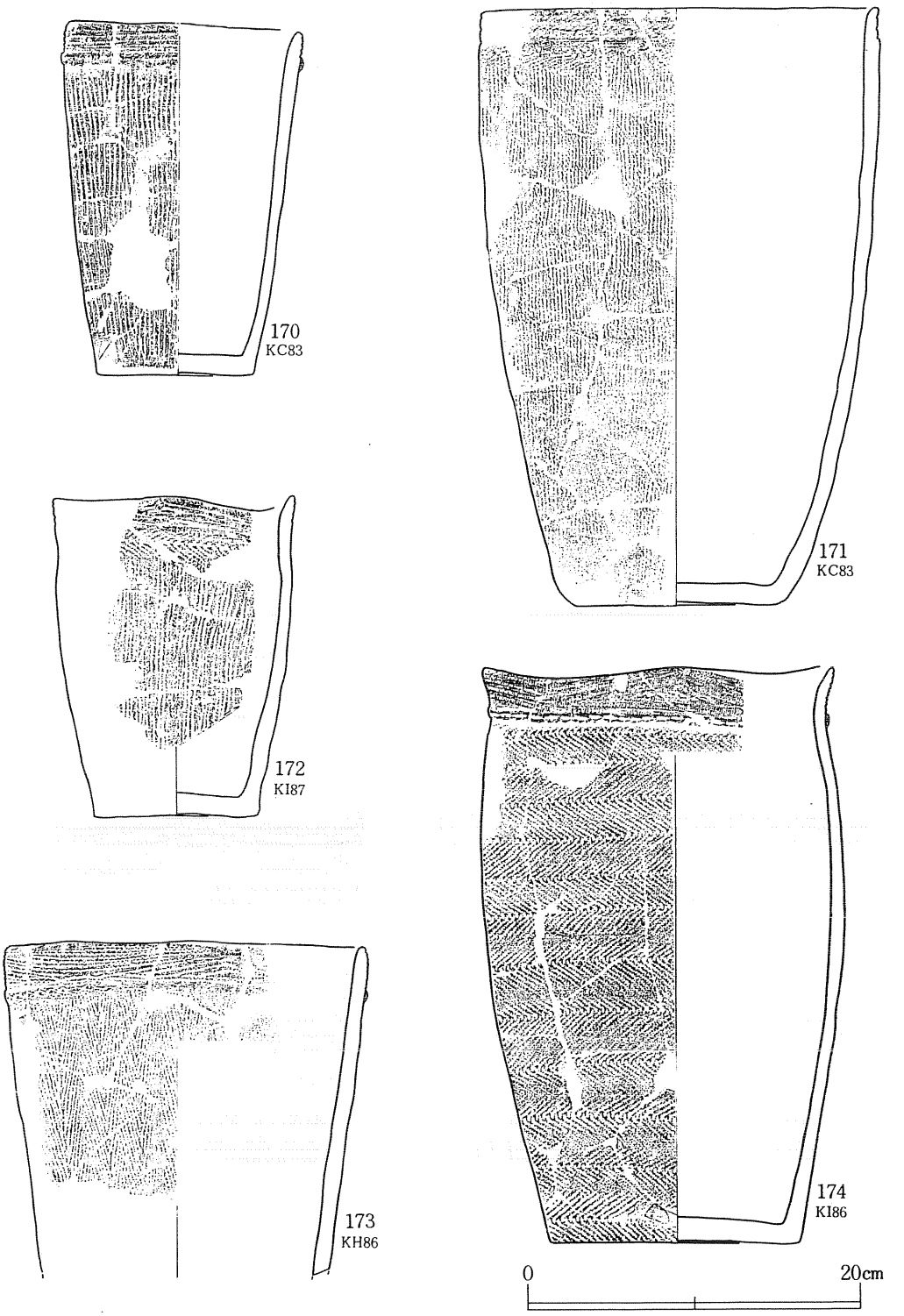
第69図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（10）・土器（10）



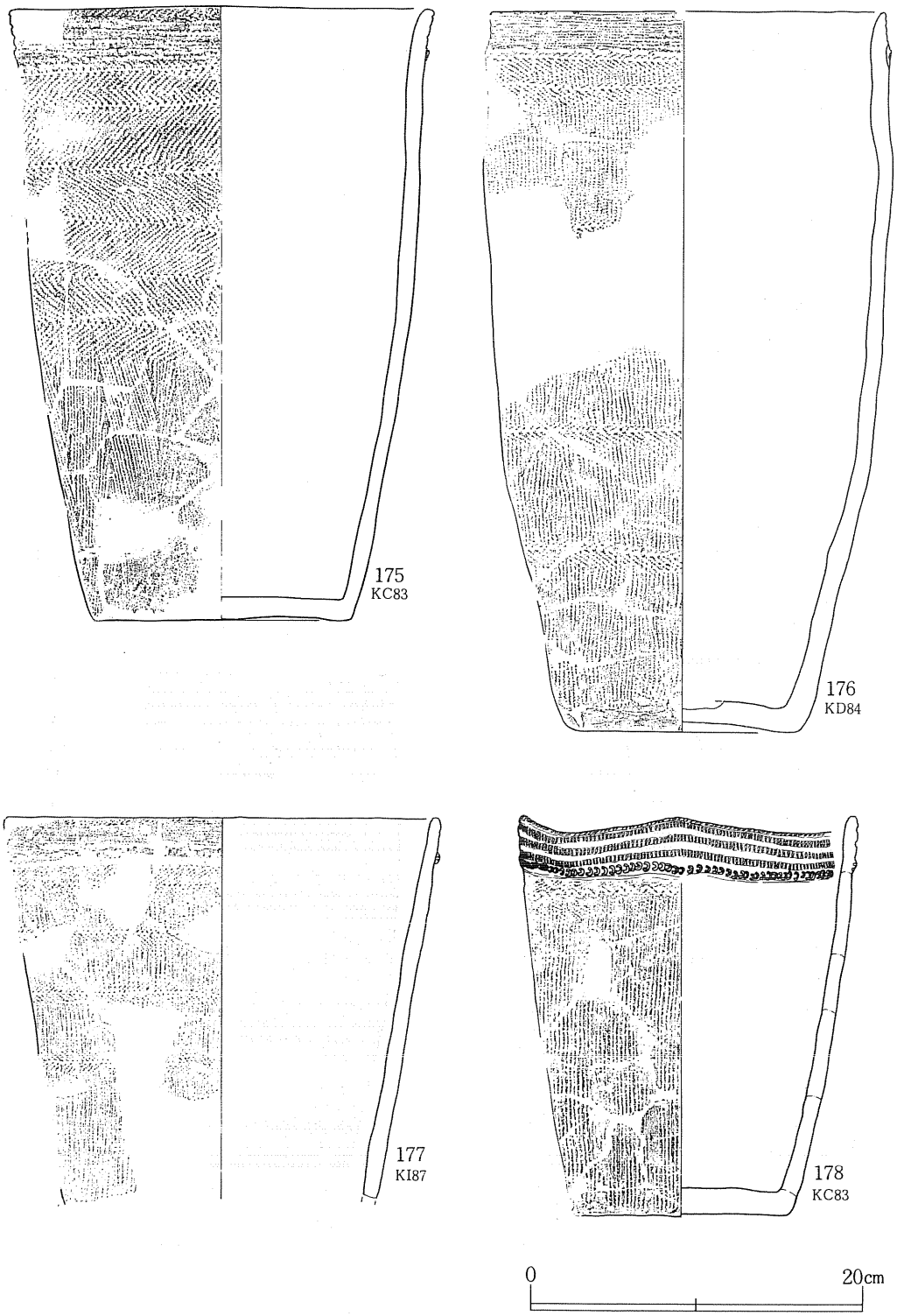
第70図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（11）・土器（11）



第71図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（12）・土器（12）



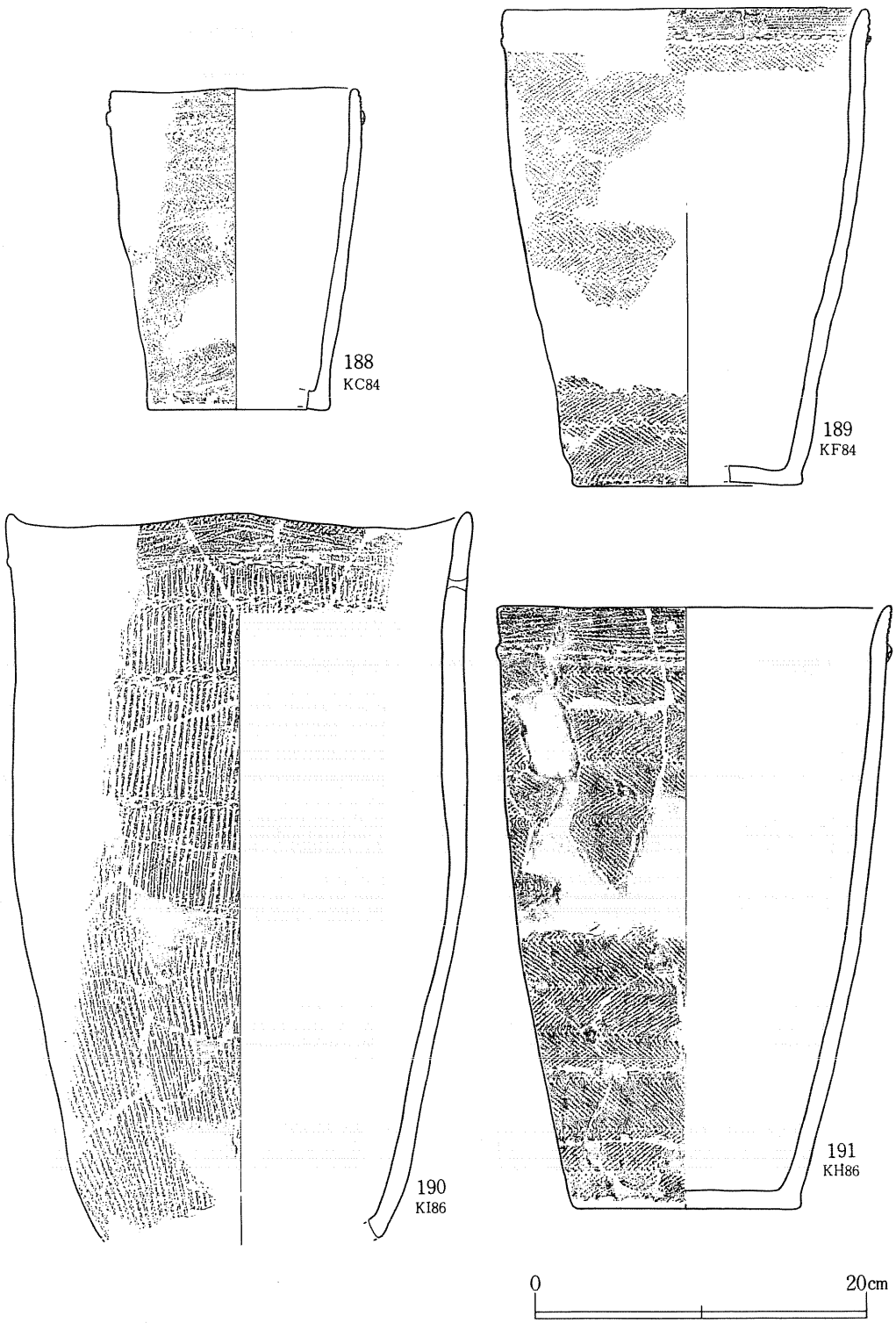
第72図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（13）・土器（13）



第73図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（14）・土器（14）

第74図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（15）・土器（15）

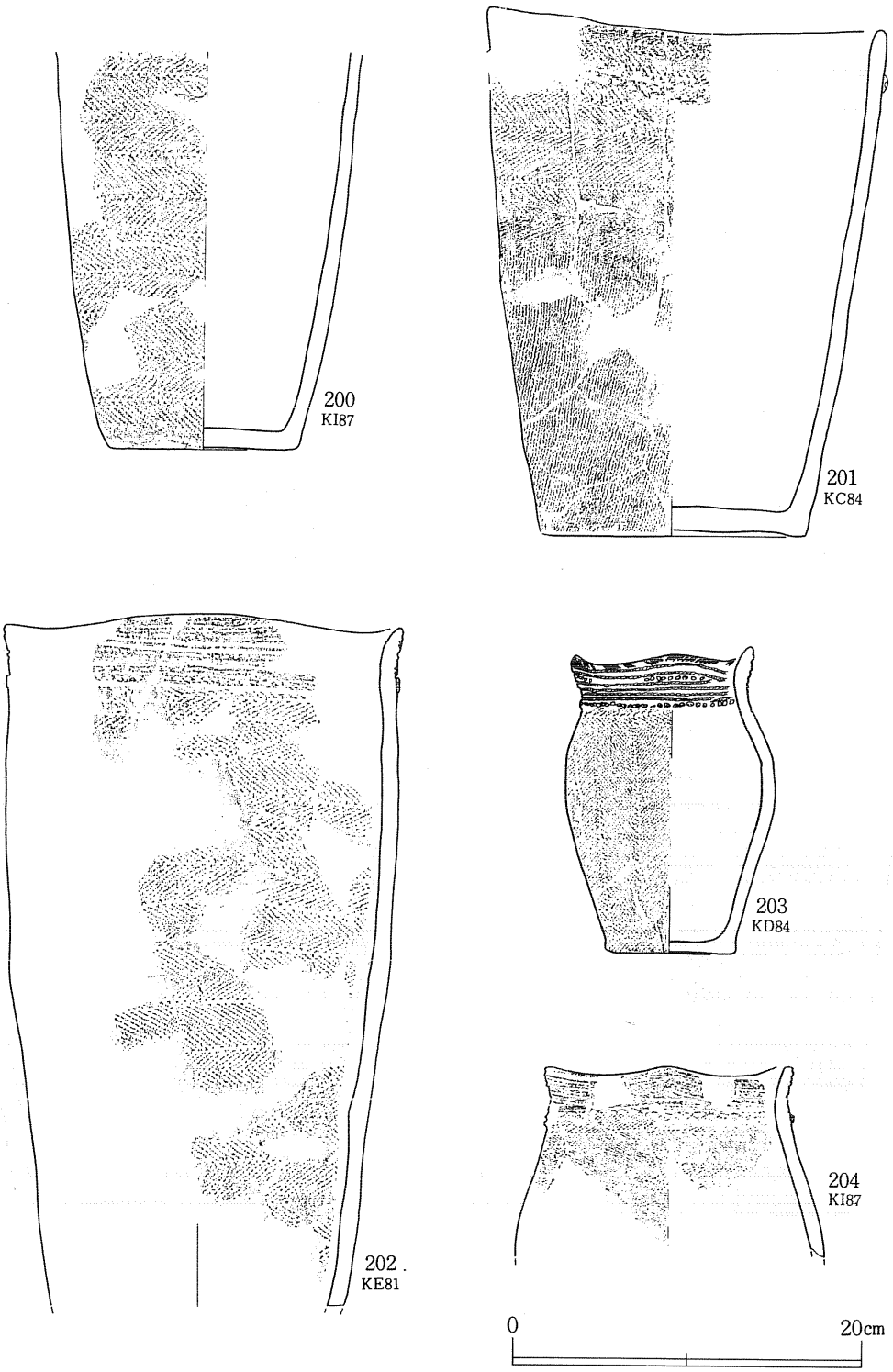
第75図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（16）・土器（16）



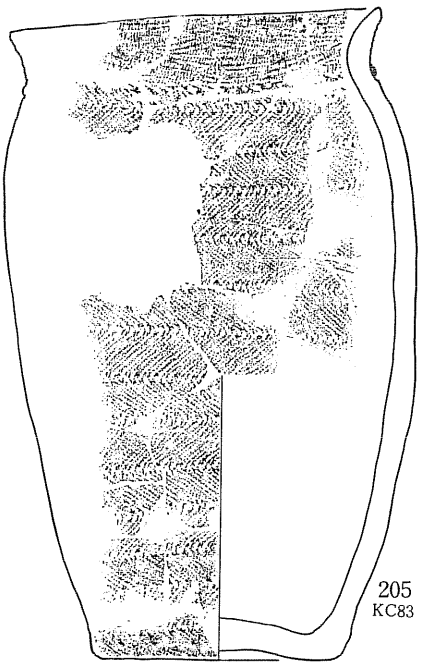
第76図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（17）・土器（17）

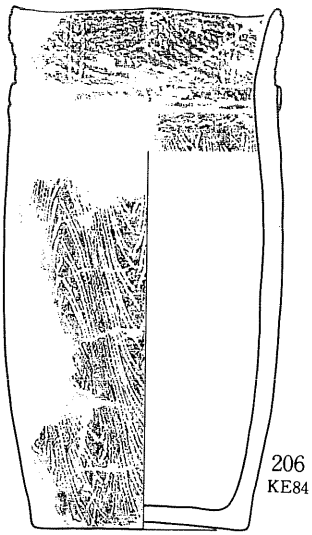
第77図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（18）・土器（18）

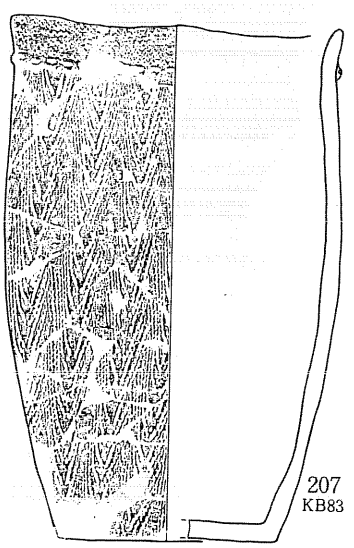
第78図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（19）・土器（19）

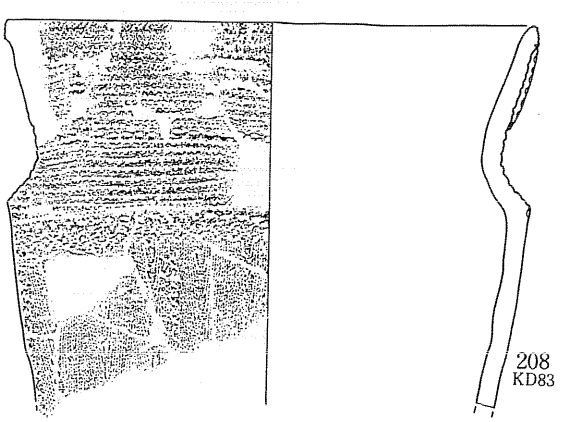


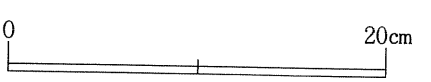
第79図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（20）・土器（20）



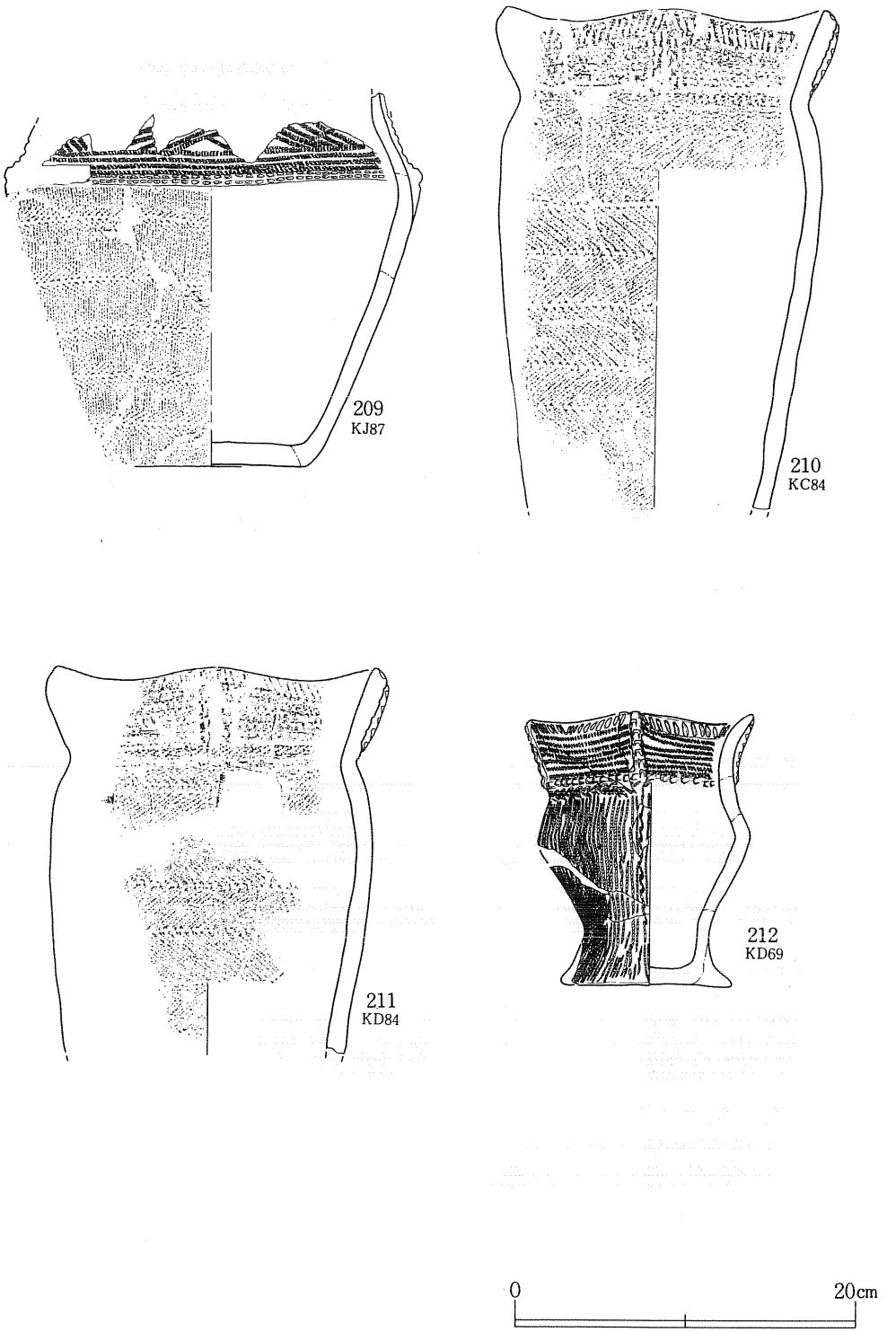




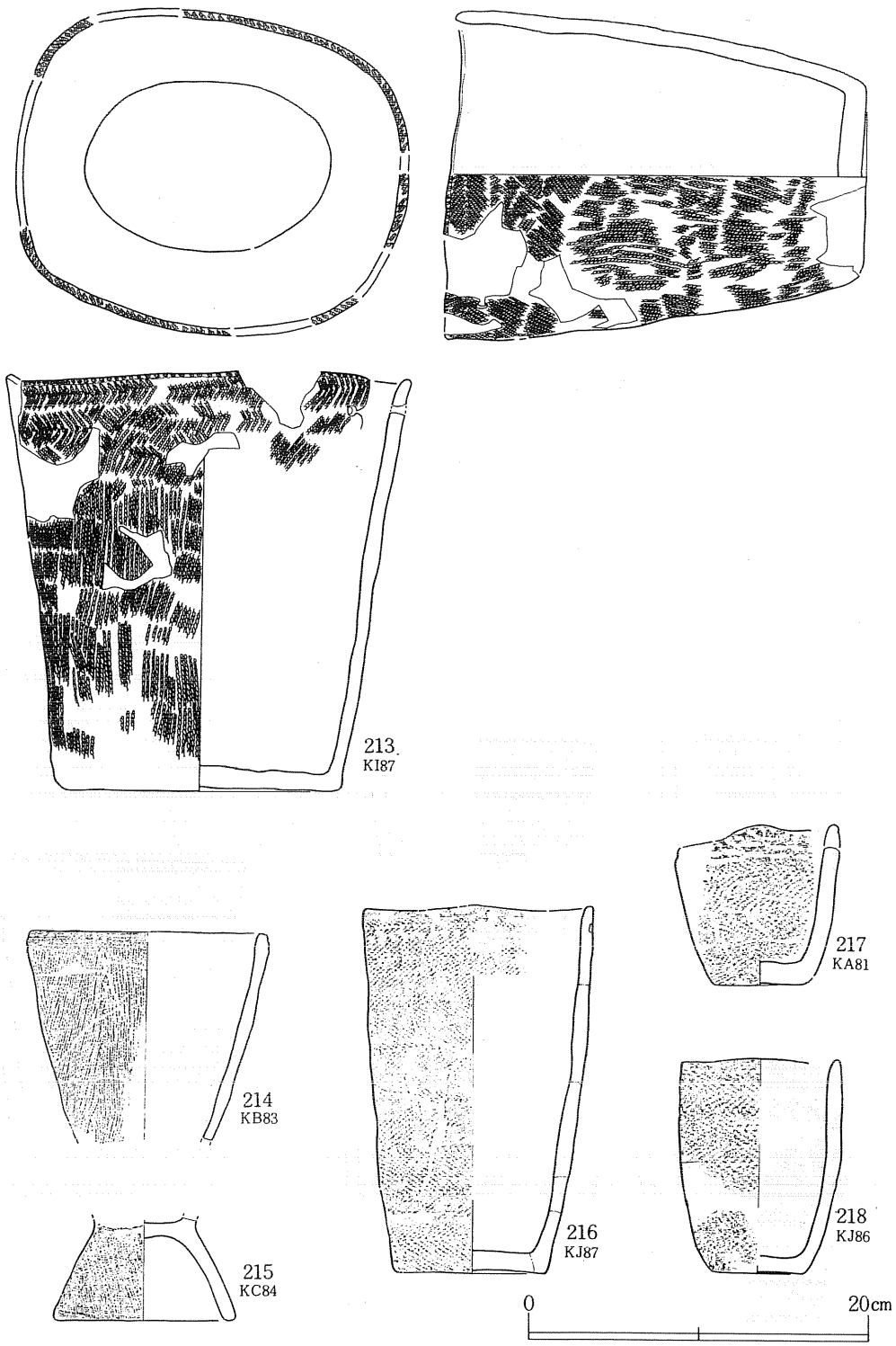




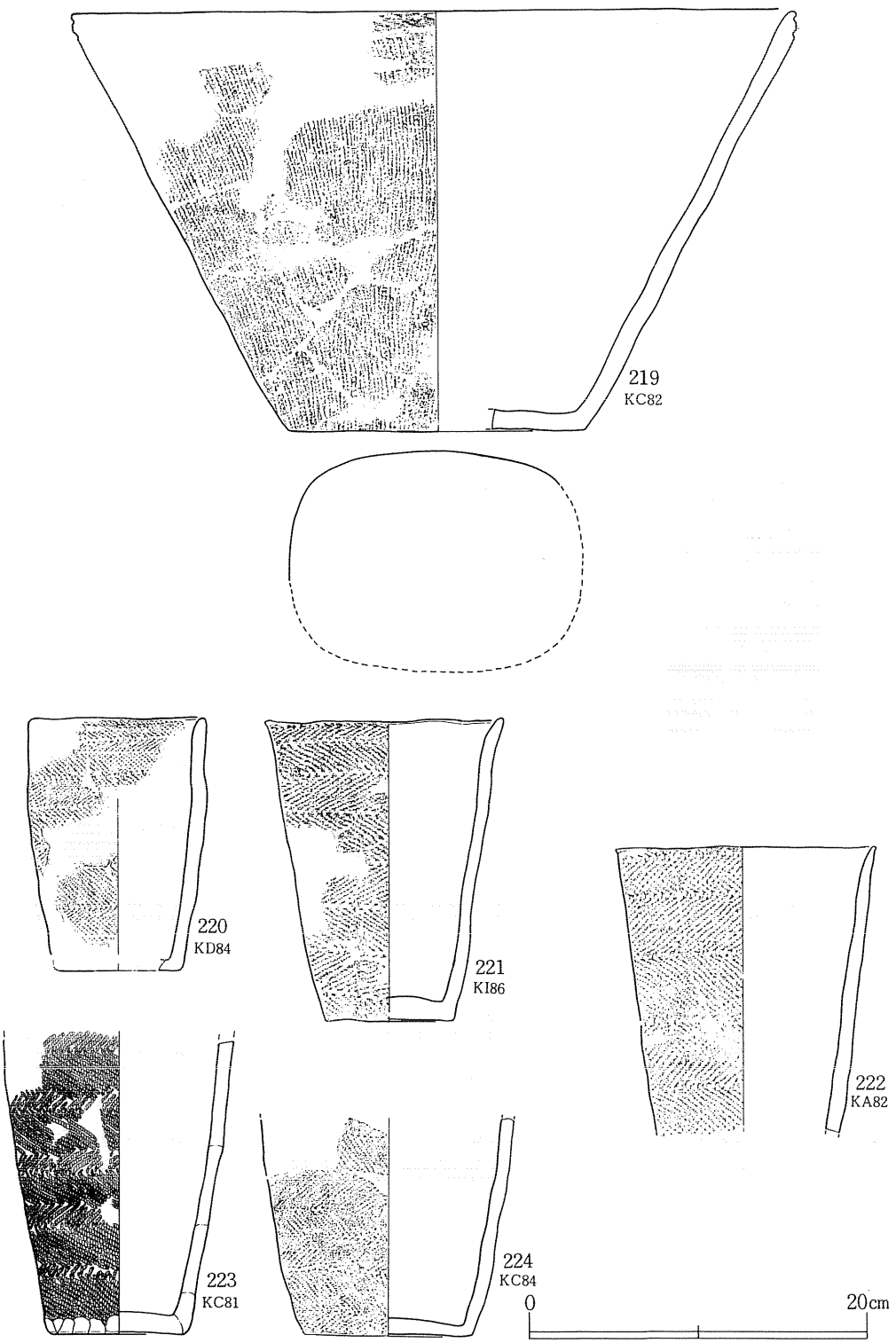
第80図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（21）・土器（21）



第81図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（22）・土器（22）

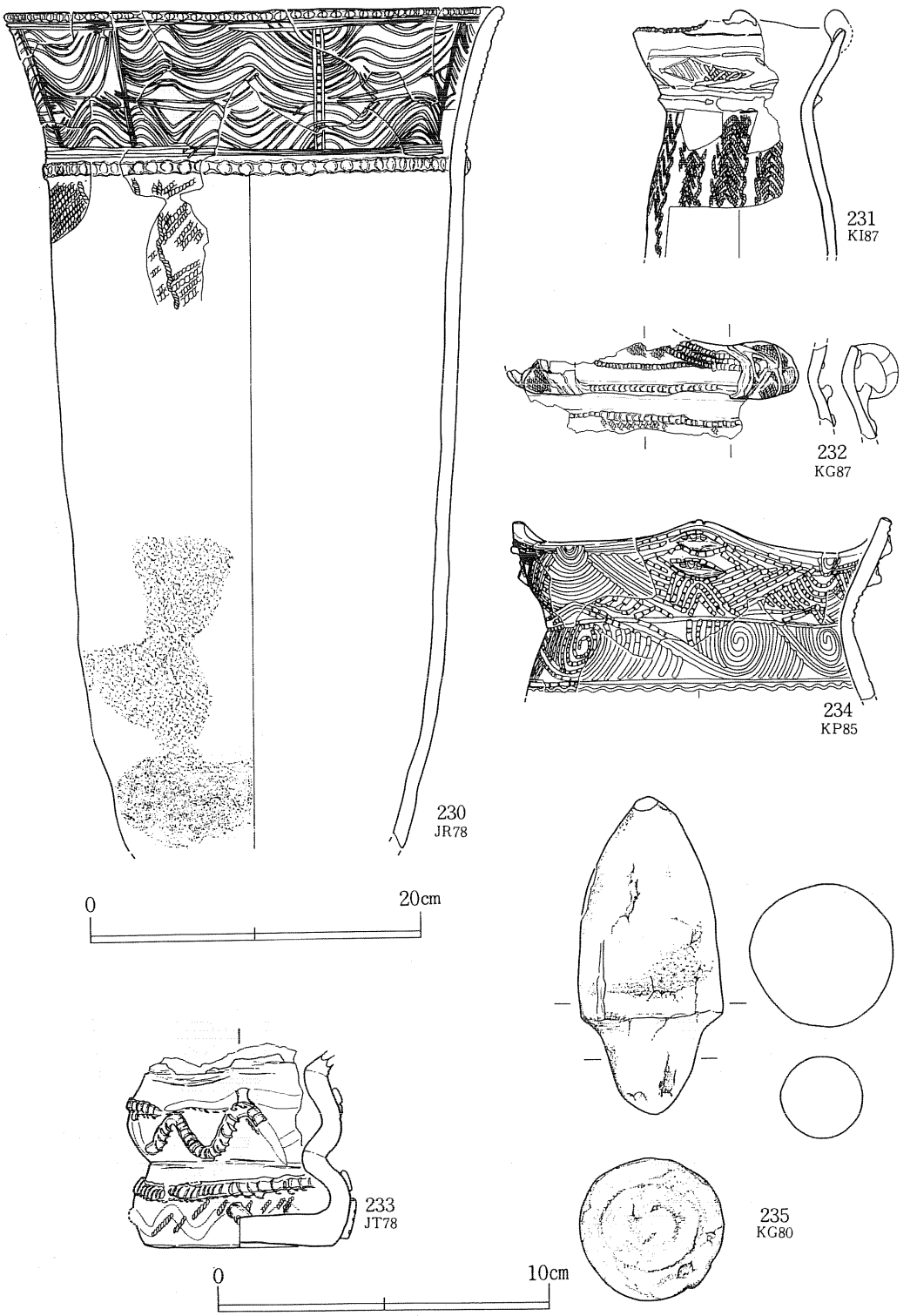


第82図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（23）・土器（23）

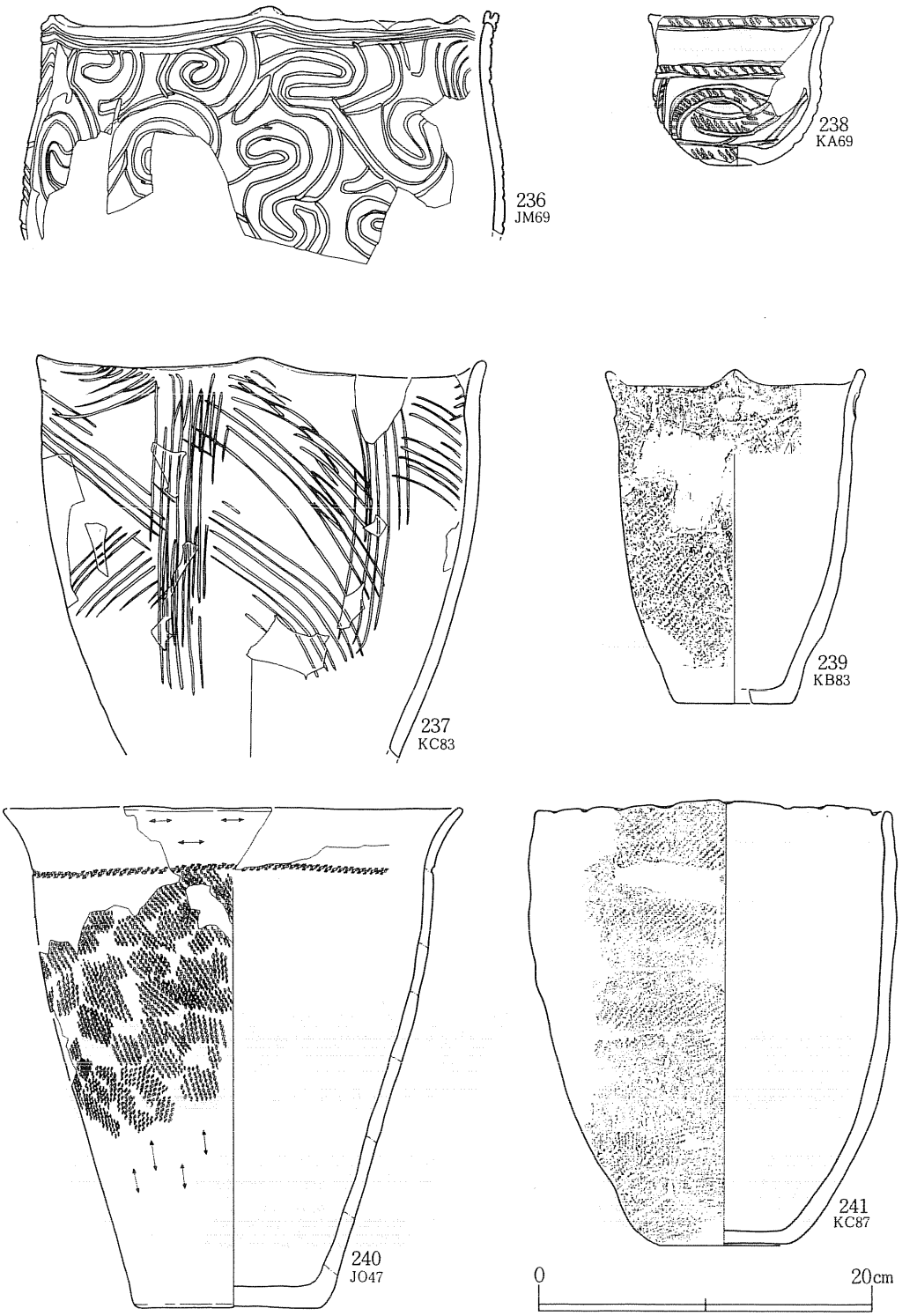


第83図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（24）・土器（24）

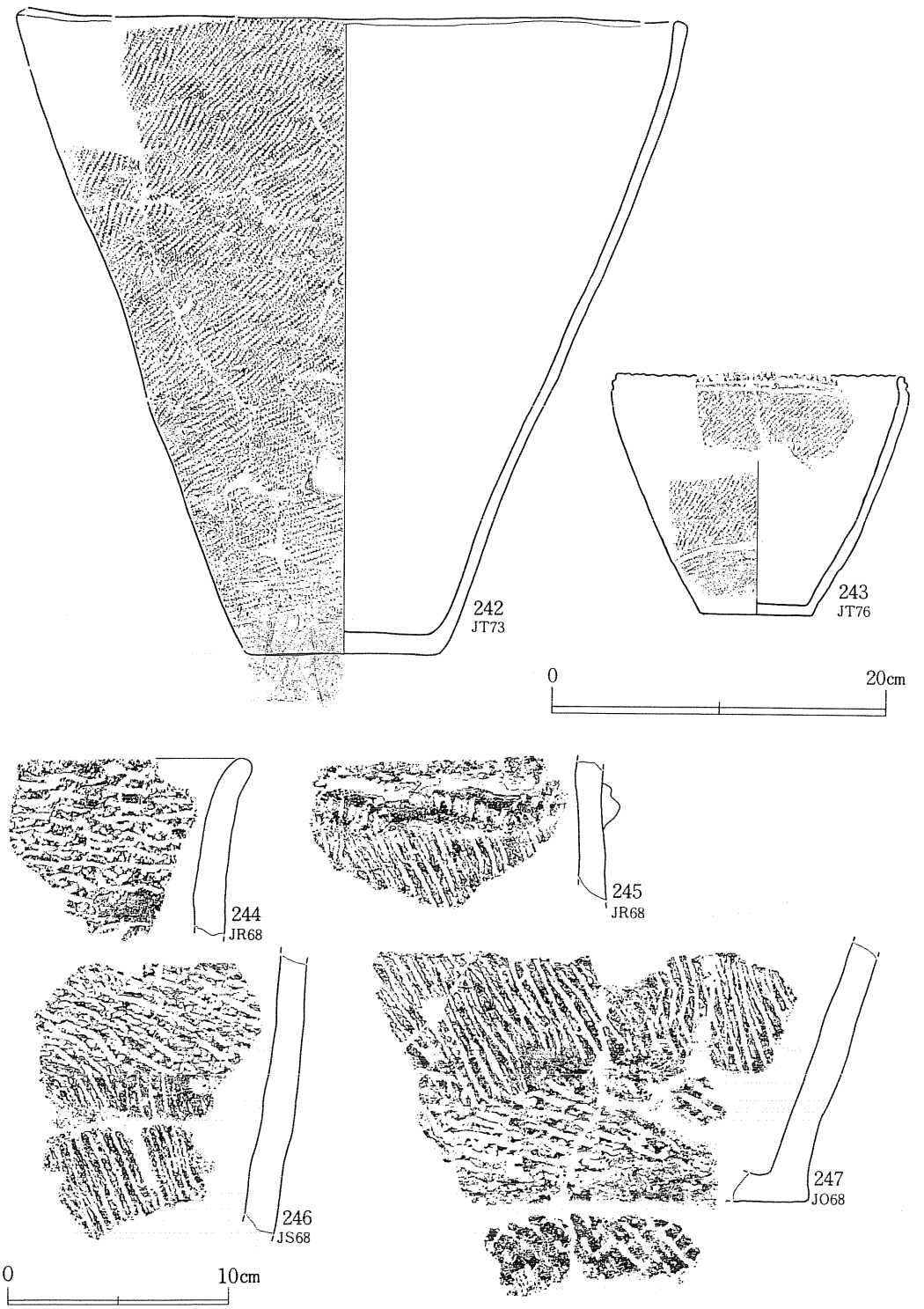
第84図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（25）・土器（25）



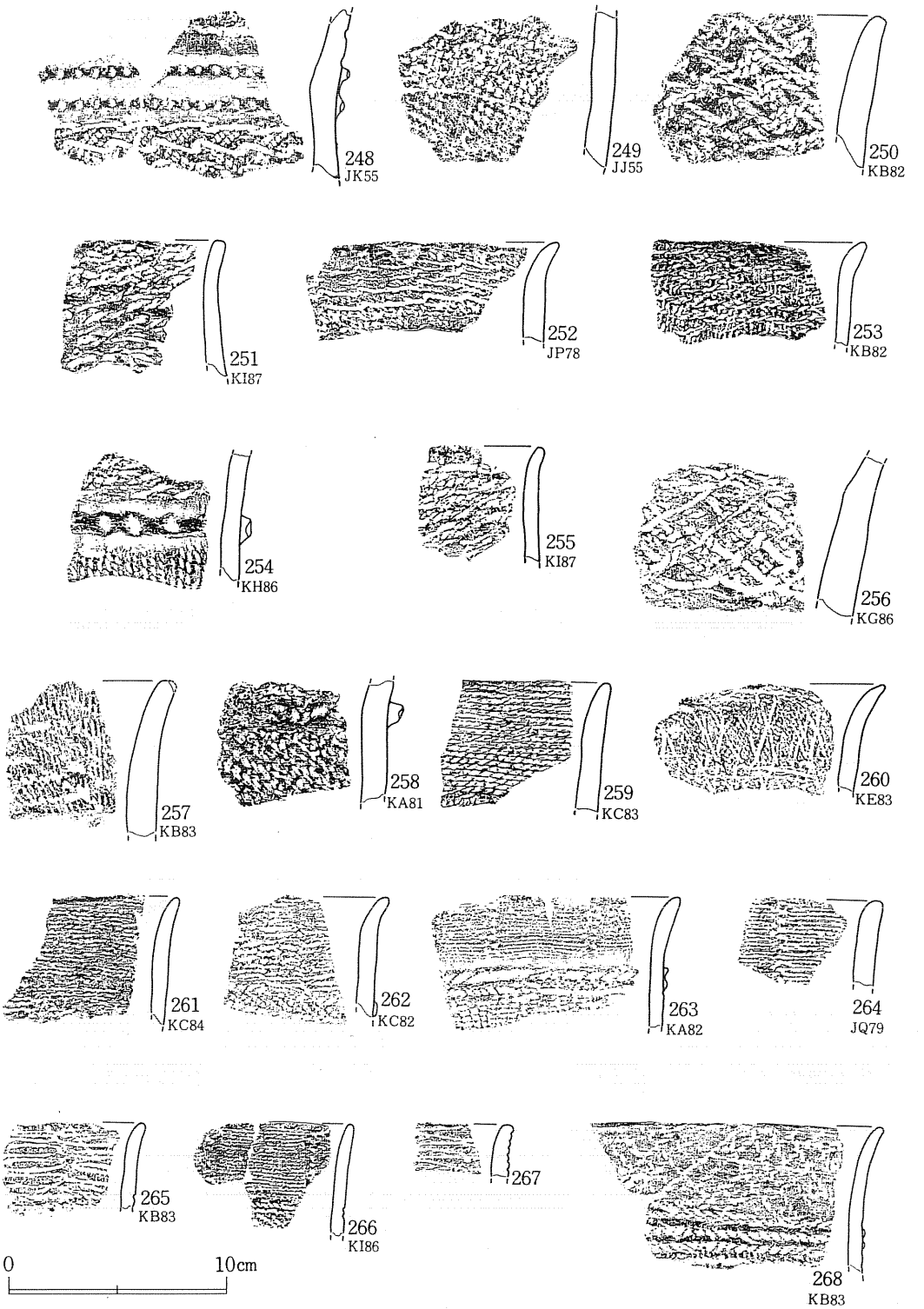
第85図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（26）・土器（26）



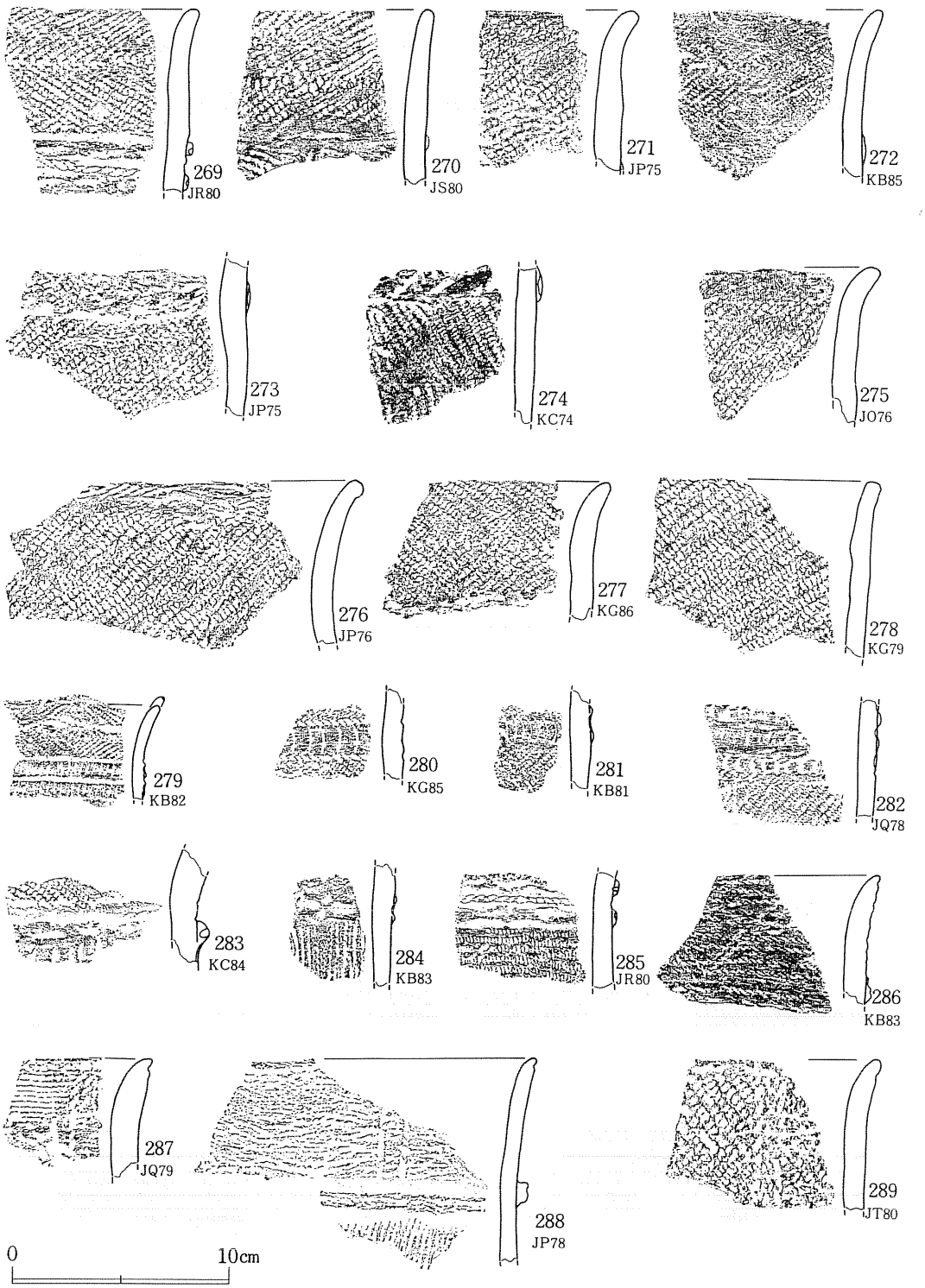
第86図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（27）・土器（27）



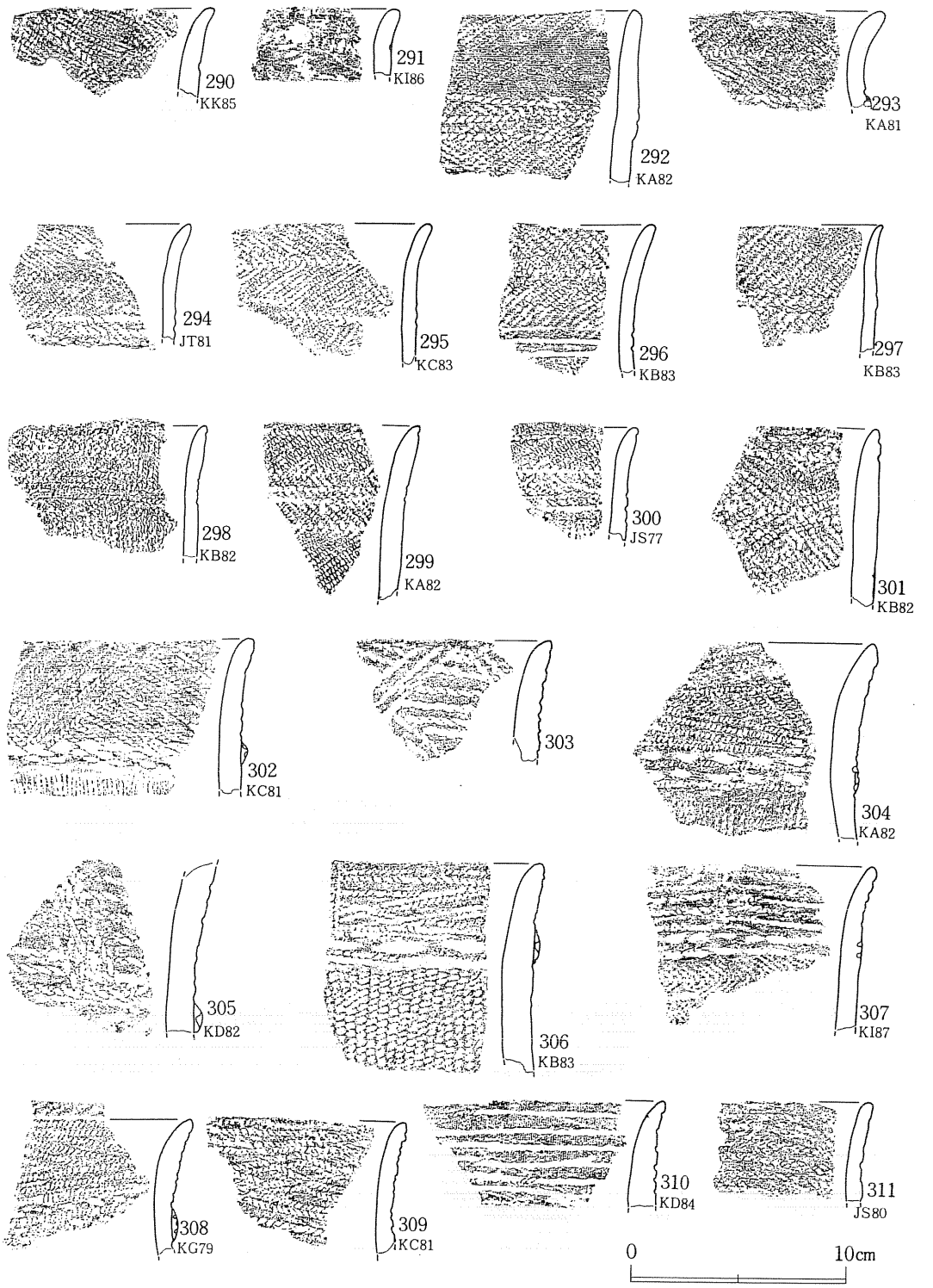
第87図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（28）・土器（28）



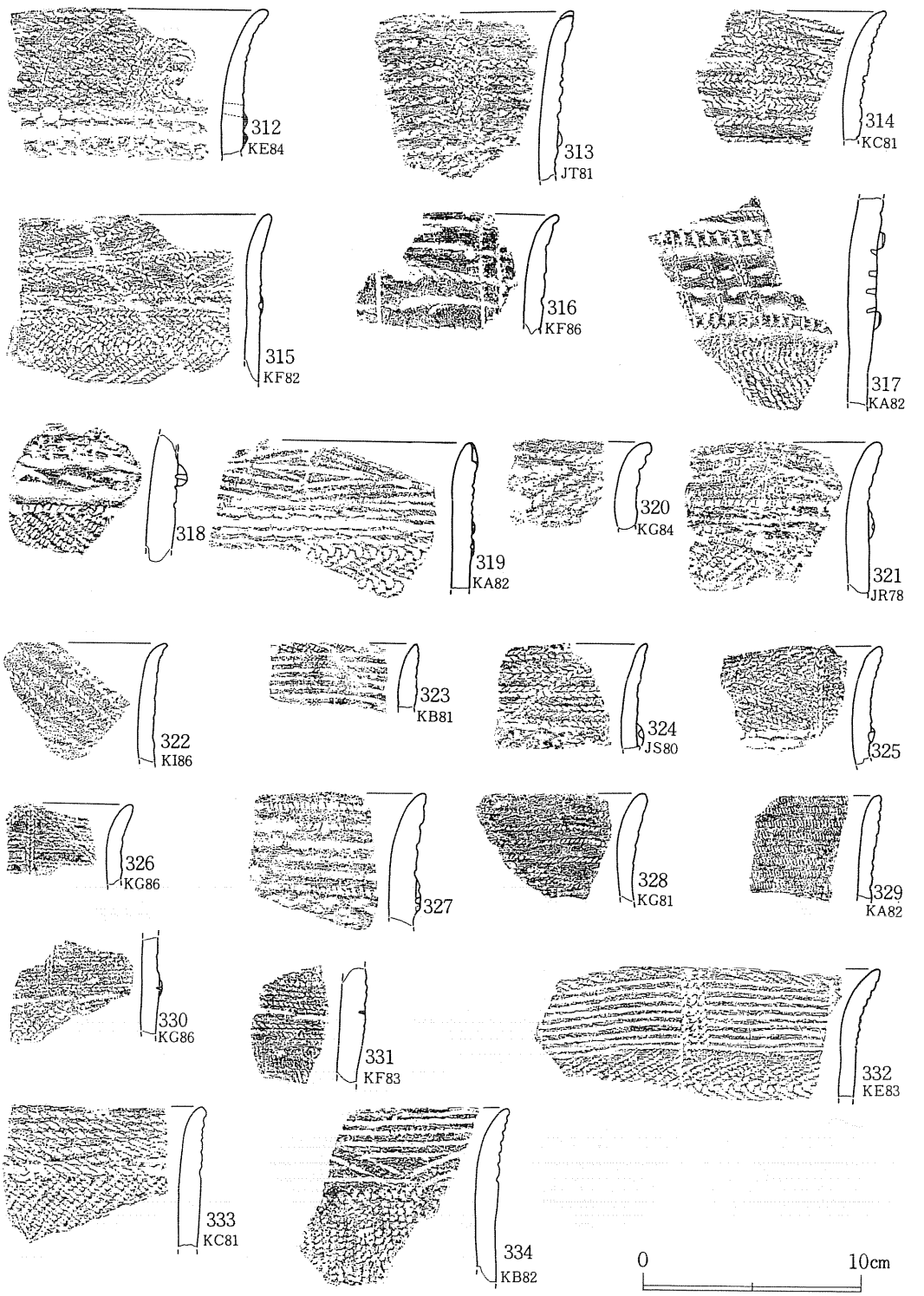
第88図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（29）・土器（29）



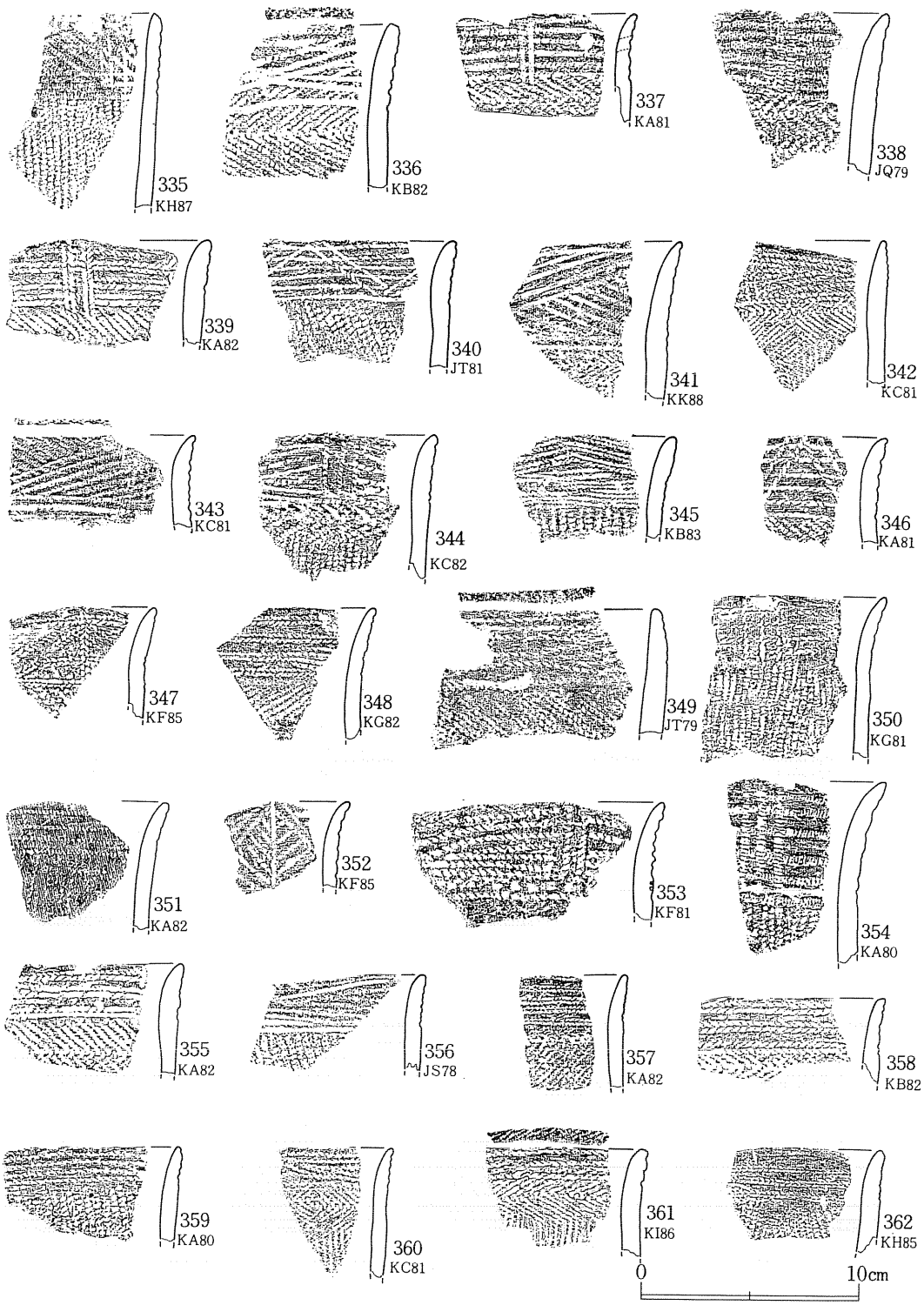
第89図　AⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（30）・土器（30）



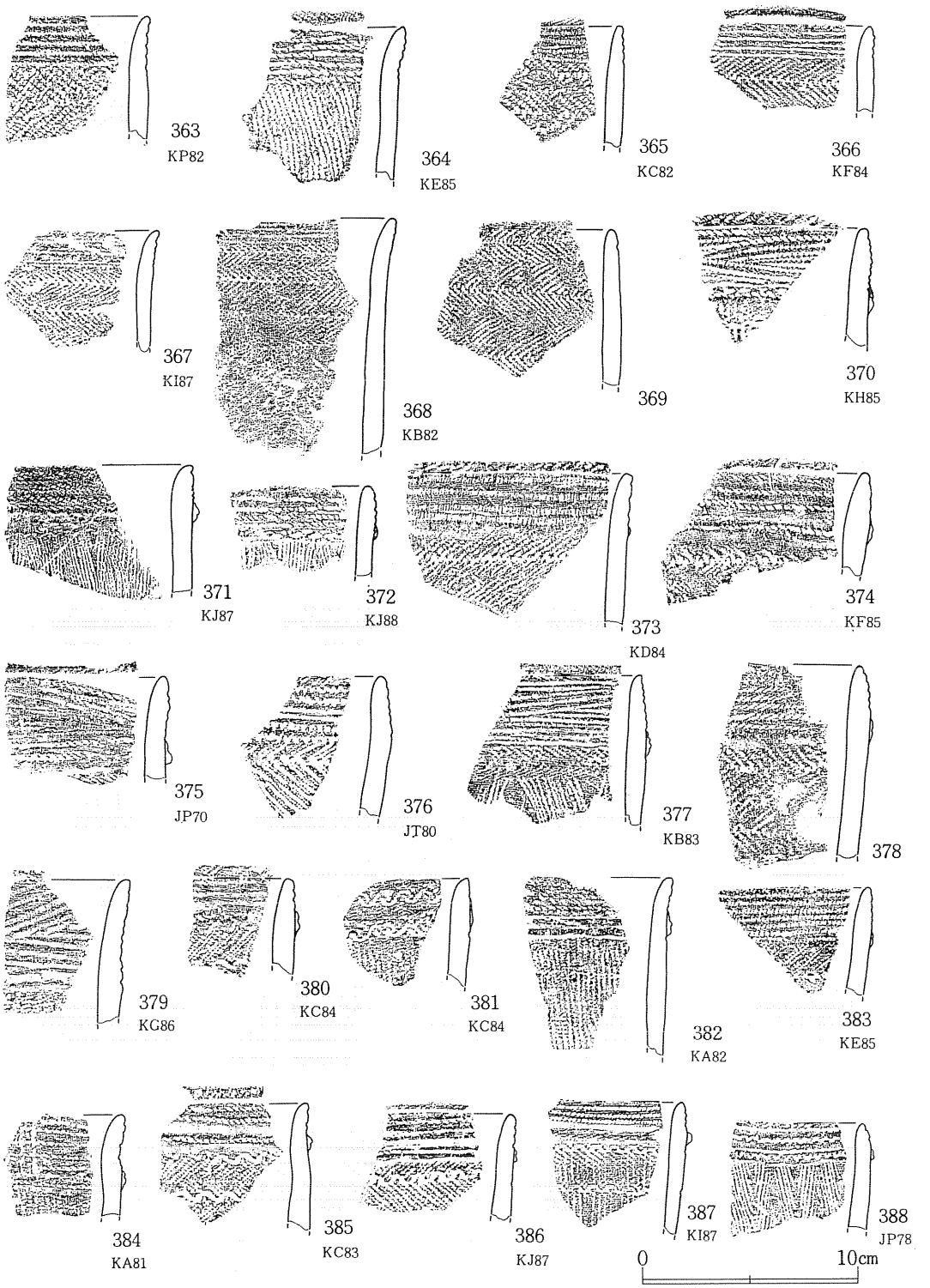
第90図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（31）・土器（31）



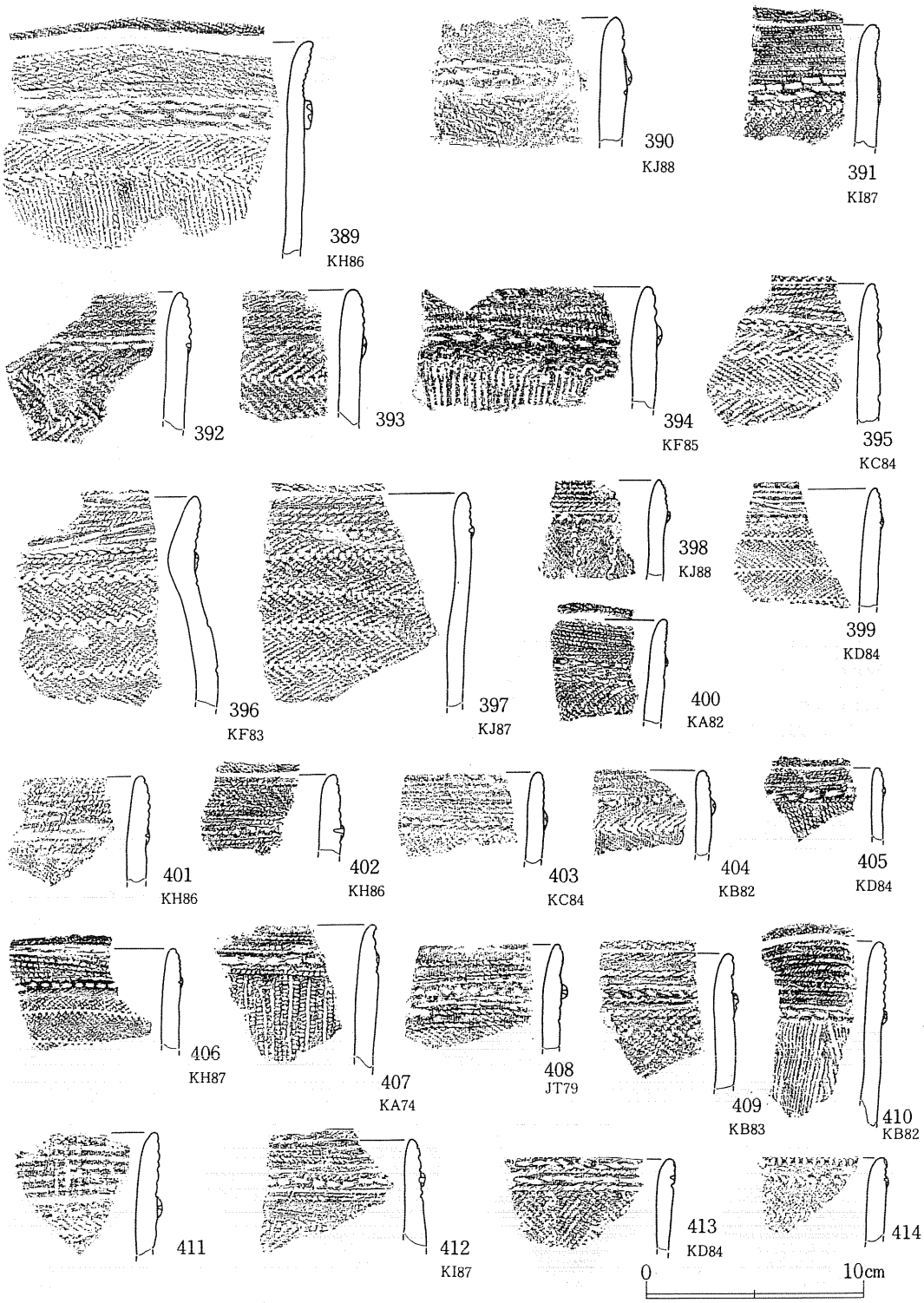
第91図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（32）・土器（32）



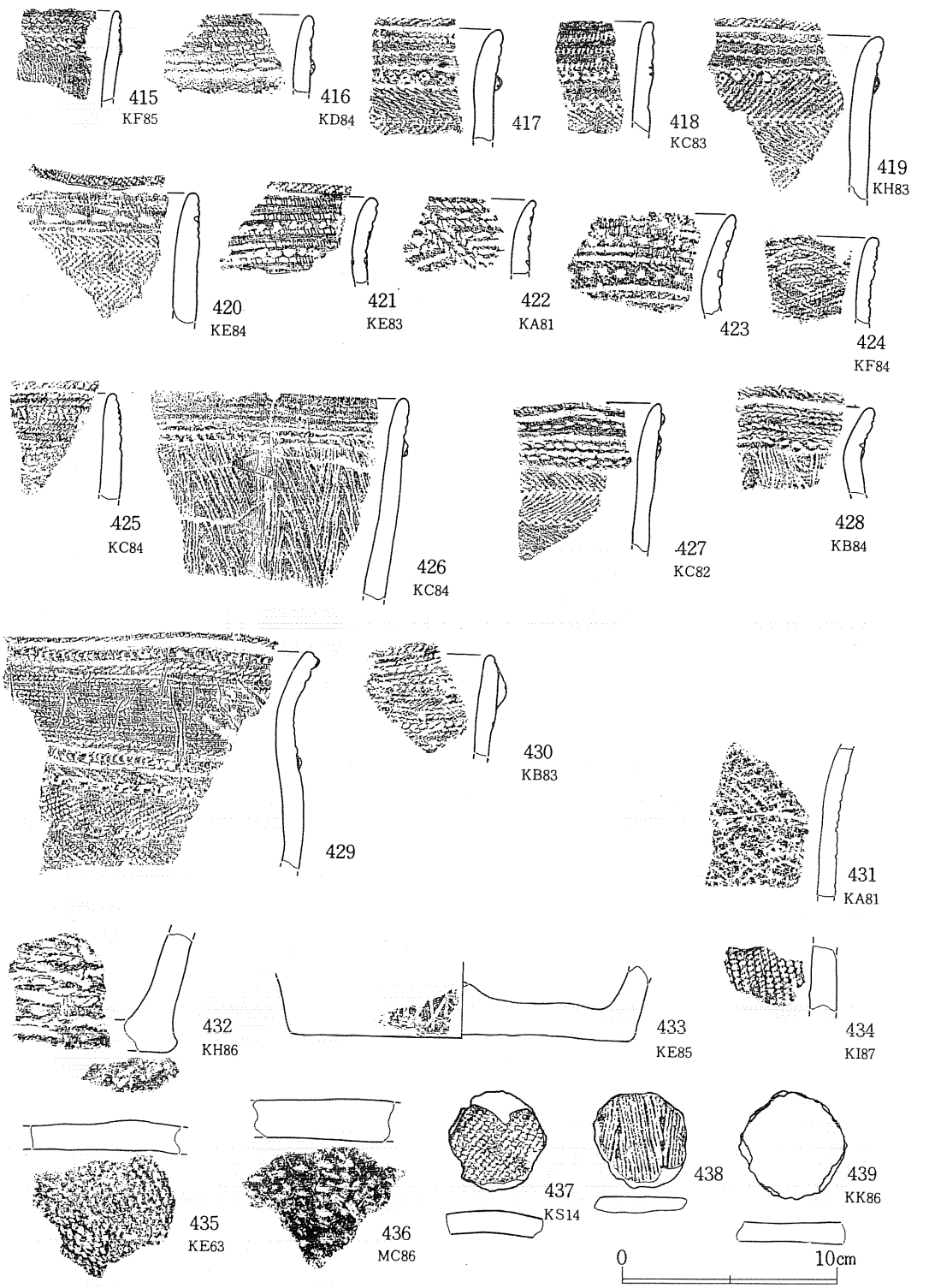
第92図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（33）・土器（33）



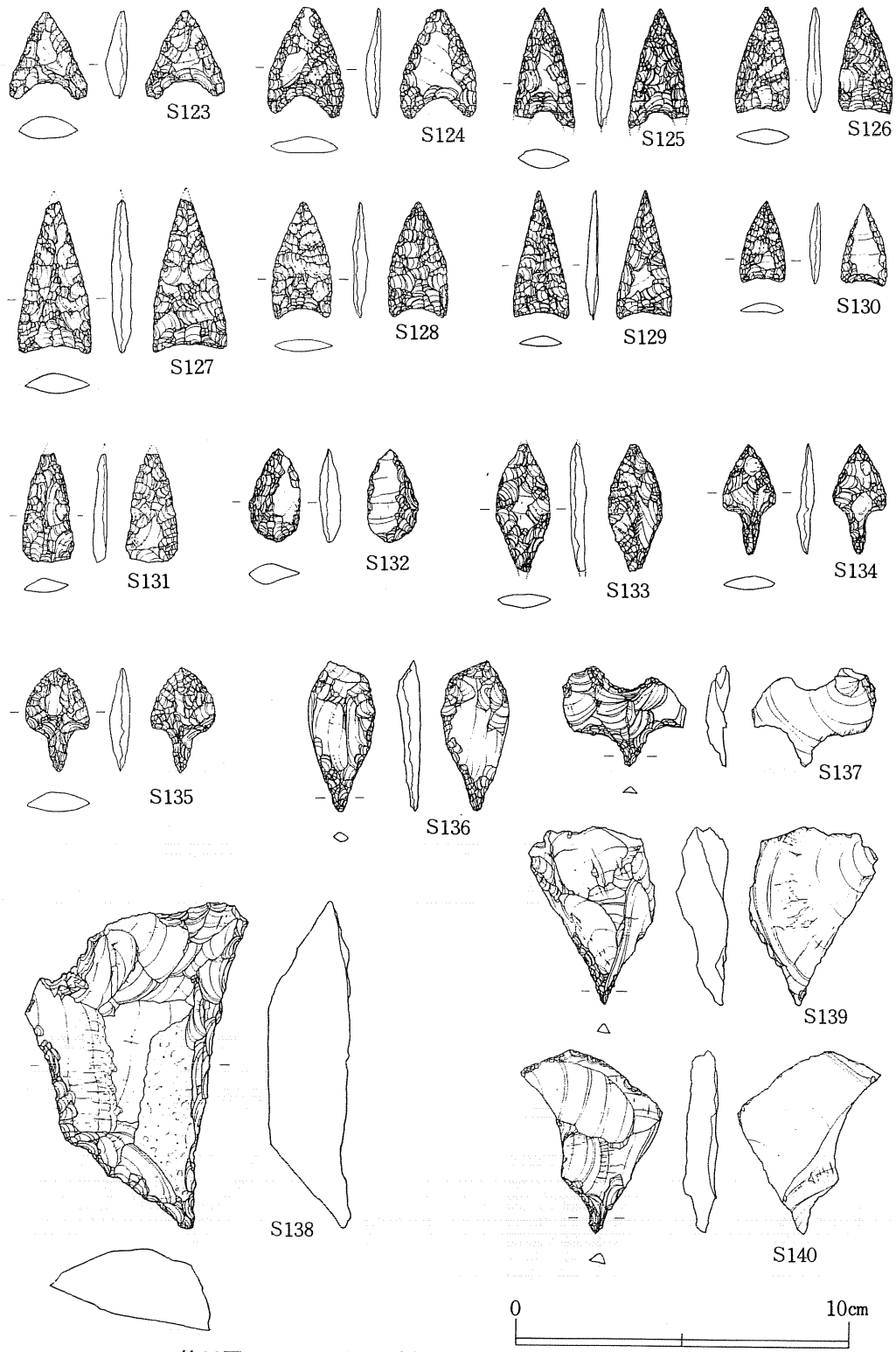
第93図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（34）・土器（34）



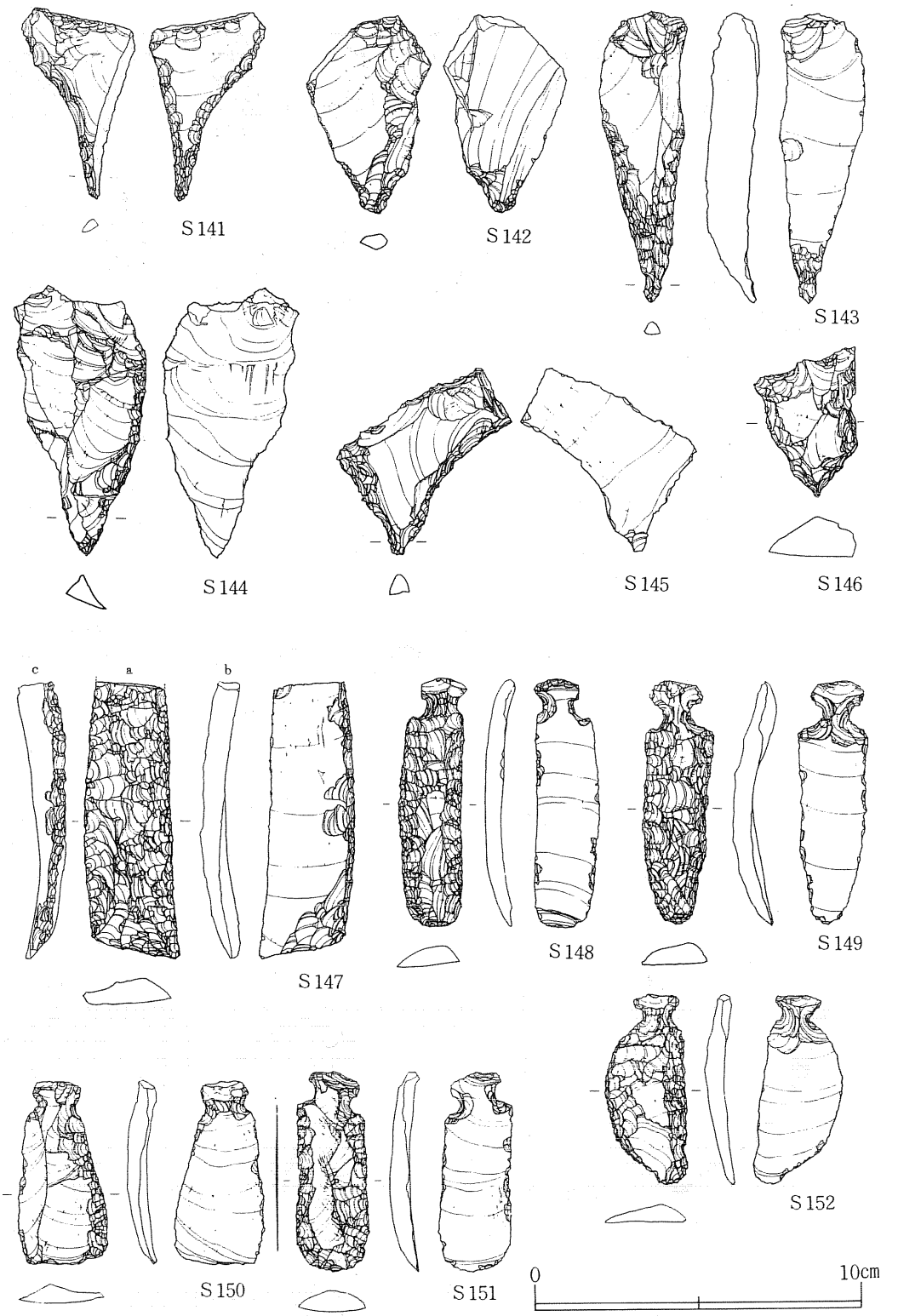
第94図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（35）・土器（35）



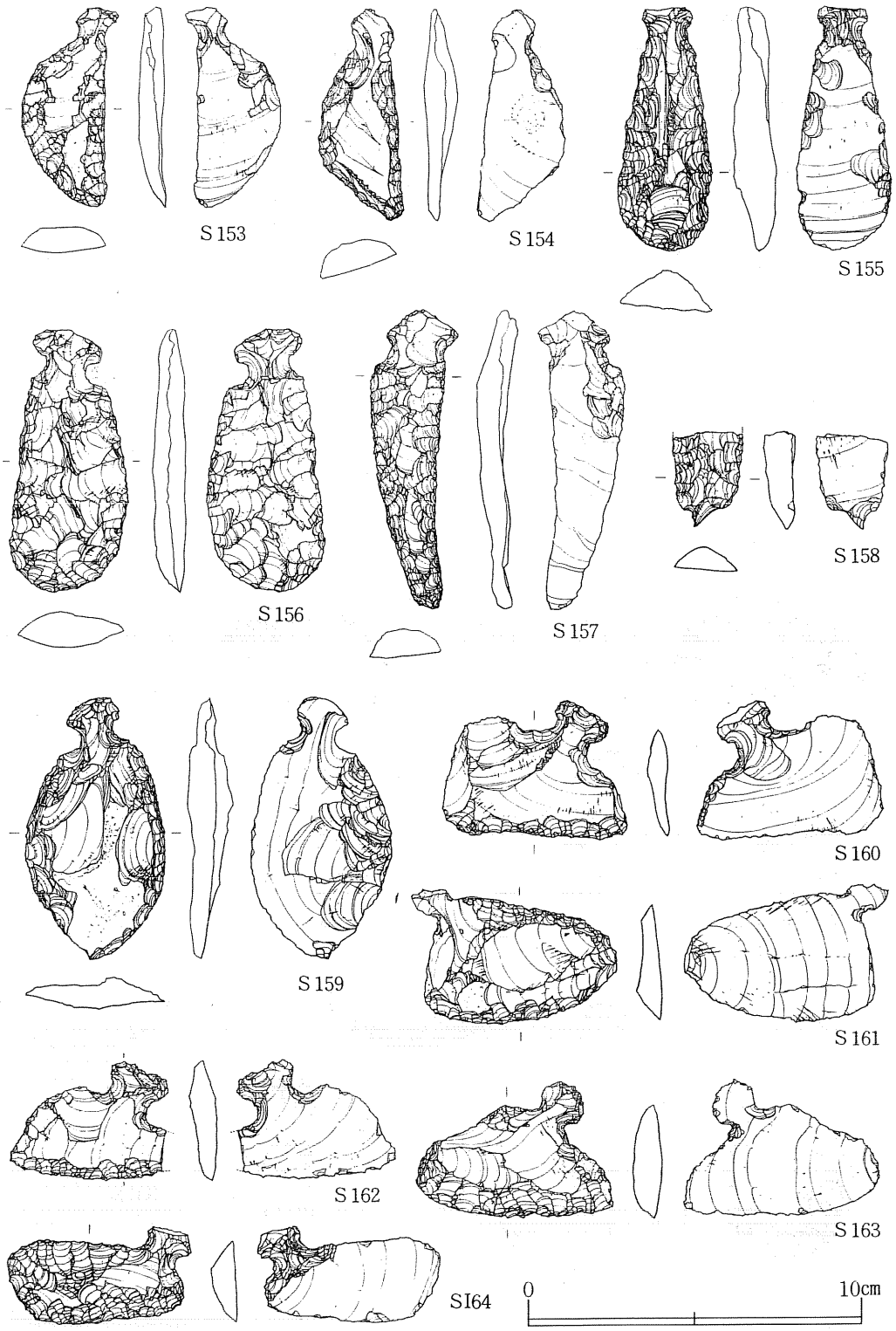
第95図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（36）・土器（36）



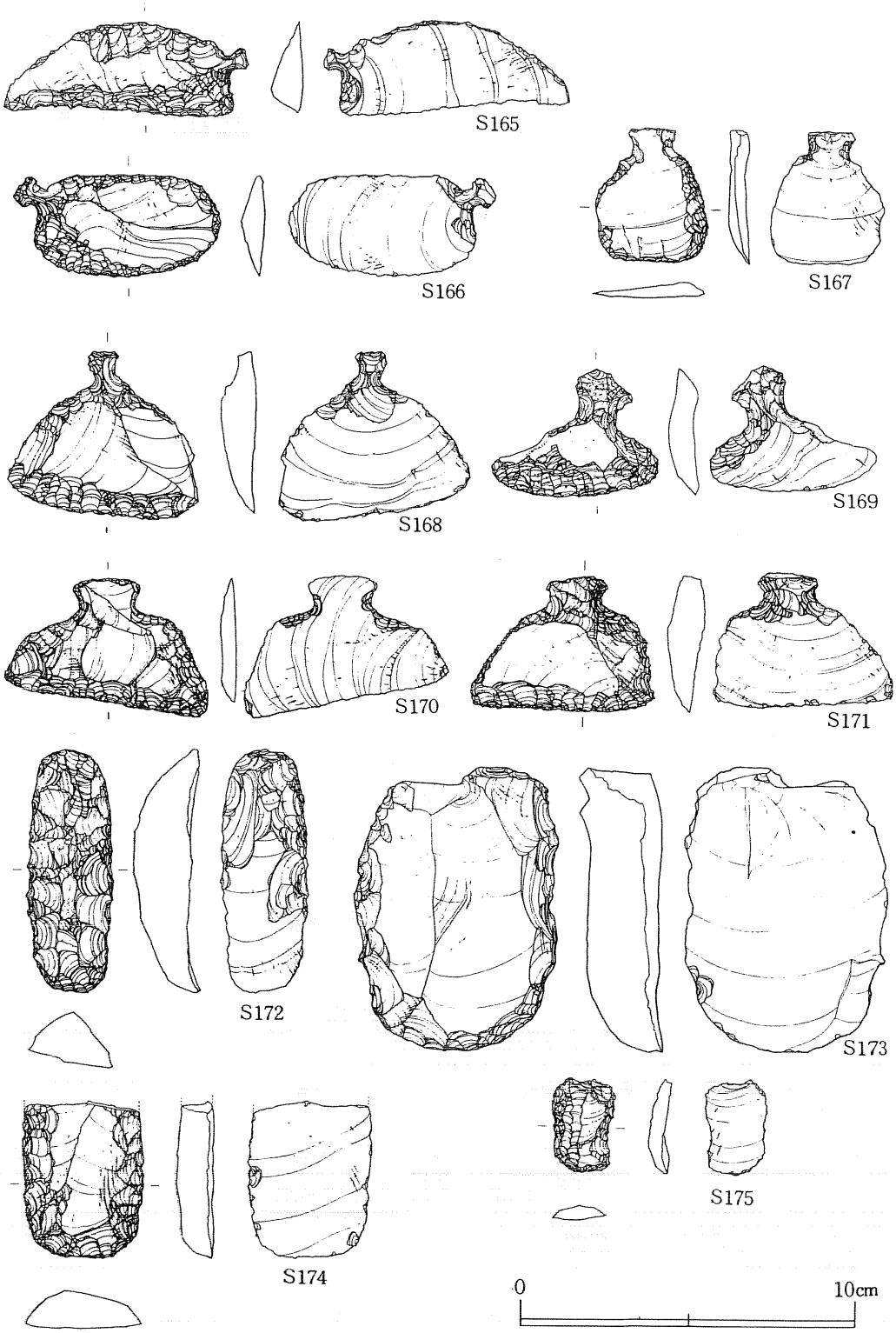
第96図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（37）・石器（１）



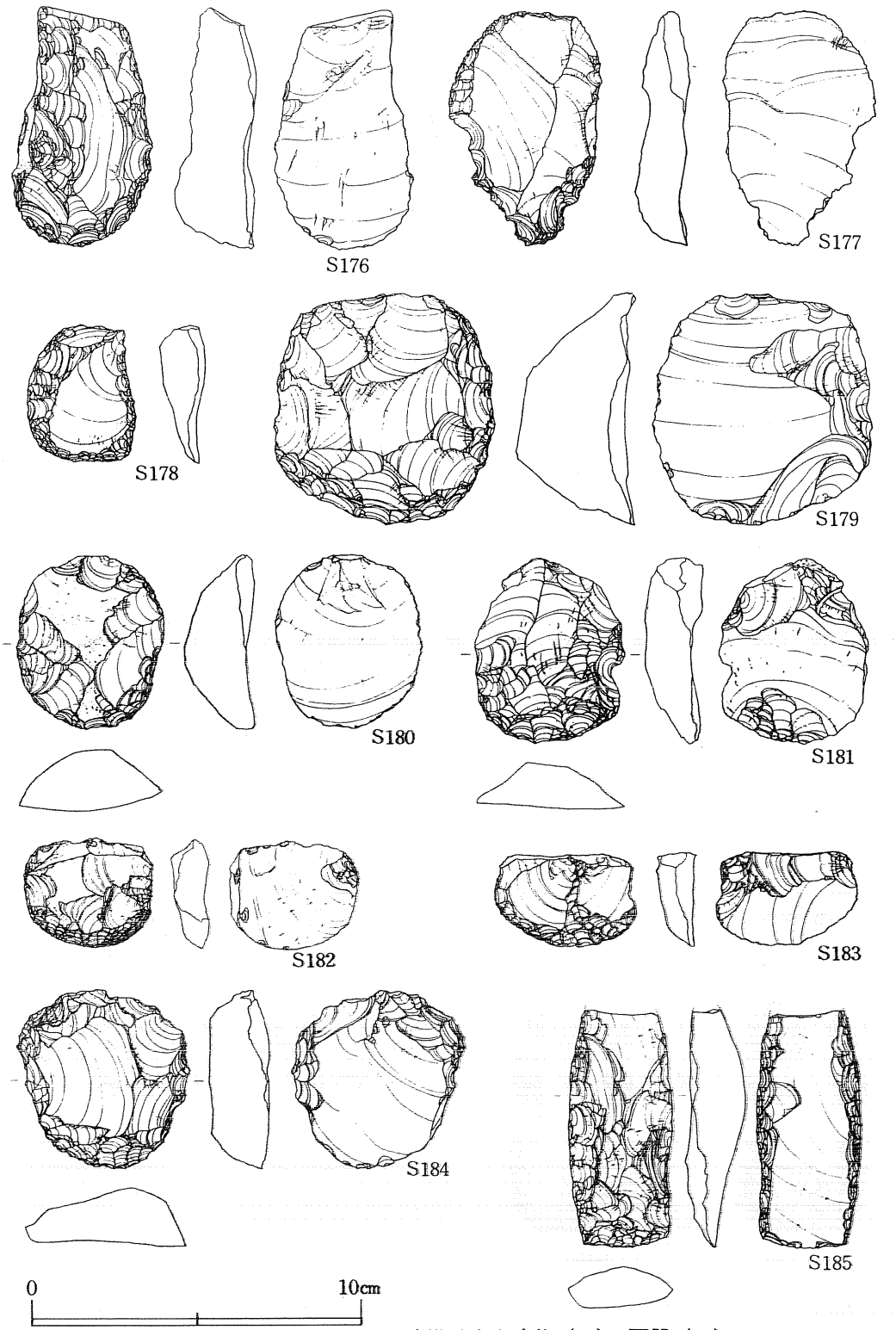
第97図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（38）・石器（２）



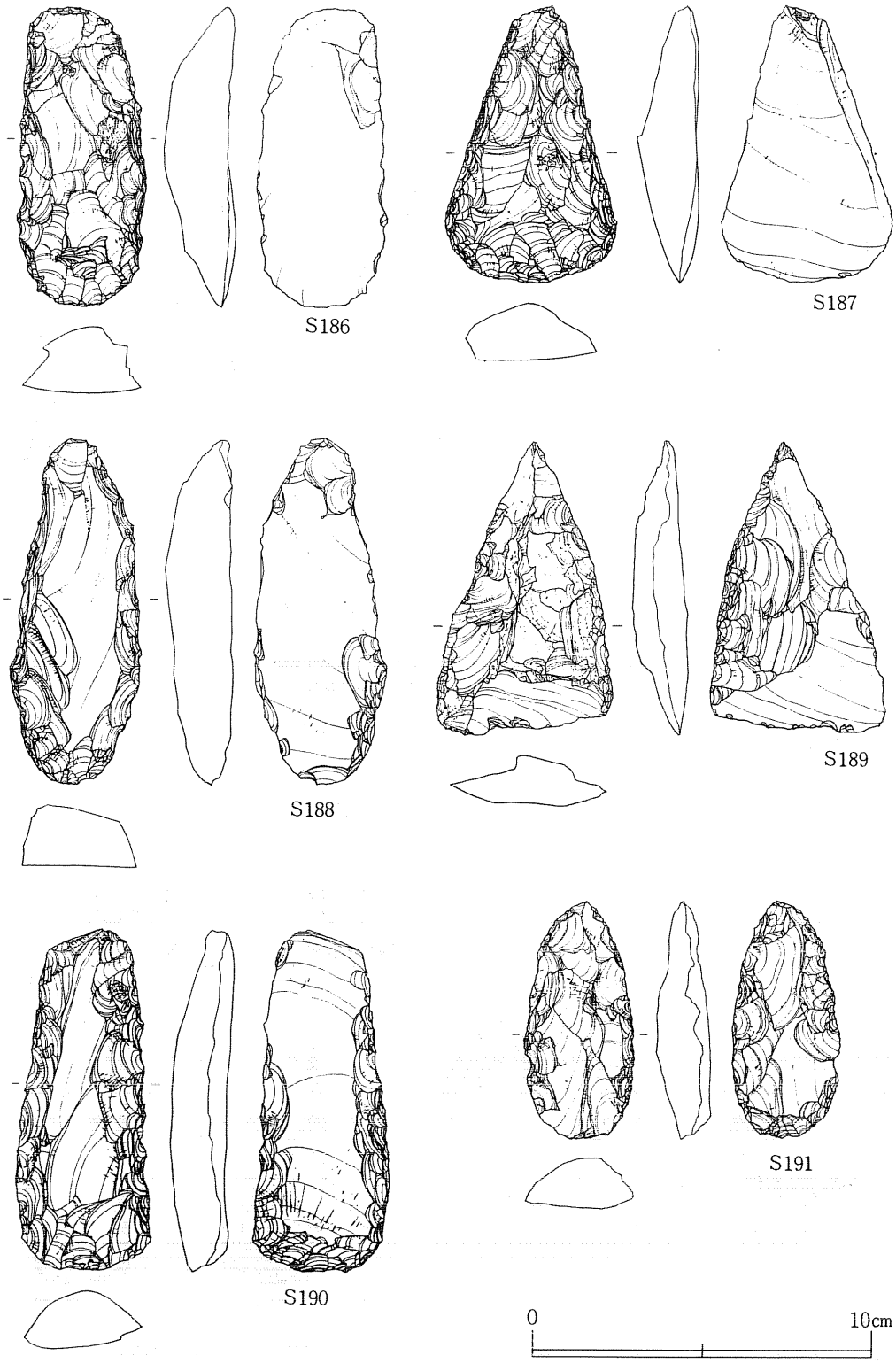
第98図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（39）・石器（３）



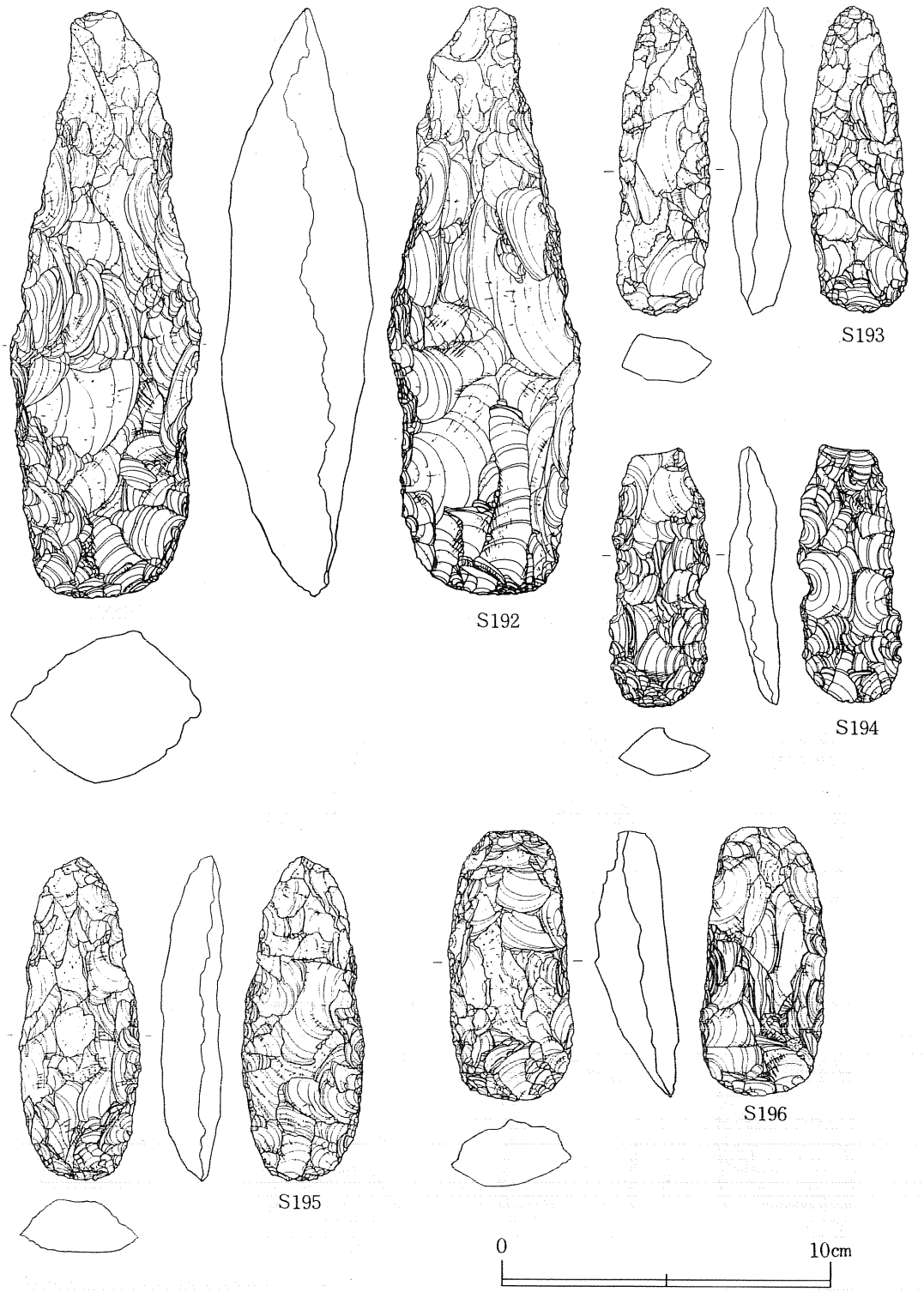
第99図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（40）・石器（４）



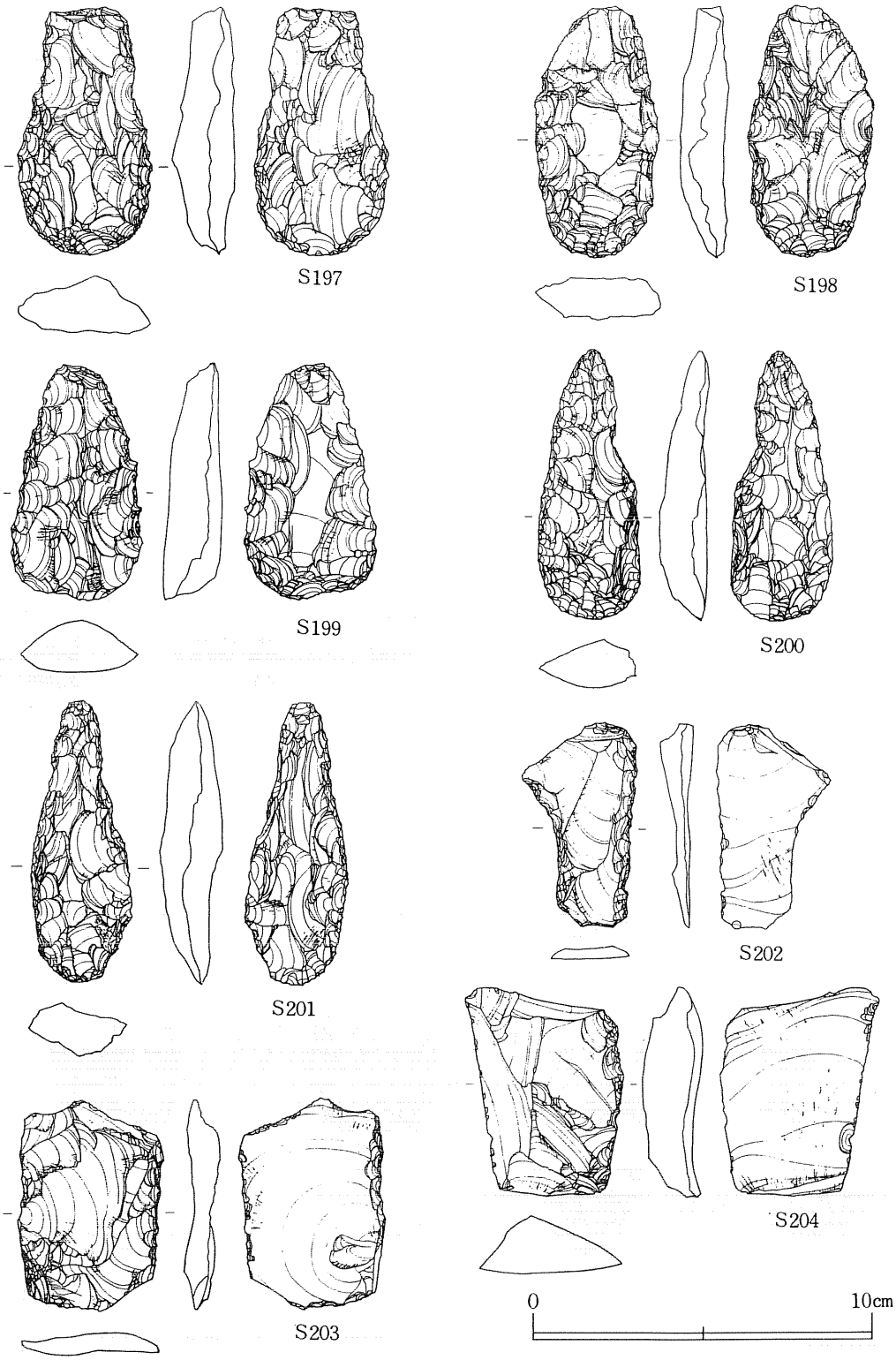
第100図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（41）・石器（５）



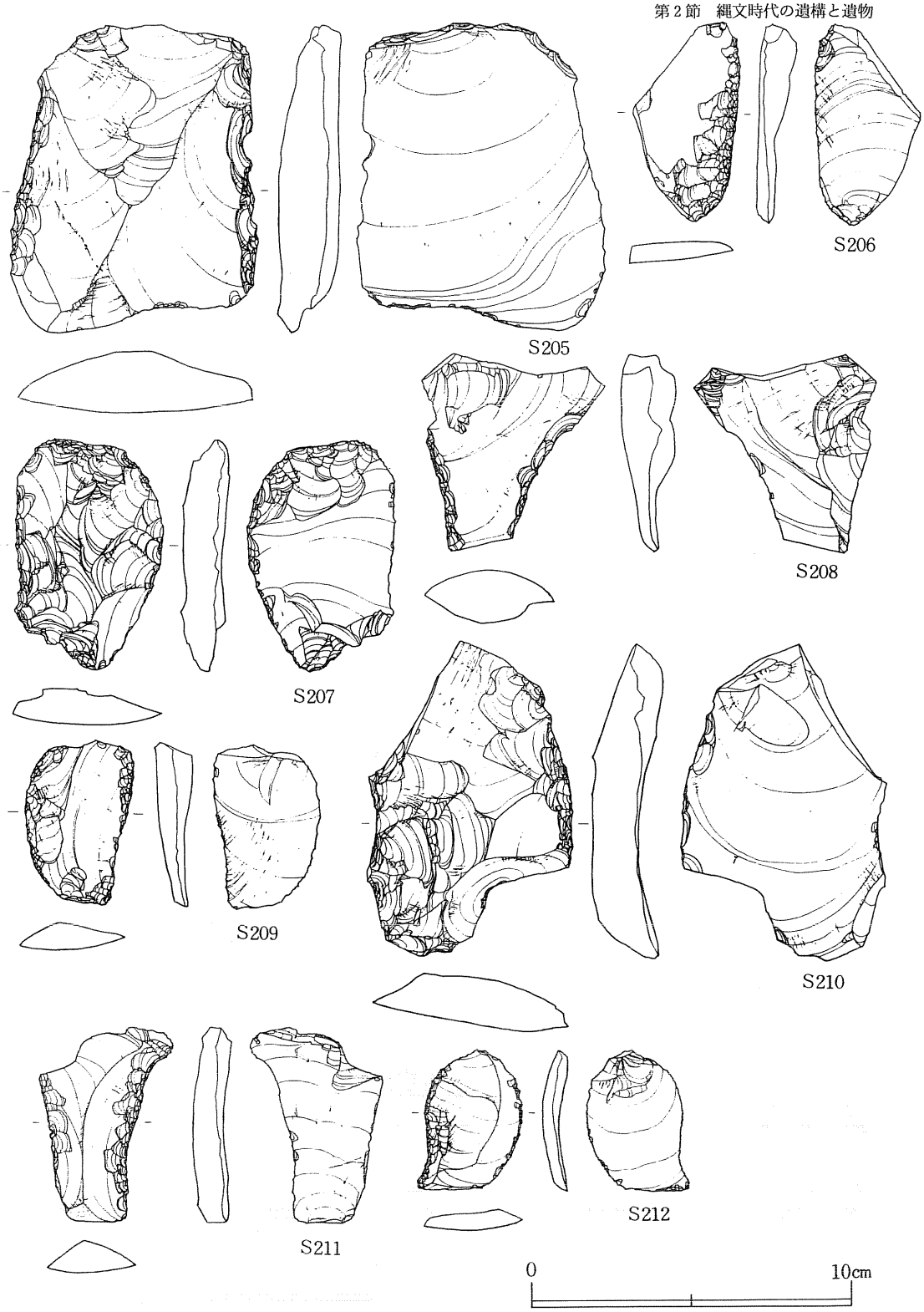
第101図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（42）・石器（６）



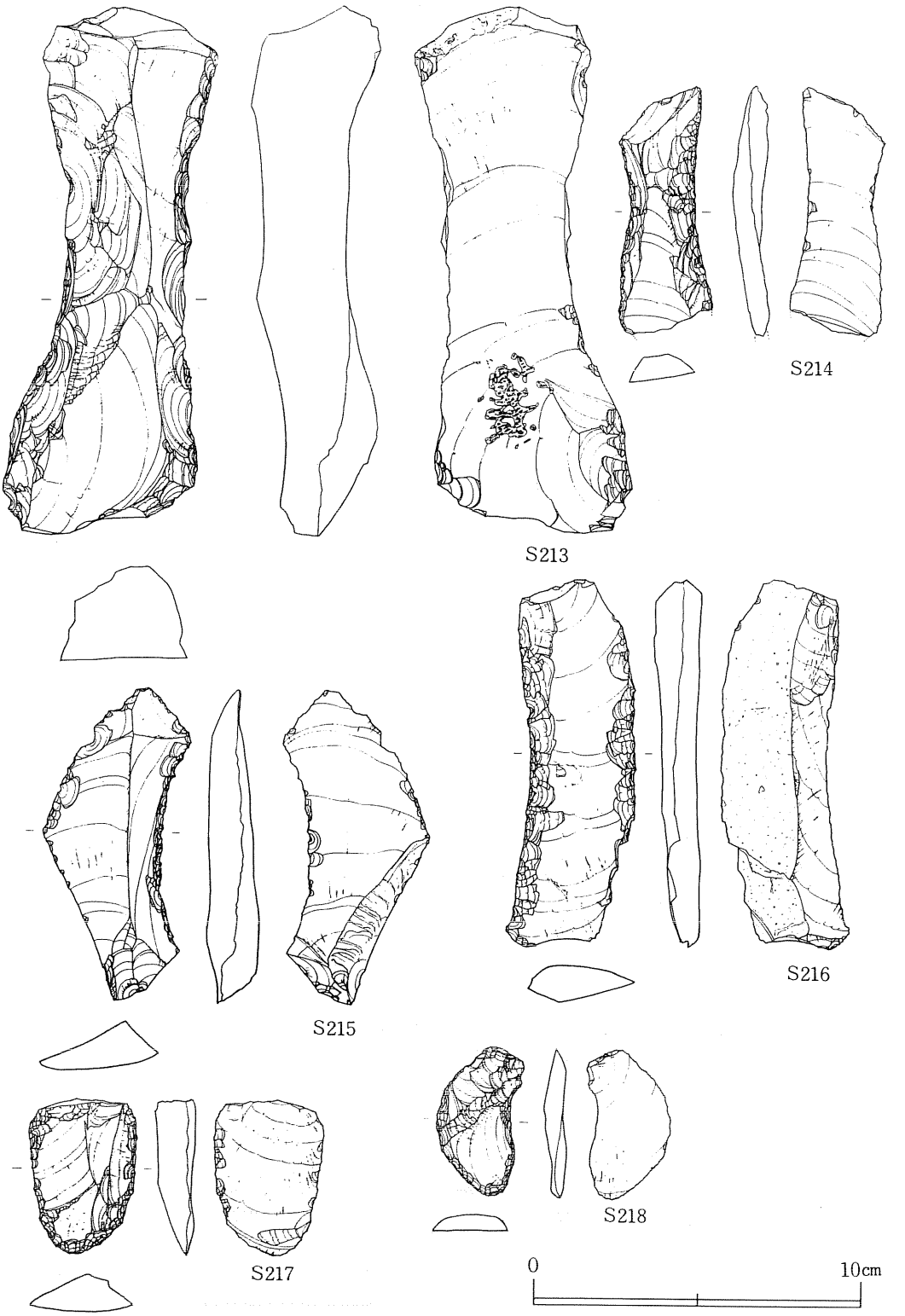
第102図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（43）・石器（７）



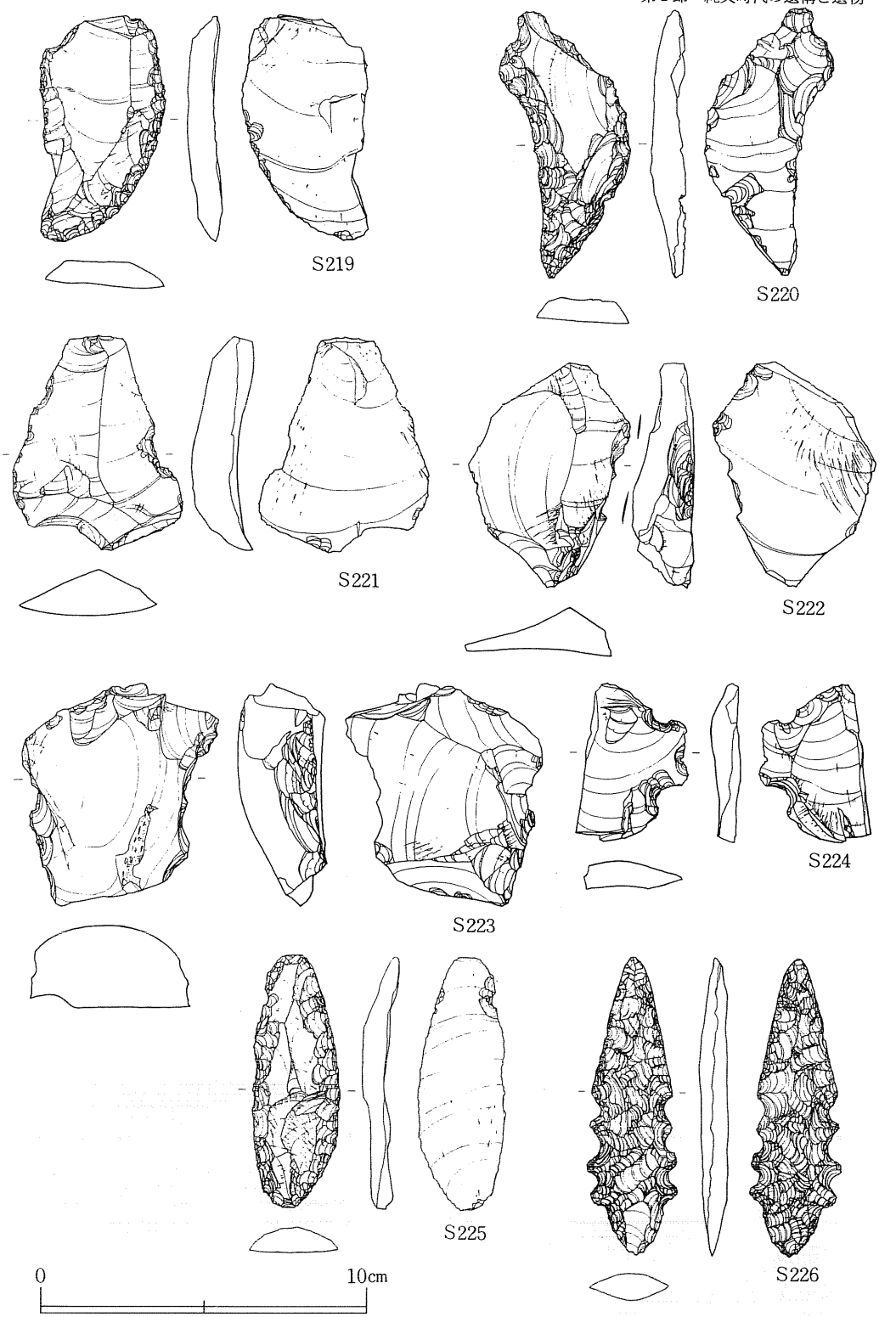
第103図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（44）・石器（８）



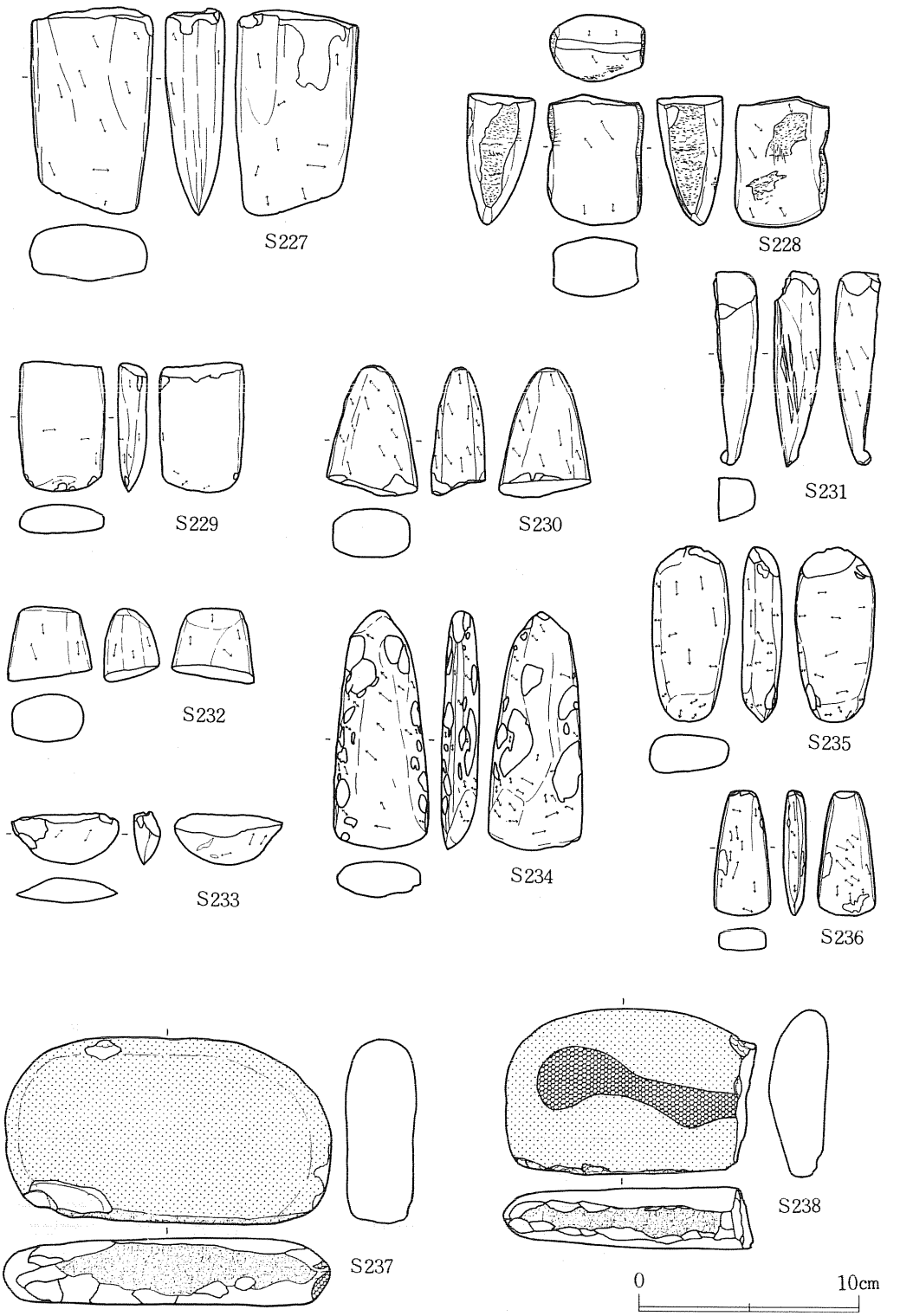
第104図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（45）・石器（９）



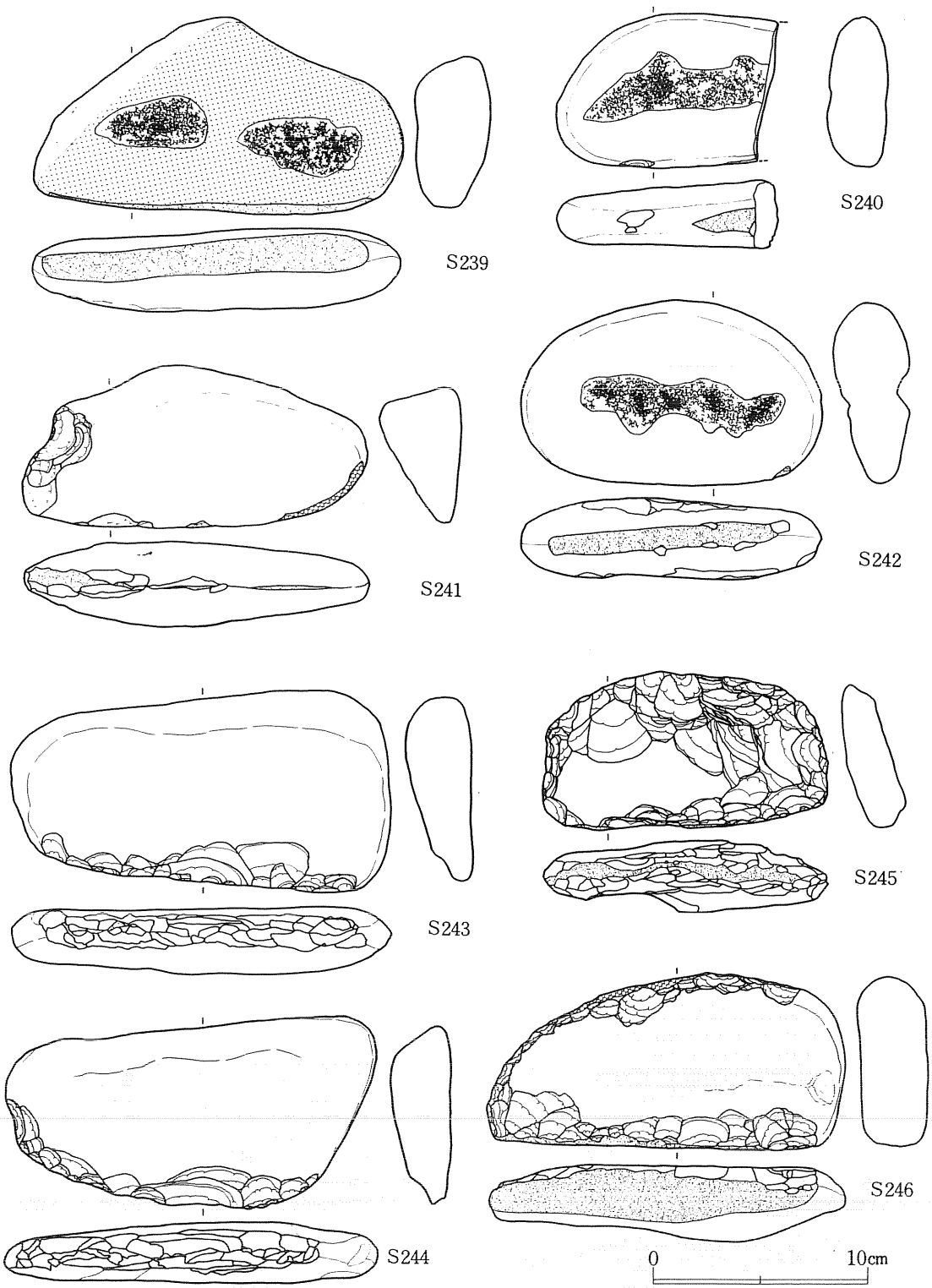
第105図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（46）・石器（10）



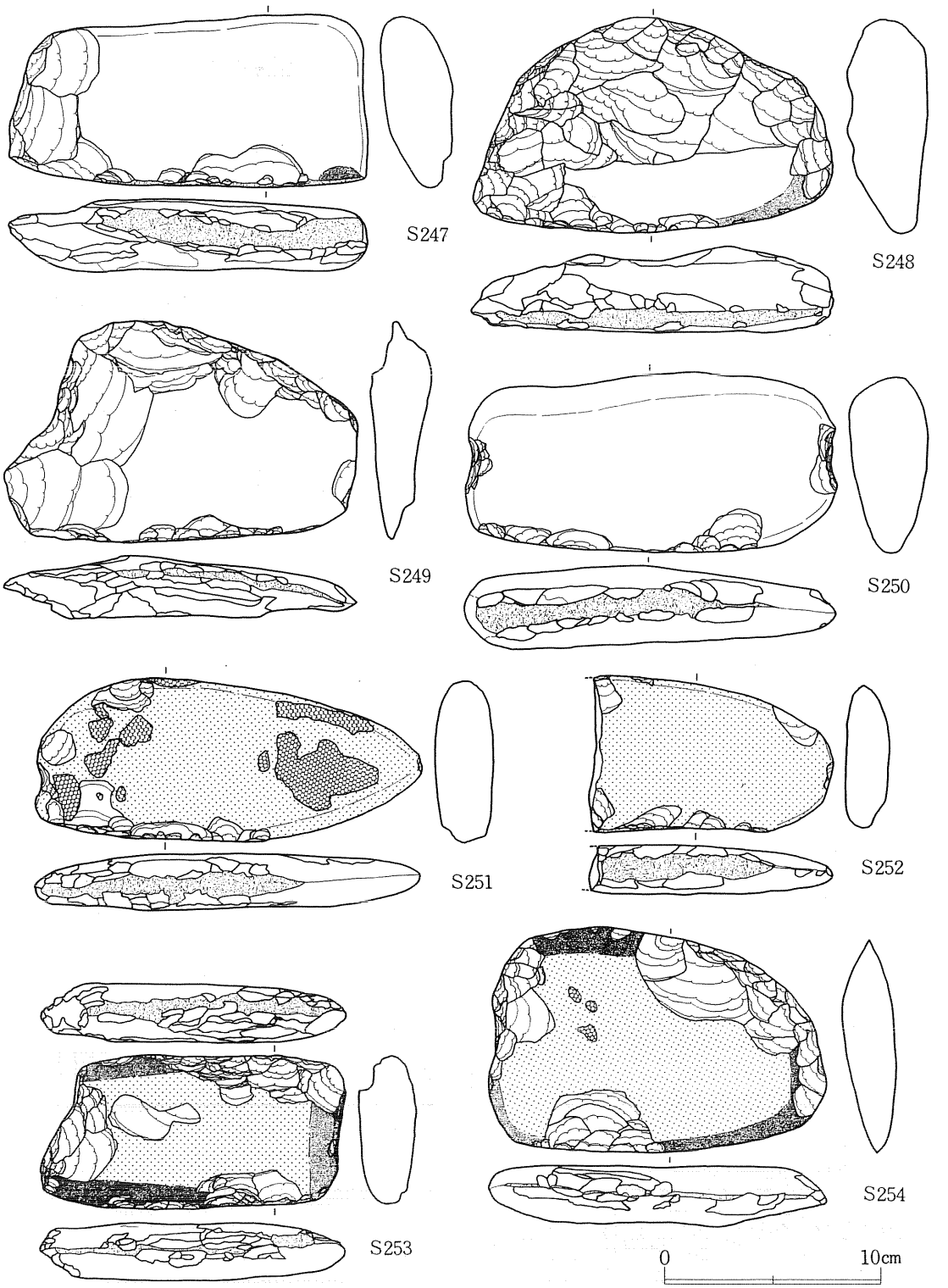
第106図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（47）・石器（11）



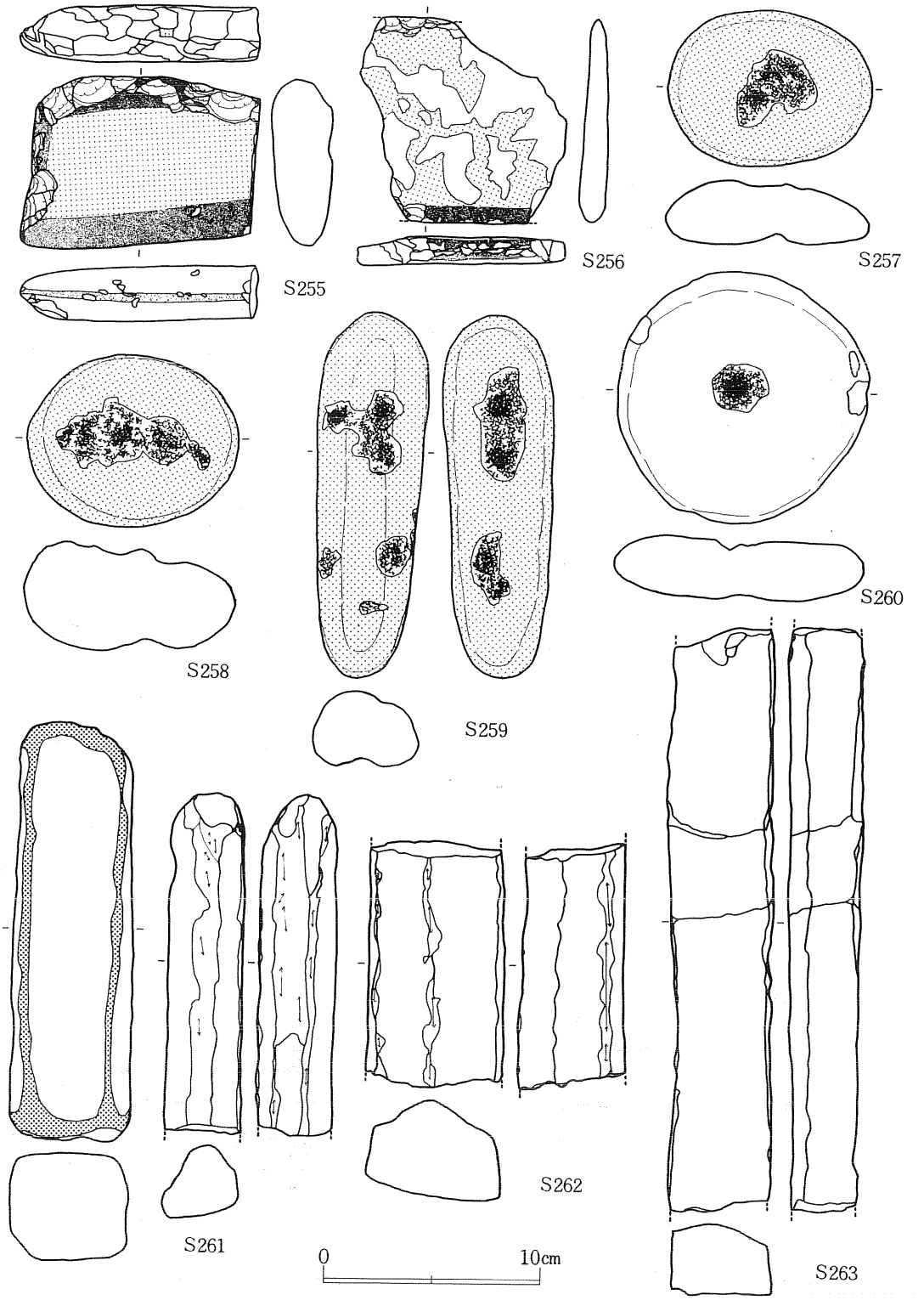
第107図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（48）・石器（12）



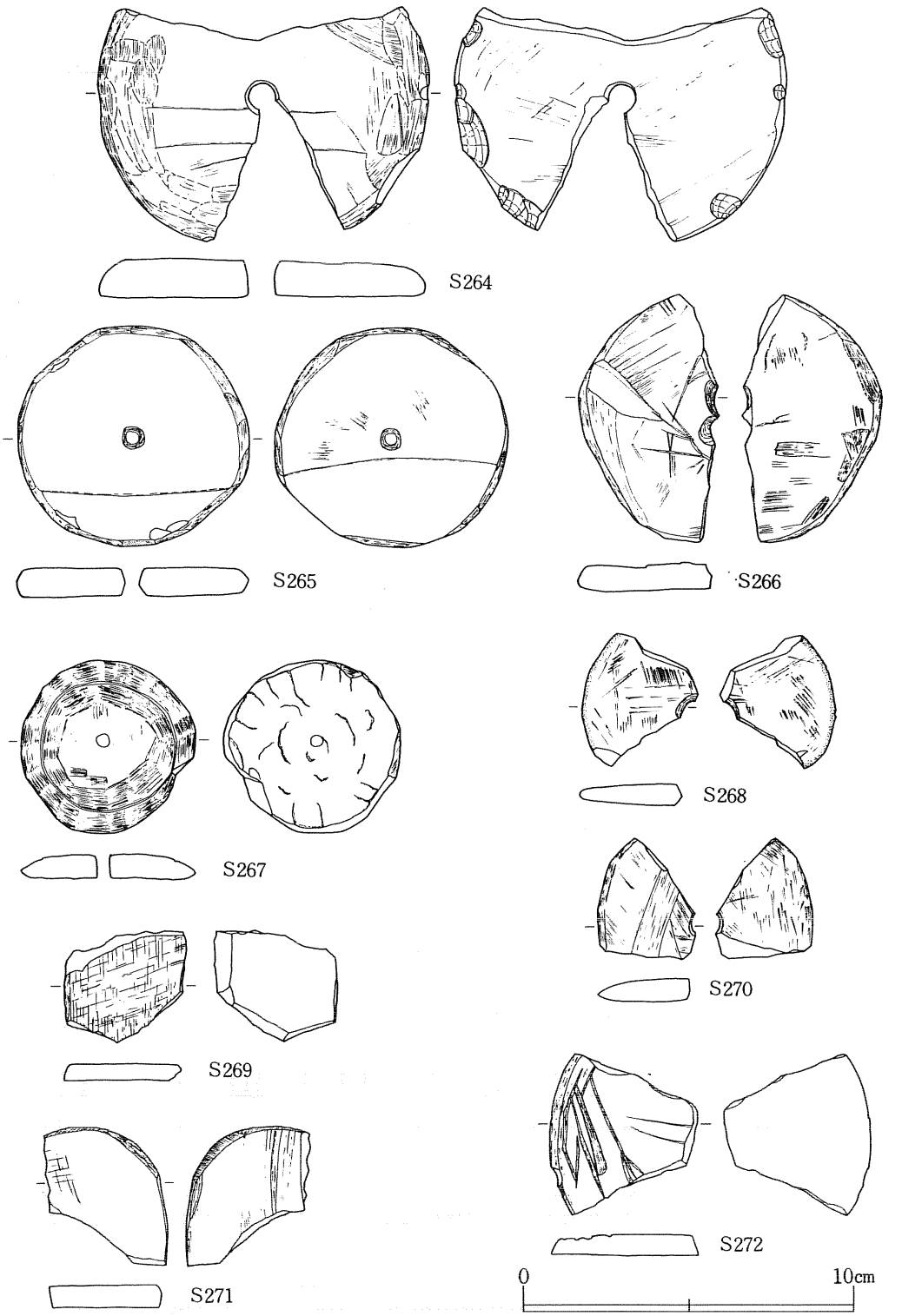
第108図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（49）・石器（13）



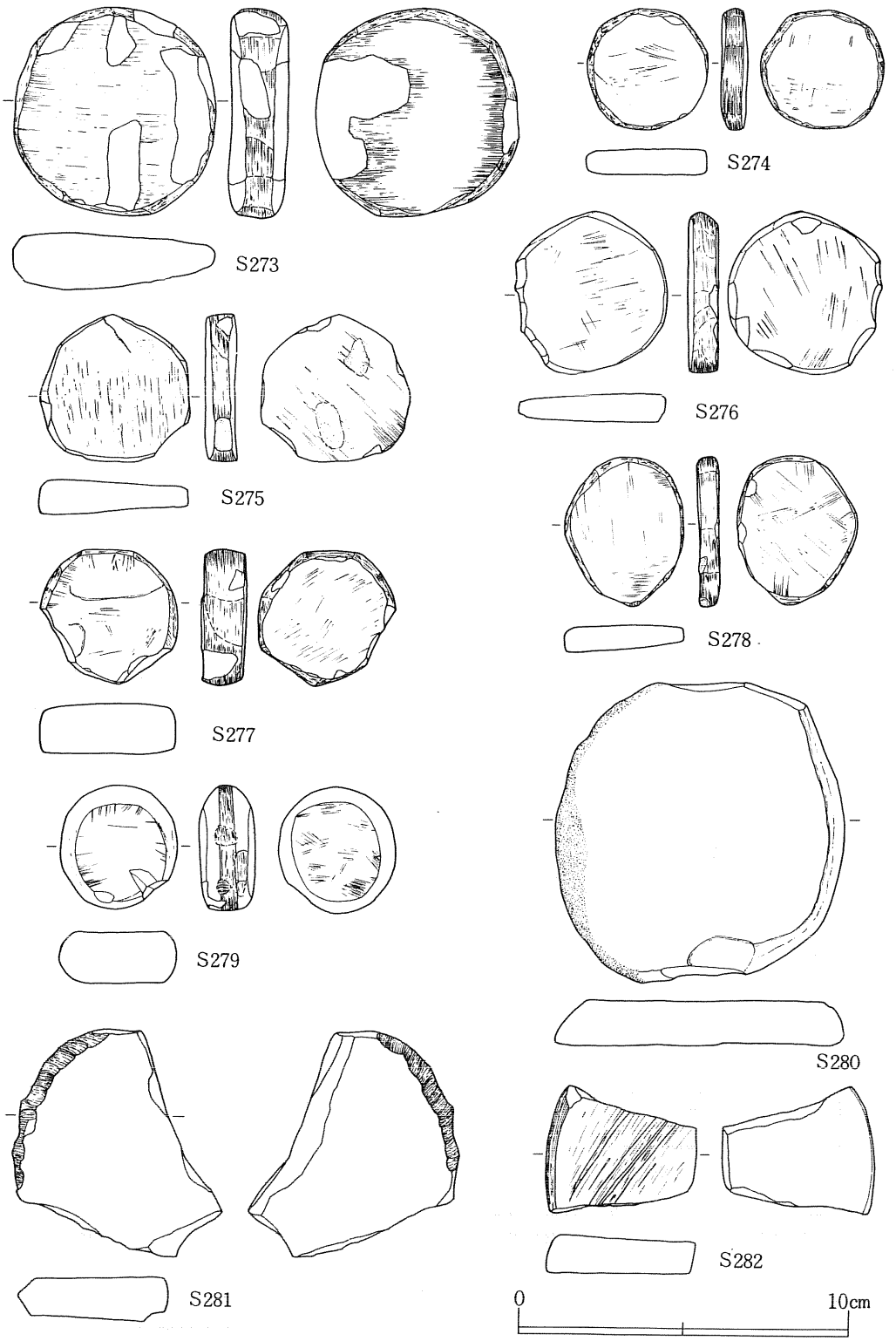
第109図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（50）・石器（14）



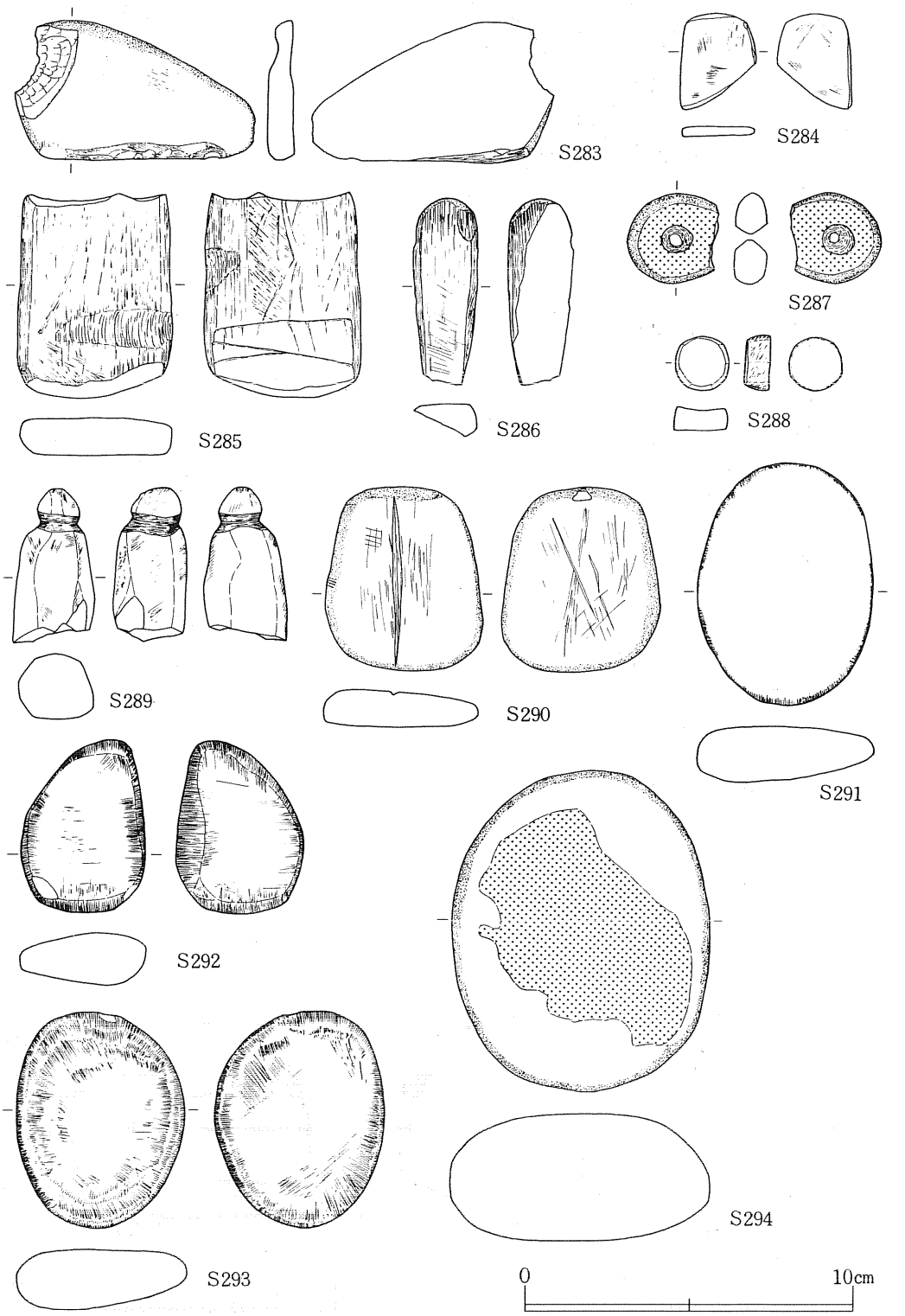
第110図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（51）・石器（15）



第111図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（52）・石器（16）



第112図　ＡⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（53）・石器（17）



第113図　AⅠ・Ⅱ区　遺構外出土遺物（54）・石器（18）

第３節　平安時代の遺構と遺物

ＡⅠ・Ⅱ区で検出した遺構のうち、第Ⅲ層大湯浮石層を切り込んで構築している遺構、あるいは覆土中に大湯浮石粒子を含んでいる遺構を平安時代の遺構と見なしている。これは問題となる下限時期について、同区での遺構内外出土遺物に中世と考えうる遺物が認められないことを根拠としている。このことは、該期の遺構を検出したＡⅢ・Ⅳ区、Ｃ区についても言えることである。

検出遺構は、竪穴住居跡11軒、土坑12基、掘立柱建物跡３棟、鍛冶炉１基、焼土遺構２基、溝状遺構11条、柱列１列、配石遺構１基、畑畝跡１箇所である。

遺構は、関上段丘下位面の標高約197～199ｍに分布し、ＡⅠ区（およそ72ライン以北）の溝３条、焼土遺構１基以外は、ＡⅡ区で確認している。

(1)　竪穴住居跡　（第116～136図、図版39～54）

該期の竪穴住居跡は11軒、遺構確認面である第Ⅲ層大湯浮石層面の保存状態が良く、同面で鮮明な方・円形の黒色土プランを見いだすことができる。

竪穴住居跡などの記述にあたっては、ここでの用語の統一、各部計測方法について以下に示しておく。

「規模」については、各壁から求められるの中軸線の長さを計測し、長軸、短軸の順に東西方向の軸線長を東西長、南北方向の軸線長を南北長として記載する。

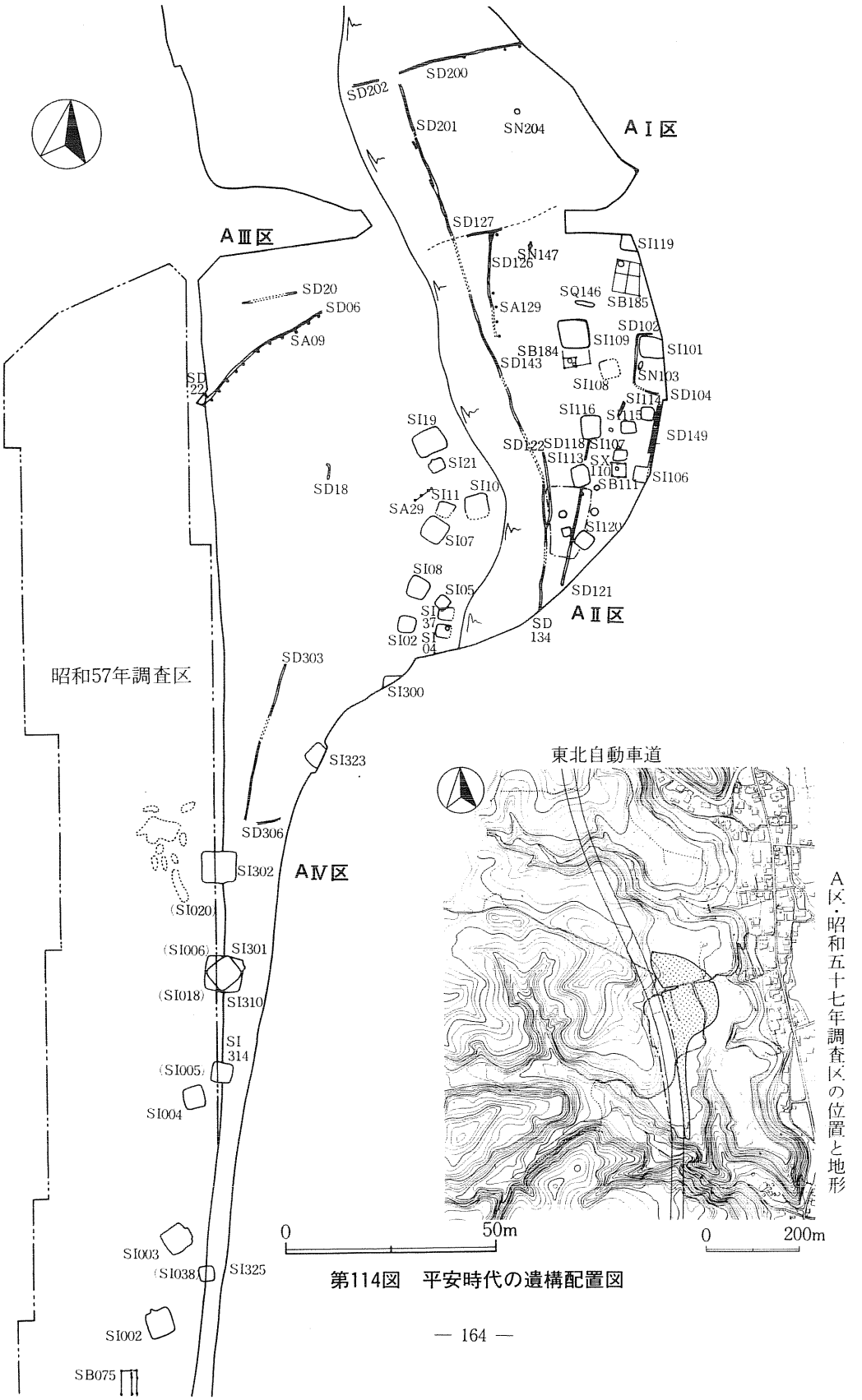
「主軸方位」は、東西・南北長で示している中軸線方向のうち、座標北に近い方向をとる中軸線と座標北とのずれを指している。従って必ずしも長軸方向と座標北とのずれを示すものではなく、Ｎ―４５°―Ｅ（Ｗ）以上の数値となることもない。これは、竪穴住居跡を含む遺構群全体の構築計画性を検証し易くするためである。

「床面積」は、板壁などで囲まれているであろう住居内部の居住有効面積を推定することを目的としている。面積は､壁溝が存在する住居跡では壁溝最深部､壁溝の認められない住居跡では周壁下端部をそれぞれ結んだ範囲をプラニメーターを用い、３回の計測平均値を示している。

「壁高」は、確認面から床面までの高さを計測・記載している。

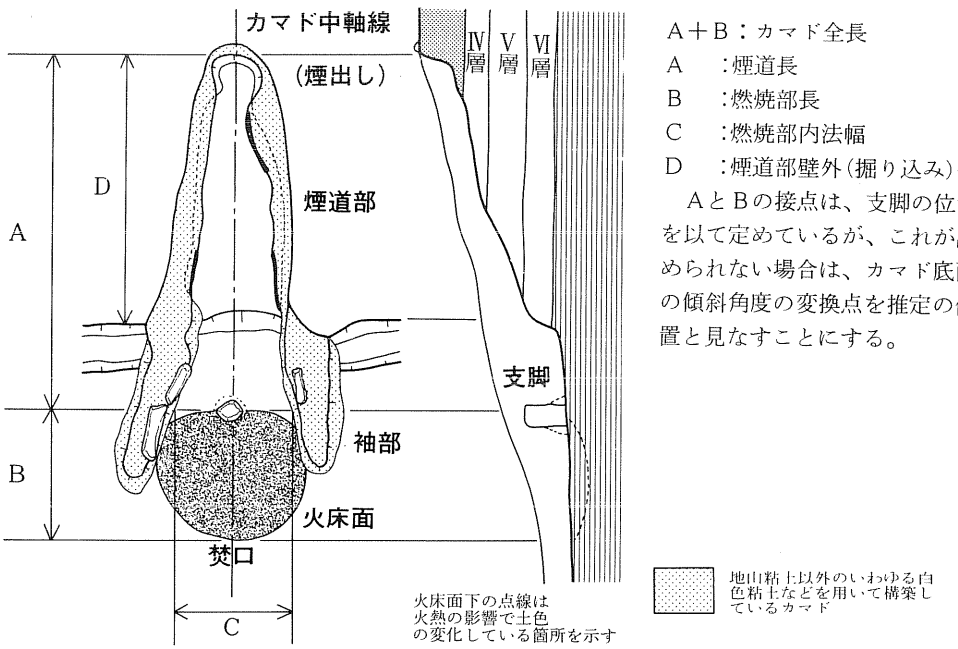
「カマド」に係る事項は、次頁第115図に模式図と用語、計測箇所を示す。カマド中軸線は、煙道先端部（煙出し）の中心と焚口の中心を結んだ軸線を指している。この中軸線方向については、煙道先端部方向と座標北とのずれを計測している。

「出土遺物」において土器の個体数を明記してあるものは、口縁部破片を抽出して個体数を割り出している。



第114図　平安時代の遺構配置図

Ａ区・昭和五十七年調査区の位置と地形



第115図　カマドの模式図と用語、計測箇所

ＳＩ101　（第116～118図、図版39、40）

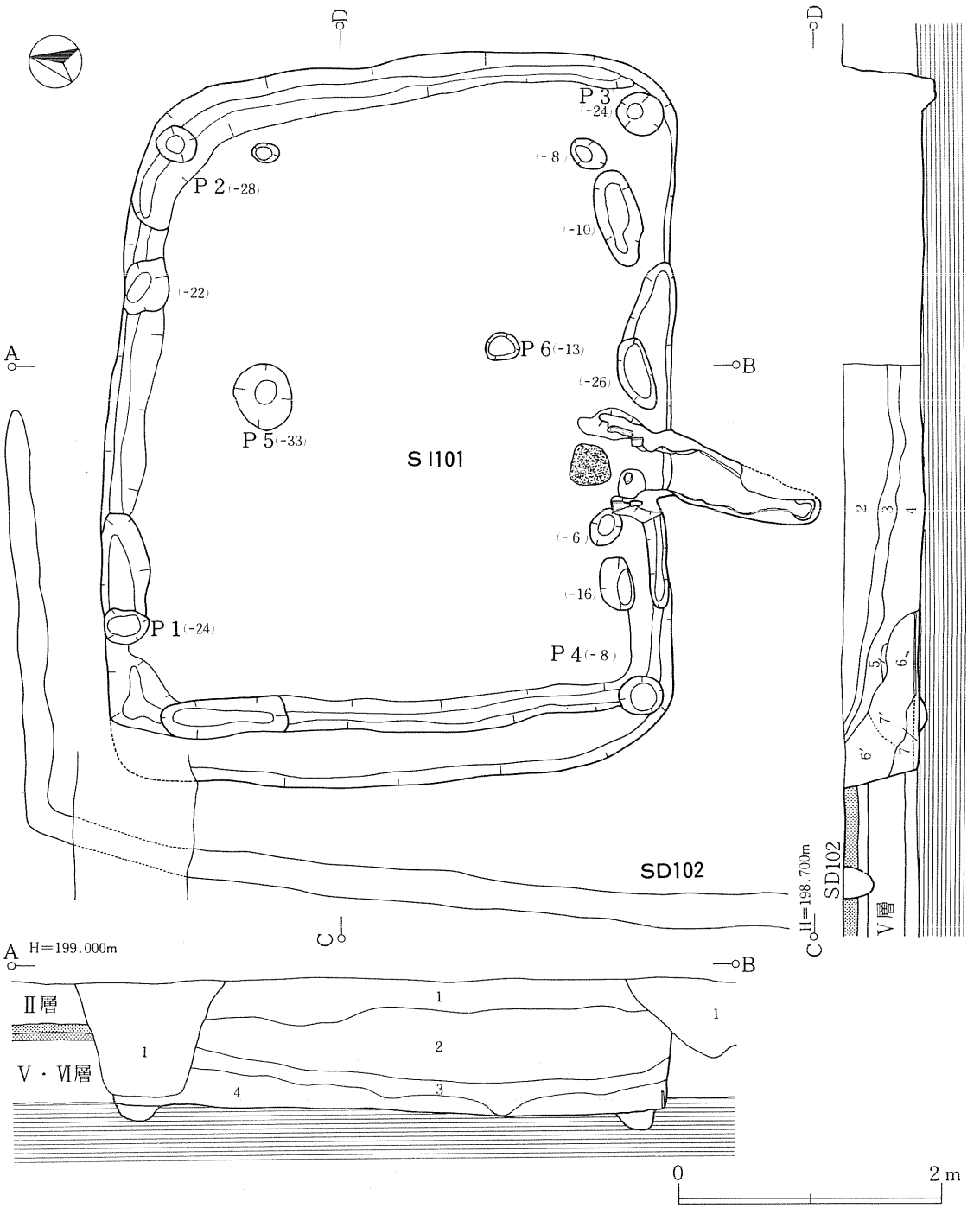
位置・確認状況　ＪＩ・ＪＪ64・65グリッド、第Ⅲ層大湯浮石層で検出した。住居北西隅は畑の耕作に伴い破壊されていた。同面で確認できたＳＤ102溝状遺構は、住居外側に沿うように配されている。

形態・規模　東西長5.3～5.6ｍ、南北長４～4.3ｍのやや歪つな隅丸長方形を呈する。主軸方位はＮ―10°―Ｗを示す。

覆土　４層以下については、大湯浮石粒子の混入状態により、人為的堆積土と考えられる。

床・壁　床面は第Ⅶ層地山面を僅かに掘り下げたレベルにあり、平坦で堅く締まっている。床面積は18.9㎡である。壁高は、北・西壁で最高58㎝ある。床面あるいは床面直上で炭化材、焼土を数多く確認できた。東・西壁では倒れた状態で、南・北壁の一部では壁際に立ったままの壁板材を検出した。前者西壁では整然と並んだ板材16枚が一度に倒れた（倒した）様を示している。各材には手斧の痕跡が明瞭に観察される。板材１枚あたりの大きさは、最大で長さ80㎝、幅25㎝、厚さは５㎜前後である。東壁は西のそれに比べると遺存状態は良くないが、９枚の板材が確認できた。床面には、焼失に伴うと見られる焼土が全面に広がっている。特に炭化材列の内側床面上の図示した帯状の範囲で顕著に認めらた。

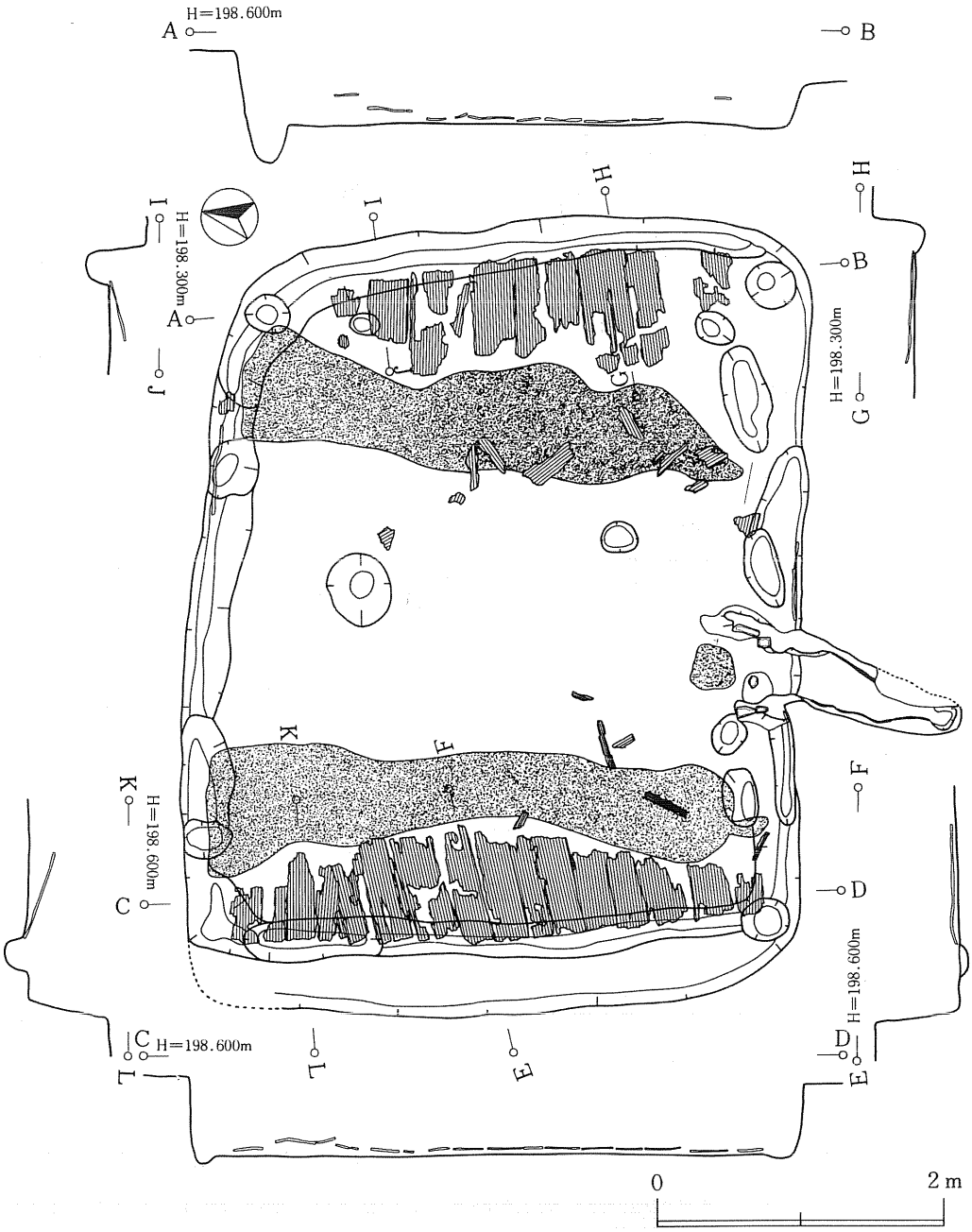
壁溝・柱穴　壁溝は南壁の一部を除き巡る。ただし西壁では壁直下ではなく、内側40㎝程に位置している。西側の板材列は、この溝内に立てられていたことが材下端部の位置から明ら



SI101

1．耕作・攪乱土　2．赤黒色(10YR1.7/1)第Ⅱ層　3．赤黒色(2.5YR1.7/1)
4．黒色(10YR3/1)　5．褐炭色(10YR3/1)灰、粘土　6．黒色(10YR3/1)浮石多い
6．浮石が横縞状に堆積　7．黒色(10YR3/1)と地山の混合土　7′．貼床部分

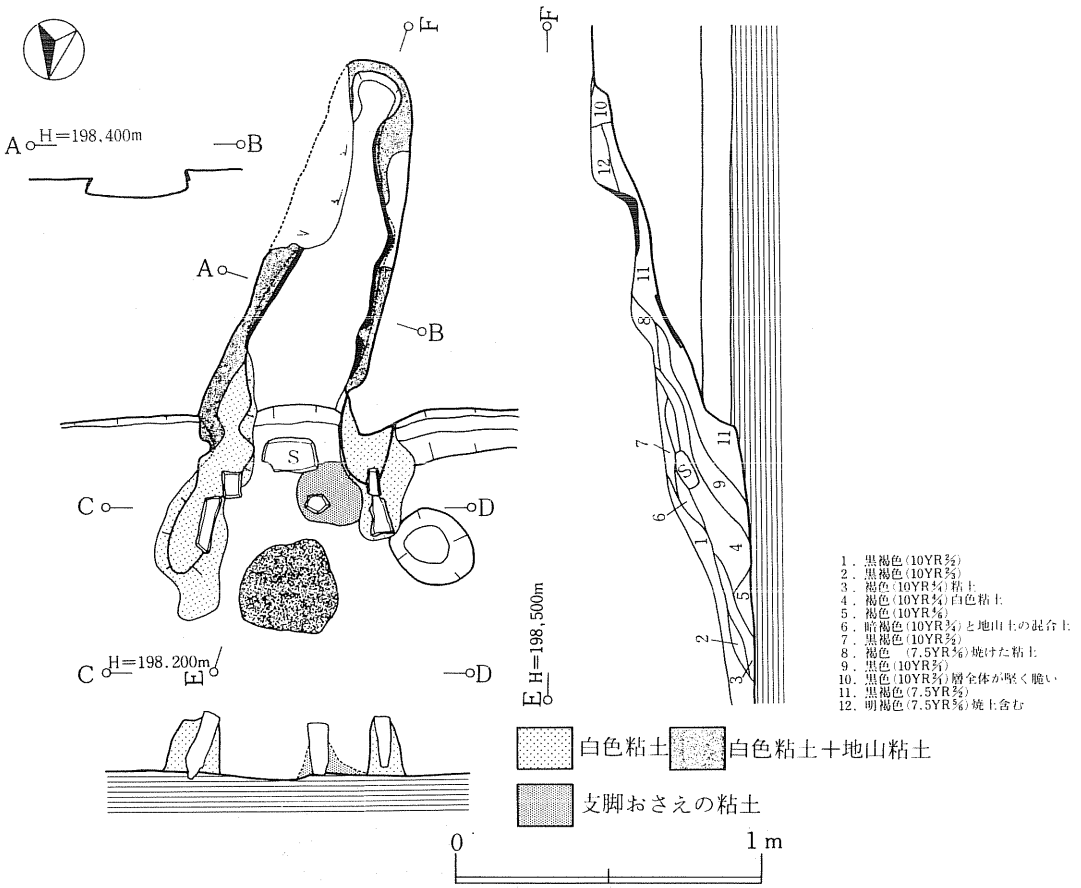
第116図　SI 101竪穴住居跡、SD102溝状遺構



第117図　SI 101竪穴住居跡・炭化材出土状況

かである。溝の幅は25～30㎝、深さは５～12㎝である。柱穴は各壁際に位置するＰ１～４と見ることができる。

カマド・炉　カマドは、南壁中央やや西寄りで確認した。煙道の一部は耕作に伴い破壊されていたが、残りは全体に遺存状態良好である。カマド中軸線（N―177°―W）は壁に対し直



第118図　SI 101竪穴住居跡カマド

交せず、煙出し部がやや西に振れている。全長190cm（煙道長145cm、燃焼部長45cm）、燃焼部内法幅は50cm、煙道部での最大幅35cmを計測する。袖部は石を芯材とし白色粘土で固めている。燃焼部中央からやや右袖寄りには長さ17cmの支脚として用いられた石が位置する。支脚の周囲にはこれを固定するための粘土が確認できる。石は火熱の影響で脆くなっていた。

煙道部は、まず壁外に第Ⅴ層を溝状に上り勾配約17°で1.2m程掘り進める。煙出し部分に相当する先端部を除き煙道内壁に粘土を貼る。この粘土は、袖部の粘土より黄味・粘性が強く、植物の細い茎（笹竹か）・葉などが含まれることから、いわゆるスサ入り粘土を用いていることが分かる（第143図参照）。この部分は火熱で赤褐色に変色・硬化している。削平されているが天井部も同様にして架構していたものと考えられる。

出土遺物（第137図440・441）　土師器甕（4個体）、把手付土器、フイゴ羽口、鉄滓、流失滓が出土している。441は中実の把手が付く形態をなすと考えられる。底部はナデである。

ＳＩ106　（第119図、図版41、42）

位置・確認状況　ＪＩ57・58グリッド、第Ⅲ層大湯浮石層で検出した。遺構東側は調査区外になる。

形態・規模　東西長3.7ｍ以上、南北長3.3〜3.5ｍの東西方向に長い隅丸長方形を呈するものと思われる。主軸方位はほぼ座標北を示す。

覆土　５層は大湯浮石粒子・小ブロックが多く混じっている。さらに拳大〜人頭大の礫を多く含み、炭化物、土器、鉄滓も含まれている。これらのことから同層は人為堆積と考えられる。

床・壁　床面は第Ⅴ層下面黒褐色シルト質土にある。壁高は、北壁で最高40cmである。

壁溝・柱穴　いずれも確認できなかった。

カマド・炉　カマドは南壁西寄りで確認している。右袖の一部は、カマド廃棄直後意図的に破壊しているようである。全長150cm（煙道長105cm、燃焼部長45cm）、燃焼部内法幅45cmを測る。袖部は白色粘土を主とし、石・塼を補強材として用いている。燃焼部ほぼ中央部には石の支脚（高さ16cm）が原位置を保っていた。火床面は幾分窪んでいるが、カマドの使用に伴い窪んだものと考えられる。煙道部は、壁外に第Ⅲ・Ⅴ層を溝状に18°の上り勾配で約85cm掘り進んでいるが、粘土などの構築材は認められなかった。煙道東側内壁の一部には焼面が観察できる。

なおカマド内より炭化種子が出土しているが、同定の結果マメ類であることが明らかとなった。（第11章科学的分析参照）

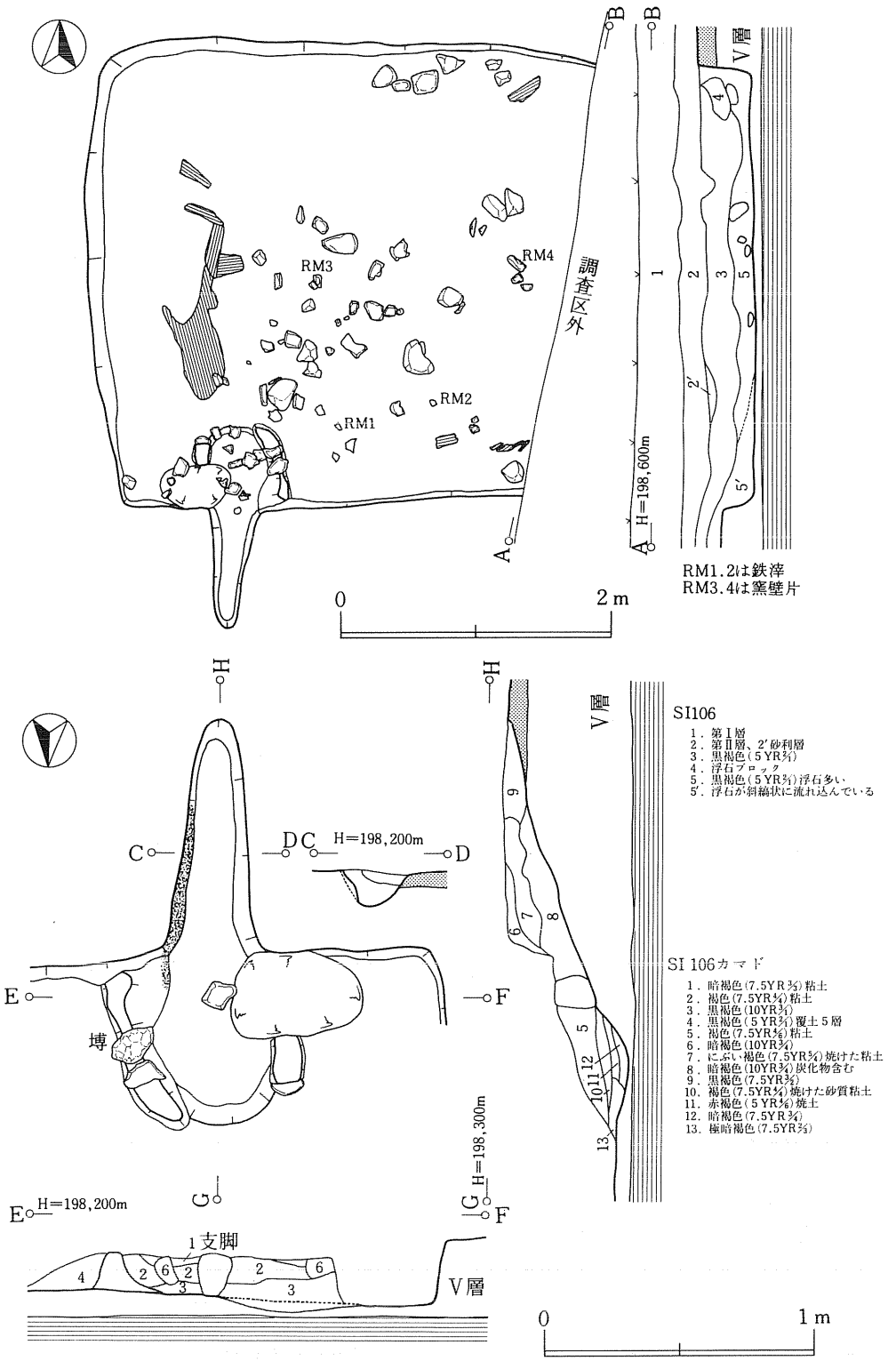
出土遺物（第137図442〜447）　土師器甕（６個体）、鍋（１個体）、把手付土器２点、フイゴ羽口、鉄滓、窯壁片が出土している。444、445、447はカマド内出土である。底部に木葉痕を残す445は、中実の把手が付くと考えられる。体部のケズリは、粗くいわゆるナタケズリ様である。447は、推定口径35cmの厚手の鍋で、二次加熱を受けている。窯壁片は床面直上より２片得られている。

ＳＩ107　（第120図、図版41、43）

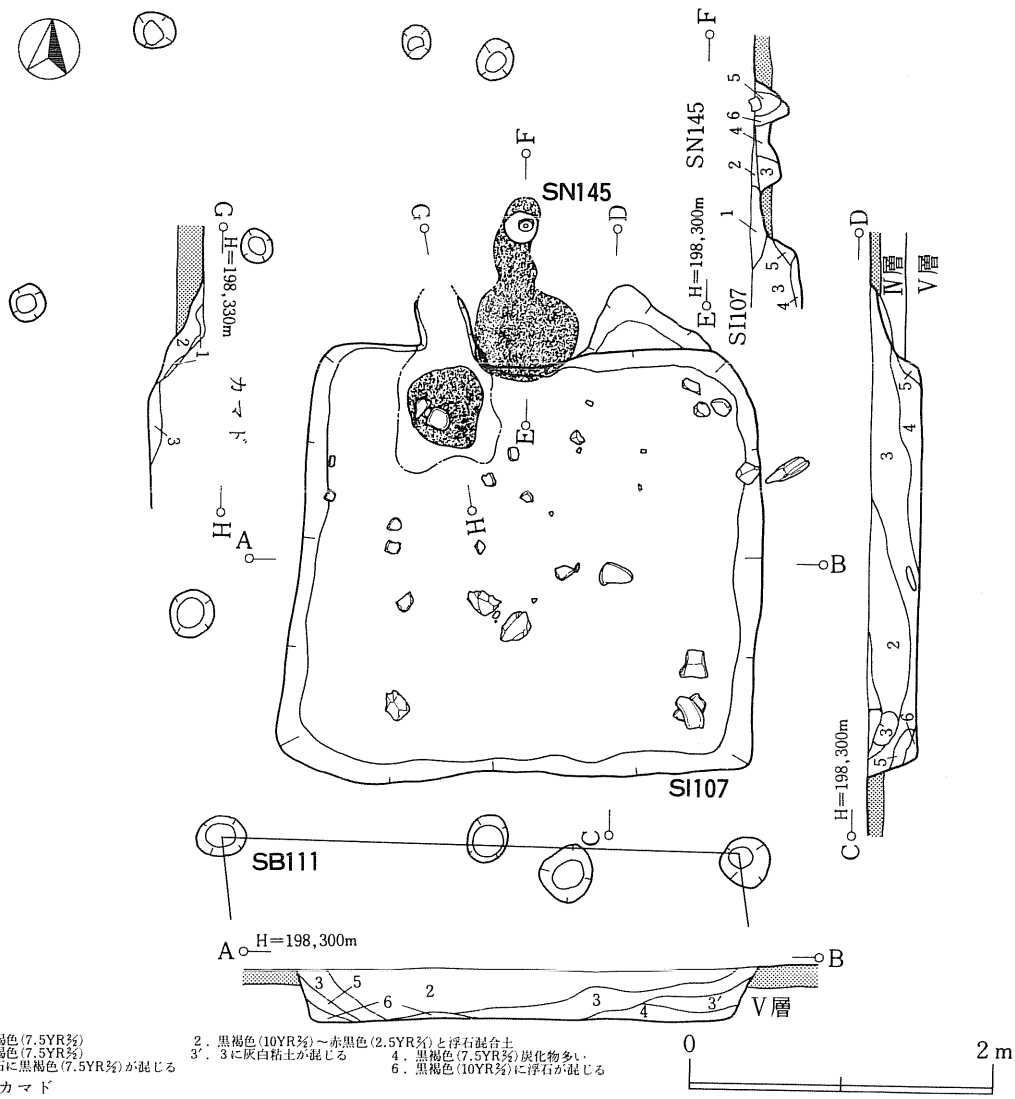
位置・確認状況　ＪＪ・ＪＫ58グリッド、第Ⅲ層面で検出した。住居北壁上には、これを切ＳＮ145焼土遺構が位置している。南壁にほぼ平行する南側40cmには、ＳＸ110鍛冶炉に伴うＳＢ111掘立柱建物跡の北側柱列が存在する。

形態・規模　東西長2.9〜3.1ｍ、南北長2.8〜2.9ｍの隅丸方形を呈する。主軸方位はＮ－４°－Ｗを示す。

覆土　２・３層には大湯浮石粒子・小ブロックが多く混入している。



第119図　SI 106竪穴住居跡



SI107
1．黒褐色(7.5YR3/2)　2．黒褐色(10YR3/2)～赤黒色(2.5YR3/2)と浮石混合土
3．黒褐色(7.5YR3/2)　3′．3に灰白粘土が混じる　4．黒褐色(7.5YR3/2)炭化物多い
5．浮石に黒褐色(7.5YR3/2)が混じる　6．黒褐色(10YR3/2)に浮石が混じる

SI107カマド
1．赤黒色(2.5YR3/2)粘土混じる　2．にぶい赤褐色(5YR5/3)粘土　3．黄色(2.5Y8/6)粘土、焼土混じる

SN145
1．明赤褐色(5YR5/6)浮石の焼土化、掘り込みをもたない　2．暗褐色(10YR3/4)浮石
3．黒褐色(7.5YR3/2)に浮石混じる、柱穴か　4．浮石に黒褐色土混じる
5．黒褐色土に浮石を多く含む　6．黒褐色土に浮石を少量含む

第120図　SI 107竪穴住居跡・SN145焼土遺構

床・壁　第V層中を床面としているが、締まりに欠けるためか明確に面としての床は把握し得なかった。床面積は7.2㎡である。壁高は、最高で35㎝を測る。

壁溝・柱穴　いずれも確認できなかった。

カマド・炉　カマドは、北壁西寄りで確認している。袖部など原形を留どめないほどの状態であり、竪穴住居自体の遺存状況からすると、カマドを意図的に破壊したと想定できる。煙道部は、壁外に25°の上り勾配で掘り込む形態であるが、掘り込み面が第Ⅲ層であることも影響してか、先端の煙出し部分ははっきりしない。火床面は住居床面をそのまま利用している。

その他の付属施設北壁東寄りには、三角様の張り出し（奥行き45cm、幅90cm）が認められる。地盤が柔らかい関係もあり、廃棄後の崩れとも考えられるが、ここでは検出位置から、出入口施設としておきたい。

出土遺物（第138図448、141図480、142図Ｓ295）　土師器甕（２個体）、砥石、フイゴ羽口、鉄製品（鎌か）が出土している。フイゴ羽口は、ＳＩ115出土の破片と接合した。

ＳＩ108　（第121図、図版44）

位置・確認状況　ＪＫ・ＪＬ63・64グリッド、第Ⅲ層面で礫を含む黒色円形のプランとして確認した。

形態・規模　東西長4.5〜4.7ｍ、南北長4.6ｍの隅丸方形を呈する。主軸方位はＮ―27°―Ｗを示す。

覆土　住居内ほぼ全域の覆土中位から床面直上にかけて、多量の礫を確認できる。この礫の供給源は、後述のＳＩ109構築に係っていると考えられる。また住居北西隅の一角（一点破線内）覆土中に焼土の分布が認められる。礫などと共に廃棄されたものと思われる。

床・壁　第Ⅴ層下面を床面としているが、南西部床面の一部には第Ⅶ層地山段丘礫層が露出している。これは倒木痕に伴う地山の盛り上がりによるものである。床面積は18.4㎡である。壁高は、最高45cmを測る。

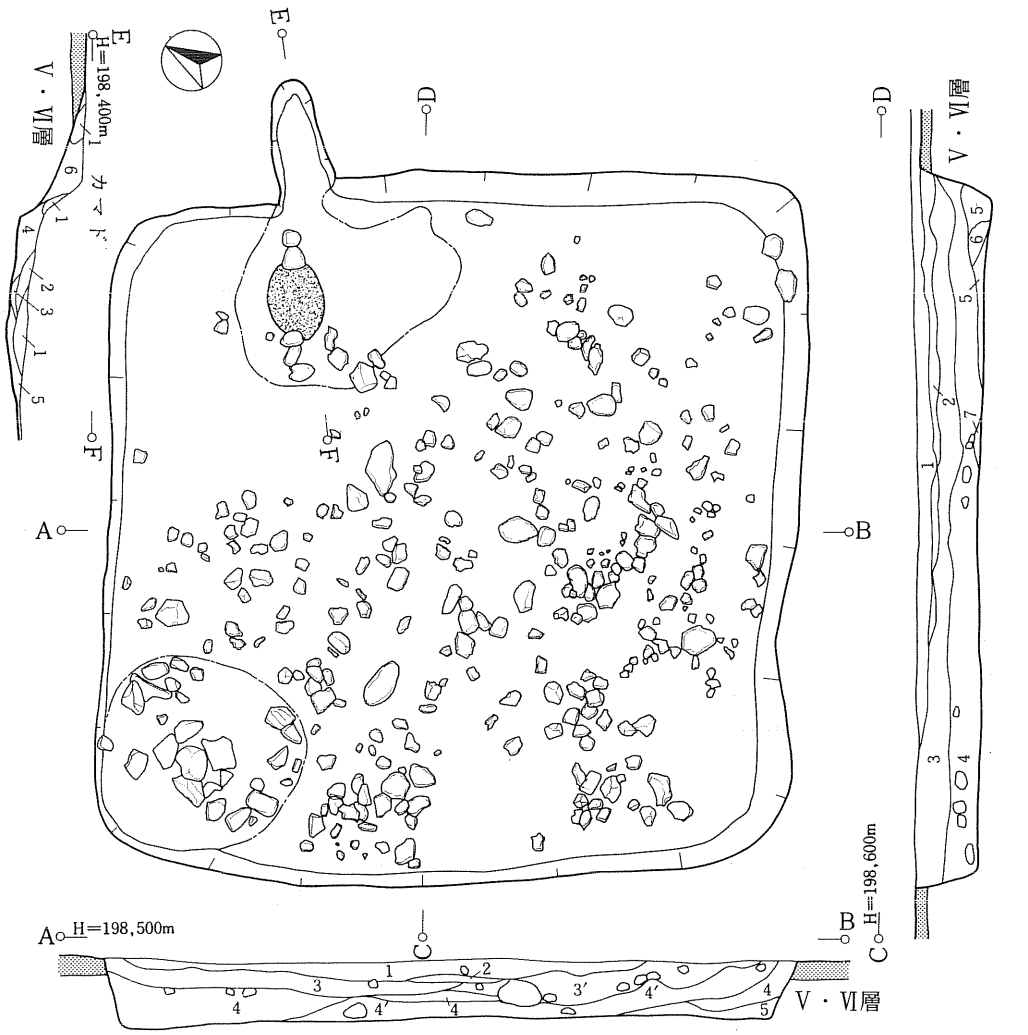
壁溝・柱穴　いずれも確認できなかった。

カマド・炉　カマドは東壁北寄りで確認している。壁外に延びる煙道と火床面しか残っていない。全長は170cmを測る。煙道部は、壁外に20°の上り勾配で溝状に約80cm掘り進めている。カマド堆積土から火熱のため薄紫色を呈する白色粘土（１層）と、黒褐色土・大湯浮石粒子の混合土（２・３層）を主材として構築していたものと考えられる。

出土遺物（第138図449、141図481、142図Ｓ296）　土師器甕（９個体）、砥石、フイゴ羽口、鉄滓が出土している。449の底部は砂底を示しているが、中央部分をケズリ取っている。

ＳＩ109　（第122、123図、図版45、46）

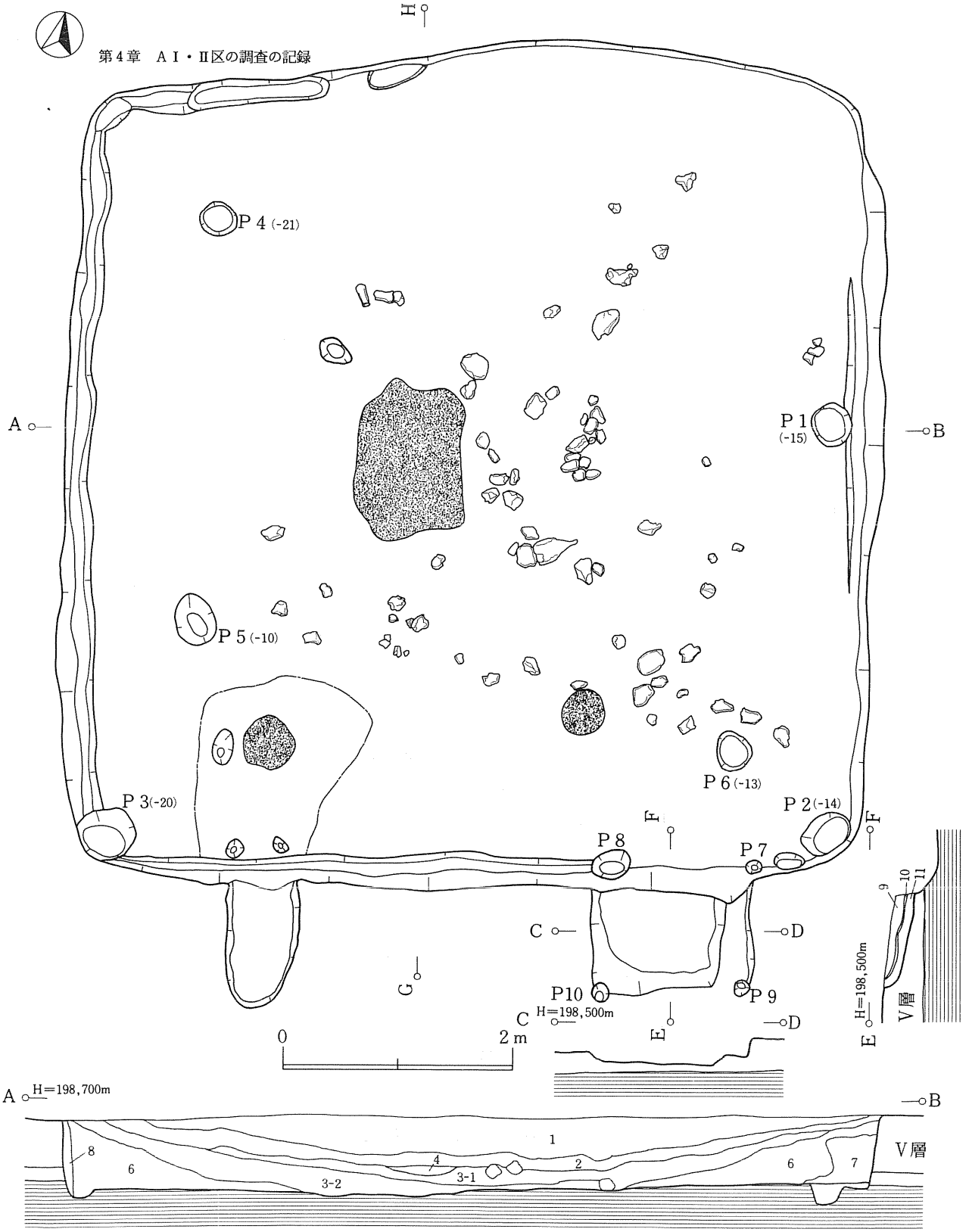
位置・確認状況　ＪＭ〜ＪＯ64〜66グリッド、第Ⅲ層面で検出した。遺構は縄文時代の竪穴住



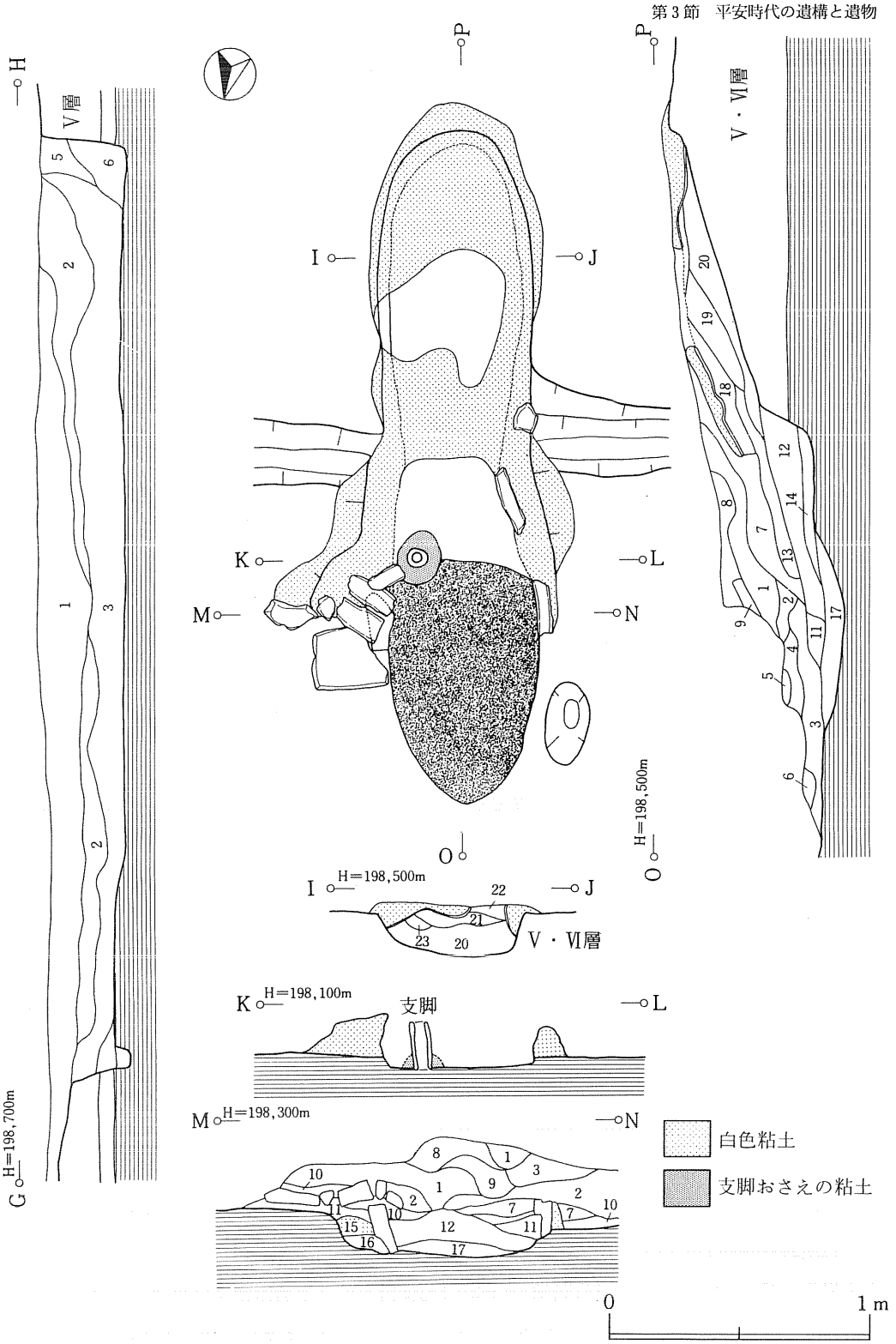
SI108
1．赤褐色(7.5R4/4)　2．黒褐色(5YR3/1)　3．黒褐色(5YR3/2)
3′．暗褐色(7.5YR3/3)　4．黒褐色(5YR3/1)浮石やや多い　4′．4より浮石少ない
5．黒褐色(5YR3/1)　6．浮石のブロック　7．赤黒色(2.5YR3/2)

SI108カマド
1．灰褐色(7.5YR5/2)粘土　2．黒褐色(7.5YR3/2)焼土混じる　3．にぶい赤褐色(5YR4/4)浮石赤変
4．赤黒色(2.5YR3/2)　5．黒色(7.5YR2/1)と浮石混合土　6．赤黒色(2.5YR3/2)

第121図　SI 108竪穴住居跡



第122図　SI 109竪穴住居跡



第123図　SI 109竪穴住居跡カマド

居跡ＳＩ152と、これに係るＳＱ153礫群を切り込んで構築している。この際多量に生じることとなった礫については、北側約３ｍ先にＳＩ152が埋まり切らずに窪んでる箇所（ＳＱ146配石遺構）と南東約５ｍ先の廃棄されたＳＩ108の窪地をその捨場として用いているようである。（第124図参照）

形態・規模　南北長6.8～7.2ｍ、東西長７ｍの隅丸方形を呈している。主軸方位はＮ―11°―Ｗを示す。

覆土　３層は大湯浮石層粒子を斑状多量に含み、地山に包含されている亜角礫、円礫も多く認められる。７層は大湯浮石の二次堆積土である。

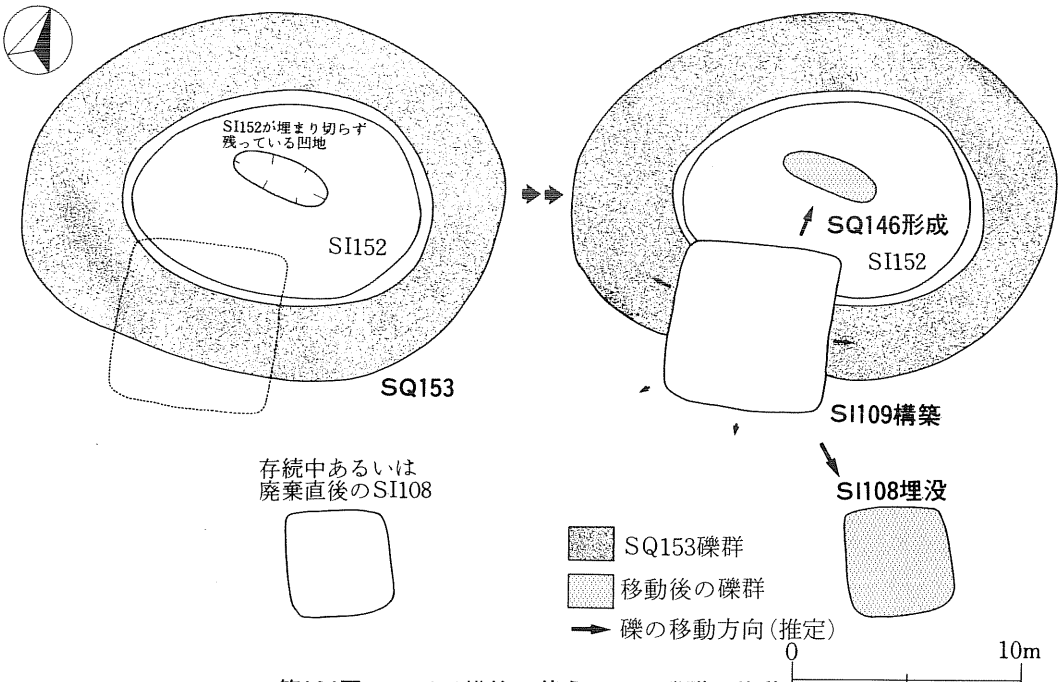
床・壁　床面は第Ⅶ層地山面を僅か掘り下げたレベルにある。地山段丘礫層が露出している。ＳＩ152と重複する北東部では貼床されているが、堅く締まってはいない。床面積は46.6㎡ある。壁高は、最高で63㎝ある。

壁溝・柱穴　壁溝は北壁東半と東・南壁の一部を除き幅20～30㎝、深さ10㎝前後で巡っている。他の住居跡と比較して本遺構壁溝の掘り込みは浅い。柱穴は壁際にＰ１～３、床面上にＰ４～６を検出している。床面上のＰ４・５の配置からすると、南北中軸線で折り返した東側にもう２本の柱穴と合わせた４主柱が想定されたが、精査の結果これを確認できなかった。この部分の床面は段丘礫層が露出し、非常に堅く締まっているため、仮に床面上に４主柱が存在していたとしても、Ｐ４・５規模の柱を建てるとすれば、掘り込みは必要なかったのかもしれない。

カマド・炉　カマドは、南壁西寄りで確認している。全長260㎝（煙道長165㎝、燃焼部長95㎝）、燃焼部内法幅55㎝と長大であり、遺存状態は極めて良好である。袖部は切石を芯材として床面に埋め込み、その上に白色粘土を貼り付けている。燃焼部奥、左袖寄りにはフイゴ羽口を転用した支脚が原位置を保っていた。羽口のまわりにはこれを押さえるための粘土が認められる。煙道部は、壁外を17°の上り勾配で幅40～50㎝、長さ約110㎝に掘り込んでいる。煙道部内壁～天井部には、袖部で用いている粘土より幾分黄味の強い粘土を架構材として使用している。内側に面した壁は火熱で硬化著しい。天井部がそのまま落下した部分が多いが、使用時の状態を保っている箇所では、横断面形がカマボコあるいは両凸レンズ状を呈し、その内側での高さは15㎝ある。

その他の付属施設　住居南壁東寄りには、奥行き約１ｍ、幅1.4ｍの張り出しが存在し、この４隅の小柱穴（Ｐ７～10）から、上屋を伴う出入口施設を考えることができる。東側の壁は階段状を呈している。

出土遺物（第138図450～456、141図482・483、143図Ｍ１）　土師器甕（11個体）、フイゴ羽口（２個体）、鉄製品、骨片、鉄滓が出土している。骨片は覆土４層、450・452・453・



第124図　SI 109構築に伴うSQ153礫群の移動

455・456はカマド内出土である。452、454はＳＩ108覆土出土の破片と接合した。454は、口縁部から体部の１／３が欠損しているが、土器の形態などからこの部分に把手が付されていた可能性もある。Ｍ１は、断面方形の棒状鉄製品である。

ＳＩ113　（第125、126図、図版46）

位置・確認状況　ＪＬ・ＪＭ56・57グリッド、第Ⅲ層大湯浮石層で検出した。

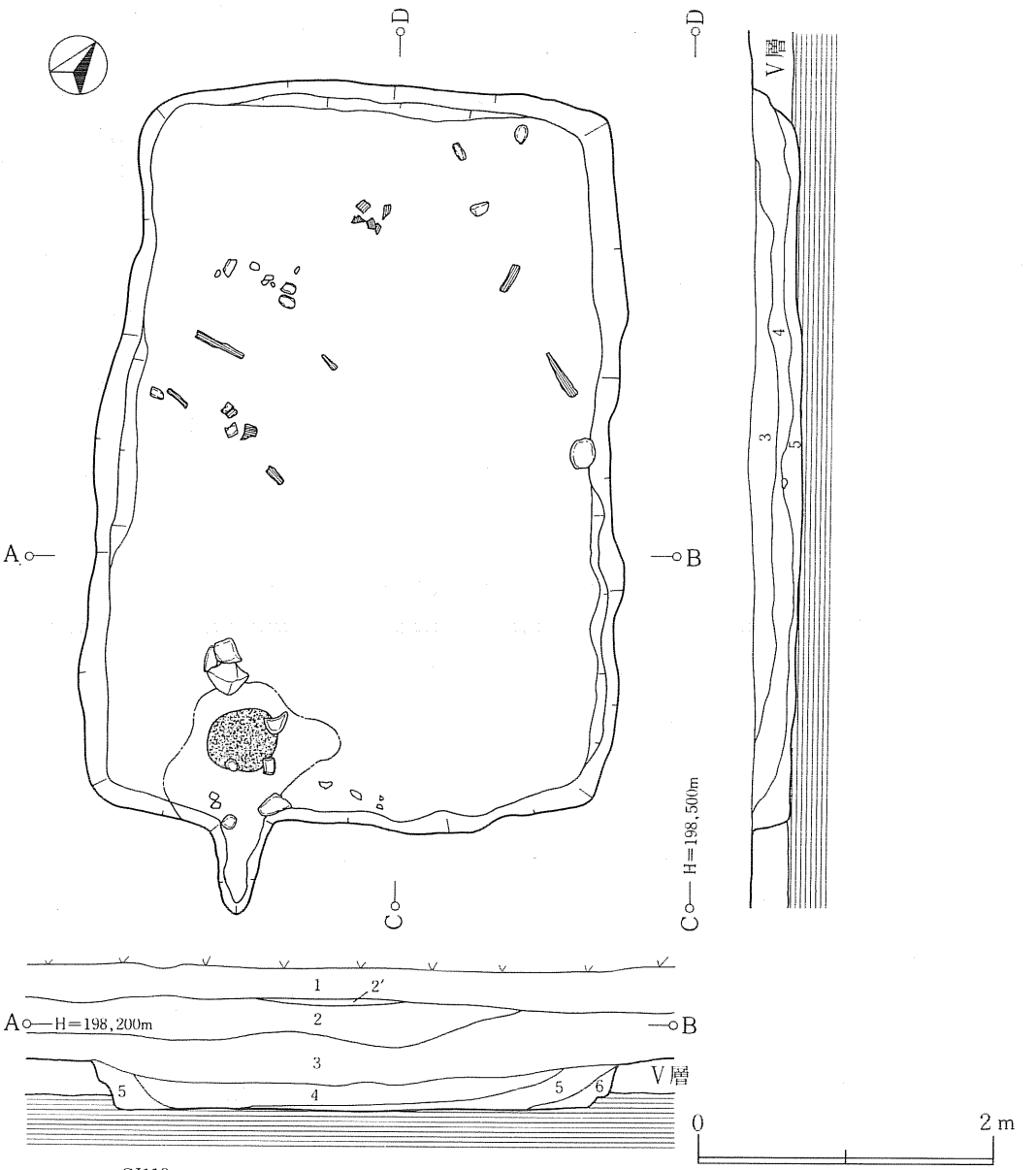
形態・規模　南北長4.9〜5.1ｍ、東西長3.3〜3.7ｍのやや歪つな隅丸長方形を呈する。主軸方位はＮ—27°—Ｗを示す。

覆土　４層は黒褐色土と大湯浮石粒子・小ブロックを半々の割合で混合している。５層中には炭化材を多く含んでいる。材の中には少量の萱が混じっている。

床・壁　第Ｖ層中を床面とし、平坦ではあるが堅く締まってはいない。床面積は14.9㎡である。壁は斜めに立ち上がり、最高38cmある。

壁溝・柱穴　いずれも確認できなかった。

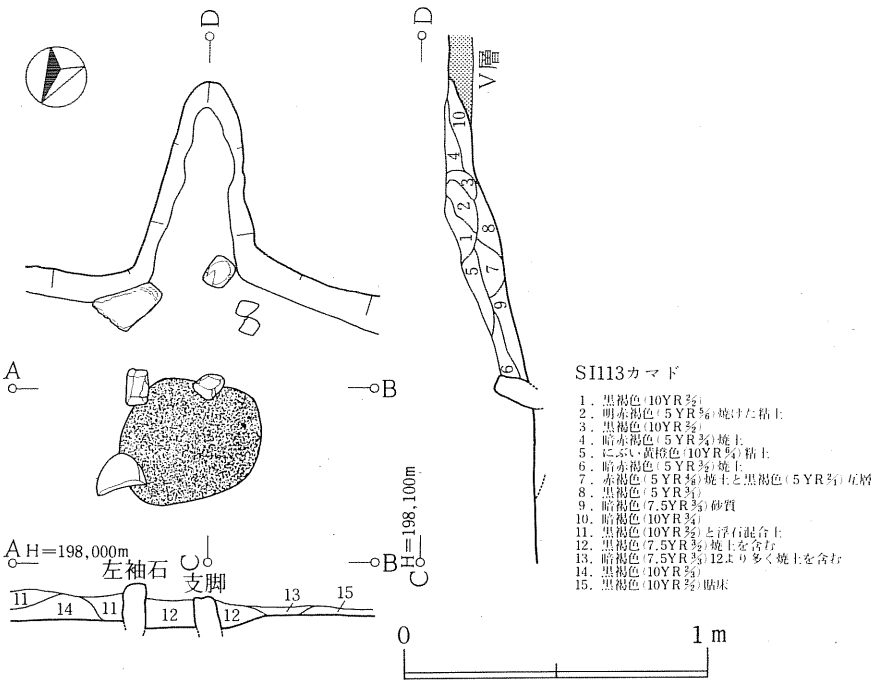
カマド・炉　カマドは南壁西寄りで確認した。原位置を保つものは、支脚と左袖の石のみである。全長140cm（煙道長100cm、燃焼部長40cm）を測る。煙道部は、壁外を14°の上り勾配で溝状に約60cm掘り込んでいる。上部材は、その崩落土から類推できる。支脚から壁際までは大湯浮石粒子と地山粘土の混合土（５層）、壁外は粘土（２・４層）で架構していた



SI113

1．黒褐色(10YR3/2)第Ⅰ層　2．黒褐色(5YR3/1)第Ⅱ層相当　2′．砂利層・後世の道路遺構か
3．黒色(7.5YR2/1)　4．黒褐色(10YR3/2)と浮石の混合土
5．黒褐色(10YR3/2)炭化材・物を多く含む　6．黒褐色(5YR3/2)と浮石の混合土

第125図　SI 113竪穴住居跡



第126図　SI 113竪穴住居跡カマド

ようである。後者の粘土は火熱で明赤褐色に変色・硬化している。

出土遺物（第139図457・458、142図Ｓ297）　土師器甕、鍋、砥石、フイゴ羽口、鉄滓が出土している。457は、底部破片に木葉痕が認められる。458は、比較的薄手で焼成の良好な鍋形を呈するものであろう。

ＳＩ114　（第127図、図版47）

位置・確認状況　ＪＩ61グリッド、第Ⅲ層面で検出した。住居東壁をＳＤ105溝状遺構が切っている。

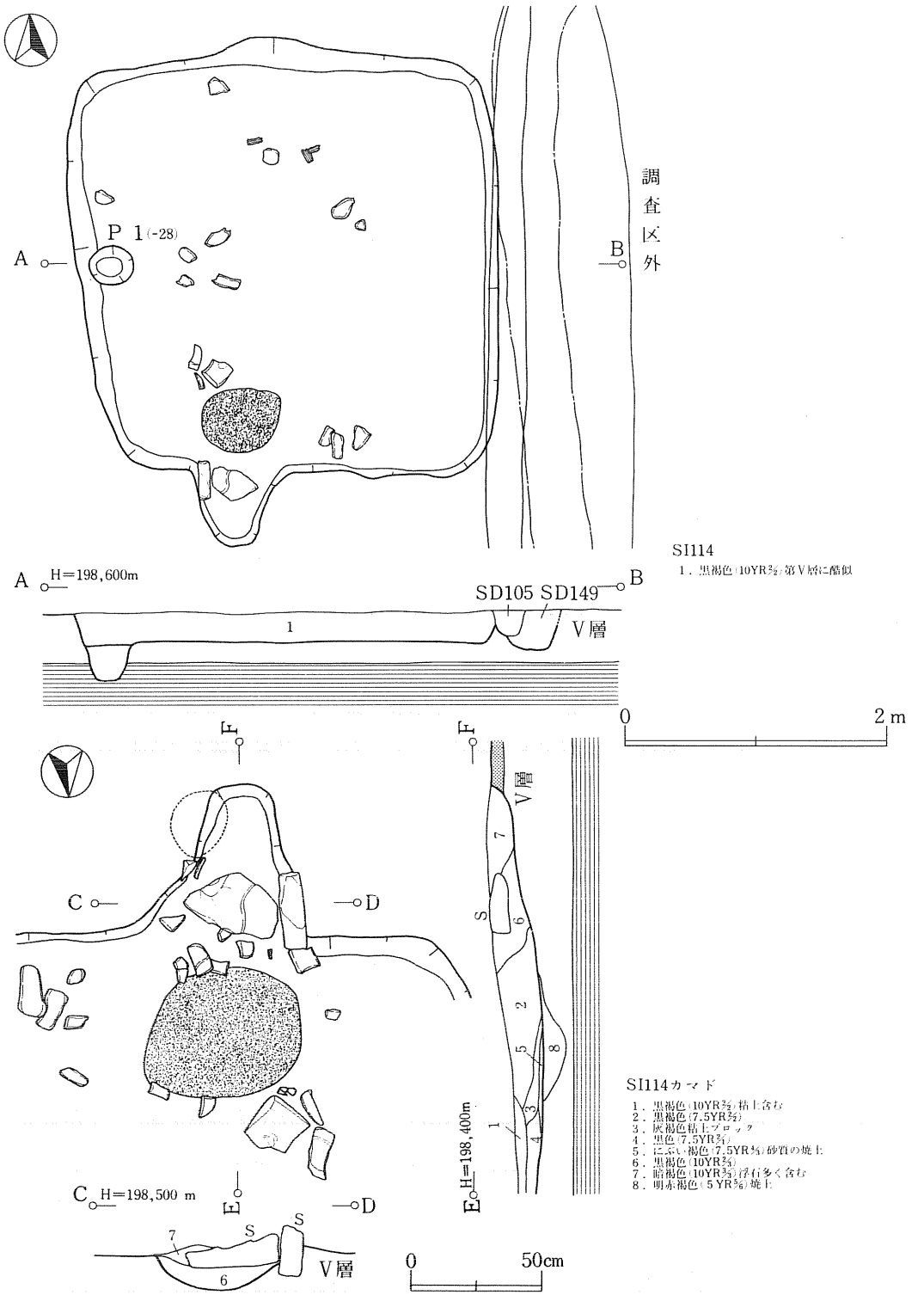
形態・規模　東西・南北長ともに３～3.2ｍの隅丸方形を呈する。主軸方位はＮ－３°－Ｅを示している。

覆土　覆土は第Ｖ層土と酷似しており、壁、床面検出は困難を極めた。

床・壁　第Ｖ層中を床面としており、貼床なども認められなかったことから、面として明確に床を把えることはできなかった。床面積は8.9㎡、壁高は22㎝を測る。

壁溝・柱穴　壁溝はない。柱穴は西壁中央でＰ１を確認している。ただし上述のような床面の状態からすると、両者の有無を含めて不明と表記した方が適切かもしれない。

カマド・炉　南壁西寄りで確認している。カマド構築には切石（あるいは塼か）を多用してい



第127図　SI 114竪穴住居跡

るが、袖部は完全に失われている。全長は120cm（推定煙道長65cm、燃焼部長55cm）を測る。煙道部は、壁外をU字形に10°の緩い上り勾配で幅46cm、長さ60cm程に掘り込んでいる。右側壁には切石を埋め、天井部も幅35cmの同質の切石を乗せた、いわば石組である。

出土遺物（第139図459～462）　土師器甕（６個体）、フイゴ羽口、鉄滓、流失滓が出土している。462は、土師質ではあるが、器種不明の製品である。胎土に粒径のやや大きい砂粒を多く含んでいる。

ＳＩ115　（第128、129図、図版48、51）

位置・確認状況　ＪＪ60グリッド、第Ⅲ層大湯浮石層で径約4.5ｍの黒色円形を呈するプランとして検出した。

形態・規模　東西長3.4～3.8ｍ、南北長３～3.2ｍのやや歪つな隅丸方形を呈する。主軸方位はＮ－５°－Ｗを示す。

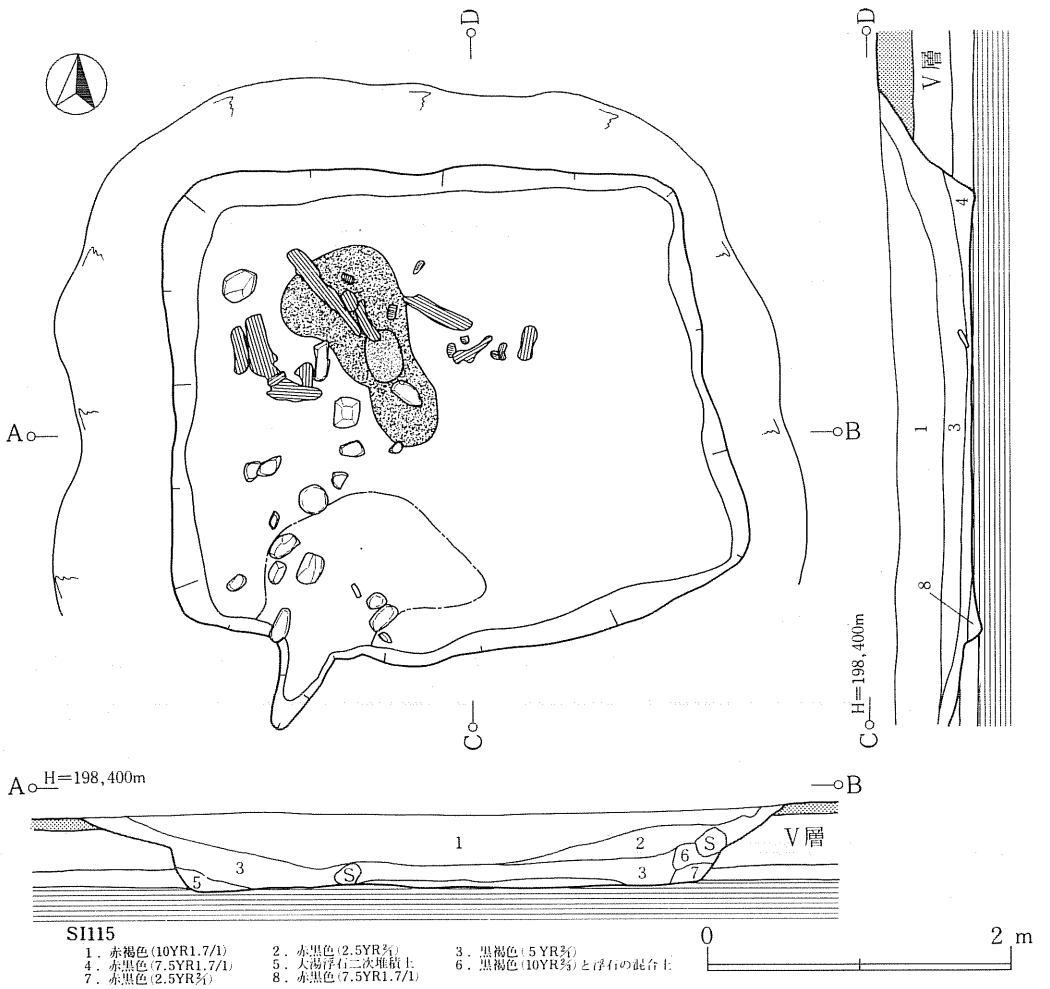
覆土　炭化材、焼土の多くは４層上面で確認されている。

床・壁　第Ⅶ層地山上面を床面としており、同層をほとんど掘り込んではいない。床面積は9.2㎡ある。確認面からの壁高は、最高で60cmある。壁が斜めに立ち上がっているのは、掘り込み面の地盤が柔らかく、住居廃棄後３層土が流入する時点かその直前に崩れが生じたためと考えている。

壁溝・柱穴　いずれも確認できなかった。

カマド・炉　カマドは南壁西寄りで確認している。カマド中軸線（Ｎ－166°－Ｗ）は、周壁に対し直交するのではなく、煙出し部が西に偏している。全長は135cmで、火床面奥に位置する立石（Ｓ１）が支脚であるとすると煙道長60cm、燃焼部長73cmとなる。燃焼部は掘り方を伴う。袖部などは原形状を留どめていないが、崩壊した石や堆積土からある程度の復元は可能である。袖部はおそらく石を主材とし、大湯浮石粒子に黒褐色シルト質土を混ぜた土（３層）で構築している。壁外に約55cm張り出させた煙道部は25°の上り勾配を示す。その天井部には、粘土（４・８層）を以て架構していたようである。平面的に確認はできなかったが、カマド９層は、砂質粘土が赤変硬化している箇所であり、同層で挟まれた間を煙出し部（点線で推定）と見ることができる。

出土遺物（第139図463～467、142図Ｓ298）　須恵器壺１点、土師器甕（６個体）、把手付土器２点、砥石、フイゴ羽口、歯・骨片、鉄滓が出土している。把手付土器はカマド焚口、歯・骨片は燃焼部の焼土中の出土である。把手付土器（465・466）には、中実と中空の２種類の把手が認められる。Ｓ298は、大形の砥石で長さ27cm、重量3.6kgある。



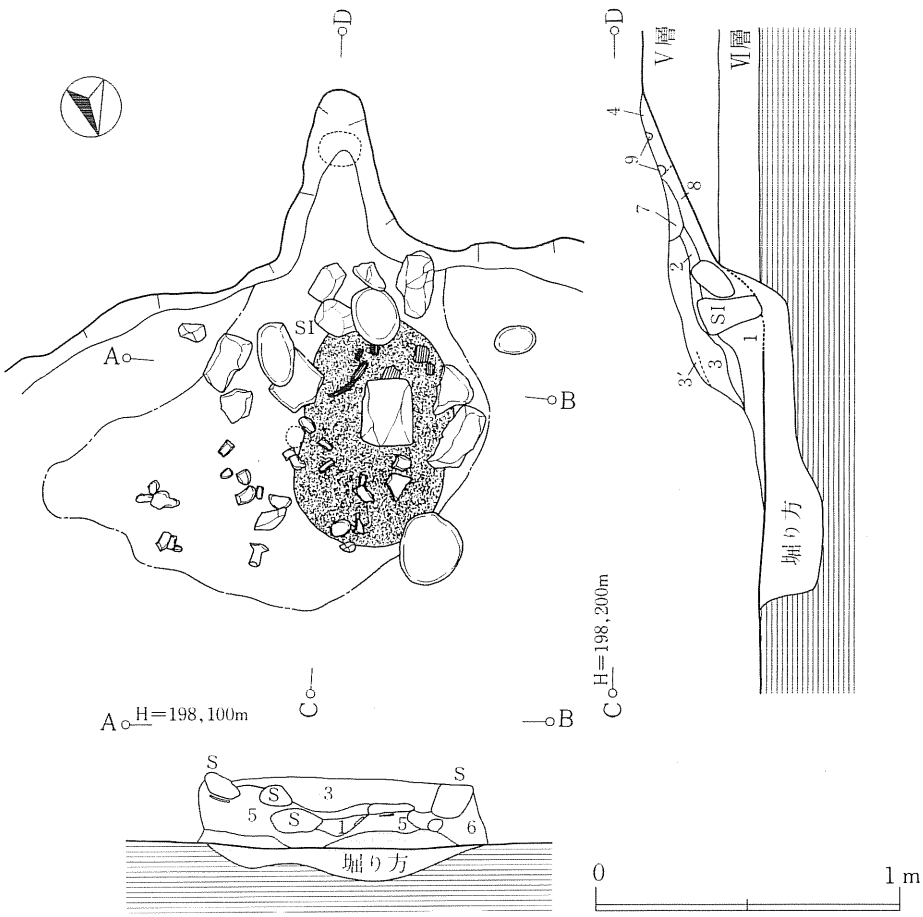
第128図　SI 115竪穴住居跡

ＳＩ116　（第130～132図、図版49～51）

位置・確認状況　ＪＬ・ＪM59・60グリッド、第Ⅲ層大湯浮石面で検出した。

形態・規模　東西長5.2～5.4m、南北長５～5.2mの隅丸方形を呈する。主軸方位はＮ－７°－Ｗを示す。

覆土　覆土中位（２～４層上面）で数多くの炭化材を確認できた。西壁部では横倒しとなっている壁板材６枚と、これらのおさえをなしていたと考えられる横木（長さ110cm、幅５～８cm）を検出している。この板材直下では多量の炭化麦と思われる種子を確認した。炭化米も混

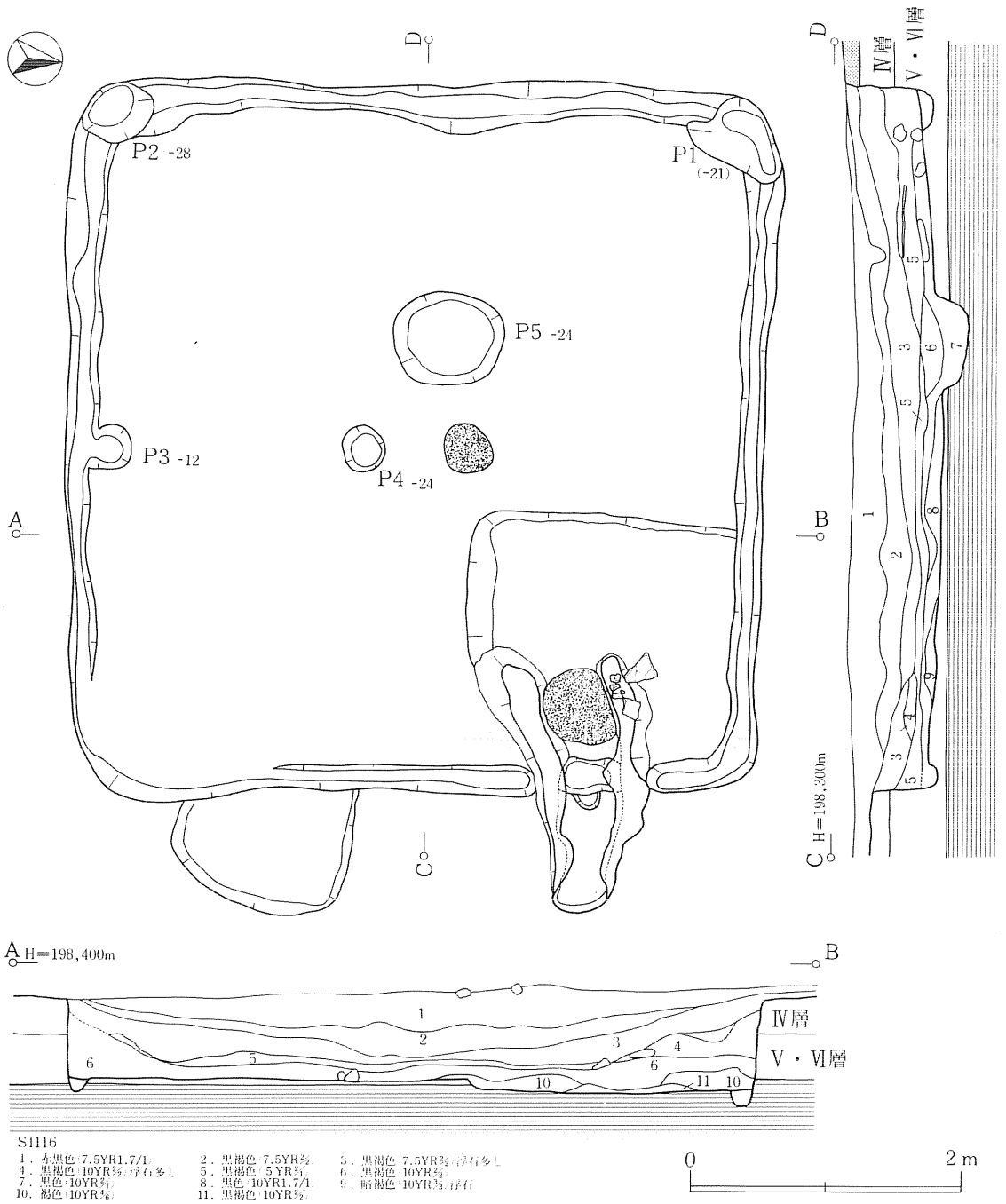


第129図　Si115竪穴住居跡カマド

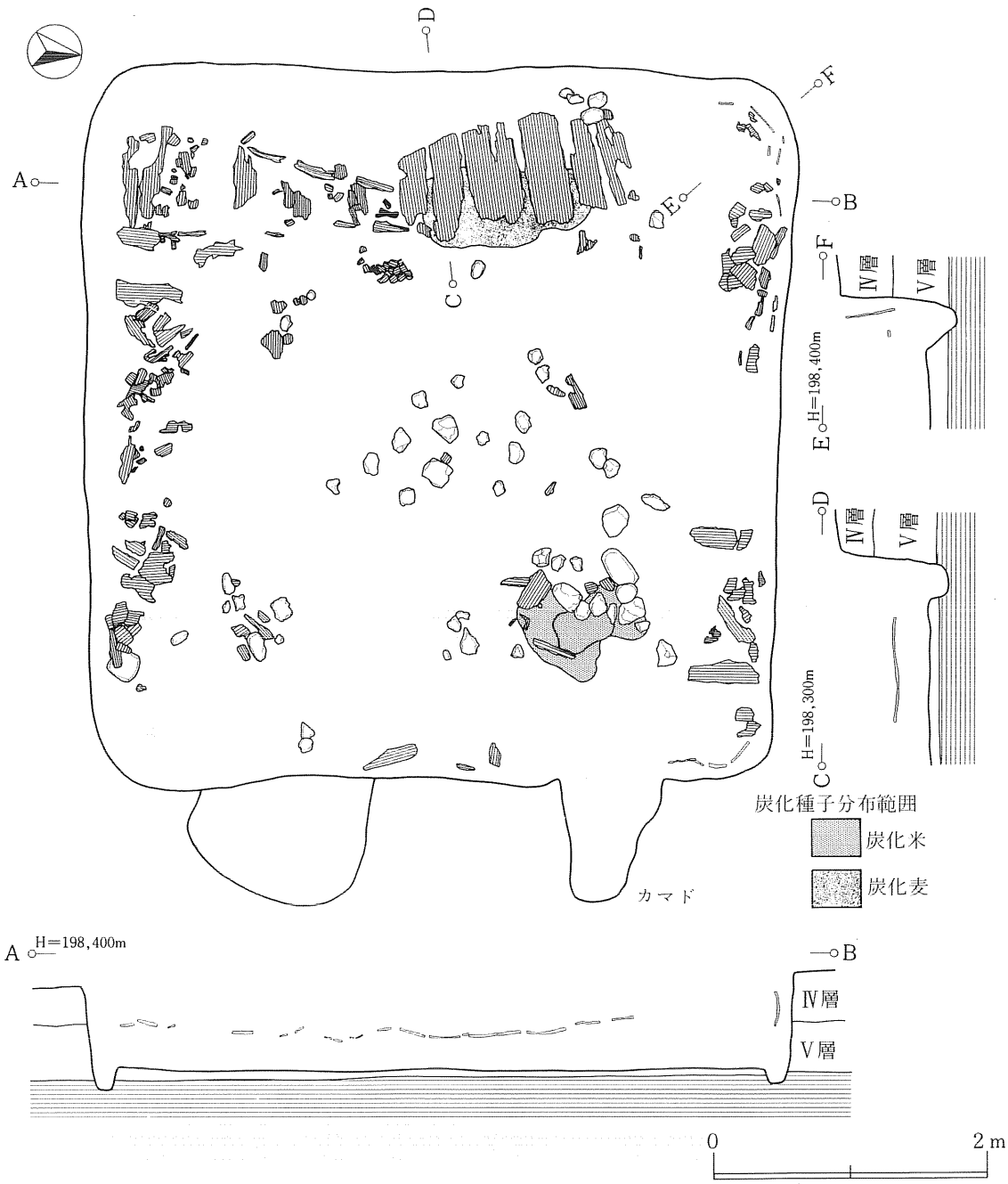
じっている可能性は高いが、種子同定の結果ではムギ類だけのようである（第11章科学的分析参照）。北東・北西隅では立ったままの壁板材が確認され、材の配置はＡⅢ区ＳＩ19北東隅における配置と同様である。その他多数の板材、角材などを見いだしているが、細片化著しくこれ以上は言及できない。また覆土中より多量の鉄滓も出土している。

床・壁　第Ｖ層下面を床面としているが、小さな凹凸あり、貼床を施していた可能性がある。床面北東部では方形様に区画され、床面が一段低く（10cm前後）なっている。この面は第Ⅶ層地山上面である。また床面ほぼ中央部に掘り込まれている土坑（Ｐ５）は、本住居に伴う施設である。床面積は24.6㎡である。壁高は、最大値で64cmを測る。

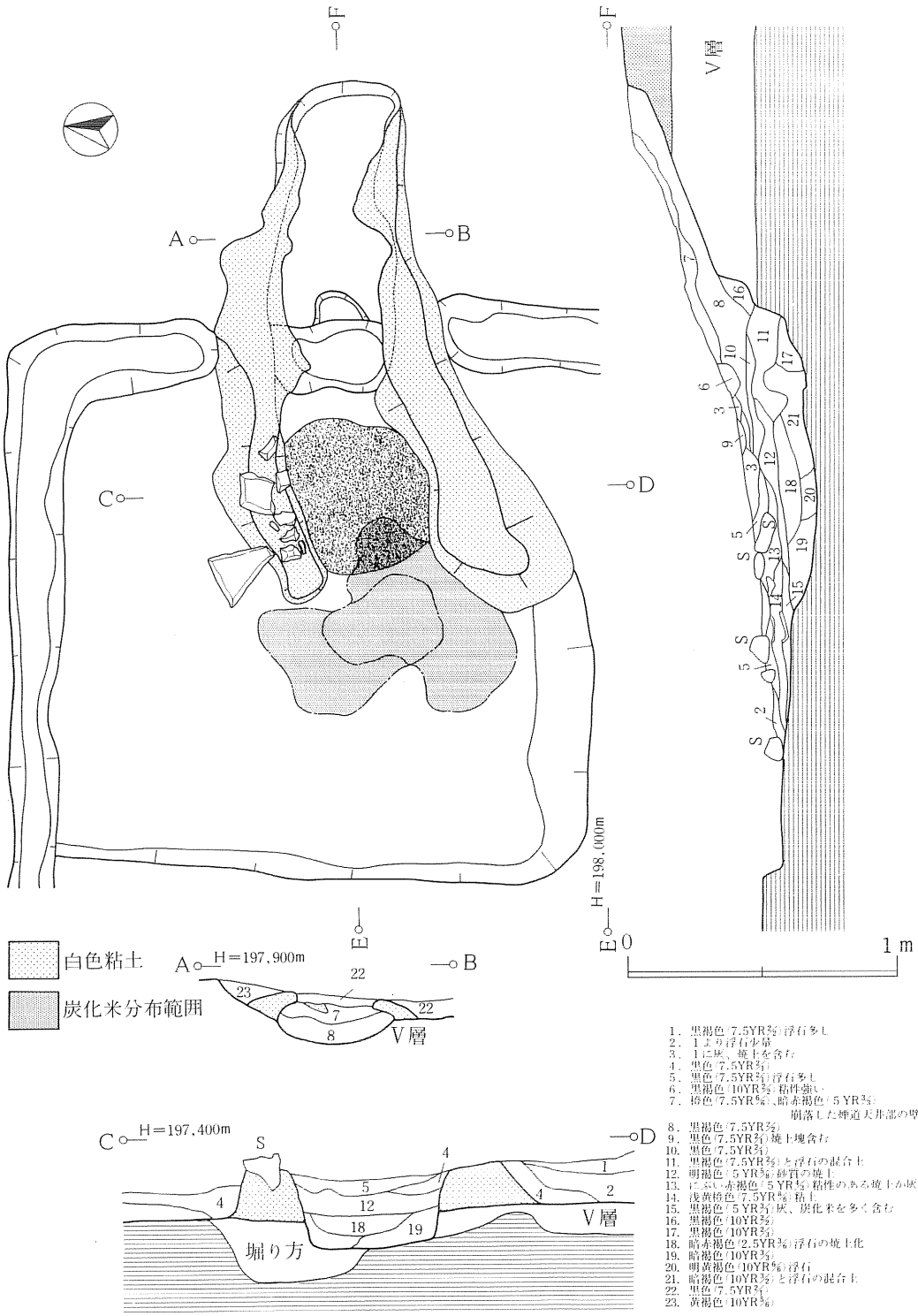
壁溝・柱穴　壁溝は南東隅を除いて幅20～30cm、床面からの深さ８～20cmで巡っている。柱穴



第130図　SI 116竪穴住居跡



第131図　SI 116竪穴住居跡・炭化材・種子出土状況



第132図　SI 116竪穴住居跡カマド

は西壁両隅部（Ｐ１・２）と南壁中央部（Ｐ３）、床面ほぼ中央部（Ｐ４）に位置している。

カマド・炉　カマドは東壁北寄りで確認している。全長185㎝（推定煙道長120㎝、燃焼部長65㎝）、燃焼部内法幅50㎝で、全体の形状は直線的ではなく、南に開く緩い弧状を呈している。燃焼部は一段下がった床面上にある。袖部は、主に白色粘土を、煙道部は地山粘土と思われる黄味の強い粘土を用いている。煙道の一部では赤変・硬化した粘土がアーチ状に遺存していた。白色粘土にはスサが混ぜられている。左袖には石が補強材として使用されている。カマド内から炭化米が得られているが、焚口部で集中的に認められる。炭化米出土層位は、火床面直上であり、この上にカマド崩落粘土が乗る。カマド煙道部内においては骨片が数点見つかっている。床面ほぼ中央部には径35㎝の焼土面が検出できるが、炉となりうるのか否かは不明である。なお、焚口部の炭化米は約3.6合分あり、重さにして約185ｇ、推定粒数は26,000粒となった。

その他の付属施設　住居東壁南寄りには奥行き60〜90㎝、幅130㎝の張り出しが存在する。確認状況では本住居に伴うと考えることができることから、位置的にも出入口の施設として把えることができよう。

出土遺物（第140図468〜474、142図Ｓ299〜143図Ｓ301）　土師器甕（12個体）、把手付土器、砥石（３点）、フイゴ羽口、炭化米・麦、骨片が出土している。469・471・473・474は、カマド内出土であり、470は、ＳＩ107覆土出土の破片と接合した。

ＳＩ119　（第133〜135図、図版52）

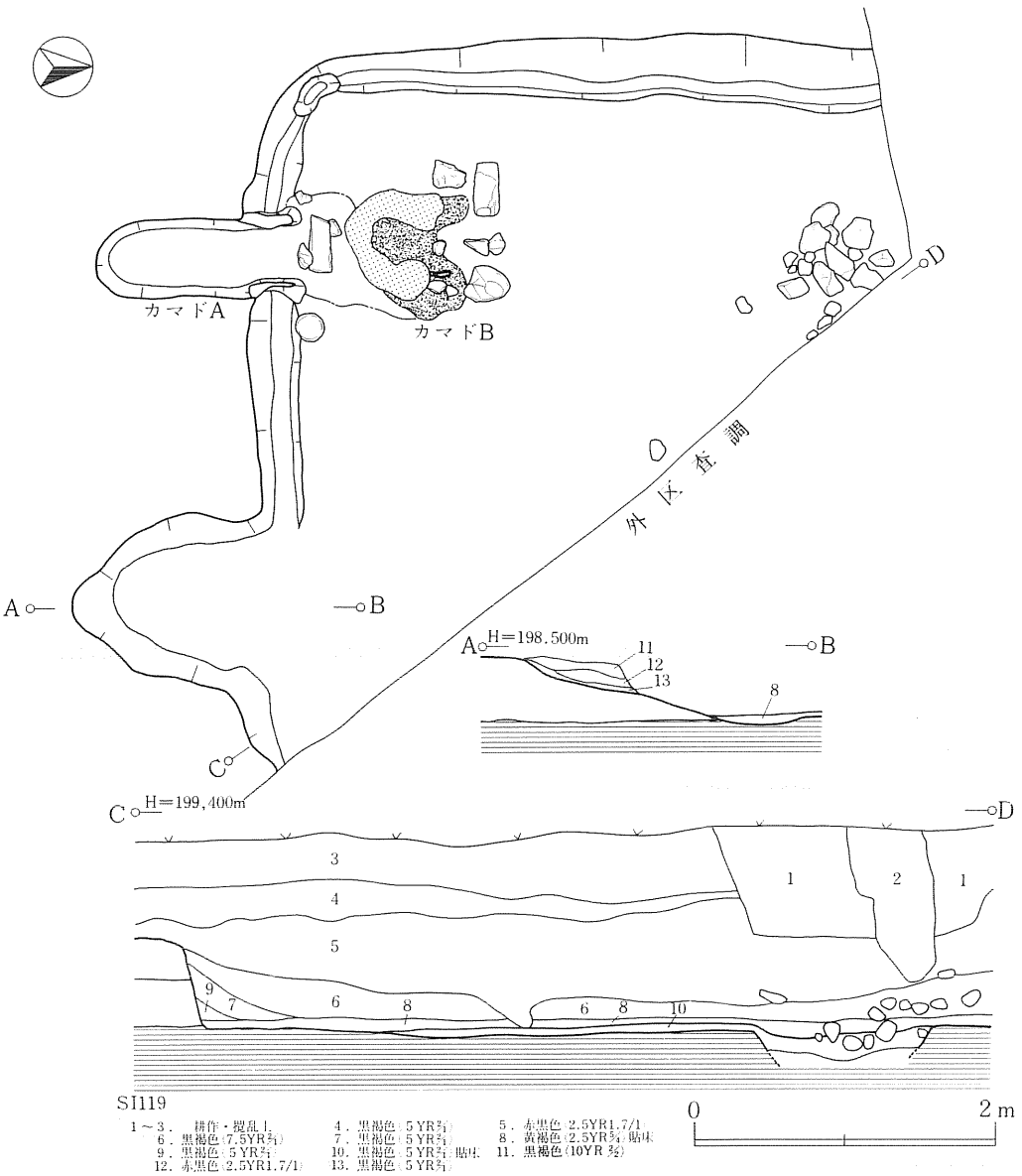
位置・確認状況　ＪＫ・ＪＬ70・71グリッド、第Ⅲ層面で検出した。遺構の北・東半は調査区外となっている。

形態・規模　確認できる長さは、東西で4.8ｍ、南北で4.2ｍの隅丸方形である。主軸方位はＮ－３°－Ｅを示す。

覆土　７層は大湯浮石粒子を多量に含み、壁際を帯状円形に巡る。

床・壁　床面は第Ⅶ層を僅か掘り下げたレベルにした後、同面がここでは段丘礫が多く凹凸していたためであろうか、２枚の土（８・10層）を貼って完成させている。10層赤黒土を部分的に貼る。この時点ではあまりたたき締めていない。この上に８層土を敷く。用土は、大湯浮石粒子・同小ブロック・地山粘土・赤黒土・小砂利をそれぞれほぼ均等量混ぜ、突き固めるようにしている。同上面はカチンカチンの状態である。また床面北側には礫が集中している箇所が認められる。断面観察では床面を掘り込んでいるように見えたが、これを平面的には確認できず、本住居との係りを含めて、不明と言わざるを得ない。

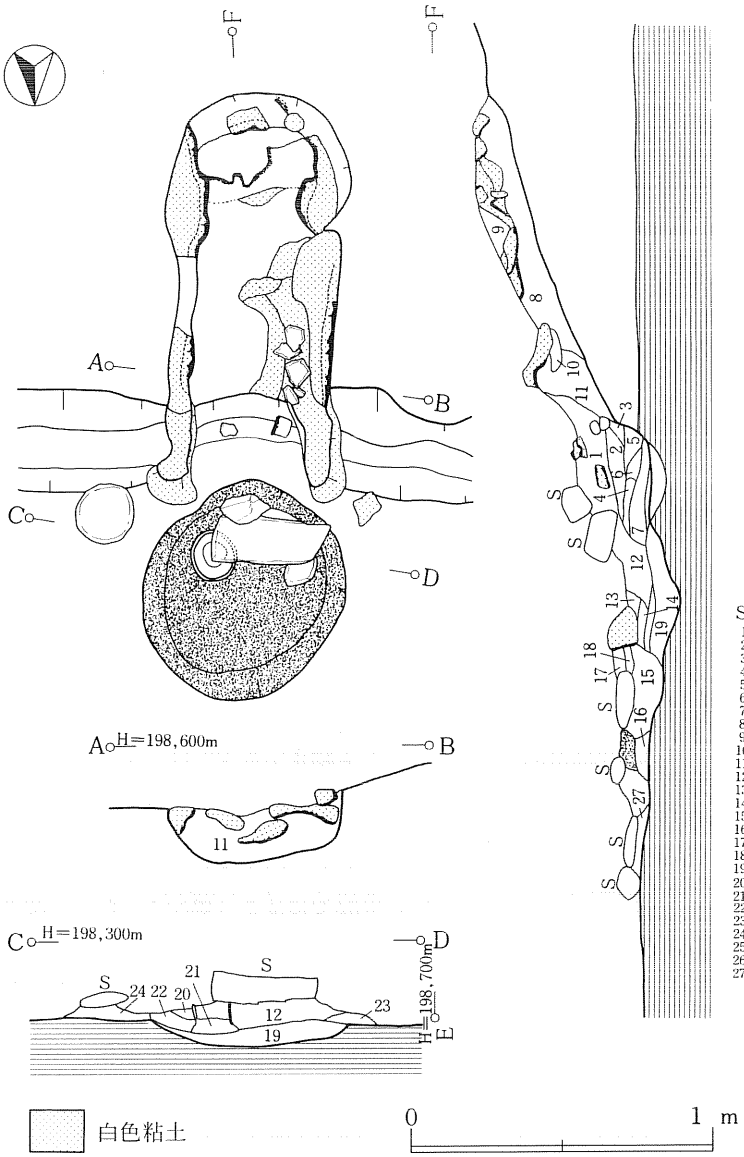
壁高は、西壁北側で最高75㎝である。



第133図　SI 119竪穴住居跡

壁溝・柱穴　壁溝は調査範囲内ではぼほ30～40cm幅、深さ６～10cmで確認できる。柱穴は南西隅でＰ１を検出している。

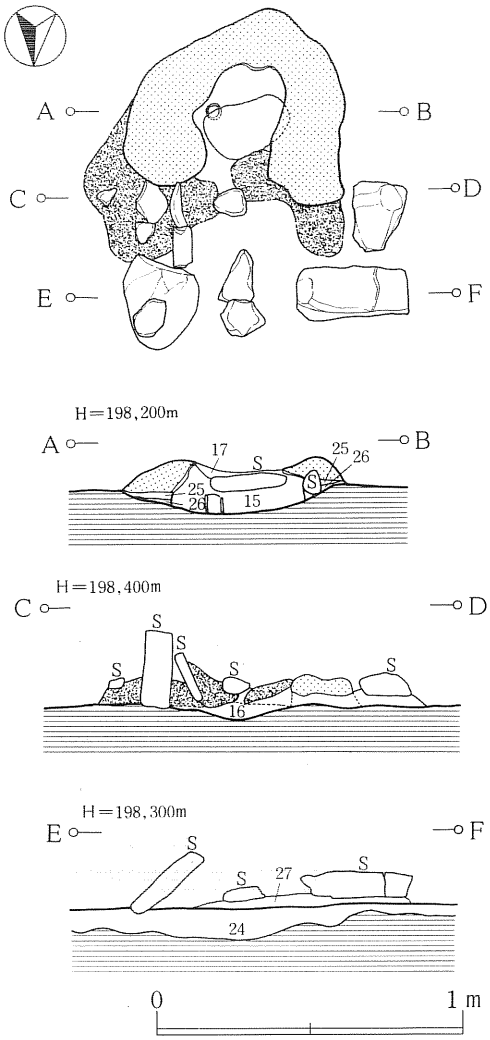
カマド・炉　カマドは、南壁西寄りで確認している。燃焼部から焚口に相当する位置にはこの



第134図　SI 119竪穴住居跡カマドA

カマドとは異なるカマド様の遺構も存在する。ここでは前者をカマドA、後者をカマドBと仮称し記していく。常識的に考えればカマドBは、カマドAの一部を破壊して構築しており、先後関係は明白である。ただし両者の位置関係、構築法・形状から他の住居カマドと同一視できない性質を有していた可能性が高い。

カマドAは、全長190cmである。径約70cmの円形を呈する火床面には、径15cmの土師器甕が倒立している。火床面上における土器の位置・状況から支脚とは考えにくく、埋甕のようである。甕の上には長さ37cm、厚さ10cmの切石(砂岩、加工痕明瞭)が乗っている。こ



第135図　SI 119竪穴住居跡カマドB

の部分より奥の煙道部は、遺存状態良好である。壁溝を埋め、壁外に20°の上り勾配で90cm程掘り進める。架構材に白色粘土を用いているが、竹（おそらく笹竹、径７㎜前後）を骨材とし、粘土を貼っている。煙道部全体がこのような構造をしていたのかは不明であるが、少なくとも原位置を保っている側壁での観察では、煙道部長軸方向に並行させるように竹を密に並べていたことが、硬化した粘土材に遺された凹みで知ることができる。この竹材に直交する方向の材の有無は明らかではない。天井部は確認できなかったが、アーチ形あるいは台形様の横断面形をしていたのではないか、と考えている。同じような竹材を用いているＳＩ101カマドも同様な構造を採っていたと想定できる。

カマドＢは、本体である白色粘土部分がどれだけ破壊・削平されているのか分からないが、現況では長さ（奥行き）60cm、幅70cmの北側に焚口をもつ馬蹄形を呈している。内側の壁は硬化している。白色粘土で囲まれた内側底面には、フイゴ羽口が立ち、この上に長さ27cm、厚さ５cmの平らな河原石が置かれている。覆土は、黒褐色を呈しているが、全体の20〜30％の割合で砂鉄が含まれ、サラサラして締まりもあまりない。馬蹄形部分の前面には焼土、炭化物、カマドＡ同様の切石が立った状態あるいは横倒しの状態で検出されている。石はいずれも強い火熱を受けている。

その他の付属施設　住居南壁東寄りには、奥行き・幅約1.2ｍのＵ字形を示す張り出しが認められる。この部分は15°前後の緩いスロープとなっている。出入口の施設と考えることができる。

出土遺物（第140図475・476、141図484・485）　土師器甕（５個体）、フイゴ羽口２点が出土している。図示した４点はいずれもカマド内出土である。

ＳＩ120　（第136図、図版53、54）

位置・確認状況　ＪＫ・ＪＬ52・53グリッド、第Ⅲ層大湯浮石面で検出した。西壁でＳＸ133畑跡と重複しているが、その先後関係は不明である。

形態・規模　東西長４～4.3ｍ、南北長3.8ｍの南辺がやや長い隅丸方形を呈する。主軸方位はＮ－13°－Ｅを示す。

覆土　４・７層は大湯浮石粒子を主体とする土層である。覆土中位には炭化材が認められる。

床・壁　第Ｖ層中を床面としており、部分的に貼床されているが、特に堅く締まってはいない。床面積は14.8㎡、壁高は最高38㎝である。

壁溝・柱穴　壁溝はない。柱穴は壁際隅にＰ１～４、床面中央北側にＰ５・６が位置している。どのように組み合わされるのであろうか。

カマド・炉　カマドは東壁南寄りで確認している。袖部などは完全に崩壊している。全長190㎝であり、煙道部は、壁外を８°の緩い上り勾配で溝状に100㎝掘り進んでいる。カマド崩壊土から、袖部は大湯浮石を含む黒褐色シルト質～砂質土と白色粘土を用い、煙道部は袖部より幾らか粘性の強い土（１層）を利用している。火床面は平坦な住居床面をそのまま使用している。カマド内から骨片と炭化米が少量確認されている。

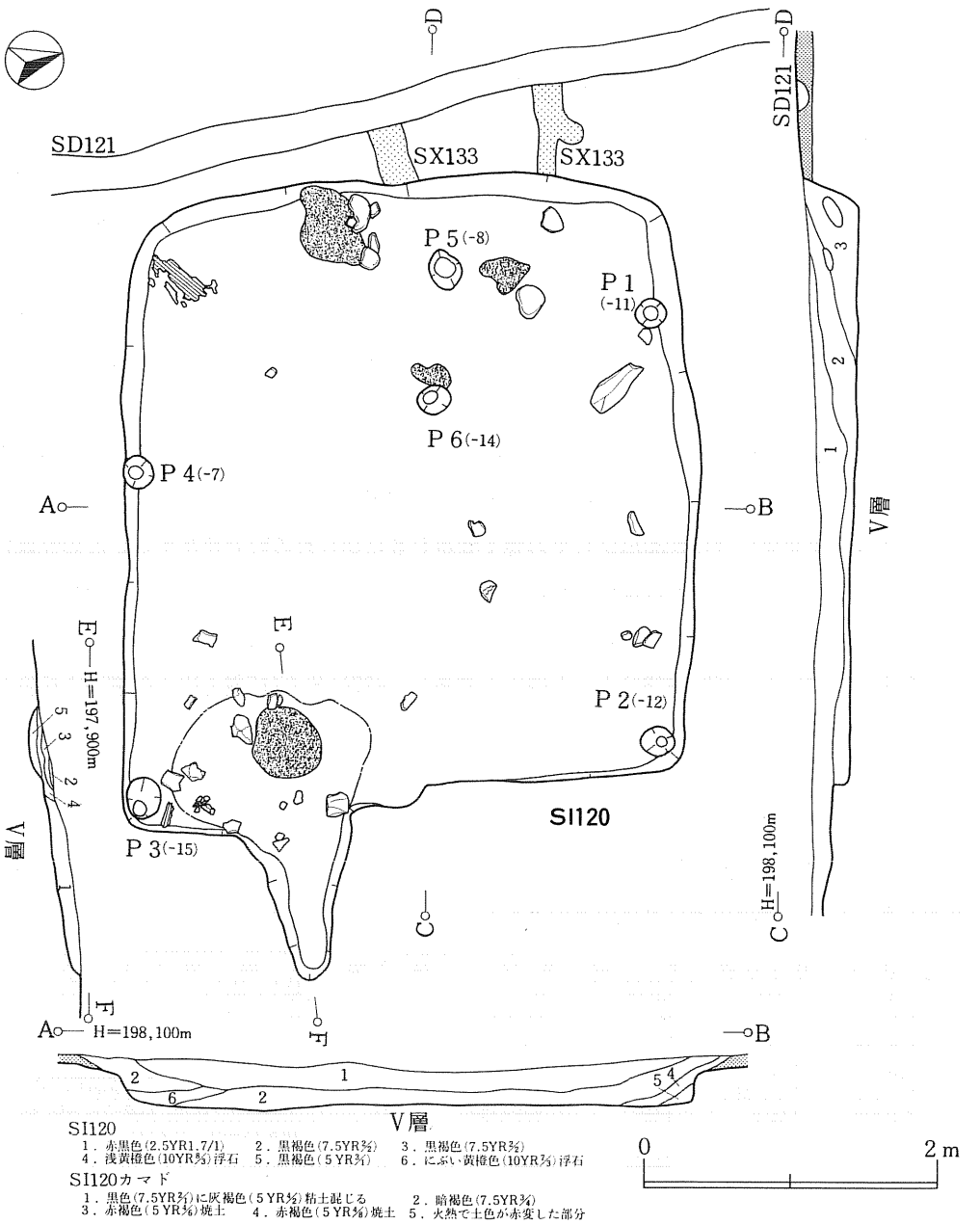
床面中央北側には長さ30㎝足らずの焼土面がＰ６に切られる形で存在する。この北側にも２箇所で焼土の広がりが認められるが、これは床面よりやや浮いているものである。

出土遺物（第140図477・478、143図Ｓ302）　土師器甕（４個体）、砥石、フイゴ羽口、鉄滓が出土している。477・478はカマド内出土であり、477はＳＩ115覆土出土の破片と接合した。砥石（Ｓ302）は石英質の石材を用いている。

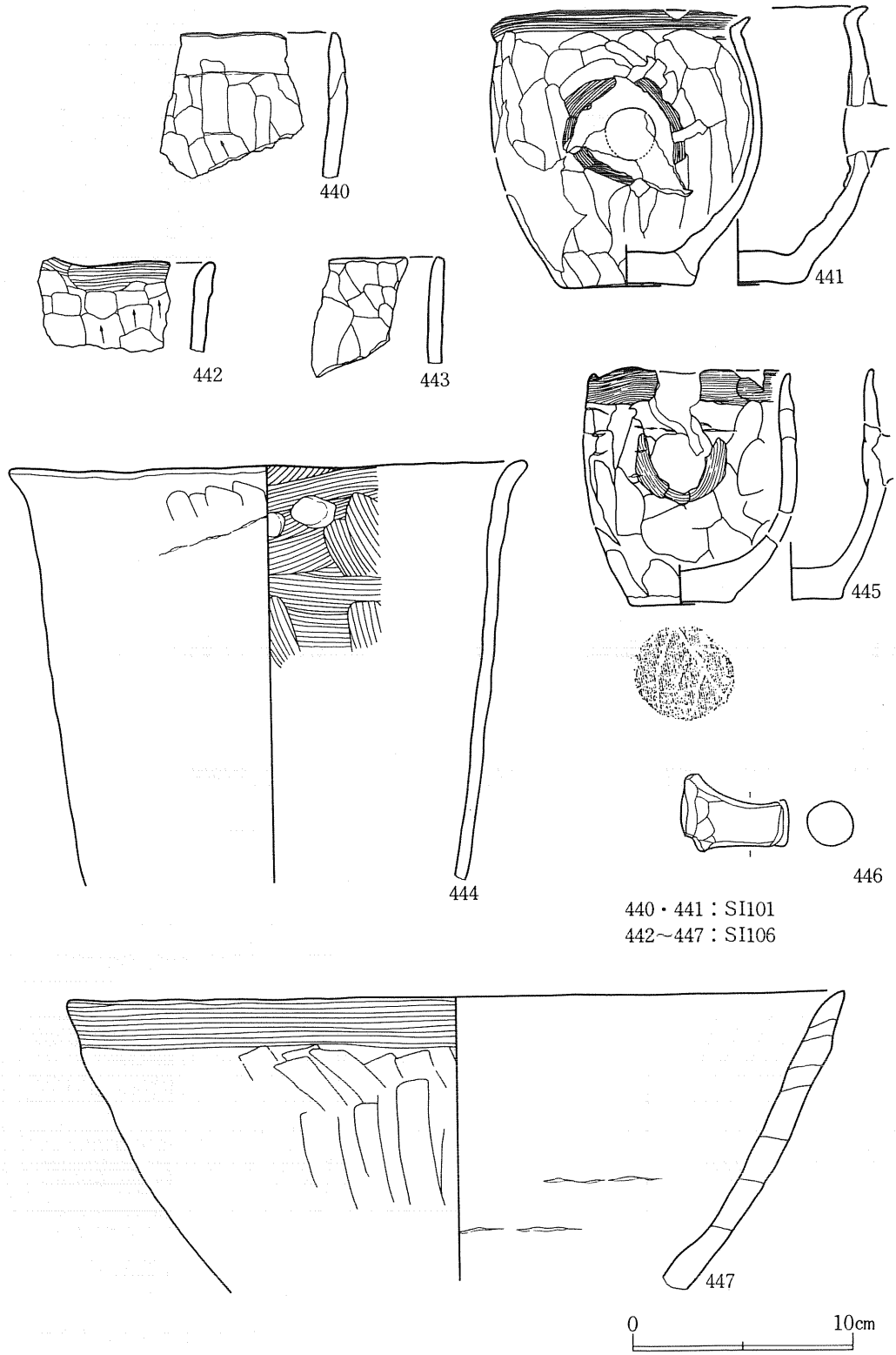
(2)　土坑　（第144～146図、図版54、55）

第Ⅲ層大湯浮石層上面で確認した平安時代の土坑は、ＡⅡ区の12基である。ＡＩ区では検出されなかった。各遺構のデータは以下のとおりである。

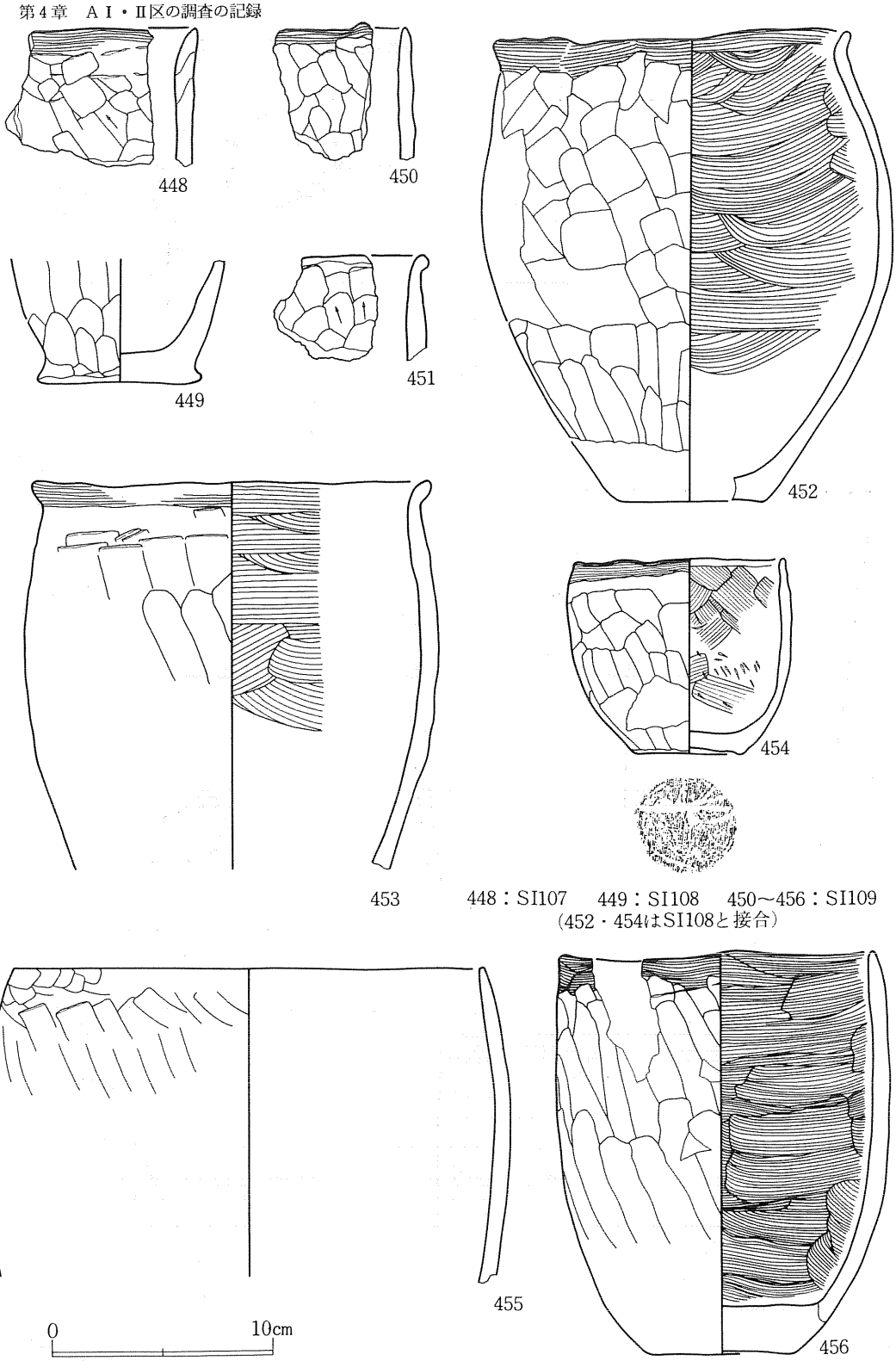
遺構名	出土位置	形態	規模(㎝)	深さ(㎝)	遺物・備考
ＳＫ103	ＪＪ64	楕円形	200×110	15	焼土、鉄滓、流失滓、窯壁を含む
ＳＫ124	ＪＫ56	楕円形	125×80	12	覆土中に礫を含む
ＳＫ128	ＪＬ69、70	隅丸方形	105×95	22	
ＳＫ130	ＪＫ54、55	不整円形	190×170	15	土師器甕、底面凹凸あり
ＳＫ131	ＪＬ、M53	台形	290×210	25	土師器甕、縄文土器、底面凹凸あり
ＳＫ132	ＪM54	円形	140×130	12	土師器甕、鉄滓、坑底面に径69㎝、深さ23㎝の土坑あり
ＳＫ137	ＪＮ63	楕円形	125×105	35	
ＳＫ138	ＪＮ63	楕円形	110×65	12	焼土、鉄滓を含む
ＳＫ139	ＪＬ58	円形	70×65	25	土師器甕
ＳＫ140	ＪＫ60	円形	50×50	8	
ＳＫ141	ＪＫ60	円形	65×55	20	フイゴ羽口
ＳＫ154	ＪＬ55	円形	50×45	6	炭化材（表皮）、藁灰、焼土



第136図　SI 120竪穴住居跡

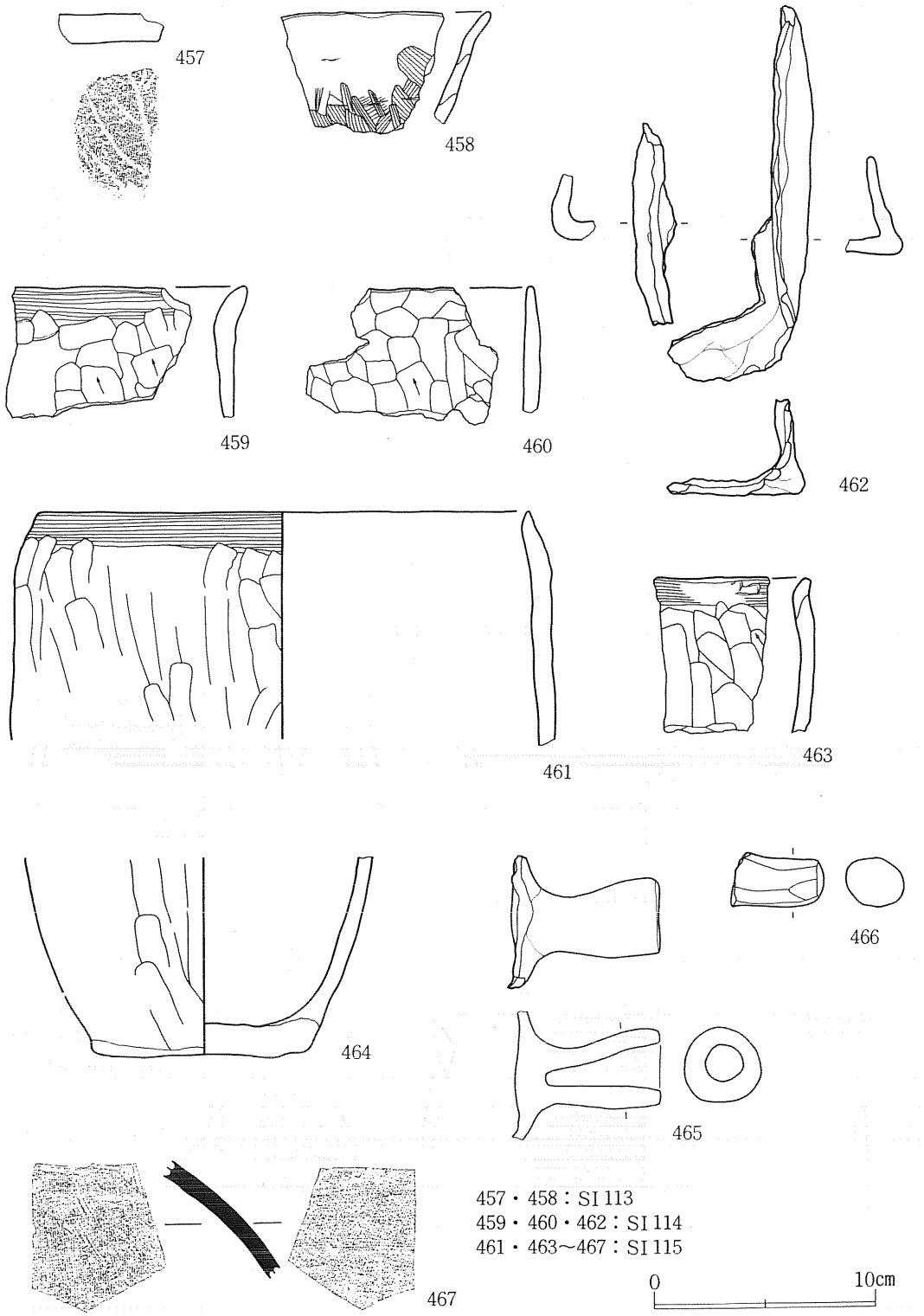


第137図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（27）・土器（13）

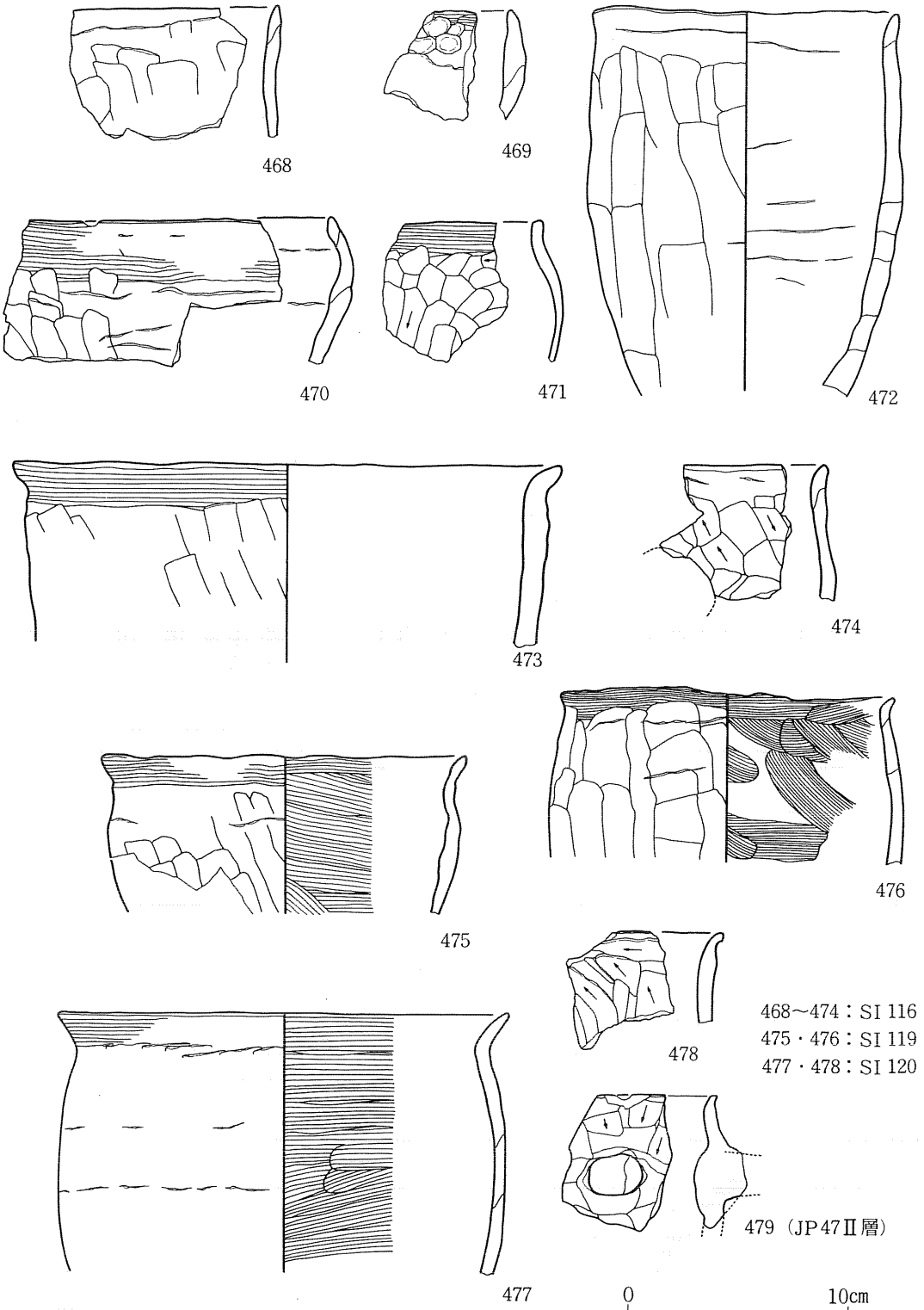


448：SI107　449：SI108　450～456：SI109
（452・454はSI108と接合）

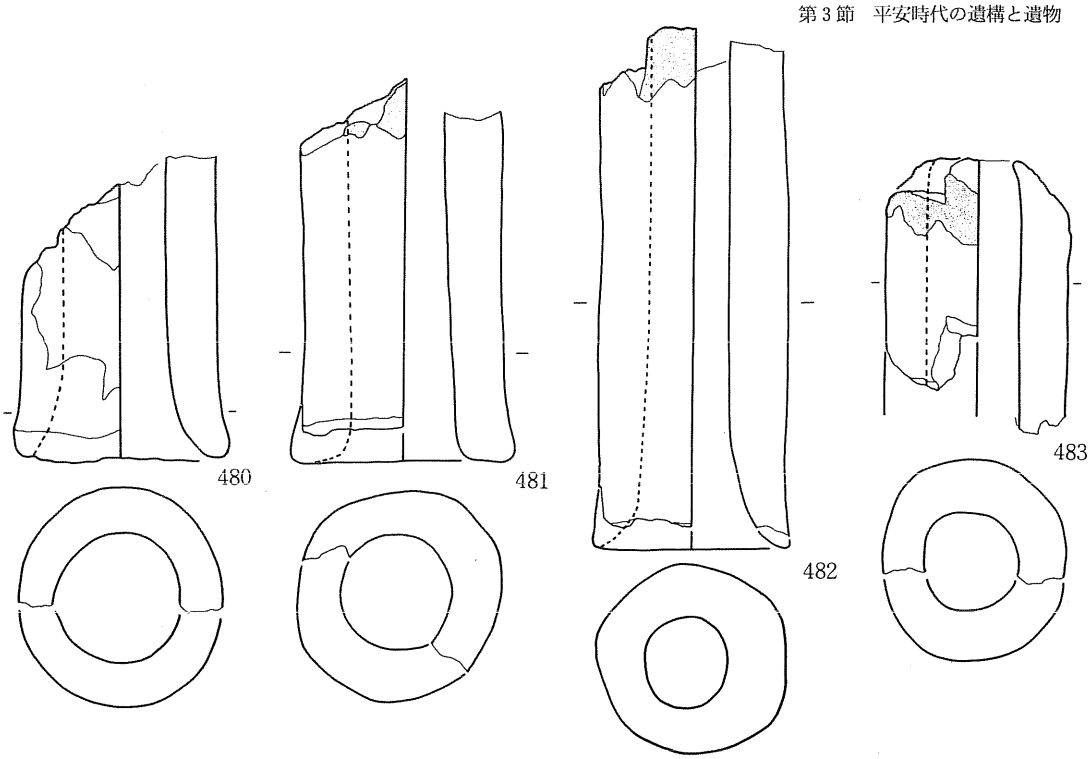
第138図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（28）・土器（14）

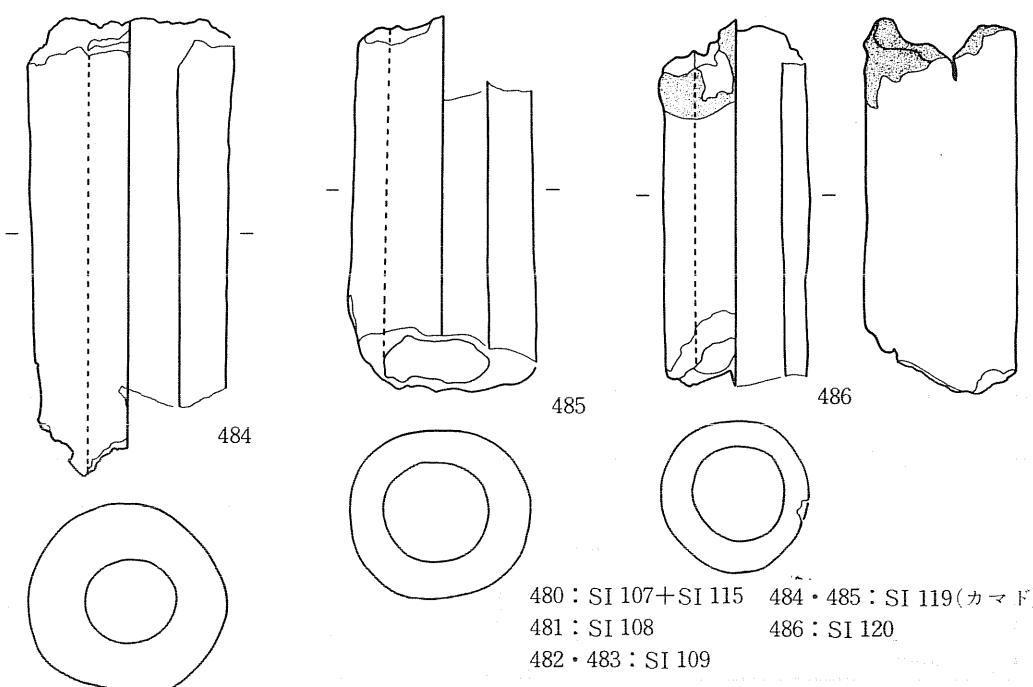


第139図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（29）・土器（15）



第140図　AⅠ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（30）・土器（16）



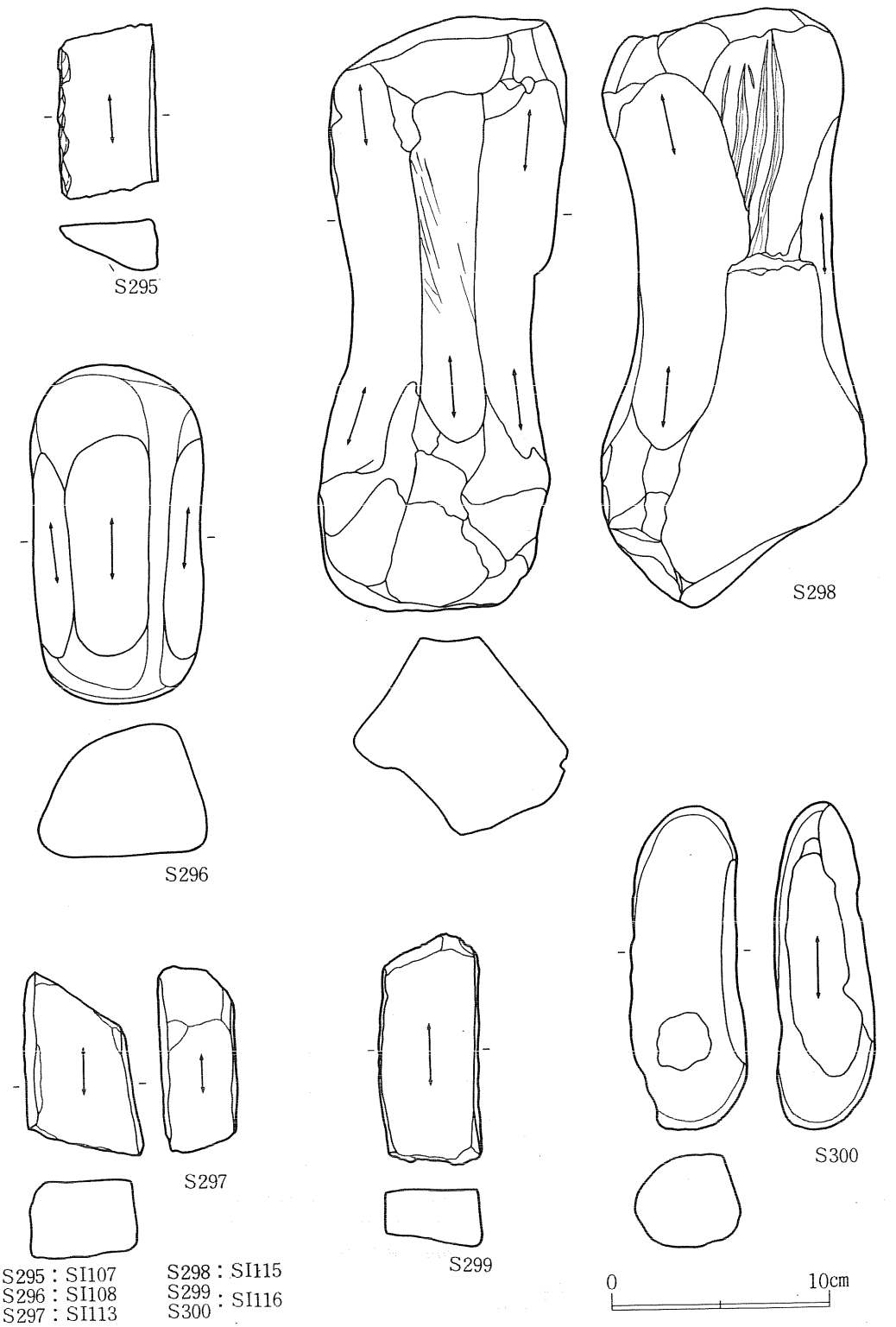


480：SI 107＋SI 115　484・485：SI 119（カマド）
481：SI 108　486：SI 120
482・483：SI 109

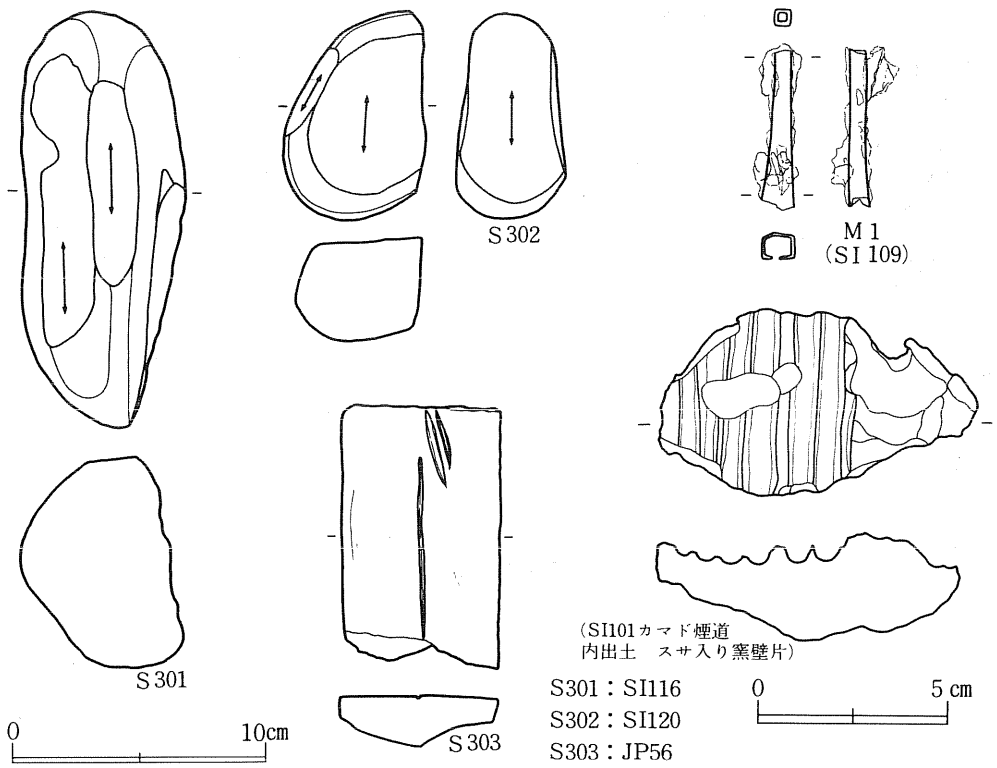
溶融部分

0　10cm

第141図　AⅠ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（31）・フイゴ羽口



第142図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（32）・砥石（1）



第143図　ＡＩ・Ⅱ区　遺構内出土遺物（33）・砥石（２）・鉄製品・窯壁

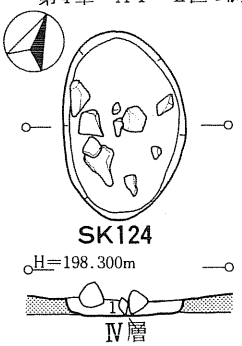
ＳＫ103は、確認面及び覆土中の焼土、鉄滓、流失滓、窯壁の分布から、製鉄関連の遺構と考えることができる。ＳＫ138もＳＫ103と平面形状が類似し、焼土、鉄滓の出土から同種の遺構と見ることができるかもしれない。また遺構としては確認できなかったが、ＳＩ116西隣のＪＮ60グリッド第Ⅱ層の一角から多量の鉄滓が検出され、ここにも製鉄関連の遺構が存在していた可能性がある。

ＳＫ137・138の周りには、両遺構を方形に囲む４本の柱穴が存在する。この点については掘立柱建物跡の項でふれる。

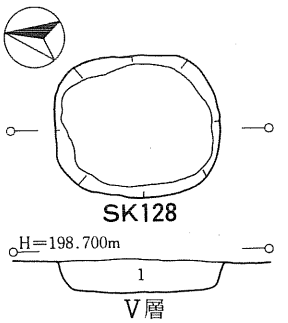
ＳＫ130は、壁・底面に砂質粘土が部分的に認められる。この面が焼けており、鉄滓を僅かに含んでいる。この粘土は、竪穴住居カマドに用いられている白色粘土に似る。

ＳＫ132坑底面には径60cmの円形を呈する小さな土坑が掘り込まれている。この土坑には炭化材が認められるが、ＳＫ132に伴う掘り込みであるのか、ＳＫ132より旧い土坑となるものなのか明らかではない。

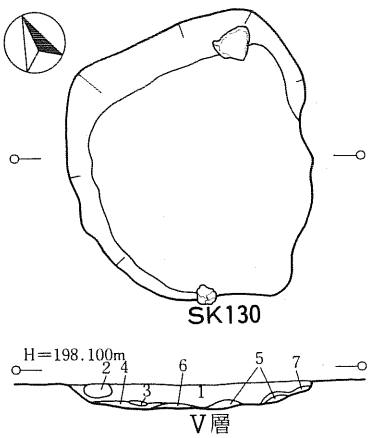
ＳＫ154では、木材の表皮を主とする炭化材を覆土１層下面に認めている。この材の下には藁灰様の炭化物を確認でき、更にこの下に薄い焼土が広がっている。



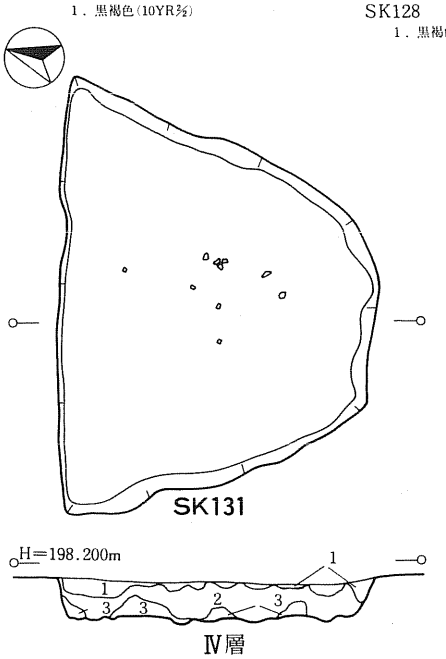
SK124
1．黒褐色(10YR3/2)



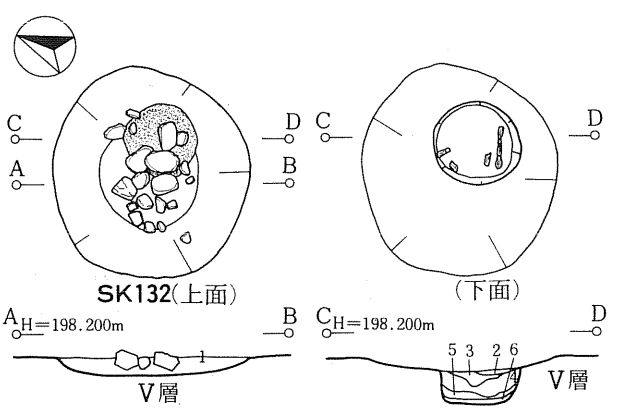
SK128
1．黒褐色(10YR3/2)浮石を斑状に多く含む



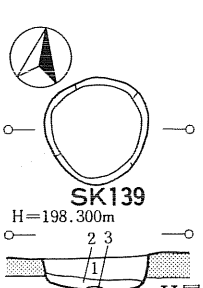
SK130
1．黒褐色(10YR3/2)浮石を含む　2．黒褐色(5YR3/1)
3．赤黒色(2.5YR3/1)　4．黒褐色(10YR3/2)1より締まる
5．浅黄橙色(10YR8/4)砂質の焼土・鉄滓を僅かに含む
6．赤黒色(10R1.7/1)砂鉄を含む　7．浮石粒子の二次堆積



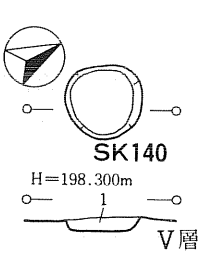
SK131
1．黒褐色(10YR3/2)浮石を多く含む
2．大湯浮石の二次堆積土
3．黒褐色(10YR3/2)



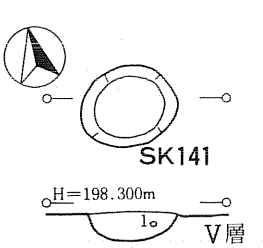
SK132
1．赤黒色(2.5YR1.7/1)　2．黒褐色(10YR3/2)
3．黒色(10YR1.7/1)炭化物層　4．黒褐色(10YR3/2)
5．暗褐色(10YR3/3)薬炭層　6．黒色(10YR1.7/1)炭化物層



SK139
1．黒褐色(10YR3/2)浮石を多く含む
2．黒色(10YR1.7/1)と灰の混合土
3．暗褐色(7.5YR3/4)焼土



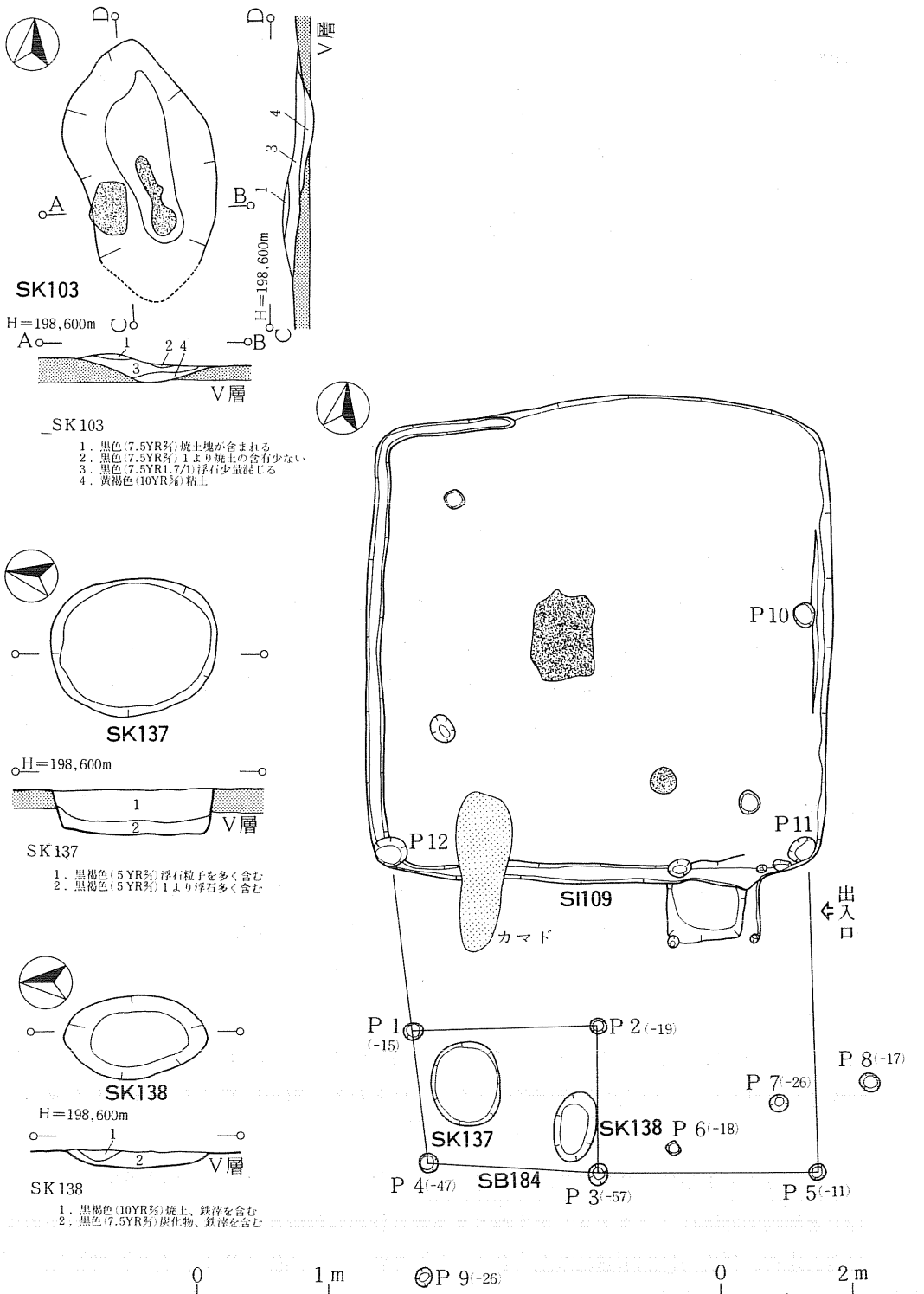
SK140
1．黒褐色(10YR3/2)浮石を多く含む



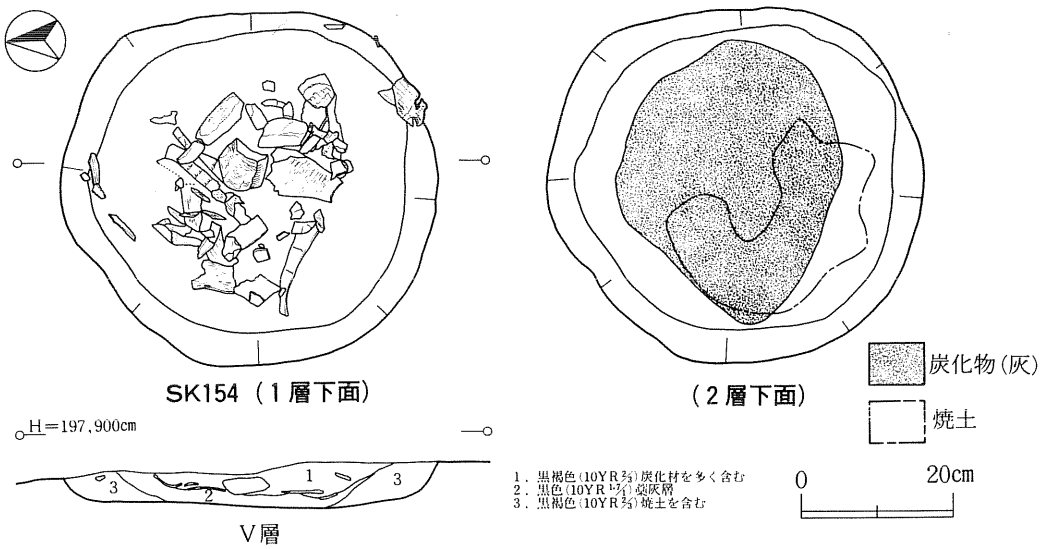
SK141
1．黒褐色(10YR3/2)浮石を多く含む
焼土、灰、鉄滓を含む

0　2 m

第144図　SK124・128・130・131・132・139・140・141土坑



第145図　SK 103・137・138土坑、SB 184掘立柱建物跡



第146図　SK 154土坑

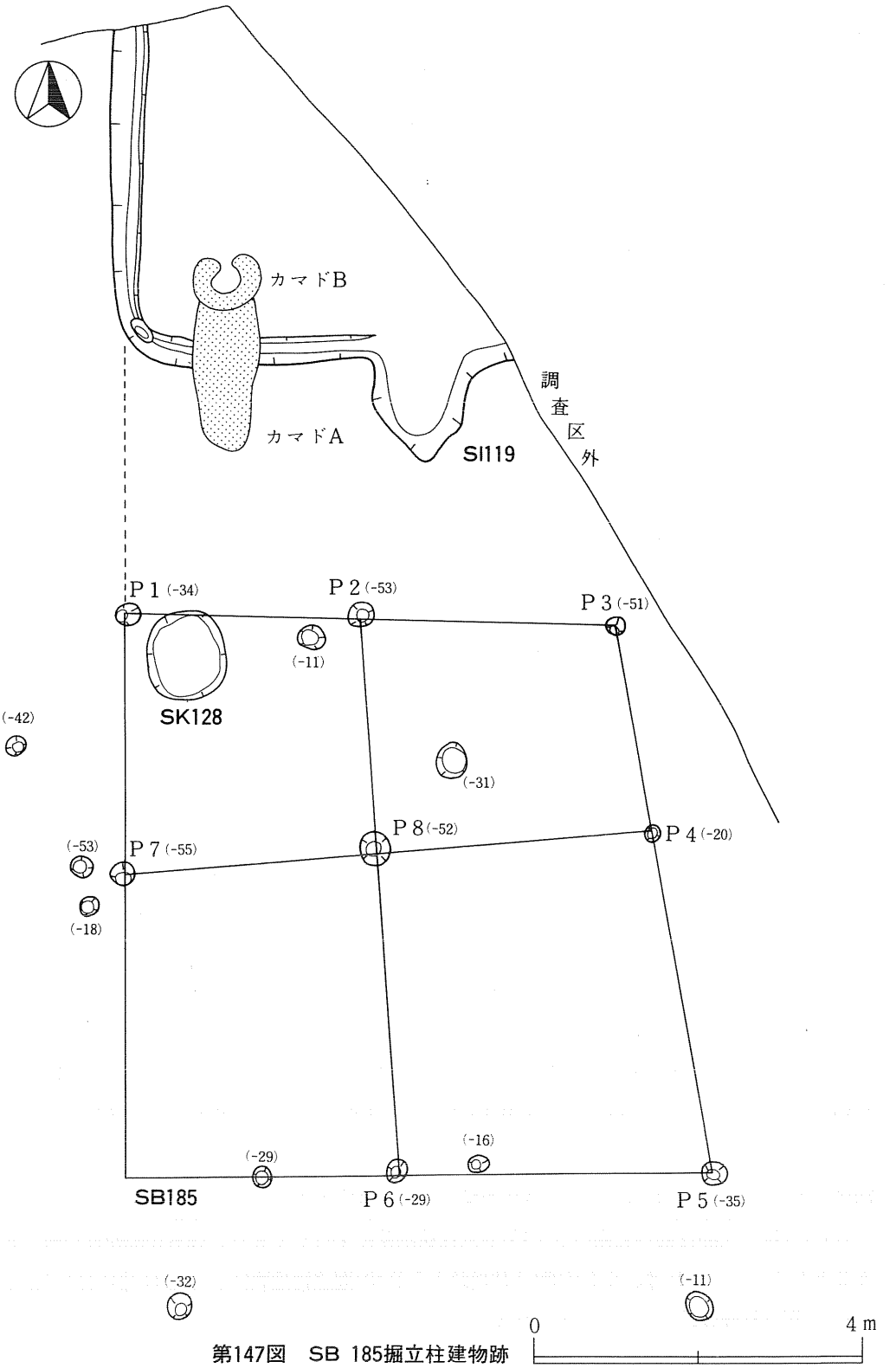
(3) 掘立柱建物跡　（第145、147図）

ＡⅡ区、第Ⅲ層大湯浮石層面では、径20～40cm程の柱穴を数多く検出している。この内、柱穴配置のうえで掘立柱建物跡となるのではないかと考えている遺構を３棟抽出している。ただしこの３棟は、昭和57年調査において１棟確認しているＳＢ075のような、それ自体独立した掘立柱建物ではなく、土坑・鍛冶遺構に伴う上屋施設あるいは、竪穴住居跡と一体化した建物であった可能性をもつ。なお、ＳＸ110鍛冶遺構に伴う上屋と見られるＳＢ111掘立柱建物跡は、鍛冶遺構の項で記述する。

ＳＢ184　（第145図）

ＪＮ・ＪＯ63、64グリッドでＳＫ137・138土坑を囲むように配されている建物を確認した。建物を構成する各柱穴は、径30cm前後の円形を呈し、深さ15～57cmである。柱間距離は、Ｐ１－２で３ｍ、Ｐ２－３で2.2ｍ、Ｐ３－４で2.65ｍ、Ｐ４－１で２ｍとなる。

この１×１間の建物は、その位置関係と、周辺の柱穴から、北側に占地しているＳＩ109竪穴住居跡との密接な関係が窺える。建物北（南）面の柱筋は、竪穴住居南壁に平行し、西面の柱筋を北に延長すると竪穴住居南西隅柱（Ｐ12）にあたる。南面柱筋の東3.3ｍ先に位置するＰ５は、竪穴住居東壁際の２本の柱穴（Ｐ10・11）柱筋を南側に延長した線上にのる。これらのことから１×１間の建物が竪穴住居に付設していたか、あるいは竪穴住居南壁隅柱（Ｐ11・12）と建物南面隅柱（Ｐ４・５）を４隅とする竪穴住居に棟続きの建物であった可能性もある。後者の場合、建物の柱間距離は南面（Ｐ４～５）で約６ｍ、西面（Ｐ４～１２）で4.7ｍ、東面（Ｐ５～11）で4.9ｍとなる。



第147図　SB 185掘立柱建物跡

ＳＢ185　（第147図）

ＡⅡ区北東部、ＪＫ・ＪＬ68～70グリッドで確認した建物である。遺構の東側が調査区外となるため、更に東に延びる建物であったかもしれないが、現況では南西隅柱を欠くものの２×２間の総柱建物と考えている。各柱穴は径20～35cmの略円形を呈し、確認面からの深さは20～55cm（平均41cm）である。柱間距離での規模は、北面（Ｐ１～３）で６ｍ、南面推定で7.1ｍ、東面（Ｐ３～５）で6.8ｍ、西面推定で6.9ｍとなる。

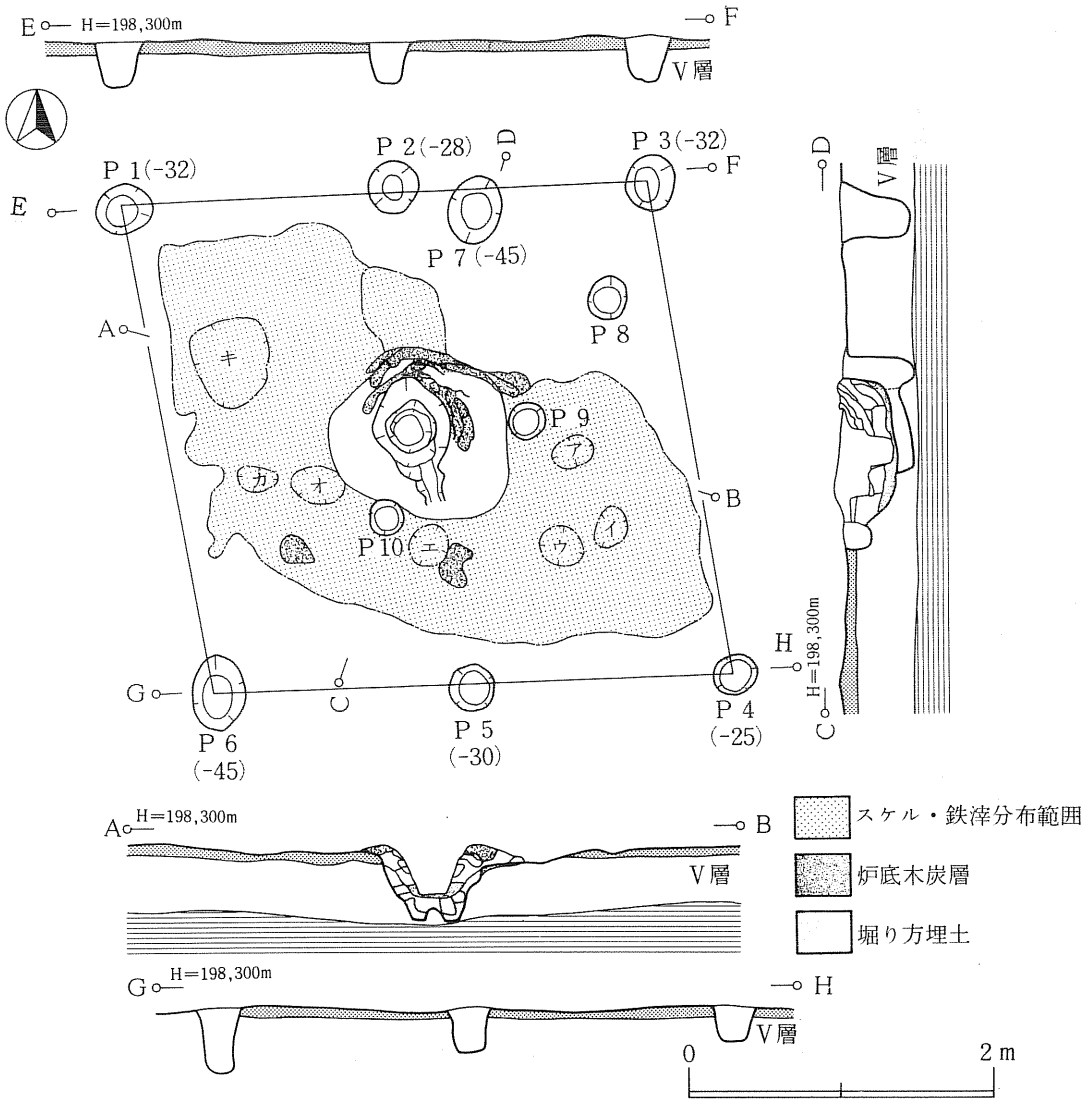
本建物の柱穴配置は、前述のＳＢ184のあり方に似る。すなわち、建物北面の柱筋は、北側に占地するＳＩ119竪穴住居跡の南壁と平行し、西面Ｐ７－１を結んだ軸線（第147図、点線で指示）は、住居西壁軸線と合致する。また建物北西隅に位置するＳＫ128土坑を中心として考えれば、ＳＢ184とＳＫ137・138の関係のように、土坑に伴う上屋のような配置とも想定できる。

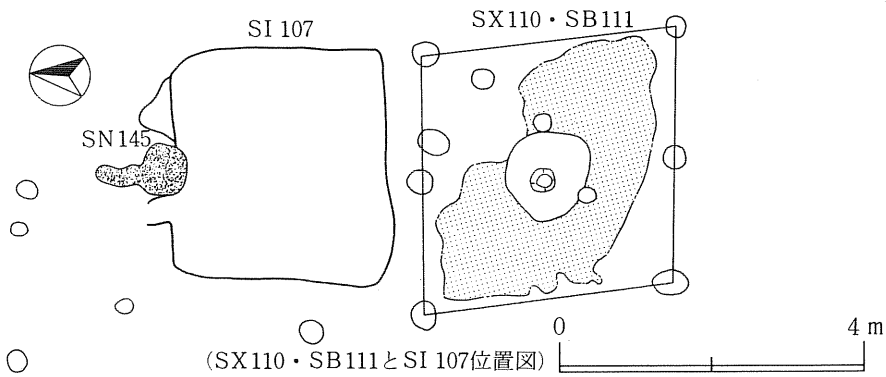
(4) 鍛冶遺構ＳＸ110・ＳＢ111　（第148、149図、図版41、56～58）

ＪＪ・ＪＫ57・58グリッド、第Ⅲ層大湯浮石層面で長さ約４ｍ、幅約２ｍの範囲に鍛造薄片（スケル）・鉄滓などの分布を確認した。この範囲内には浅い窪み（深さ２～６cm）が数箇所（ア～キ）あり、ここにスケル・鉄滓が特に集中している。ア、イでは鉄滓、ウ～カではスケルが主であり、キは両者が集中している。キの中には流出滓も混在する。この分布範囲の中央北側で南に開く半円状の還元・変色した粘土帯が３、４条ある。鍛冶炉（ＳＸ110）本体は、この粘土帯の中に位置している。規模は、確認面での口径30～35cm、底径は18～20cm、炉底までの深さ25cm前後の逆円錐台形を呈する。炉体は、地山土に大湯浮石粒子を混ぜた粘土を主としており、側壁の粘土は還元しいてる。炉体から南側に向かって幅15cm前後の溝が切られている。炉下部には長さ95cm、幅55cmの平面長方形を呈する掘り方が存在する。

炉の周囲には径25～30cmの柱穴が10個確認できる。この内Ｐ１～６については炉を方形様（平行四辺形）に囲うような建物（ＳＢ111）となる。スケル・鉄滓の分布範囲はこの建物内に収まっている。柱間距離を見ると、北面（Ｐ１～３）・南面（Ｐ４～６）で3.45ｍ、東面（Ｐ３－４）で3.35ｍ、西面（Ｐ１－６）で3.3ｍを計測する。確認面からの深さは25cm（Ｐ４）～45cm（Ｐ６）となる。各柱穴には大湯浮石粒子を比較的多く含んだ黒褐色土（10ＹＲ２／２～２／３）が充填している。混入物としては、一様に炭化物を少量含んでいるが、焼土粒子、鉄滓などは殆ど認められない。Ｐ10は炉を切っている柱穴である。

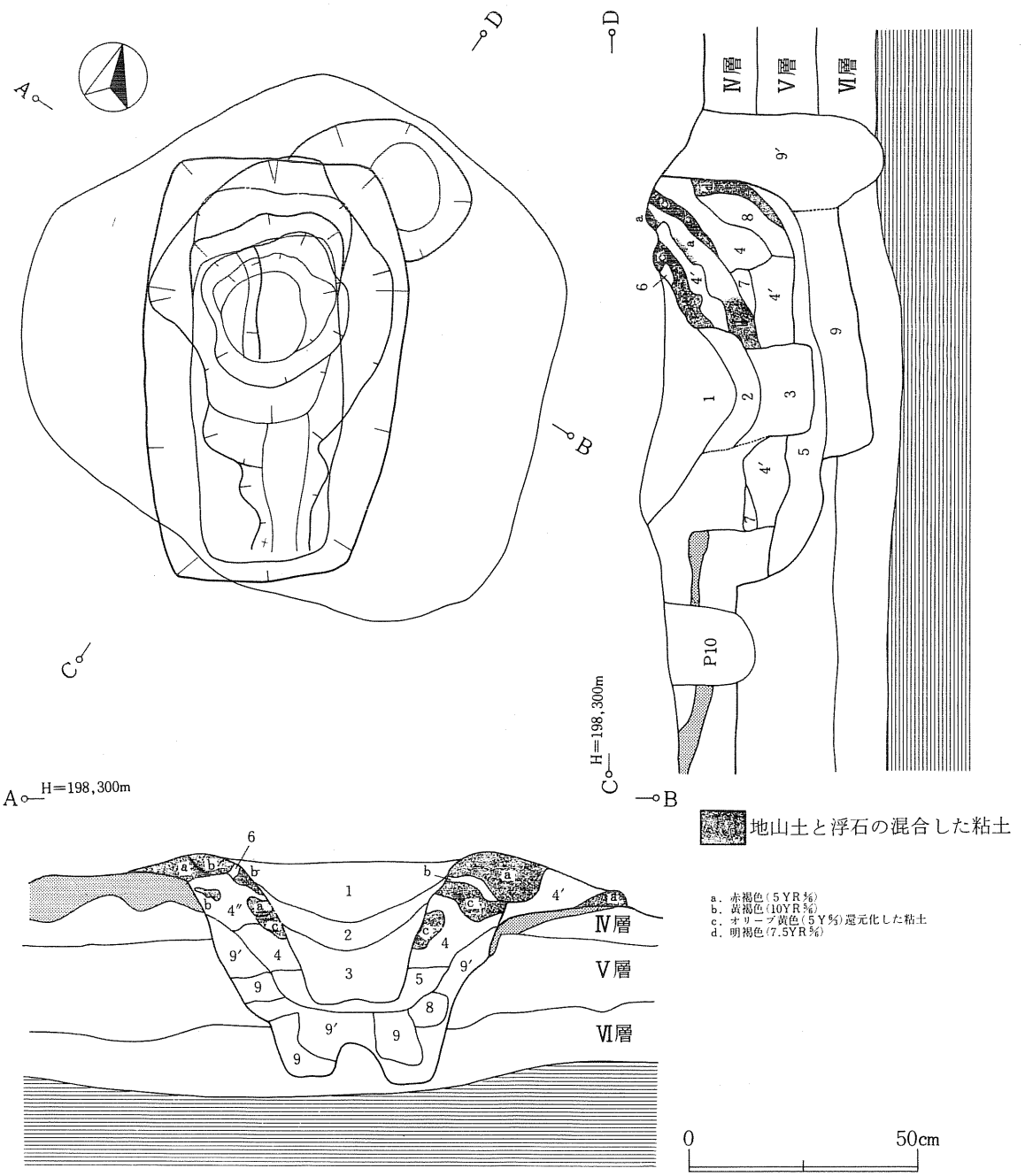
ＳＢ111は、北面柱筋が北側のＳＩ107竪穴住居南壁に平行しており、両者の同時性を窺い知ることができる。これは、ＳＩ109竪穴住居跡とＳＢ184掘立柱建物跡、ＳＩ119竪穴住居跡とＳＢ185掘立柱建物跡のあり方と共通する。





（SX110・SB111とSI 107位置図）

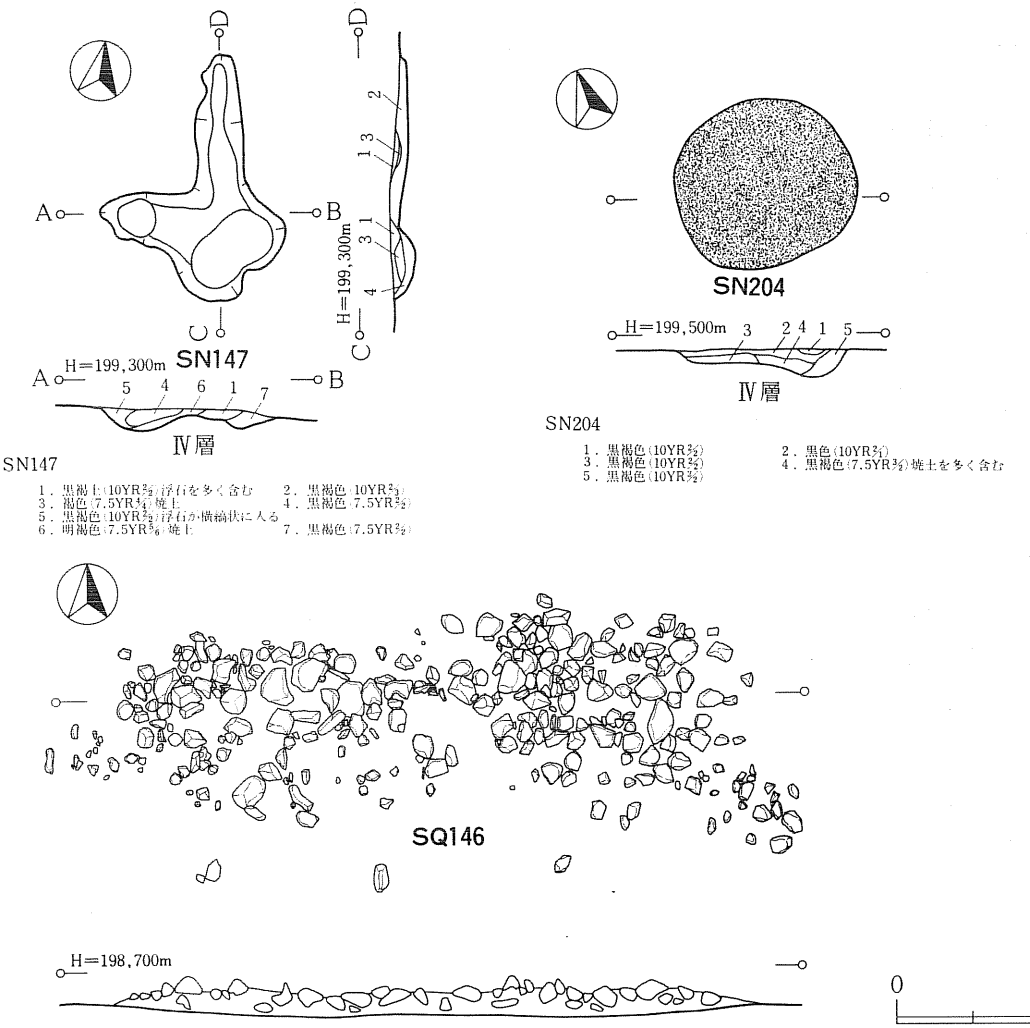
第148図　SX 110・SB 111鍛冶遺構



SX110

第149図　SX 110鍛冶炉

1．黒褐色（7.5YR 3/2）軟らかくしまりなし、スケル・鉄滓を少量含む
2．赤黒色（2.5YR 1.7/1）粒子細かい、しまりなし
3．赤黒色（2.5YR 1.7/1）微細な炭化物の集合体か、2との境は漸移している
4．黒褐色（10YR 3/2）還元化した浮石粒子を多量に含む、地山土は含まれない。4′には焼土粒子も含む、4″にも焼土粒子が含まれるがしまりやや欠ける
5．黒色（10YR 1.7/1）3同様微細な炭化物の集合体か、しまりなし
6．黒褐色（10YR 3/2）
7．4に類似、4より浮石が多く含まれている
8．黒褐色（10YR 3/1）浮石の焼土化
9．黒褐色（10YR 3/1）浮石粒子微量混入、しまりやや弱。9′は炉に切られる柱穴埋土、浮石を多く含む、しまりは4よりややある、8・9は掘り方埋土



第150図　SN 147・204焼土遺構・SQ 146配石遺構

(5)　焼土遺構　（第150図、図版55）

焼土遺構は、ＡⅠ区で１基、ＡⅡ区で１基の計２基を確認している。いずれの遺構とも土器類の遺物は検出できなかった。

ＳＮ147　（第150図、図版55）

ＡⅡ区―ＪＬ70グリッド、第Ⅲ層大湯浮石層で薄い焼土の広がりとして確認している。長軸1.65m、短軸1.2mの〝」〟字形を呈する。形態的には北端部を煙出しとするカマドのようでもあるが、南側に続くであろう竪穴の掘り込みなどは確認できなかった。

ＳＮ204　（第150図）

ＡⅠ区―ＪＴ77・78グリッド、第Ⅳ層で焼土の広がりを確認している。確認面での径1.1～1.2mの略円形を呈している。土坑の様に明確な掘り込みをもつものではないが、覆土中にも

焼土粒子・小ブロックを比較的多く含み、大湯浮石粒子も少量ずつ含まれている。

(6) 溝状遺構、柱列　（第114、151図、図版58、59）

ＡＩ・Ⅱ区で確認している溝状遺構は、登録番号を付した数で15条ある。ただしＡⅡ区ＳＤ134・ＳＤ143とＡＩ区ＳＤ201、ＡⅡ区ＳＤ102とＳＤ104、及びＡⅡ区ＳＤ118とＳＤ121はそれぞれ一連の溝であることが明らかとなり、遺構数は11条となる。遺構確認面は、第Ⅲ層大湯浮石層面である。ＳＤ105覆土より土師器甕破片、鉄滓が、ＳＤ142・149覆土より土師器甕破片が出土している。

ＳＤ102・104　（第151図、図版58）

ＡⅡ区ＳＩ101竪穴住居跡及びＳＮ103焼土遺構の西～北側（ＳＤ102）、更に南側（ＳＤ104）を囲むような位置で確認している。検出の状況から両溝は連絡していたものと見ることができる。

ＳＤ102西辺の長さ11.8ｍ、北端で東に折れその長さ3.2ｍである。幅20～25㎝、深さ15～25㎝であり、南端部が柱穴様を呈しその深さは27㎝を測る。ＳＤ104は確認できる長さ3.4ｍ、幅25㎝前後、深さは10㎝未満の数値である。溝東端部は倒木痕により攪乱を受けており、以東の確認はできなかった。

本溝の配置は、ＳＩ101竪穴住居跡とＳＮ103焼土遺構を取り囲む、板塀などと考えられる区画施設の存在を想起させるのに十分な条件を充たしていると言える。

ＳＤ105、ＳＤ149　（第114図、図版59）

ＡⅡ区東端部、ＪＩライン上で南北方向に延びる２条の溝を確認している。両溝は20㎝前後の間隔をもって平行しているが、ＳＩ114の東側で重複しており、（旧）ＳＤ149→（新）ＳＤ105となる。ＳＤ105はＳＩ114東壁をも切っている。２条の溝の両端部は、倒木痕による攪乱や竪穴住居跡（ＳＩ106）との重複により不明瞭であるが、北端部では東に折れるようである。これはＳＤ102、ＳＤ104の在り方に似るものがある。

ＳＤ105は、確認している長さ約12ｍ、幅25㎝前後、深さは５～15㎝、ＳＤ149は長さ約16ｍ、幅40㎝前後、深さは15～35㎝を測る。

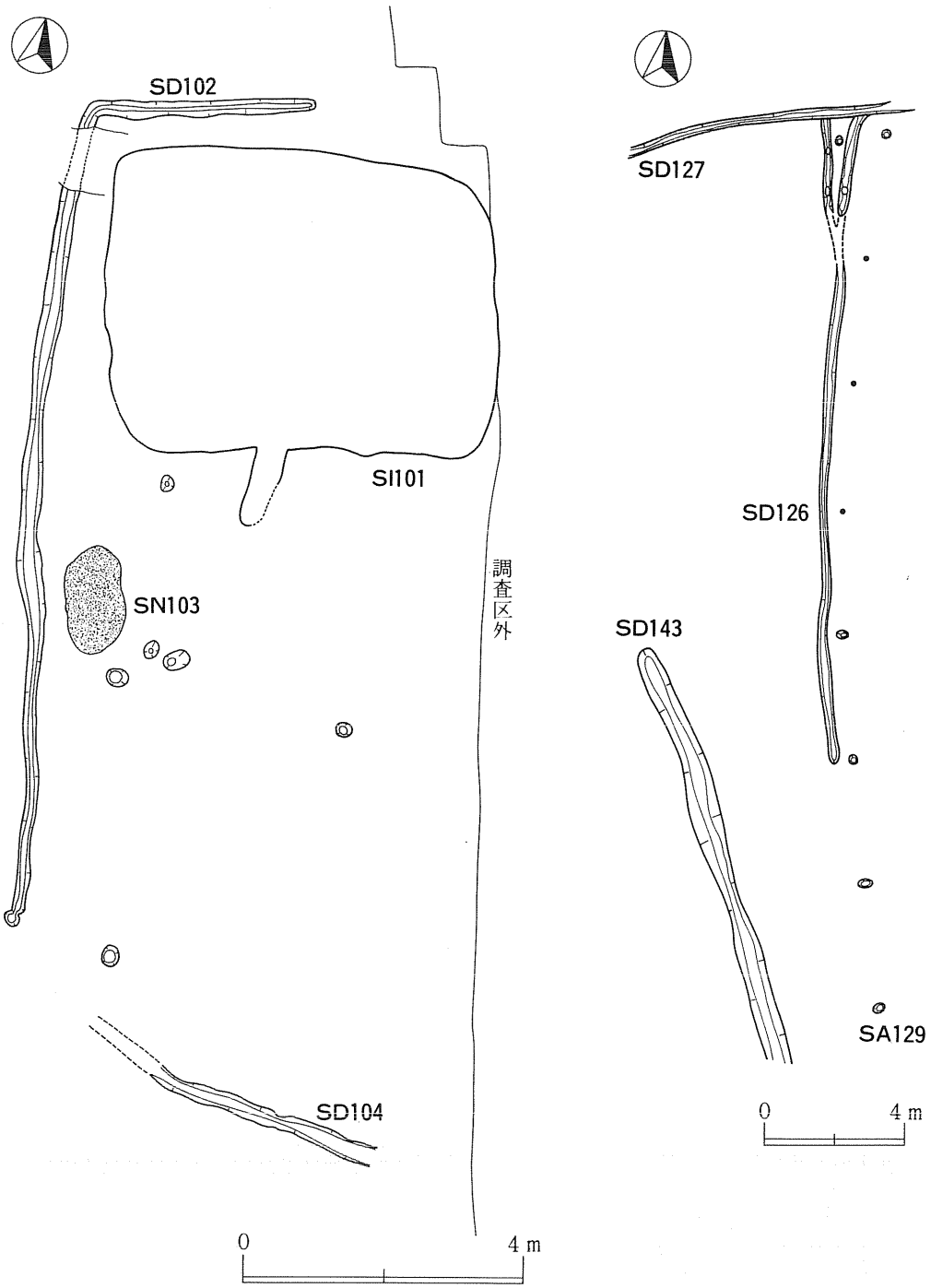
ＳＤ118・121　（第114図、図版53、59）

ＡⅡ区南側、ＪＬライン上で南北方向に延びる溝を検出している。確認できる北端部はＳＩ116南壁部分にあたるが、両者の新旧関係は明らかにできなかった。その南側ではＳＩ113、ＳＸ133畑畝跡と重複しており、溝は前者に切られ、後者を切り込んで構築している。

その長さ約36ｍ、幅15～25㎝、深さは10㎝未満である。

ＳＤ122　（第114図）

ＡⅡ区南西側、ＳＸ133畑畝跡西側でほぼ南北方向に延びる溝を確認している。南端は緩や



第151図　SD 102・104・126・127・143溝状遺構、SA 129柱列

かに西に曲がりＳＤ134に吸収される。確認時の状況では、（旧）ＳＸ133→ＳＤ122→ＳＤ134（新）となる。

確認できた長さは約17ｍ、幅20cm前後、深さは20～25cmを測る。

ＳＤ126・ＳＡ129、ＳＤ127　（第151図）

ＡⅡ区北側で、南北方向のＳＤ126と北端部でこれに直交する東西方向のＳＤ127を確認した。両者の新旧関係あるいは同時性の有無を明らかにはできなかった。

ＳＤ126は、確認できる長さ約18.5ｍ、幅25～35cm、深さ15～20cm、北側で枝分かれし２条となってＳＤ127に接続する。枝分かれした溝間と、溝底面には浅い柱穴が認められる。

ＳＡ129柱列は、ＳＤ127溝東側に等間隔に並ぶ５本の柱穴列である。配置状況からＳＤ127と一対をなしていた施設と考えることができる。柱列は南北方向に延びるが、直線的と言うより幾らか東に求心するような緩い弧を描く。柱穴は北端のＰ１を基点に、Ｐ２～Ｐ５の柱間がそれぞれ3.6ｍと等しい。Ｐ１－Ｐ２間は14.4ｍ開いており、精査によっても柱穴は確認できなかったが、ちょうど3.6ｍ等間で３本（第151図の●印）の柱穴が納まる距離である。Ｐ２～Ｐ５は径25～30cmの略円形を呈し、確認面からの深さ23cm（Ｐ２）～40cm（Ｐ４）を測り、深くしっかりした掘り込みである。南端のＰ５の存在から溝は失われているものの、少なくともＳＤ127は、長さ25ｍの規模を有していたことになる。同溝を南側に延長させると前述したＳＤ122の軸線上にほぼ乗る。

ＳＤ127は確認できる長さ約８ｍ、幅25cm前後、深さ５～15cmである。溝両端部とも更に延びていたと考えられるが、平面的にその確認はできなかった。ただしＡＩ区ＳＩ207（縄文時代の竪穴住居跡、第11図参照）の土層断面観察により、第Ⅲ層大湯浮石層を掘り込み面とする溝状の落込みを確認しており、位置・層位から、これがＳＤ127の東側延長部である可能性が高い。また第Ⅲ層上面精査時に撮影した航空写真を読むと、溝東端部はＡⅢ区との境である段丘崖下端、ＫＤ69グリッド杭まで延びているようである。この位置は、標高差にやや難はあるもののＡⅢ区ＳＤ06・ＳＡ09の延長線上に当たり、両者が連続した一つの施設であった可能性を指摘できる。この場合、ＳＤ127東端とＳＤ06西端を結ぶ直線距離は、約96ｍとなる。

ＳＤ134・143・201　（第114図、図版53、59）

ＡＩ～ＡⅡ区西端に位置し、ＡⅢ区と画する段丘崖線とほぼ平行するように延びる溝を確認した。北側の一部では溝が二重となり、南端は調査区外に続く。部分的に途切れるが確認できる長さは約132ｍに及ぶ。幅40cm・深さ10cm前後を平均とするが、おおよそ73ライン以北では幅15～30cm、63・64ラインでは幅60cm前後、深さ15～20cmの数値を示している。

ＳＤ142　（第114図）

ＡⅡ区、ＪＪ・ＪＫ60～62グリッドで確認できた南北方向に延びる溝である。同じ南北方向

を指す溝でもＳＤ105、149、118・121とは軸線方向が異なり、北側が幾分東に振れている。確認できる長さは約６ｍ、幅20cm前後、深さ15～25cmを測る。

ＳＤ200、ＳＤ202　（第114図）

ＡＩ区で検出したおよそ東西方向に延びる溝である。ＳＤ200は確認できる長さ約30ｍ、東端は調査区外である。幅20～35cm、深さ10cm前後を測る。溝の30cm程南側には、３箇所で径20～30cmの柱穴が認められる。ＳＤ127に伴うＳＡ129のようには連続して確認できなかったので、独立させた遺構として扱わなかったが、柱穴の深さ20～30cmで、溝のそれよりも深い。

ＳＤ202は確認できる長さ約７ｍ、幅・深さはＳＤ200に近似する。

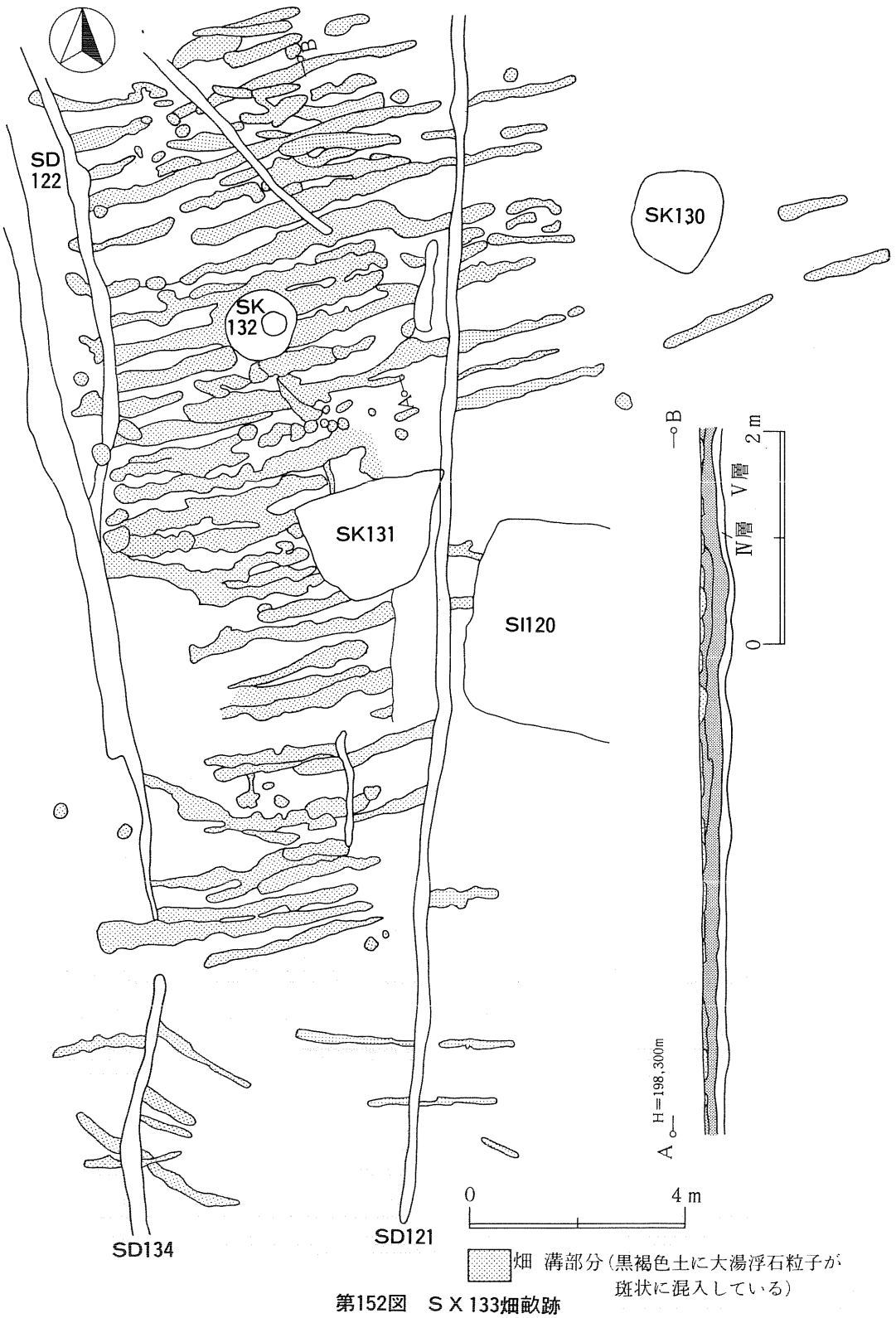
両者が同一の溝であるのか、更にこれらと直交方向に位置しているＳＤ201（ＳＤ143）と連っていたのか、三者の交錯する区域（ＫＧ・ＫＨ79グリッド周辺）を精査してもこれを明らかにすることはできなかった。

(7)　ＳＸ133畑畝跡　（第152図、図版59）

ＡⅡ区南側、第Ⅲ層大湯浮石層面で多数の溝状を呈する黒色・黒褐色土の落込みを確認し、畑の畝跡と想定している遺構である。遺構確認面と重複する平安時代の溝との係りから、少なくともＳＤ121・122溝よりは古い時期の遺構であるに間違いはない。また該期の土坑ＳＫ131・132とも重複し、これらにも切られている。一方溝どおしの重複もあり、複数期にわたるとも考えられる。溝の覆土には一様に大湯浮石粒子が混入している。

遺構は、おおよそ南北22ｍ、東西10～16ｍの範囲内に幅20～30cmの溝が東西方向に並んでいる。溝の幅、すなわち畝幅は約50～60cmである。それぞれの溝を子細に観察すると、その輪郭は直線的ではなく、あたかも団子を串で刺したようなラインを描いている。各溝の深さは10cm未満であり、その底面は第Ⅳ・Ⅴ層上面に収まる。溝覆土中より鉄滓が出土している。

平安時代の畑跡は、山形県米沢市柿の木遺跡、岩手県九戸郡軽米町皀角子久保（さいかちくぼ）Ⅵ遺跡などでも確認されている。（註１）柿の木遺跡では、約40本の畝跡が整然と配されている。畝幅は85～115cmで、「約90cmを単位とした耕作間隔が予想され」、畑跡の「おおまかな面積は240㎡から300㎡をなすもの」と考えている。畝の溝内出土遺物から、畑の構築年代を「平安時代初期頃」に置いている。皀角子久保Ⅵ遺跡ではプラント・オパール分析を実施し、イネ・ヒエ・アワが栽培されていた可能性を指摘している。



第152図　ＳＸ133畑畝跡

第4節　小　　結

ＡＩ・Ⅱ区の調査では、縄文時代と平安時代の竪穴住居跡などの遺構が多数検出され、縄文時代の遺物が多量に出土した。今これらについて少しまとめておきたい。

1　縄文時代前期の竪穴住居跡について

検出された35軒の縄文時代前期の竪穴住居跡の大部分は、その形態や柱穴配置、規模などによって以下のＡ～Ｇに分けることができる。

Ａ類：隅丸長方形あるいはこれに近い楕円形を呈し、２本主柱が壁から離れている。床面中央部のくぼみ部が地床炉と考えられる（―ＳＩ205・207・211・231・237）。

Ｂ類：円形を呈し、２本主柱であるが、主柱が壁から離れているもの（―ＳＩ210・175Ａ）と、壁際にあるもの（―ＳＩ223・224Ａ・224Ｂ・212Ａ・215Ａ・215Ｂ）がある。地床炉と考えられるが、明確でないものもある。

Ｃ類：円形か円に近い楕円形を呈し、４本主柱である（―ＳＩ173Ａ・173Ｂ・173Ｃ・213Ｂ・156）。炉の形態には地床炉（―ＳＩ173Ｂ・173Ｃ・156）と、土器埋設炉（―ＳＩ173Ａ・230）がある。

Ｄ類：円形かこれに近い不整円形を呈し、６本主柱である（―ＳＩ213Ａ）。地床炉と考えられる。Ｅ類：楕円形を呈し、６本主柱で規模が大きい（―ＳＩ152Ａ・152Ｂ）。２～３箇所の地床炉と考えられる。

Ｆ類：小さな円形か楕円形に近い円で、床面中央部に１本主柱がある（―ＳＩ218・228・175Ｂ・168・170）。炉は不明である。

Ｇ類：その他、どの類に入るか判然としないもの（―ＳＩ162・165・222・233・234）。

このように分類された竪穴住居跡は、全く同一時期のものではなく、時間的に異なる竪穴住居跡がその規模や柱配置を異にして表出されたものと考えられる。そして各々の竪穴住居跡の時期は、そこで使用された土器などの遺物によって決められるものであるが、ＡＩ・Ⅱ区で検出されたそれらの多くは、時期を決定づけるような遺物の出土状況を示していないものが多い。しかしここで、個々の住居床面や覆土中から出土した土器や住居の周辺から出土した土器によって、各々の住居跡の概ねの時期を求めることができると考えられる。以下に、ＡＩ・Ⅱから出土した土器の編年上での位置を示し、いくつかの竪穴住居跡の編年上の時期を求めることによって、ＡＩ・Ⅱ区における縄文時代前期の竪穴住居跡の形態や柱配置の変遷を探ってみたい。

ＡＩ・Ⅱ区から出土した縄文時代前期の土器は、東北地方北部以外の土器の影響を強く受けたと考えられる数点の土器を除けば、全て前期円筒土器下層様式に属するものである。これらの土器を含めたはりま館遺跡全体の前期の土器については、第12章のまとめに少し述べること

とし、ここでは単に型式名のみを記し、検出された竪穴住居跡の時期を求めてみたい。第Ⅰ群土器１・２類＝円筒下層ａ式、第Ⅰ群土器４・５ｂ・６類＝下層ｂ式、第Ⅱ群土器１類＝下層ｃ式、第Ⅱ群土器２・３・４類＝下層ｄ$_1$式、第Ⅱ群土器５・６・７類＝下層ｄ$_2$式。

検出された35軒の竪穴住居跡でその時期が明確なのは、土器埋設炉を持つＳＩ173Ａ１軒のみである。ＳＩ173Ａの炉に埋設された土器は第Ⅱ群４類土器であり、ＳＩ173Ａは円筒下層ｄ$_1$式期に属するとすることができる。さらにＳＩ173Ｂ・Ｃについても、ＳＩ173Ａが単純に同じ場所に建て替えたものであるという状況にあることから、ＳＩ173Ａとほぼ同時期とすることができる。また、ＳＩ212Ａは床面に接するか、あるいは廃棄されてそれ程の時を経ずして捨てられたと考える土器が数個体出土しており、それらの土器は全て第Ⅰ群４類土器に含まれるものである。従って、ＳＩ212Ａは円筒下層ｂ式期に属すると考えられる。そしてこれに先行するＳＩ212ＢはもちろんｓＩ215Ａ・Ｂも、廃棄されてからほとんど時間を経ずに埋められてＳＩ212Ａ・Ｂの床面になっていることから、ＳＩ212Ａとほぼ同時期と見ることができる。さらにまた、根拠には若干乏しくなるが、竪穴住居跡が廃棄されてから少し埋まった段階の住居跡のくぼみ中央部に、亜角礫などと共に１～２個の土器が捨てられたのがＳＩ211とＳＩ175Ａである。ＳＩ211の土器は、第Ⅰ群２類と４類、ＳＩ175Ａの土器は第Ⅱ群６類の土器である。従って特にＳＩ211の場合は、そのような土器が床面からそれ程離れていないことから、円筒下層ａ～ｂ式頃のものと見ることができると思われ、周囲から出土している土器もこれとほぼ同時期のものが多い。そしてこのような観点からＳＩ218・228を見れば、これらはほぼ円筒下層ｂ式期に属し、床面直上から第Ⅱ群１類土器が出土したＳＩ152を円筒下層ｃ式頃に所属させることができる。また、ＳＩ156の地床炉のあり方はＳＩ175Ｂ・Ｃによく似ている。

以上のことから、はりま館遺跡ＡＩ・Ⅱ区における縄文時代前期の竪穴住居跡の形態や柱配置は、最も古いタイプの竪穴住居跡としてＡ類があり、これがＣ類やＤ類に変わっていくものと考えられる。つまり、隅丸長方形もしくはこれに近い楕円形を呈し、壁から離れた２本主柱のタイプから、円形かこれに近い形を呈し４～６本の主柱穴を持つタイプへの変遷と見ることができる。Ａ類は、おそらくは下層ａ式期には存在し、これがｂ式期にも引き継がれ、形を徐々に円形化して行き、ｄ式期には４～６本の主柱穴を持つ形になったと推定される。Ｂ類とＦ類のように比較的小さな円形を呈して１～２本の主柱穴を持つタイプのものは、下層ｂ式期には既に存在し、ｄ式期までも継続するものと考えられる。また、Ｅ類のような大型住居跡と呼べる規模を持つ竪穴住居跡の、はりま館遺跡内での初現については明確ではないが、下層ｃ式頃には確実に存在していることが明らかとなった。

なお、ＳＩ152Ａ・Ｂ竪穴住居跡の周囲にはＳＱ153とした大小の礫・砂利を含む集石遺構が廻っていた。これは、竪穴住居構築の際に掘り上げた土砂を住居の周りに土堤状に盛り上げた

もので、両者の関係が明確な遺構という形で捉えられたものである。これによって該期の全ての竪穴住居跡がその外周に土堤状の盛り土部分を持っていたとは限らないが、概ねそのような状況にあったということができる。

2　ＡＩ・Ⅱ区における縄文時代前期集落の景観について

これら竪穴住居跡の分布をみると、一部単独で存在しているように見えるＳＩ210・228・170などを除くと、下位関上面の縁辺に沿っていることが分かる。今回の調査区は、ＡＩ・Ⅱ区の間に東から入る短小な沢によって分けられているものの、この沢が縄文時代にあっては現在ほど入り込んでいなかったことは、ＳＩ233や237の存在からも明らかである。また、この期の竪穴住居跡が今回の調査区内に限って存在するのではなく、ＡⅡ区の南東側やＡＩ区の北側にまで広く分布するであろうことは、その一部を確認しただけのＳＩ162・165やＳＩ235の存在を待つまでもない。このことは、ＮＨＫ小坂ラジオ中継放送所の建設工事の際に多くの遺物が出土したという証言からも明らかである。このため、今回検出された縄文時代前期の35軒の竪穴住居跡は、少なくともこの倍以上は存在すると推定される竪穴住居跡の一部に過ぎないことになる。従って今回検出された竪穴住居跡の分布をもって未調査であるＡⅡ区の東側とＡＩ区の北～北東側を含めた、はりま館遺跡ＡＩ・Ⅱ区の縄文時代前期における竪穴住居跡全体の分布を予測することはむずかしいが、以下のように考えることができる。それは、ＡＩ・Ⅱ区が存在するそれぞれの台地縁辺から35ｍ前後の幅で竪穴住居群が分布し、全体としては、それぞれが半円もしくは$\frac{1}{3}$円を描くように分布する、ということである。そしてそれらの竪穴住居跡の時期は、後述するように、円筒土器下層様式期にあっても相対的にはＡＩ区側が古く、ＡⅡ区側が新しいと考えられることから、いくつかの時期の竪穴住居跡がそれぞれの位置で重複はするものの、全体としてはＡＩ区の北側から漸次ＡⅡ区側に中心が移動していると見ることもできる。

しかしここで考慮されなければならないのは、ＡＩ区中央北部に広がる捨場の位置とあり方である。これまで秋田県内で発掘調査が実施された縄文時代前期円筒土器下層様式期の集落で、明確な捨場が検出されたのは、小坂町大岱Ⅳ遺跡[註2]や大館市上ノ山Ⅰ遺跡[註3]、協和町上ノ山Ⅱ遺跡[註4]（前期大木土器様式と混在）などである。大岱Ⅳ遺跡と協和上ノ山Ⅱ遺跡の捨場は集落の外縁に当たる斜面（協和上ノ山Ⅱでは竪穴住居跡にも多量の遺物が捨てられているものもある）で、大館市上ノ山Ⅰ遺跡は台地中央部に形成された短小で深い沢であり、３例共に日常の生活面より一段低い部分を捨場としている。これに対し、本遺跡の場合は、台地のほぼ中央部に捨場が形成されている。捨場に残された遺物等に、他の３遺跡と著しく相異する点は見いだせない。一般的には台地の縁辺に沿って竪穴住居跡などが分布する馬蹄形集落にあっては、遺構群の存在しない中央部が集落の広場として機能したと見られている。本遺跡のＡＩ区にあっては、広

場に当たるべき部分かそれにより近いところに当時の生活面よりも少し高くなる捨場が形成されていたことになり、集落の景観としては同期の他の遺跡と違っていることになる。

3　平安時代の遺構について

ＡＩ・Ⅱ区、第Ⅲ層大湯浮石層面で検出した該期の遺構は、竪穴住居跡を中心として、土坑、掘立柱建物跡、鍛冶炉および製鉄関連遺構、溝状遺構・柱列、畑畝跡などである。

本区の検出遺構の特徴は、竪穴住居跡の分布範囲が比較的限定されているにもかかわらず、重複がないため整然と配置されているように看て取ることができる、と言えることであろう。しかも、各遺構が単独に存在していたのではなく、種別の異なる遺構どおしが同一時期に併存していたと想定できる事例も抽出できた。すなわち、

(1)　竪穴住居跡・土坑群と、この西端・北端を画する溝状遺構・柱列（ＳＤ126・122・ＳＡ129、ＳＤ127及びＳＤ134・143・201、ＳＤ200・202の最低２時期）（第114図）。

(2)　ＳＩ101竪穴住居跡、ＳＫ103製鉄関連遺構（土坑）と、ＳＤ102・104溝状遺構（第151図）。

(3)　ＳＩ107竪穴住居跡と、鍛冶遺構ＳＸ110・ＳＢ111（第148図）。

(4)　ＳＩ109竪穴住居跡と、ＳＫ137・138土坑及びこれらの上屋と考えられるＳＢ184掘立柱建物跡（第145図）。

(5)　ＳＩ119竪穴住居跡と、ＳＫ128土坑・ＳＢ185掘立柱建物跡（第147図）を挙げることができる。

(1)の事例については、ＡⅢ区でも確認できており、平安時代の〝はりま館〟の景観復元にあたっての重要な資料の一つである。また、ＡⅢ区と同一段丘面にあるＡⅣ区検出遺構との係りもあり、本項では問題点の抽出に留どめ、第12章でまとめることにする。

註１　米沢市教育委員会「柿の木遺跡」『米沢市万世町桑山団地造成地内埋蔵文化財調査報告書第Ｉ集』

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『皀角子久保Ⅵ遺跡発掘調査報告書』1988（昭和63年）

註２　秋田県教育委員会「大岱Ⅳ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅻ』1984（昭和59年）

註３　秋田県教育委員会「上ノ山Ｉ遺跡」『国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ｉ』1988（昭和63年）

註４　秋田県教育委員会「上ノ山Ⅱ遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ』1988（昭和63年）

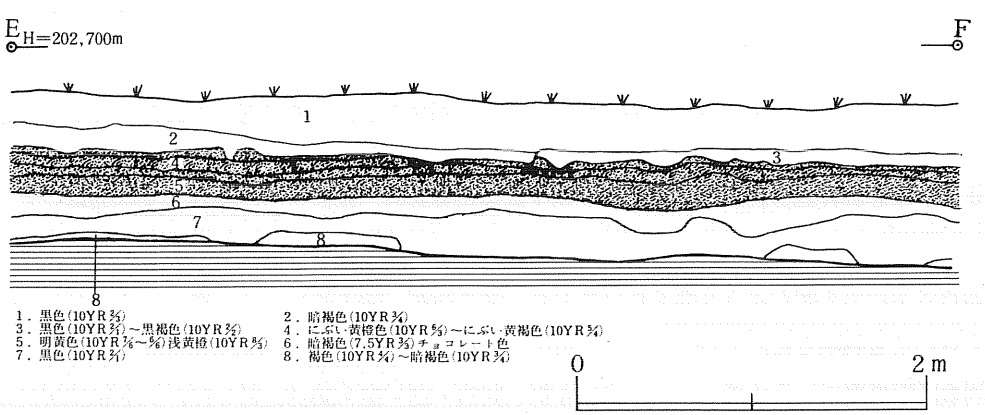
第５章　ＡⅢ区の調査の記録

第１節　ＡⅢ区の概要

１　ＡⅢ区の位置と立地、基本層位

ＡⅢ区は、広大なはりま館遺跡の東側中央部に位置する。はりま館遺跡の東半部は便宜的に、比高差２～４ｍの上位関上面と下位関上面に分けられるが、ＡⅢ区は上位関上面の北東部に当たる。この部分は略平坦な面であるが、微視的に見れば北西から南東側にわずかに下降する。また、調査前は畑地であったために平坦に見えていたが、地山の盛り上がった部分が数ケ所に存在し、地山上面はなだらかではあるものの、必ずしも平坦ではない。ＡⅢ区の西側は昭和57年度調査区、南側は同一の面でＡⅣ区に連なっており、東側は２～４ｍの比高差をもって一段低いＡⅡ区に連続する。下位関上面の東端からＡⅡ区をはさんでＡⅢ区東端までは、60～100ｍの距離がある。

第153図がＡⅢ区ほぼ中央部の土層断面図である。後世の畑の耕作によって、第１・２層の厚さなどが地点によって若干異なるものの、大略はＡⅢ区周囲のほかの調査区と同じである。第１層は新旧２つの耕作土である。１ｂ層が旧い耕作土で、１ａ層は比較的最近に西側から東側に移動された耕作土である。第２層は黒～黒褐色土で、大湯浮石堆積後の黒ボク土である。この第２層は、耕作あるいは耕作土の移動によって失われた部分もある。また、ＡⅡ区などで見られる第Ⅲ層直上の２ｂ層（平安時代の生活面となった浮石混じりのしまりのある黒色土）は耕作によって失われており、ほとんど残存していない。第３層は大湯浮石層である。耕作によって失われている部分もあるが、良好に存在している部分では厚さ約20cmである。基本的に



第153図　ＡⅢ区　土層断面図

は、下位に粒径１～20㎜の軽石粒があり、その上位にしまりのあるパミス状の火山灰がのっているが、各々の厚さ２～５㎝で互層をなす部分も見られる。ＡⅢ区で検出された平安時代の竪穴住居跡などは、全て第３層の上面から掘り込まれている。第４層はいわゆるチョコレート色に見える暗褐色土である。調査区中央部に分布する縄文時代晩期の遺物及び焼土などの多くは、この層中で確認されている。第５層は黒色土で、縄文時代前期の遺物が散見される。層厚は10～25㎝で、ＡＩ・Ⅱ区などに比べて若干うすい。第Ⅳ層はいわゆる地山漸移層、第Ⅶ層は地山土である。地山土は黄橙色の風化軽石と考えられる層を一般的とするが、地山が盛り上がった部分ではこれが段丘砂礫層である。

２　遺構・遺物の分布

縄文時代の主な遺構は、ほとんどが晩期のものと考えられる焼土遺構と、それより古いと考えられるＴピットである。焼土遺構は調査区の北半西部に多く、調査区中央を南北に連なるように検出されたＴピットは、調査区東端から10～20ｍ西側に位置している。

平安時代の遺構は、北西部を北東～南西方向に走る溝状遺構とそれに伴う柱列を除けば、竪穴住居跡などの遺構は調査区東端部、つまり上位関上面の東縁辺に沿うように南北に連なり、ＡⅣ区の同じ時期の竪穴住居跡群に連続している。

遺物は縄文時代・平安時代を通じて概して少ないが、特に平安時代のものは、そのほとんどが竪穴住居内から出土している。縄文時代の遺物は、前期・後期・晩期のものである。前期は調査区北西～北部から、後期は北西～北部を除くほぼ全面からわずかずつ出土しているのに対して、晩期は調査区中央部から北西部にほぼ限定されている。なお、弥生時代の遺物は出土していない。

３　調査経過

ＡⅢ区の調査は５月16日から開始されたが、これには他の調査区の準備等のこともあり１～３班全員が入った。昭和62年度の範囲確認調査で、第３層大湯浮石層上面に平安時代の遺構面が、この下の第４・５層中に縄文時代の遺物が包含されていることがわかっていた。このため、まず、第３層上面で平安時代の遺構を検出し、その調査終了後に縄文時代の調査に入る予定で進められた。第３層上面までの耕作土はあらかじめ重機で除去してあったため、同日、早くも南東部で平安時代竪穴住居跡（ＳＩ02）が１軒検出された。なお、この南東部は畑の耕作によって第３層が失われていた部分である。５月18日には北西部でＳＤ06溝状遺構を検出した。これは調査区南西部を囲むような弧を描いており、溝の内側（南西側）には、溝に沿う柱穴列が存在することも判明した。

調査区南東部ではその後も、５月19日４軒、同24・25・28・30日に各１軒と、次々に平安時代の竪穴住居跡が検出されたが、他の部分では、ＳＤ06・ＳＡ09以外には同期の遺構・遺物が

ほとんどなく、５月23日からは部分的に第４・５層の掘り下げを開始した。しかしながら、調査区中央部から北西部にかけて、焼土遺構というよりは焼土粒子が少し集中して見える程度の焼土が数ケ所あり、その周囲から縄文時代晩期の土器が散見、あるいは小さなまとまりとなって出土した他は、竪穴住居跡などの大きな遺構は検出されなかった。それらの焼土や土器の平面図を取り、さらに掘り下げ、第６層上面で精査したところ、６月16日頃からＴピットがまばらに検出されるようになった。

６月15日までに、合計10軒の平安時代の竪穴住居跡を検出したが、この中にはＳＩ19のように焼失家屋と考えられる住居跡もあり、遺存していた炭化材等の実測に時間が割かれた。ＳＩ19の場合、最大で長さ102㎝、幅39㎝の壁板材が倒れた状態で検出され、これにはきれいな手斧痕が残っていた。

ＡⅢ区の縄文時代の遺構はＴピットと土坑及び焼土で、遺物もそれほど多くはなかったため、６月８日からはＡⅡ区の調査にも一部着手し、６月15日からは、第３班がD区の発掘準備に入った。

６月20日以降も縄文時代の遺構はそれほど増えず、７月29日までに縄文時代のＴピット14基、平安時代の竪穴住居跡10軒の精査と実測、写真撮影などを行って、ＡⅢ区の調査を終了した。

第２節　縄文時代の遺構と遺物

１　検出遺構

ＡⅢ区で検出された縄文時代の遺構は、陥し穴と考えられているＴピットが14基、性格不明の土坑３基、焼土遺構６基である。Ｔピットと土坑は第Ⅵ層上面で確認され時期が明確にされないのに対し、焼土遺構は第Ⅳ層上面か中位で検出され、周囲から晩期の遺物が出土しているので、ほぼこの時期のものと見てよい。以下、本項ではＴピット、土坑の順に説明し、焼土遺構については出土遺物の項で説明する。

(1)　Ｔピット　（第154図～157図・図版61）

はりま館遺跡ＡⅢ区からは、14基のＴピットが検出された。これらの大部分は、南北にやや長い調査区の中央部を南北に連なるように分布し、ＡⅢ区以南のＡⅣ区やＳ57調査区のＴピット群に続くものと考えられる。

遺構の確認は、第Ⅴ層中位でその存在を知ることのできたものも少数例あるが、正確なプランは第Ⅵ層及び第Ⅶ層上面である。

各Ｔピットの規模は第２表のとおりで、上面長はＳＫＴ16の4.25ｍを最長に、ＳＫＴ27の2.40ｍを最短としてかなりの違いがあるものの、底面幅は0.12ｍ～0.27ｍとそれほどの差がな